

---

# スーパーロボット大戦OG ~パラレル~

ジーク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スーパーロボット大戦OG ～パラレル～

### 【Nコード】

N0137J

### 【作者名】

ジーク

### 【あらすじ】

新西暦179年 3つめの隕石「メテオ3」がアイドネウス島に落下した。

そこに居合わせたビアン・ゾルダークはメテオ3の周辺から一人の少年を発見、保護された。意識を取り戻した時には記憶がなく、自分の名前も覚えていなかった。ビアンはその少年を救世主の名を取り「ルシア」と名付けた。

それから7年後、ルシアは宇宙での修行を終え、義父ビアンが総帥を勤める組織「デイバイン・クルセイダーズ」に参加することにな

った。

- ・ 自分を引き取り、我が子のように育ててくれたビマンのために・・・

## 本編に入る前に

本日はスーパーロボット大戦OG（パラレル）にアクセスしていただきありがとうございます。

まだガン×ソードの方が途中なのですが、この作品も書きたいと思いい投稿しました。

この作品の傾向として、DC戦争時をアニメ版重視 エアロゲイター戦時をゲーム版重視という形にとります。要するにリユウセイ編で通すという事です。

今後もOG2、OG外伝と続ける予定ですが、本作はOG1で完結という形をとります。

会話形式で制作しているので場面が分かりづらいところと、戦闘シーン以外は基本的にどのキャラが何をしているのかという表現は書きませんのでご了承ください。

今回は本編に入る前に軽くオリジナルキャラクターと搭乗する機体を紹介したいと思います。

機体の方は新しく登場する度に後書きの方に記載します。

キャラクター

ルシア・ゾルダーク 男（19）

声優（付けるとしたら）菊池正美

メテオ3落下後に発見され、ピアン・ゾルダークに保護された少年。エルザムらコロニー統合軍での5年の修行を終え、アイトネウス島に帰還、そのままDCの特務大尉に任命される。性格は温厚だが冷静な判断ができ、時に熱くなる時がある。テンザン・ナカジマのゲーム感覚での戦いから度々衝突する。リユウネとはあまり会っていない。

ピアノ譲りの特機好きであり特機に乗れることを夢見ているが、どちらかと言うとリアル系のアニメが好きな様子。  
模擬戦闘時にアイビス・ダグラスと知り合い、自然と想いを寄せることになった。

パイロット能力(あくまで想像です。)

能力

格闘	167	射撃	170
技量	159	防御	142
回避	248	命中	250

地形適性

空 A 陸 A 海 B 宇 S

エースボーナス

武器のEN消費30%軽減

最終ダメージ+15%

所持技能

念動力Lv1~9

指揮官Lv1~9

見切り

アタッカー

インファイトLv1~9

ガンファイトLv1~9

精神コマンド

直感(25)

努力(15)

集中(15)

直撃(20)

熱血（40）

覚醒（60）

ツインコマンド

魂（80）

搭乗機体

ガーリオン（ルシア専用機）

ルシアが搭乗するガーリオンのプロトタイプを改良した機体  
パーソナルカラーは銀色で、宇宙で戦う姿は「白銀の流星」と言わ  
れている。

その名の通り機動性、運動性は義父であるビアン・ゾルダークがテ  
スラ・ドライブをルシアに合わせたことでノーマルタイプのガーリ  
オンを遥かに凌ぐものとなった。

DC発足時にアイドネウス島から八ガネ撃墜任務に入る。

武装

マシンキャノン

バーストレールガン

ディバイン・アーム

ソニック・ブレイカー

## 本編に入る前に（後書き）

以上でキャラクター、機体の紹介を終わります。

何故この作品を書くようになったのかと言つと

キャラ紹介でアイビスが出ていれば大方予想はつくと思いますが・  
・アイビスとくつつけようかと思えます。別に原作でのアイビスが  
不憫だということではありません（オイ）  
見る人によってはキャラの崩壊だと思われかねませんがご了承くだ  
さい。質問や指摘があればお気軽にどうぞ。

ガン×ソードもスパロボも同時に頑張つていこうかと思えますので  
よろしく願います。

## 第1話 白銀の流星

DC本部 アイドネウス島 ビアン自室

ビアン「ルシアよ。宇宙での修行、御苦労であった。」

ルシア「はっ、総帥。」

ビアン「そう固くなるな、私とお前は親子なのだからな。」

ルシア「しかし・・・リユーネを差し置いて俺みたいなのが・・・」

ビアン「謙遜するな、もっと誇りに思ってもいい。」

ルシア「はい、ありがとうございます。もうすぐ始まるんですね。」

ビアン「ああ、私達は連邦に代わりこの地球圏を防衛する。そのためには連邦を叩く必要がある。」

ルシア「そのために南極で行われる会談を利用するわけですね。」

ビアン「そうだ、自分たちが助かりたいがために地球を売ることなどあってはならん。そんな腰ぬけ共にはこの地球は任せられん。」

ルシア「同感です、この地球あってこそその命だというのに・・・連邦はあれから何も変わっていません・・・」

ビアン「そうだな、だからこそ私達がこの美しい地球を護らねばならん。」

ルシア「はい・・・！」

ビアン「そろそろリオン部隊の演習が始まるのだがお前も見ていくか？」

ルシア「もうそんなところまで進んでいるのですか？」

ビアン「あまり時間がないのはお前も分かっているだろう。」

ルシア「はい、それじゃ見てきます。」

そしてルシアはモニタールームに足を運ぶ

DC本部 モニタールーム

ルシア「失礼するぞ。」

アードラー「これはこれはルシア坊、ここに何の用事？」

ルシア「坊はよしてくれコッホ博士、演習を拝見しようと思ってな。モニターしてるか？」

ツグミ「今映像を映します。」

空間モニターが映され、四機のリオンが編隊を組んで飛行している。しかし、一機だけ動きが不安定だった。

スレイ「1よりCC、所定空域に到達した。」

ツグミ「こちらccc、了解。」

ルシア「うん？一機だけ動きが変だぞ？」

スレイ「1より4へ、編隊を乱すな！スロットルをキープするんだ！」

アイビス「あ、4了解！」

スレイ「無様な飛び方をする位ならエンジントラブルを理由に後退しろ！」

アイビス「くっ……！」

スレイ「それが嫌なら少しでも訓練の成果を見せるのだな。」

ルシア「ちよつといいか？」

オペレーター「は、はい。」

ルシア「4、操縦桿をしっかり握れ。」

アイビス「え……？」

ルシア「落ち着いて操縦するんだ、リオンは癖がないから柔軟性が高い。意識を集中して、風に乗るんだ。」

アイビス「りよ、了解！」

ルシアをアドバイスを聞いた途端、アイビスのリオンは安定した。

スレイ「4、感謝するんだな。総帥のご息様が直々にアドバイスされたのだからな。」

アイビス「え！？あ、あなたが・・・！」

ルシア「そんな固くならなくていい、俺も君と同じで最初は操縦もままならなかった。けど3年修行してやっとガーリオンを扱えるま  
でになった。だからこれからも頑張れ。応援してやる。」

アイビス「あ、ありがとうございます！」

ルシア「そういえば名前聞いてなかったな？君、名前は？」

アイビス「え？」

ルシア「4じゃ後から話すのに呼びづらいだろ？」

アイビス「アイビス、アイビス・ダグラスです！」

ルシア「アイビスか、覚えておくよ。」

アードラー「ルシア坊、私語はそこまでにしていただきたい。」

ルシア「ああすまない、俺としたことが・・・。」

ツグミ「CCより1へ！間もなく対戦相手のメッサーが模擬戦区  
域へ進入します。」

スレイ「1よりCCへ！我々と合流するはずの5はどうなっている？」

ルシア「5？まだいるのか？」

アードラー「はい、さようでございます。」

ルシア「模擬戦に遅刻とは・・・根性が腐ったパイロットだな。」

アードラー「いえいえ、そうではありません。そ奴は私が選り出した最高の素材ですから。」

ルシア「最高の素材？」

そこに何処からかもう一機、黄色いリオンが現れた。

テンザン「ハツハハハハハハ！！俺ならここにいての！！！」

笑い声を上げながらテンザンはアイビスを横切り、アイビスがバランスを崩す。

アイビス「うわ！？」

スレイ「あいつ・・・何を・・・！」

ルシア「な、何だあの操縦は・・・！」

そこにDCの主力戦闘機「メッサー」が六機、戦闘空域に進入した。

テンザン「ホッ！やられキャラが選り取り見取りだぜ！」

スレイ「待て 5!!!まだ模擬戦は始まっていない!こちらの指示に従え!!!」

テンザン「るっせー!」

ルシア「 5!!!編隊を乱すと一網打尽にされるぞ!!!」

テンザン「そうなるかそこで見てるっての!!!」

テンザンはリオンのブーストでメッサーの背後を取り、模擬弾を撃って当てた。

テンザン「いただきだったの!!!」

その後もめちゃくちな動きではあるが、メッサーに全て被弾させた。

テンザン「ハハハハハ!!!中々いけてるぜこのゲームはよ!!!」

アイビス「すごい・・・動きはめちゃくちゃだけど・・・!!」

スレイ「あれがコッホ博士が選別したパイロットか・・・!!」

ルシア「あの操縦・・・俺が1年かけてやっと形になったというのに・・・」

アドラー「ヒヒヒヒ・・・テンザンの奴やりおるわい。いかがですかルシア様?」

ルシア「確かにパイロットの素質があるみたいだな。コッホ博士、後であいつを俺のところに来るよう命じてくれ。」

アードラー「ほう、何故です?」

ルシア「さっきの聞いただろ?ゲームだと・・・戦争をゲーム感覚でやられるのは迷惑気あまりない。」

アードラー「しかし、訓練されたパイロットよりテンザンの方が上、これは現実です。」

そこにビアンがモニタールームに入って来た。

アードラー「これはビアン博士!私が選び出したアドバンスド・チルドレンは良好な成績を示しています!」

ビアン「それよりアーマードモジュールの生産状況はどうだ?」

アードラー「は、予定通りに進んでおります!イスルギ重工では第3生産の組み立て作業が開始されております。連邦軍への隠ぺい工作も万全でございます。」

ルシア「・・・」

ツグミ「・・・」

ビアン「アードラー、リオンを一機出し、伊豆近海の偵察を行わせる。」

アードラー「は?」

ツグミ「え・・・!」

アードラー「リオンを・・・それもよりによって伊豆に・・・!？」

ルシア「それでは連邦にアーマードモジュールの存在が明るみになっ  
てしまいます!」

ビアン「構わん、任務遂行者の選考はお前に任せる。」

アードラー「ビ、ビアン博士!？」

そこに突然アラームが鳴り始める

ルシア「何事だ!？」

オペレーター「演習空域にバグスが侵入!!」

ツグミ「数は!？」

オペレーター「5機です!!」

ルシア「大して数はいないな。」

テンザン「だったら俺が撃墜してやるっての!全機撃墜して退屈し  
てたところだつての!」

ルシア「模擬弾でバグスに挑むつもりか？」

テンザン「あ、いっけね。」

ルシア「すぐに チームの退避命令を！俺が出て片付ける！」

ツグミ「え！？」

アードラー「あ、あなたが自ら！？いけません！！万が一のことがあつたらどうなさるおつもりです！！」

ルシア「忘れたか？俺はこの時のために5年宇宙で修行を積んできたんだ！すぐに出るぞ！！」

ルシアは愛機のガーリオンの元に走る

ルシア「装備は時間がないからこのままいくぞ！」

ツグミ「お気をつけて！ガーリオン発進どうぞ！」

ルシア「ルシア・ゾルダーク、ガーリオン出るぞ！！」

スレイ「1より各機！すぐに戦闘空域から離脱する！」

しかし、アイビスの機体がまたバランスをなくす。

スレイ「4！！死にたくなければルシア大尉の教えを思い出せ！！」

アイビス「りよ、了解！」

しかし、バグスがアイビスの機体に取りついてきた。

アイビス「ぐ!?」

スレイ「な・・・!? 4!!!」

アイビス「や・・・やられる・・・!!」

ルシア「そのまま動くなよ!!!」

そこにルシアのガーリオンが駆け付けた

ルシア「デイバイン・アーム!!!」

アイビスに取りついたバグスが撃墜された

ルシア「大丈夫か!？」

アイビス「は、はい・・・!!」

ルシア「怖いのは分かるが今は生き延びることを優先するんだ!」

アイビス「りよ、了解!!!」

バグス4機がガーリオンに襲いかかる

ルシア「エアロゲイターの偵察機か?だが・・・俺に会ったのが運の尽きだ!!!」

ガーリオンのフィールドが展開され、そのままブーストで突貫する。

ルシア「ソニック・ブレイカー!!!」

攻撃を避けようとバグスが散開する。

ルシア「無駄だ!!」

ガリオンは展開しバグスを次々と撃墜する。

まるで流星が流れるかのように敵機が撃墜されていく

スレイ「すごい……あれが「白銀の流星」……」

アイビス「……………」

ルシア「本部！増援は！」

ツグミ「ありません！エアロゲイターの偵察機だったようです！」

ルシア「ひとまず安心だな。　チーム、帰還するぞ。」

テンザン「けっ！見せ場を全部持っていきやがって……面白くないっての！」

ルシア「テンザンと言ったな、訓練された兵士でも一瞬の気の緩みであんな風に命を落としかける。闘うならそれなりの覚悟というもの……」

テンザン「たかがゲームで何を熱くなってるんだっての！それに死にかけてのはそいつが雑魚なだけだろ？」

アイビス「!!」

ルシア「お前!!」

テンザン「なあアードラーのじいさんよ!もつと面白いゲームやらせてくれ〜!戦闘機相手じゃ物足りねえっての!」

アードラー「……いいだろうテンザン、望み通りにしてやる。お前が選ばれた人間だということを見せてやれ。」

ルシア「コツホ博士!!」

テンザン「じゃあそういうことだからよ!次のゲームのために休まなきゃな!」

そういつてテンザンが一足先に本部に帰還した

ルシア「あいつ……!!」

スレイ「ルシア大尉、部下の無礼を許していただきたい。」

ルシア「いや、お前が謝る必要はない。それよりも……」

アイビス「……」

ルシア「アイビス、あいつの言う事なんざ気にするな。君はいくらでも強くなれる。」

アイビス「は、はい……」

ルシア「その時は俺がいくらでも相手をしてやるよ。」

アイビス「はい!!」

ルシア「いい返事だ。さ、帰還するぞ!」

アイビス「了解!」

スレイ「了解。」

DC本部 格納庫

ルシア「君達が チームか。」

スレイ「はっ、先ほどの救援に感謝します。」

アイビス「助けをいただいております!」

ルシア「君がアイビスか・・・中々かわいい顔してんな。」

アイビス「え!?!」

スレイ「ルシア大尉・・・あまり部下をからかわないでください。」

ルシア「ははは・・・あ、こっしちゃんいられない。ちょっと出てくる。」

スレイ「はっ。」

DC指令室

ルシア「どういっつもりだコッホ博士、あんな奴をDCに加えるな

ど……!」

アドラー「しかし、アドバンスド・チルドレンはDCになくてもならないものです!」

ルシア「だがあれをどうにかしてもらわないと……あれに巻き込まれて死ぬなんざごめんだぞ?」

アドラー「は、気をつけます。」

ルシア「次の偵察は俺も出るぞ。」

アドラー「な、何をおっしゃるのですか!?!」

ルシア「あいつ一人じゃリオンを鹵獲されかねん。俺も出て奴を援護する。」

アドラー「それならばせめてリオンをお使ください! ガーリオンまで連邦に知られては……!」

ルシア「分かっている。機体の準備をさせてくれ。パーソナルカラーも換えなくちゃな。」

アドラー「は、すぐに手配を……(全くピアン博士といいルシア坊といい……一体何を考えているんだ……?)」

## ピアン自室

エルザム『ピアン博士、彼は無事に到着出来たのでしょうか?』

ビアン「問題ない、立派な戦士に成長したな。」

エルザム「素質もあつてか、吸収が早く私も教え甲斐がありました。」

ビアン「そうか、ご苦労だった。もうすぐ南極での会談が始まる。」

エルザム「私もその頃にはそちらに到着出来るかと思っています。」

ビアン「ああ、その時はルシア共々頼むぞ?」

エルザム「はっ。」

ビアンはエルザムとの通信を切った。

ビアン「……親として子供を戦争に駆り立てるなど非道だな……だがこれも来るべき時のためだ……ルシアよ……許せ……」

第1話 完

第1話 白銀の流星（後書き）

中断メッセージ風後書き

ルシア「お、ここで終了か。いい見極めだ、ゆっくり体を休めるようにな。」

エクセレン「ん〜、ちょっと押しが足りなかったな。」

ルシア「お、押し？」

エクセレン「ホラホラ、みんなみたいにぶっ飛んだ事言えば株が急上昇よ！」

ルシア「ぶっ飛んだこと！？いきなり言われてもな……うん……」

ルシア「次回も見ないと三枚おろしだ!!」

エクセレン「……………」

ルシア（や、やっぱり駄目だったか……!）

エクセレン「合格!すごいわルシア君!花丸の満点よ!」

ルシア「え!?!あれでいいのかよ!?!」

エクセレン「どう?今度は色々な武器使って叫んでみたら?」

ロシア「.....断固拒否する.....」

## 第2話

## 痛みある戦い

DC本部 キラーホエール前

リオン2機の搬入作業が始まっていた

DC艦長「少佐、移送作業の終了時刻まで2330です。」

テンペスト「了解した、伊豆からの定期便は？」

DC艦長「偵察機ですか？今日のところは現れなさそうですね。」

テンペスト「そうか・・・」

DC艦長「おかげで今回は安心して月見が楽しめます。」

テンペスト「月は宇宙で見るのが一番だ。」

そこにルシアとテンザンがテンペストの元に歩み寄る。

DC兵「艦長、テストパイロットとルシア大尉を連れてきました。」

DC艦長「ご苦労。」

ルシア「お久しぶりです、テンペスト少佐。」

テンペスト「ルシアか、長年の宇宙による修行、御苦労であった。」

ルシア「いえ、総帥の大義を成し遂げるためですから。なんなら少しシミュレータで対戦しますか？」

テンペスト「偵察任務が終わったらな。」

テンザン「カビくせえ輸送船の次はむさつ苦しい潜水艦か。やってられねーっての。」

ルシア「テンザン!!!」

テンペスト「貴様がテンザン・ナカジマか？」

テンザン「おう、アンタがテンペスト・ホーカー少佐か？」

ルシア「テンザン!!!言葉を慎め!!!」

テンペスト「構わん。」

テンザン「あの特殊戦技教導隊の。」

テンペスト「……」

テンザン「何か気に障るような事言ったか？」

ルシア「いい加減にしる貴様!!!」

テンザン「親の七光りな奴は黙ってるっての!」

ルシア「何!?!」

テンペスト「そこまでにしる。早く個室に案内してやれ。」

DC兵「はっ！」

テンザン「まっ、俺が来たからには文字通り大船に乗ったつもりでいてくれや。あんたらが覗き見してる連中にDCの実力見せてやっからよ！」

ルシア「……！」

テンペスト「さっさと行け。」

DC兵「はっ！」

テンザンとDC兵がその場を立ち去る

ルシア「少佐、申し訳ありませんでした。」

テンペスト「いや、お前に責任があるわけじゃない。気にするな。」

DC艦長「しかし、あのような子供を使うとは……」

ルシア「コッホ博士は何を考えてるのか……」

テンペスト「ビアン博士もな。」

ルシア「総帥は総帥なりに考えがあると思われるのですが……」

テンペスト「何も聞いてないのか？」

ルシア「ええ・・・何も教えてくれなくて・・・」

テンペスト（今の段階でリオンを使えば、連邦に我々の手の打ちを晒す事になる。何故だ？

何故ビアン博士はこのような任務を・・・？）

ルシア「では自分も自室に戻ります。」

テンペスト「ああ、任務遂行を祈る。」

ルシア「はっ！」

キラールホエール艦内

DC兵「間もなく伊豆基地近海に入る。パイロットは機体に搭乗し  
出撃準備を！」

ルシア「了解した。」

テンザン「あゝあ、待ちくたびれたぜ。」

ルシア「テンザン、これは実戦だ。無様な戦いをしたら許さんぞ？」

テンザン「何でお前なんかに許しを被らなきゃいけないんだ？」

ルシア「くっ・・・！」

テンザン「任せとけて！このゲームもさくつとクリアしてやっか

らよー!」

ルシア（何故だ・・・！何故こんな奴がDCなんかになんかに・・・!）

テンザン「そついやあよ、アンタ演習してたパイロットの女と話していたよな？」

ルシア「それがどうかしたか？」

テンザン「もしかして一目惚れしたとか？」

ルシア「な・・・!?!？」

テンザン「あれ？凶星だったか？」

ルシア「戯言を言うな！！俺は上の人間としてだな・・・!」

テンザン「はいはい、色男さんはだまってなよ。」

ルシア「貴様・・・!」

DC兵『テンザン機、ルシア機、発進どうぞ!』

テンザン「それじゃ行ってくるっての!」

ルシア「チツ・・・ルシア・ゾルダーク、リオン出る!!」

2機のリオンが発進され、後方にF・32シユヴェールトが付いた

DC兵「ルシア大尉！援護します!」

ルシア「助かる。」

そこに輸送船「タウゼントフェスラー」が見えた。

ルシア「ん？輸送船・・・？」

テンザン「ホッ！お決まりのパターンだけ！あれにや新型が積みま  
れるぜ！」

ルシア「何でそう言える？」

テンザン「だってそうだろ？意味もなく伊豆に輸送船なんかでね  
っての。」

ルシア「・・・一理あるな。各機、輸送船を攻撃。しかし積み荷の  
み破壊せよ。」

テンザン「何でだよ？」

ルシア「もし人員輸送の船だったらどうするつもりだ？」

テンザン「んなの関係ねえっての！」

テンザンのリオンがブーストし、輸送船に攻撃を仕掛けた。

ルシア「あいつ・・・！また勝手なことを！」

DC兵「どうしますか大尉？」

ルシア「伊豆の偵察任務がまだだ。それにホントに新型があるとしたら放つてはおけない。各機、ついてこい！」

DC兵「了解!!」

攻撃を仕掛けるが輸送船は固く、SRXチームと戦車隊の演習場まで辿りついてしまった。

テンザン「へへっ・・・戦車が、戦闘機より歯ごたえがありそうだな！」

ルシア「テンザン引き返せ!これ以上は危険だ!」

テンザン「バカ言え!!戦車なんざただの的だつての!!」

DC兵「やめるテンザン!!我々の任務はもう完了した!」

ルシア「リオンをこれ以上明るみにするわけにはいかない!!」

テンザン「あゝもう、うるせえな!!俺はまだ遊び足りないっての!!」

DC兵「大尉!!テンザンが戦車隊のド真ん中に・・・!」

しかしテンザンは弄ぶかのように戦車隊を撃墜していった。

ルシアのリオンのレーダーが機影を察知する。

ルシア「ん?これは・・・敵のパーソナル・トルーパーか!?!」

DC兵「どつされますか！」

ルシア「PTがいたとなると事情が変わってくる！PTへ攻撃を仕掛ける！各機は援護を！」

DC兵「了解！」

ルシアのリオンも降下し、PT迎撃に向かう。

そこに連邦のPT「シュツツバルト」と「ゲシュペンスト」が見える

ルシア「あれがゲシュペンスト・・・それに同系列の支援機か。」

ライ「後続が来たか・・・！」

リュウセイ「な、何なんだよあの機体は・・・！」

リオンとシュヴェールトは攻撃を仕掛けるがシュツツバルトは絶妙なタイミングで回避した。

ルシア「連邦にも腕の立つ奴がいたとはな・・・。」

ライ「リュウセイ！お前は先に行け！」

リュウセイ「え！？」

ライ「機動性ならゲシュペンストが上だ！奴らの相手は俺だけで十分だ！お前はハルマ隊を救え！」

リュウセイ「俺一人でか！？」

ライ「今動けるのはお前しかいないんだ！行くんだ！」

リュウセイ「お、おう！」

リュウセイのゲシュペンストがテンザンが迎撃しているハルマ隊の元へ急行した

ルシア「PTがテンザンの方に・・・！各機！俺はテンザン機を援護する！ここは任せたぞ！！」

DC兵「了解！」

ルシアは追撃に向かうがシュツツバルトのビームカノンが発射されたが、それを回避する。

ルシア「くそ・・・！」

DC「大尉！援護します！」

DC兵がシュツツバルトに攻撃を仕掛け、足止めをする

DC兵「今です大尉！！」

ルシア「感謝する！」

ルシアのリオンはテンザンの元へ急いだ。

そこで見たのは、戦車隊を次々と撃墜しているリオンの姿だった。

ルシア「テンザンそこまでだ！離脱するぞ！！」

テンザン「何言ってるんだよ！まだ獲物は残ってるっての！！」

そう言ってるオンのトリガーを引き、こちら側に向かっていた戦車の一機のキャタピラを破壊する。

テンザン「これで終わりだったの！」

ルシア「やめろ！！無抵抗の人間にまで手を出すな！！」

テンザン「死ねえ！！」

テンザンは話も聞かずにトリガーを引いたが、そこにゲシユペンストが割り込み、戦車を庇った。

ルシア「な！？」

テンザン「やった！・・・ん？」

庇ったせいか、ゲシユペンストの左腕が破壊されていた。

ハルマ「あのゲシユペンストは・・・！」

リュウセイ「中尉！今のうちに逃げてくれ！！」

ハルマ「曹長！？」

リュウセイ「早く！！」

ハルマ「わ、分かった！」

戦車に乗りこんでいた連邦兵士は脱出した。

テンザン「へへッ！もっといいい獲物が現れやがったぜ！！」

リュウセイ「どこのどいつか知らねえが、これ以上やらせねえ！！」

テンザン「へへへッ！俺がPT撃墜第一号になってやるぜ！！」

そう言つてテンザンはPTに攻撃を仕掛ける。

しかし向こうは回避し反撃するが、リオンの機動性に追いつけるはずもなく攻撃は当たらない。

リュウセイ「くそ・・・！！当たらねえ！」

テンザン「このリオンはな・・・！てめえらの人形とはわけが違つてのー！！」

テンザンはPT周辺を攻撃し、下がるうとしたPTを穴にはめて転ばせた。

リュウセイ「し、しまった！？」

テンザン「俺と戦うにはレベルが足りなかつたな！！」

ルシア「そこまでだテンザン！！俺達の任務は戦闘じゃない！引くんだー！！」

テンザン「くたばれや、ゲシュペンスト！」

テンザンはレールガンで狙いを定めるが、何者かの攻撃でレールガンが破壊された。

テンザン「な!?!」

ルシア「新手か!?!」

そこにもう一機のゲシュペンストと先ほどのシュッツバルトが駆け付けに来た。

ルシア「シュヴェールルト隊は全滅か……!」

アヤ「リュウ!今のうちに!」

リュウセイ「アヤ・・ライ・・!」

テンザン「テメエ!……ん!?!」

アラームが鳴り後ろを見るとブーメランのような武器がリオン目がけて飛んできた。

テンザン「何!?!」

わずかに掠めた隙を狙い、シュッツバルトがツインビームカノンを発射する。

ライ「そこだ!」

アヤ「今よ！リュウ！」

リュウセイ「お、おう！」

ゲシュペンストのマシガンがテンザンのリオンの右足部分を破壊した。

テンザン「じよ、冗談じゃねえ！俺はこんなところで死ぬキャラじゃねえっての！」

ルシア「だから言わんこつちやない……だが潮時だな、撤退する！」

テンザン機とルシア機は伊豆から撤退した。

アヤ「リュウ！大丈夫！？」

リュウセイ「あ、ああ……何とか……（さっきの奴ら……一体何者なんだ……？もう一機は見てただけだったし……）」

キラールホエール級 艦内

ルシア「テンザン、あの戦闘は何だ？命令無視した上、機体の破損、始末書じゃ済まんぞ？」

テンザン「壊れたもんは直せば済むことだったの。」

ルシア「何だと……！」

テンザン「文句があるんならアンタの親父が俺を選んだアードラーに言えつての！それも上は承知の上であれに乗せてるんだぜ？」

ルシア「そのせいでシュヴェールルト隊が全滅したんだ！！貴様の責任だ！！」

テンザン「離せよ・・・アードラーが黙っちゃいねーぜ？」

ルシア「・・・くそ！」

DC兵「ルシア大尉、南極での会談の映像が入ってきました！」

ルシア「もう会談が始まる日か・・・繋いでくれ。」

DC兵「はっ！」

そこに映し出されたのはグランゾンとエアロゲイターの戦艦だった。

ルシア「あれはグランゾン・・・！」

グランゾンは戦艦を攻撃し、その後戦艦からデータにない機体が発進された。

ルシア「あれはバグス・・・いや、違う機体か・・・！」

尚も戦闘が続き、グランゾンは周りのPTとアンノウンを撃墜、スペースノア級戦艦「シロガネ」を沈めた。

ルシア「あれが・・・グランゾン・・・！！いよいよ始まる・・・俺達DCが連邦に代わり地球圏を護るんだ・・・！！」

しかし、そこに謎の機体が現れた。

ルシア「あれは・・・！？AGX-05・・・！？」

しかし戦闘は行われず、AGX-05は何処かへ飛び去って行った。

ルシア「グランゾンがいた場所にAGX-05・・・何か関係があるのか・・・？」

第2話 完

## 第2話

## 痛みある戦い（後書き）

中断メッセージ風後書き

タスク「ルシアく、聞いたぜ！お前エクセ姐さんに合格もらったんだって？」

ルシア「な！？あのアマ・・・余計なことを・・・！」

タスク「俺にも何か聞かせてくれよ。2つか3つ位！」

ルシア「何でそんなに!？」

カチーナ「さつさとやりやがれ！百叩きだぞ!!！」

ルシア「わ、分かったよ・・・えーと・・・」

ルシア「バイビ〜!!」

タスク「・・・!!」

ルシア「行くぞ！弟！」

カチーナ「・・・・・・・・・・」

ルシア「直角竜巻フェイント!!」

ラッセル「・・・・・・・・・・」

ルシア（ああ駄目だ・・・・・・・・絶対無理だこれ・・・・）

タスク「ま、負けたぜ・・・・・・・・」

カチーナ「やりやできんじゃねえか！見直したぜ！」

ルシア「へ！？」

ラッセル「さすがエクセレン少尉に認められただけのことではありませんね・・・・・・・・」

ルシア「・・・・・・・・勘弁してください・・・・・・・・」

今回登場した機体

リオン・タイプT（ルシア専用機）

テストタイプのリオンのパーソナルカラーを変更しただけであり、基本武装、性能はリオンと同じ。

### 第3話　　ディバイン・クルセイダース

DC本部　アイドネウス島　管制室

そこにエルザム・V・ブランシュタインが入り、DC兵全員が敬礼をして出迎える。

そこにビアンとルシアもいた。

エルザム「ビアン・ゾルダーク博士・・・いや、総帥。お時間です。」

ビアンが静かにならずき、ルシアと共に演説する場所へ向かう。

エルザム「ルシアよ、地球に降りてからの報告は受けている。健闘したらしいな。」

ルシア「はっ、ありがとうございます。エルザム少佐。」

ビアン「頼もしい限りだ、この調子でDCに栄光をもたらしてくれ。」

ルシア「はっ！」

エルザム「地球の重力には慣れたか？」

ルシア「正直まだですがエルザム少佐とビアン総帥の期待に答えねばならないので弱音は吐いておられません。」

エルザム「そうか、いつかは宇宙に上がってもらおう事もあるが・  
その時はよろしく頼むぞ？」

ルシア「はっ！」

そして、ビアン・ゾルダークの演説が始まった。

そこにはDCの幹部、バン・バ・チュンとロレンツォ・デイ・モン  
テニヤツコもいた。

ルシア（すごい・・・DC幹部が勢ぞろいするなんて・・・これ  
はますます期待に答えねば・・・！）

ビアン「もはや人類は逃げ場を失った！我々に必要なのは箱舟では  
なく、異星人に対抗するための剣なのだ！本日をもちEOTI機関  
はデイバイン・クルセイダーズとして新生し、地球圏の真の守護者  
となることを宣言する！」

アードラー「・・・」

バン「・・・」

ロレンツォ「・・・」

ビアン「そして腐敗した地球連邦政府を肅清し、異星からの侵略者  
を退け、この宇宙を地球人類の主権を確立するのだ！！」

DCの兵士達は歓声を上げた

ルシア（これなら連邦に代わって地球を護る事が出来る・・・俺も頑張らねば・・・）

ビアン「諸君らも知っているであろう。かつて新たなフロンティアを切り開くため、地球に旅立ったヒリュウのことを！あの船は航中事故により志半ばで帰還した事になっているが真相は違う。」

エルザム「・・・」

ルシア（確か・・・）

ビアン「ヒリュウは冥王星宙域でエアロゲイターと呼称された地球外知的生命体の襲撃を受け、大破したのだ！」

ルシア「・・・」

ビアン「地球連邦政府の上層部はその事実を人民に対して隠ぺいし、エアロゲイターの存在と彼らによる侵略の脅威を闇の中へ葬り去ろうとした。」

それは俗に異星人と呼ばれる者たちの存在を世に知れ、地球圏が混乱に陥ることを未然に防ぐための手段であったかもしれない。だが我々地球人類が異星人の侵略という未曾有の危機にさらされていることは事実なのだ。」

ルシア（そうだ・・・さつさと認めてしまえばこんな事にはならなかったんだ・・・）

ビアン「我らディバイン・クルセイダーズはそれから目をそらすようなことはせん。我等は異星人に屈することなく母星である地球を

護りぬく事を決意した！

今後の地球圏に必要なものは強大な軍事力を持ち、かつ的確な行使出来る政権ではある。だがそれは人民を恐怖や独裁で支配するものではない！我々は護るべき人民に対し刃を向けるようなことはせん。

デイバイン・クルセイダーズの意志を理解し、地球圏と人類の存続を望む者は全力を持ってその意を示せ！異議なる者はその力を持って我等に立ち向かうがいい！」

ルシア「……………」

ビアン「正義と平和の名のもとに！振るわれた剣の共に、人よ集え！人よ戦え！我等デイバイン・クルセイダーズと共に！！」

DC兵「DC！DC！DC！DC！」

DC兵「DC！DC！DC！DC！」

ルシア（これが始まりだ……………！DCの栄光は俺がもたらす……………！）

演説終了後、ミクロネシア海域のウェーク基地の制圧を命じられた。

エルザム「早速の任務だが……………やってくれるな？」

ルシア「はっ！必ずやってみせます！」

エルザム「部隊として チームを配属させた。健闘を祈るぞ。」

そう言ってエルザムはその場を立ち去り、宇宙へ上がった

そこに チームのスレイとアイビスがルシアの前に出る

スレイ「ルシア大尉、共に戦えることを光栄に思います。」

ルシア「だが君達は・・・戦闘はしないはずじゃ？」

スレイ「はい、私達はプロジェクトTDに配属されます。」

ルシア「プロジェクトTD・・・外宇宙に出るためのプロジェクトか？」

スレイ「はい、しかしそのためにも今回の任務はやり遂げる必要があります！」

ルシア「そうだな、よろしく頼むぞ。」

スレイ「はっ！」

アイビス「はっ！」

太平洋 ミクロネシア海域 ウェーク基地

連邦兵「敵が接近中！DCです！」

連邦士官「こんなところまで攻めてきたのか・・・！PTもないと  
いうのに・・・！総員出撃！！」

連邦兵「了解！」

ウェーク基地から戦闘機や戦車が出てきた

スレイ「あれほどの戦力を私達だけで……！」

ルシア「俺達3人は試作ガリオンに乗っているんだ、何とかなるさ。」

アイビス「リオンと勝手が違う……！でも……！」

連邦兵「DCめ……！」

戦闘機が複数接近してきた

ルシア「1より各機！敵を迎撃するぞ！だが命は無駄にはするな！」

スレイ「了解！」

アイビス「りよ、了解！」

ルシア「アイビス、あまり無茶はするなよ？」

アイビス「え……？」

ルシア「弱いからじゃない、お前はこれから強くなる素質がある。だからこんなところで死ぬな。」

アイビス「了解！」

スレイ（何故だ……？何故ルシア大尉はアイビスばかりを……？）

そして戦闘が始まった

3人の乗っているのはDCの試作アーマード・モジュール「ガーリオン」

DCの次期主力機として開発された機体

PTがないこのウエーク基地にとっては脅威だった

ルシア「そこだ！」

スレイ「落ちなさい！！」

ルシアとスレイが連邦の兵器を次々と落していく

しかしアイビスは操縦に手間取り中々攻撃出来ずにいた。

アイビス「くっ……！！」

スレイ「3！遅れるな！」

アイビス「りよ、了解！」

その瞬間、後方からミサイルの直撃を受けたアイビス機は墜落した

アイビス「うわああああ！！」

スレイ「アイビス！」

ルシア「アイビスー!!」

ルシアは戦闘機を撃墜し、ガリオンを墜落寸前で受け止めた  
ルシア「大丈夫か!？」

アイビス「は、はい……」

スレイ「全く……今の落ち方、流星そっくりだったぞ？」

アイビス「な……!？」

ルシア「スレイ、彼女はまだ未熟だ。そう言ってやるな。」

スレイ「は……申し訳ありません。」

ルシア「いい……ウェーク基地は制圧した、撤退するぞ。」

スレイ「了解!」

アイビス「了解……」

キラールホエール級艦内

ルシア「2人共、初の実戦ご苦労だった。」

スレイ「いえ……」

アイビス「大尉……再三ご迷惑をおかけして申し訳ありません……」

ルシア「言っただろ？最初はそんなものだ・・・」

スレイ「私達はこの後すぐにプロジェクトに参加します。大尉とはしばらくお別れです。」

ルシア「そうか・・・俺もすぐに佐世保に救援へ向かわなくちゃいけない、これから忙しくなるな・・・」

アイビス「はい・・・」

ルシア「大丈夫、永遠の別れじゃないんだ。またいつか会えると思っている。」

アイビス「はい・・・！」

ルシア「俺もプロジェクトに参加したくなっただな・・・」

スレイ「それはツグミに相談してみます。」

ルシア「ホントか？助かるよ・・・もう行かなきゃ、また会おう！」

アイビス「はい！」

ルシアはリオンに乗りこんだ。

DC兵「大尉のガールイオンは無事本部までお届けします！」

ルシア「助かる、ルシア・ゾルダーク、リオン出るぞ！」

佐世保基地

ジャーダ「くそー！いくら落としてもきりがないぜ！」

ガーネット「残ったのは私たちだけみたいね・・・」

カイ「佐世保をやらせるわけにはいかん！迎撃しろ！」

リュウセイ「ライ！例の新型は！？」

ライ「まだ現れていない、だが戦闘機だけで終わるはずもないな。」

アヤ「二人とも、警戒を怠らないで！」

ラトウーニ「新手がきたわ・・・」

カイ「新型のお出ましか！」

そこにルシアのリオンが現れた

リュウセイ「何だ？一機だけか？」

ジャーダ「よほど腕に自信があるみたいだな！」

ガーネット「私たちもなめられたものね！」

カイ「あの銀色の機体・・・それにあの紋章は・・・」

ルシア「ゲシユペンストが6機、それに伊豆の支援機が1機・・・」

俺たちDCの戦いにPTを使ってくるとはな・・・それもこれ上層部の臆病者が・・・」

ルシアは戦闘体勢に入った

カイ「来るぞ！各機迎撃！！敵は1機だ！確実にしとめる！！」

リュウセイ「了解！」

ルシア「まずはあの緑のゲシュペンストからだ。」

ルシアはカイ機に攻撃を仕掛けるがあっさりと避けられる

ルシア「避けた・・・？中々腕が立っている！」

カイ「あの流れるような戦い方・・・間違いない！あれはコロニー統合軍で白銀の流星と呼ばれたエース「ルシア・ゾルダーク」か！？やはりDC側に付いていたのか・・・！」

リュウセイ「え？」

ライ「お前じゃないぞリュウセイ。（コロニー統合軍の・・・奴が関わっているのか・・・？）」

ジャーダ「何だよそのルシアってのは！？」

ラトウーニ「ルシア・ゾルダーク、DCの総帥ビアン・ゾルダークの養子で5年間特殊戦技教導隊のスタッフとしてコロニー統合軍に在籍。DCでは大尉だけど権限は大佐クラス。」

ガーネット「それってただの親の七光りっただけじゃないの？」

ラトウーニ「それだけじゃない、実力はDC、統合軍でもトップクラス。」

リュウセイ「厄介な奴が来たもんだぜ・・・！」

ルシア「あれは・・・伊豆の時の・・・ちょうどいい、お前達に地球圏を護るだけの力があるのか・・・見定めてやる！」

ルシアはリュウセイ機を攻撃したが掠めた程度で、ライのシュツツバルトや他のPTが攻撃を仕掛けてきた

ルシア「くそ・・・！さすがに数で押されると厄介だな・・・！」

カイ「さすがはDCのエース・・・そう簡単に落ちてくれんか！」

そこにキラールホエールから通信が入った

DC兵「こちらホエール1！ルシア大尉、応答を！」

ルシア「こちらルシア機、どうした？」

DC兵「こちらでMAPWを発射し佐世保を落とします！退避を！」

ルシア「なるほど・・・そのための足止めをさせたということか・・・」

DC兵「も、申し訳ありません！出来ることなら大尉抜きでやらな

ければいけなかったものを・・・！」

ルシア「いや、PTが相手ではこうもなるつ。各機撤退！！」

ルシアの指揮の下、シュヴェールト隊は撤退を完了した。

そこにMAPWのミサイルが佐世保に当たり、基地は吹き飛んだ

ルシア「やはり・・・今の連邦にはエアロゲイターと戦う力はないな、だから俺たちがやらなければいけない・・・」

DC本部 司令室

ルシア「お、俺を伊豆攻略作戦に!？」

エルザム「そうだ、伊豆のスペーススノア級2番艦「ハガネ」とSRX計画のPTの奪取が任務だ。」

ルシア「奪取？破壊ではないのですか？」

エルザム「今の我々には少しでも強力な戦力が必要だ、それにお前なら必ずやり遂げてくれることを信じている。」

ルシア「はっ！必ず成功してみせます！」

エルザム「私もトロンベで出撃する、お前にはバックアップをやってもらつ。」

ルシア「少佐自ら!？」

エルザム「ああ、少し私情に付き合わせることになるが・・・頼んだぞ？」

ルシア「私情？」

エルザム「お前も何度か交戦したと思うが、SRX計画の参加者の一人に我が弟がいる。」

ルシア「少佐の弟というと・・・ライディーズ・V・ブランシユタインのことですか？あの中にライディーズがいると・・・？」

エルザム「ああ・・・」

ルシア「何故そんなことを・・・？」

エルザム「・・・エルピス事件を覚えているか？」

ルシア「忘れてたくても忘れられませんよ・・・！カトリア様が犠牲になったのですから・・・！」

エルザム「そうだな・・・お前にもつらい思いをさせてしまい申し訳ない。」

ルシア「謝る必要なんてありません！それもこれも全て私が・・・！」

エルザム「・・・そろそろ伊豆に向かう時間だ、今回の作戦はテンペスト少佐やテンザン・ナカジマも参加することになっている。」

ルシア「テンザンが・・・!?」

エルザム「お前からの報告は受けている。問題が山積なのは分かるが・・・今はそれどころではないことは理解しているな？」

ルシア「しかし！戦争をゲーム感覚でやられては困ります！実際そのせいで伊豆の偵察部隊は奴と俺以外は全滅しました・・・！」

エルザム「まだDCに参加して日が浅い、経験を重ねれば自ずと現状を理解するだろう。」

ルシア「・・・ガールリオンの搬入作業に戻ります。」

エルザム「分かった。」

ルシアはガールリオンの搬入作業へと行く

エルザム（ルシアもまだまだ若いな・・・教導隊にいたころの私たちによく似ている・・・）

第3話 完

### 第3話　　ディバイン・クルセイダース（後書き）

中断メッセージ風後書き

リュウセイ「ルシア！噂は聞いてるぜ！中々やるみたいじゃねえか！」

ルシア「どんだけ広がってたよ……」

リュウセイ「頼みたいことがあってよ、本編じゃ使い時がないからこのシミュレータで色々武器使ってみるよ！」

ルシア「何でそこまでして……」

ロバート「大丈夫、特定機体のもの以外は全て君のガーリオンにしてあるから。」

ルシア「配慮されてるのかされてないのか……」

リュウセイ「ささ！早く早く！！」

ルシア「わ、分かったからせかすな……えーと……シシオウブレードね、はいはい……」

ルシア「獅子王の太刀！当たると痛いぞ！！」

ルシア「獅子王三枚おろし！！とどめの……一撃……！！」

リュウセイ「……………」

ロバート「これは……………」

ルシア「……………あえて何も言わなくても」

リュウセイ「すげーよ!!すげーよお前!!」

ロバート「さすが、あのビアン博士の息子さんだね。」

ルシア「……………俺、ここにいてもいいのかな……………」

## 第4話 鋼鉄の箱舟

キラールホエール艦 ブリッジ

テンペスト「エルザム、久しぶりだな。まさか地上で共に戦う事になろうとはな。」

エルザム「ええ。」

テンペスト「だが今回の作戦は……」

エルザム「連邦軍伊豆基地を攻撃し、戦闘母艦ハガネ及びSRX計画の試作PTの奪取……ですか？」

テンペスト「奪取など手ぬるいと思わんか？敵を殲滅することが軍人本来の務めだ。」

エルザム「しかし、それが命令です。それに我々の本当の目的は来るべき脅威を撃ち払う事。それを果たすためならば敵の兵器であるうと利用するまでです。その決意がなかったがために教導隊は解体され、今では敵味方となって……」

テンペスト「言うな、作戦が順調に進められるのならそれもいだろう。だが、ハガネと試作機が我々の手に入らないその時は……」

エルザム「少佐、あなたの闘う理由はやはり……」

テンペスト「……復讐だ。」

キラールホエール 格納庫

ルシア「俺のガールリオンはどうなっている？」

DC兵「機体の状態は万全です。いつでも発進可能です。」

ルシア「テンザンは？」

DC兵「機体チェックにも立ち会わずに・・・自室で何やらゲームを・・・」

ルシア「確かバーニングPTと言ったな？そんなに面白いのか？」

DC兵「大尉、正直テンザンの自己中心的な行動には他の兵も不満がっています。このままではいずれば・・・」

ルシア「DCに入ってから日も浅いこともあるが・・・ホントにコッホ博士の考えている事はよくわからん。」

そこに格納庫全体にアラームが鳴り始める

オペレーター「総員第1種戦闘配置！繰り返す、総員第1種戦闘配置！」

ルシア「伊豆に到着したか・・・！」

DC兵「ルシア大尉、ご武運を！」

ルシア「任せてもらおう！」

連邦軍伊豆基地

エルザム「全機配置についたな？」

ルシア「少佐、テンザン機がまだです。」

テンザン「悪い悪い、ゲームしてたら眠たくなっちゃまってよ。」

ルシア「・・・テンザン貴様！！」

エルザム「やめるルシア！今は伊豆を攻略するのが先だ。」

ルシア「・・・了解・・・！」

テンザン「まったく、そんなにカリカリしていると長生き出来ないぞ？」

ルシア（くそ・・・！！エルザム少佐ももつときつく言えばこつもならないのに・・・！！）

エルザムは伊豆基地に通信を始めた

通信相手は連邦軍のレイカー指令だ

エルザム「こちらはDC第19機動部隊隊長、エルザム・V・ブラ  
ンシュタイン少佐だ。」

レイカー「伊豆基地司令、レイカー・ランドルフだ。」

エルザム「通達する、ハガネとSRX計画の試作機をこちらに引き渡せ。」

レイカー「断る。」

エルザム「では降伏か死か、好きな方を選べ。」

レイカー「そのどちらも選ぶつもりもない。」

エルザム「了解した。」

エルザムは通信を切り、戦闘態勢に入る。

エルザム「ルシア隊、テンザン隊、フェイズ2へ移行しろ。」

ルシア「ルシア隊、了解！」

テンザン「テンザン隊了解！さーて、お宝をいただきにいくとするか！」

そこに正面から新型PT-1機と、一回り大きい機体が現れた。

ルシア「あれは・・・？」

DC兵「あれはグルンガストです、今データを回します！」

ルシア「グルンガスト・・・特斯拉・ライヒ研究所の特機だつて！  
？何でこんなものが・・・？」

イングラム「破壊する！」

イングラムの搭乗機「ビルドシュバイン」が攻撃を仕掛け、テンザン隊とルシア隊のAMを一機ずつ落とした

テンザン「チッ！やっつけてくれるぜ！」

ルシア「かなり腕の立つやつみたいだな・・・！」

エルザム「ルシア、私はライダーズの元に行く。グルンガストの相手を頼む！」

ルシア「了解！」

イルム「敵の新型か・・・！」

ルシアはグルンガストに攻撃をするがビクともしない

ルシア「何て固い装甲なんだ・・・！あれが特機・・・」

イルム「中々やりやがるな。だがこれならどうだ！ブースト・ナックル！！！」

グルンガストが右腕を射出し、ルシアのガーリオンに掠めた

イルム「チッ！かすっただけか！」

ルシア「ダメージ25%・・・掠めただけでこうもダメージを・・・！」

その時、伊豆基地発進口から八ガネが浮上してきた

ルシア「あれは・・・ハガネか!？」

テンザン「ヘッ!のこのこと出てきやがって!」

テンザンが攻撃を仕掛けようとするがハガネの対空砲の弾幕により  
接近が出来ない

テンザン「チツ!近づけねえ!」

エルザム「ルシア!左舷の主砲を破壊しろ!私は右舷をやる!」

ルシア「了解!」

エルザムとルシアがレールガンでハガネの主砲を破壊する。

するとそこにテンペストから通信が入る

テンペスト『エルザム、ルシア!すぐにハガネから離れる、今から  
戦術巡航ミサイルを発射する。』

エルザム「ハガネを沈める気ですか!」

ルシア「少佐、俺達の任務は・・・!」

テンペスト『分かっている。こちらの戦力を分散する気だ、敵の援  
軍が来る前にハガネの推進部を破壊する。いいな?』

エルザム「・・・了解。」

ルシア「仕方ないか……全機撤退！」

DCの部隊が撤退を開始し、巡航ミサイルが横切った

ルシア「これでハガネは終わりか……」

ハガネに直撃する寸前でミサイルが爆発した。

しかしハガネは健在していた。

連邦のPT「R-1」のブースデットライフルで狙撃されたからだ。

ルシア「馬鹿な……！ミサイルを狙撃したと！？」

基地にいたPT部隊の一部がハガネに合流している。

ルシア「少佐！追撃を！」

エルザム「いや……期を逃した。全機帰投せよ！」

ルシア「……了解……！」

エルザム「生き延びたかハガネ、そしてライディース。フツ、次に相まみえる時を楽しみにしているぞ。」

キラーホエール艦内

ルシア「ウエーク基地の防衛……ですか？」

エルザム「ああ、お前に制圧してもらった基地だ。万が一ハガネが襲撃してきた場合はお前がいらないといけないと思ってな。テンペスト少佐の部隊もウエーク基地の配属になった。」

ルシア「しかし何故・・・？」

エルザム「ビアン総帥は・・・ハガネはアイドネウス島攻略の任務を受けた可能性があると考えたからだ。」

ルシア「あ、あり得ません！！ハガネとはいえ単艦でDC本部に奇襲なんて無謀です！」

エルザム「ルシア、あり得ん事をするから奇襲というのだ。」

ルシア「あ・・・」

エルザム「私は一足先に本部に帰還する。ルシアはそのままウエーク基地へ向かってくれ。」

ルシア「了解！・・・少佐。」

エルザム「どうした？」

ルシア「もし・・・ライダーズと出会った時は・・・どうすればいいですか？」

エルザム「・・・迷わずに撃て。でないと死ぬのはお前だぞ？」

ルシア「はい・・・」

キラールホエール 格納庫

ルシア「ODEシステム……ですか？」

ピアン「ああ、ユルゲン博士を知っているな？」

ルシア「はい。ユルゲン博士のシステム……ODEシステムは人命の消耗を最小限にとどめ、少数の人間で多数の無人機を制御するシステムだと……」

ピアン「そうだ、私はそれを凍結した。」

ルシア「凍結！？何でまた……」

シウウ「機体スペックが膨大なデータの処理についていけず、そのデータで搭乗者の脳に多大な負荷がかかるのです」

ルシア「シラカワ博士……！」

シウウ「さらにそのために大量の生体コアが必要でしたのでね……凍結処分を下しました。」

ルシア「生体コア……それじゃ結局人命の消耗の意味がなくなるじゃないですか!？」

ピアン「そうだ……システムによって死人が出るのなら、一人でも多くの兵士が戦えば済む話だ……」

ルシア「確かにそうですね……」

シユウ『ルシア君、本部に帰って来てからでいいので見てもらいたいものがあるのですが・・・いいですか?』

ルシア「え?ええ・・・俺は構いません。」

シユウ『ではご武運を。』

通信が切られた

ルシア「何だ・・・?見てもらいたいものがあるって・・・グラ  
ンゾン・・・なわけないよな・・・」

第4話 完

#### 第4話 鋼鉄の箱舟（後書き）

キョウスケ「ルシア、活躍は色々聞いているぞ。」

ルシア「だから・・・なんで広がってんだって・・・」

キョウスケ「お前にならアルトを任せられるかもしれん。やってみる。」

ルシア「アルトアイゼンでやれってか・・・!」

マリオン「攻撃の出来次第によつては・・・色々考えてもよろしくてよ?」

ルシア「なんかよからぬこと考えてない!？」

キョウスケ「・・・」

ルシア「わ、分かったから睨まないで・・・えーと、リボルビン  
グ・ステーキだね・・・うーん・・・」

ルシア「こいつに当たればただでは済まない!!ステーキ・スパ  
アアアク!!」

キョウスケ「・・・」

マリオン「・・・」

ルシア「・・・あの・・・」

「キョウスケ「さすが、エクセレンが目をつけただけのことはあるな。」

ルシア「……………へ？」

「マリオン「スパークですか……………改造案に掲載しておきますね。」

ルシア「ありがた迷惑だ……………」

## 第5話 風の魔装機神

ウエーク島基地 指令室

テンザン「よう少佐！新型機の調整はばっちしだぜ。あれは中々いい感じのおもちゃだな。」

ルシア「……………」

テンペスト「兵器をおもちゃ呼ばわりするな。」

テンザン「へーへ、で、ハガネは見つかったのかよ？」

テンペスト「ルートは絞り込んだ。発見は時間の問題だ。」

テンザン「そうかい？やっぱりデカくて強え奴を相手にする方が燃えっからな！今度はきっちりクリアしてやんぜ。」

ルシア「簡単にいくとは思えんがな。」

テンザン「何だよ？あいつを扱いきれなくてひがんでんのか？」

ルシア「クツ……………」

テンザン「ん？面白え形してんな、敵か？」

テンペスト「ここ最近各地で確認されているアンノウンだ。その正体も目的も不明だ。」

テンザン「んなもん落としちまえばいいっての！アンノウンだろうがなんだろうが俺が新型機で撃墜してやっぜ？」

テンペスト「……………」

ルシア「少佐、俺はバレリオンの調整しに行きます。」

テンペスト「分かった。」

ウェーク基地 格納庫

ルシア「くそ……！なんて扱いづらい機体なんだ……！ただの飛ぶ砲台がこんなに扱いづらいなんて……！」

テンザン「よお！苦戦してるみたいだな！」

ルシア「テンザン……！」

テンザン「やつぱオメエは本部かあの時の女のいるところに行つてれば良かったんじゃないかねえのか？」

ルシア「まだ言うかテンザン！」

テンザン「そんなに顔を赤くすんなって……冗談だったの。」

ルシア「お前な……！」

その時、アラームが鳴りだす。

オペレーター「総員第1種戦闘配置！繰り返す、総員第1種戦闘配置！」

ルシア「何だ！？」

テンペスト「ルシア、テンザン。PT2機と特機がこちらに向かってきている。迎撃に出てくれ。」

テンザン「俺に任しとけ、一網打尽にしてやつからよ！」

ルシア「少佐、俺はガーリオンで出ます。バレリオンは性に合いません。」

テンペスト「よかろう。だが敵を第2警戒ラインギリギリまでひきつける。」

テンザン「え？」

テンペスト「奴らはバレリオンの存在を知らん。それを利用し一気に敵を殲滅するぞ。ルシアは指示があるまで待機だ。」

ルシア「了解……」

ウエーク島基地

ルシア「少佐、各機配置につきました。」

テンペスト「そのまま第2警戒ラインまでひきつけた後、バレリオン部隊の一斉射撃で撃破しろ。」

ルシア「了解。」

テンザン「今回は俺が指揮官だぜ？逆らうなよ？」

ルシア「命令違反の常習犯に言われたくない！」

テンペスト「いい加減にしないかルシア。今のテンザンはバレリオン部隊の隊長だ、逆らう真似はするな。」

ルシア「・・・了解・・・」

DC兵「敵PT群、第3警戒ラインを突破！」

テンザン「へへッ！きやがったぜ！さあ来い！飛んで火に入る夏の虫ども！」

ルシアのレーダーから機体が確認出来た

ルシア「敵の新型PT2機と・・・グルンガストの可変形態・・・滞空時間が長い機体で砲台を破壊しに来たか・・・だが、これは砲台じゃない。」

イルム「何だあれは？新型の砲台か？」

リュウセイ「撃つて来ないんならこっちのもんだ！行くぜ！！」

リュウセイのPT「ビルドラプター」が単機で突っ込んできた。

リュウセイ「くらえ！」

ビルドラプターがビームを撃ったがテンザンのバレリオンは寸前で避けた。

リュウセイ「何！？飛んだ！？」

テンザン「へへッ！もらったぜ！」

しかしその攻撃も外れる

テンザン「チッ、外れたか。お前らも撃て！！」

テンザンの指示でバレリオン隊が砲撃を開始する。

イルム「こいつらは砲台なんかじゃない！」

イングラム「敵のAMか・・・各機、第3警戒ラインまで後退するぞ。」

リュウセイ「了解！」

ルシア「少佐！第5警戒ラインに反応が！識別はスペースノア級、ハガネです！」

テンペスト「撤退せずに突っ込んで来たか・・・残りのバレリオンをハガネに向かわせろ！ルシアも至急出撃し、ハガネを護るPTの迎撃を。」

ルシア「了解！」

ルシアはすぐに出撃し、ハガネのPT迎撃に移る

そこにシュツツバルトが見えた。

ルシア「あれは・・・ライディースの機体か？」

ライ「あの時エルザムといた機体か・・・！」

ルシア「ライディース！何故エルザム少佐と離反などした！」

ライ「何！？」

ルシア「少佐は少佐なりにカトライア様を亡くして哀しんでいるんだ！何故それが分からん！」

ルシアはライ機に攻撃を仕掛ける。

ライ「ただ居合わせたお前に何が分かる！知った風な口を叩くな！」

こうしている間にもハガネは前進し、バレリオン隊と交戦を開始した。

ルシア「バレリオンの射程ならハガネの対空砲の弾幕を気にせず攻撃が出来る。ここでハガネは終わりだ。」

しかし、そこに猛スピードで接近する機影が現れた。

DC兵「少佐！本基地に高速で接近する機影を確認！数は1、識別は・・・不明！」

テンペスト「何!?!」

DC兵「アンノウンが第4警戒ラインを突破! AM以上の速度です!」

ルシア「な、あれは……、南極のAGX-05!?!」

テンザン「ん? 何だありゃ?」

アンノウンは尚も基地に接近する。

テンザン「例のアンノウンか。叩き落とせ!」

バレリオン隊が攻撃するが相手の機動力があり過ぎて1つも当たらない。

ルシア「なんて機動力だ……エルザム少佐でもああはいかないぞ……!」

マサキ「ここか、やっと着いたぜ!」

シロ「こんニヤところにグランゾンがいるのかニヤ?」

クロ「さあ? 反応はないニヤ。」

マサキ「とりあえず……邪魔もんを一気に片付けるぞ!」

クロ「まさか……あれを使う気がニヤ!?!」

シロ「無茶だニヤマサキ！今あんニヤもの使つたら・・・」

マサキ「うるせー！！」

クロ「ああもう・・・」

シロ「どうなつても知らないニヤ。」

AGX-05が不穏な動きを見せてきた。

テンザン「や、やべえ予感がする・・・俺は逃げるつての。」

DC兵「は！？何処に！？」

ルシア「待てテンザン！！・・・全機！あのアンノウンから退避しろ！急げ！！」

マサキ「くられえ！サイフラアアツシュ！！」

アンノウンからエネルギー波が放たれ、ハガネに取りついていたバレリオン隊、退避し損ねたテンザンのバレリオン隊は全滅した。

ルシア「馬鹿な・・・！！あれでハガネが無傷・・・しかも一撃でバレリオン隊が全滅・・・！！」

テンペスト「馬鹿な・・・我方の機体だけが・・・！！」

DC兵「ハガネが砲撃を！」

ハガネが主砲で基地周辺を攻撃してきた。

テンペスト「やむ負えん、基地を放棄する！撤退するぞ！」

DC兵「了解！」

ルシア「くそ……！何なんだあの兵器は……！」

ルシア達はやむなしに撤退を開始した。

キラホエール艦内

アードラー『ウエーク基地が落とされたようじゃな。』

テンペスト「申し訳ありません。」

ルシア「……………」

アードラー『まあいい、至急お前とルシア大尉にはキラホエール  
23番艦と合流し、アイドネウス島に帰還するのだ。』

ルシア「少佐もですか？」

アードラー「うぬ。」

テンペスト「ハガネを野放しにしろと？」

アードラー『これは総帥直々の帰還命令だ。エルザム少佐もこちら  
に向かっておる。』

ルシア「エルザム少佐も・・・？」

テンペスト「ならこの艦は誰に指揮を執らせると・・・？」

アードラー『心配無用じゃ。以降の任務はテンザン・ナカジマに引き継がせる。』

ルシア「何だつて!？」

テンペスト「パイロットとしての腕前はともかく、指揮が執れるとは思えません。」「

アードラー『言ったじゃろ？これは総帥直々の命令だと。よいな？早急に総司令部へ帰還しろ。総帥がお前達をお待ちじゃ。』

通信が切られた

テンペスト（まさか・・・私の心が見透かされたか？ハガネを奪取ではなく、撃沈しようと考えている私の・・・）

ルシア（何故だ・・・よりによつてあんな奴をこの艦の指揮官に・・・！）

そこにテンザンが入って来る。

テンザン「さーて、今日から俺がこの艦の戦闘指揮官だからな。ちゃんと命令を聞けよ。」「

ルシア「・・・・・・・・・・」

テンペスト「・・・・・・・・・・」

テンザン「な、何だ少佐と大尉・まだいたのかよ？」

テンペスト「……………」

テンザン「総帥があんたらを呼んでんだろ？さっさと行かなきゃマズインじゃないの？」

テンペスト「言われるまでもない。」

ルシア「整備班、すぐに俺とテンペスト少佐の機体を。」

DC兵『了解！』

テンザン「ま、後の事は任せてくれ。ハガネは俺が手に入れてやるからさ。」

テンペスト「現実とゲームの区別がつかない子供には無理だ。」

ルシア「同感だな。お前はハガネどころかPT-1機の奪取も出来ん。」

テンザン「ヘツ、いつまでも家族の仇討ちにこだわってるあんたに言われたかねえな。」

ルシア「!!！」

テンペスト「……………！」

テンザン「それに、戦争するのはな……もっと明るく、派手にパ

「ッつとやんなきゃ楽しくねえつての。」

ルシア「ここで死にたくなかったらその減らず口を閉じる!!」

テンペスト「今回はかりはルシアの言う通りだぞテンザン……  
！」

テンザン「おー、怖い怖い。復讐鬼つてのは怖いねえ。それが元教導隊ならなおさらだ。」

ルシア「貴様!!!!」

DC兵「大尉!落ち着いて下さい!」

ルシア「離せ!!こいつの命令なんか聞いてるとお前らもこの先長くないぞ!!」

テンペスト「……フン。ルシア大尉をそのままガーリオンまで運べ。」

DC兵「は……はっ!」

テンザン「それじゃ、気を取り直して……ハガネ相手のウォー・シミュレーションゲームを楽しむとすつか。」

テンペスト、ルシアは乗機に乗りこみ、キラールホエール23番艦へ向かう。

テンペスト「少しは落ち着いたか?」

ルシア「すみません・・・見苦しいところを・・・」

テンペスト「いや・・・構わん。」

ルシア「確か少佐のご家族は・・・ホープ事件で・・・」

テンペスト「ああ・・・妻と娘は連邦の愚行で命を落とした。テロリストに奪われたジガンスクード」ことな・・・」

ルシア「少佐・・・」

テンペスト「無駄話はそこまでだ。キラーホエールに合流するぞ。」

ルシア「了解！」

第6話 完

第5話 風の魔装機神（後書き）

エクセレン「ルシアくん、元気してる？」

ルシア「してねーよ、誰のせいだと思ってんだ？」

イルム「残念だね、せつかくグルンガストのデータを用意しておいたのにさ。」

ルシア「マジでか！？分かった、やってやるっ。」

エクセレン「やっぱりそこは特機好きのリユウセイ君と一緒にね。じゃ、早速いつてみましょうっか！」

ルシア「この計都羅？剣で・・・定刻通りに叩き斬る！！！」

ルシア「計都羅？剣・暗剣殺！十文字斬イイイイ！！斬！！！」

イルム「おお！気合入ってるじゃないの！」

エクセレン「さすがエクセお姉さまが一目置いただけのことはあるわね！」

ルシア「……………なんか……………あつちに染まってきたる？俺って……………」

## 第6話 ヴァルシオン

DC本部 総帥執務室

ピアン「ルシア、長期に渡る任務遂行、御苦労であった。」

ルシア「しかし・・・ハガネの奪取に失敗、それどころかウエーク基地が奪回されてしまいました。」

ピアン「気にすることはない。ハガネの力が勝っていただけに過ぎん。それよりもお前には見てもらいたいものがあるのだ。」

ルシア「見てもらいたいもの・・・ですか？」

ピアン「うむ、少し付き合ってくれ。」

DC本部 格納庫

ルシア「こ、これは・・・特機!？」

ピアン「そうだ、これぞ私の搭乗機にしてDCの最終兵器「ヴァルシオン」だ。」

ルシア「ヴァルシオンが完成していたのですか・・・」

ピアン「お前には起動実験に立ち会ってもらいたい。私はテンペスト・ホーカーと話があるのでね。」

ルシア「自分みたいなのが総帥専用機に乗ってもいいんですか……!?」

ピアン「構わん、お前はDCのルシア以前に私の掛け替えのない息子なのだから。」

ルシア「ありがとうございます!」

ピアンは執務室に戻り、ルシアはヴァルシオンに乗りこむ

ルシア「すごい……操縦は思ったよりも簡単……しかも火力はグランゾン並……行ける。これならハガネを……」

DC兵「ルシア大尉、今から起動実験及びシミュレータでの模擬戦を行います。」

ルシア「模擬戦?」

DC兵「はい、大尉にはヴァルシオンの戦闘能力を把握してもらいたいとのことですよ。」

ルシア「そうか、頼む。」

DC兵「はっ!ヴァルシオン起動します!」

ヴァルシオンが起動し、モニターにシミュレータの景色が映る

ルシア「起動成功、模擬戦の相手は?」

DC兵「相手はゲシュペンスト5機、エアロゲイターの兵器群が3

小隊です。』

ルシア「そんなに相手をして大丈夫なのか？」

DC兵『問題ありません、ヴァルシオンならこの程度は準備運動にもなりません。』

ルシア「分かった、模擬戦の開始を。」

DC兵『はっ！模擬戦開始！』

前方のPTとバグス群が動き出す。

ルシア「えーと武器は・・・音声認識システム？なるほど・・・総帥らしい。」

ヴァルシオンは戦闘態勢に入った

ルシア「まずはこれだ！クロスマツシャー！！」

クロスマツシャーが右腕の砲台から放たれ、バグス群が全滅、PTも3機撃墜された。

ルシア「すごい・・・たった一撃であの数を・・・これなら総帥も安心して戦える。」

DC兵『PT群、メガビームライフル及びミサイル発射！』

PTの攻撃が迫る中、回避行動がとれない。

ルシア「くそ……！やはり特機だな……動きが……」

しかし、攻撃はフィールドによって軽減されて、ほとんどダメージは負わなかった。

ルシア「な、何だ今のは！？」

シュウ『グランゾンと同じ歪曲フィールドが展開されています。』

ルシア「シラカワ博士！？」

シュウ『敵による攻撃がフィールドで歪曲、分散されるのでダメージが軽減されるという仕組みです。』

ルシア「な、なるほど……」

シュウ『そして……次の対戦相手は私です。』

ルシア「え！？」

そう言っている間に仮想空間にグランゾンが現れる。

シュウ「総帥の息子だからって手加減はしませんよ？」

ルシア「こちらこそ……」

シュウ「では行きますよ？ワームスマツシャー！」

グランゾンがワームホールにビームを放ち、それと同時にヴァルシオンの周りにワームホールが開き、ビームが撃ち込まれた。

ルシア「うわ!? さ、さすがグランゾンだ・・・パワーが段違いだ・・・!!」

シュウ「どうしたのです? それで終わりとは言いませんよね?」

ルシア「まさか・・・こっちにはとっておきがあるんですよ!」

そう言って、ルシアは目の前にあったボタンを押す。

するとヴァルシオン周辺に竜巻が発生した。

シュウ「ほう・・・もうそれを発見しましたか。」

ルシア「これで落ちてもらいますよ! メガ・グラビトンウェーブ!」

その瞬間、ヴァルシオンからエネルギー波が放たれ、周辺の地形ごとグランゾンにダメージを与えた。

シュウ「ク・・・!? 中々やりますね・・・さすがはピアン総帥の息子です・・・」

DC兵「シラカワ博士、ルシア大尉。シミュレータを終了します。」

ルシア「分かった。」

二人は搭乗機から降りた

シュウ「中々やりますね。」

ルシア「ヴァルシオンの性能に助けられただけですよ。あ、そういうば・・・南極で見たAGX-05なんですが・・・」

シュウ「サイバスターに会ったのですか？」

ルシア「サイバスター？」

シュウ「ええ、あれは魔装機神と言う部類の特機でしてね。味方だけやられませんでした？」

ルシア「は、はい・・・バレリオン隊はあの訳の分からないMAPWに全滅しました・・・」

シュウ「仕方ありませんよ、あれはサイフラッシュと言って自分が味方と認識したもの以外を全て破壊する兵器なのですから。」

ルシア「そうかそれで・・・しかし博士、何でそんなことまで？」

シュウ「昔から色々縁がありましてね。あの操者には・・・」

そこにビアンが戻って来た。

ビアン「起動実験は終わったか？」

シュウ「ええ。彼、結構使いこなしていましたよ。」

ビアン「そうか・・・今からヴァルシオンでハガネの力をこの目で確かめてみる。」

ルシア「な!？」

シュウ「ヴァルシオンで……ですか？」

ピアン「うむ。」

ルシア「危険です!!いくらヴァルシオンが強いからといって単機で挑もうなど……!!」

ピアン「お前をこれほどまで苦しめたハガネに挨拶しなければいけません。それに……ハガネをこちらに引きつけることも可能だ。」

シュウ「ヴァルシオンで力を見せつけ、脅すというわけですね？」

ルシア「通じるとは思いません……」

ピアン「なら、お前は護衛としてついてくるがいい。」

ルシア「俺がですか!？」

ピアン「そうだ、お前の機体は改良された。アードラーから説明を受けるといい。」

アードラー「ルシア大尉、こちらです。」

アードラーに連れてこられた先には、ルシア用のガーリオン・カスラムがあった。

ルシア「俺のガーリオン？」

アードラー「はい、連邦にいる内通者の横流しでT-LINKシステムとそれに対応された武器を搭載させました。」

ルシア「T-LINKシステム？」

アードラー「簡単に言うなればパイロットの脳波で火器管制などを行えるシステムです。」

ルシア「脳波？これは適性がないとダメなんじゃないのか？」

アードラー「心配には及びません。ルシア大尉にはその適性が十分すぎるほどありますゆえ。」

ルシア「ホントかよ・・・ところでその武器というのは？」

アードラー「T-LINKリッパーと呼ばれる遠隔操作型の近接武器です。」

ルシア「まさかそれ・・・あのゲシュペンストが使っていた・・・？」

アードラー「内通者の話ではそうらしいです。ささ、早く総帥の護衛任務に就いて下さい。」

ルシア「分かっている。」

ハガネがいる海域では、ユーリアが隊長を務める「トロイエ隊」がハガネに攻撃を仕掛けていた。

しかし、ハガネの軍勢に勝てるはずもなく、撤退を余儀なくされていた。

ハガネはルシアとビアンを感知していた。

エイタ「この空域に急速接近してくる物体を感知しました！先程の部隊ではありません！」

テツヤ「識別は！？」

エイタ「一機はAM・・・残る一機は不明です！」

テツヤ「一体なにが現れるというのだ・・・！」

ビアンとルシアは近くの島に着陸する。

ジャーダ「な・・・何だ、あいつは！？」

リュウセイ「巨大ロボット・・・！？」

イングラム「グランゾンでもエアロゲイターの機体でもない・・・DCの新型機か・・・？」

ビアン「初めまして諸君。私がDC総帥ビアン・ゾルダークだ。」

テツヤ「な・・・！」

リュウセイ「何だっつてえ！？」

ガーネット「ビアンって言ったわね・・・じゃああれって本物？」

ジャーダ「さ、さあな・・・ホログラフィかも知れねえ。」

ラトウーニ「あの機体は実体・・・！多分、本物のビアン・ゾル  
ダーク・・・」

ライ「そして護衛のあれは例の・・・！」

アヤ「ど、どうしてDCの総帥がこんな所に・・・！？」

ダイテツ「・・・ビアン、久しぶりだな。」

ビアン「フッフ、全くだ。ヒリュウの進宙式以来か・・・？」

ダイテツ「ここに現れた理由は何だ？」

ビアン「この私が直々に出向いたからにはこれが最後のチャンスだ  
と思いたまえ。」

ダイテツ「最後のチャンス・・・？」

ビアン「そうだ。己の運命を選ぶ最後のチャンスだ。」

ダイテツ「・・・」

ビアン「我が軍門に降るか、ここで死を選ぶか・・・選択は二つに  
一つだ。」

リュウセイ「何言ってるやがる！誰がためえらなかに降伏するか！

！」

ルシア「何も知らない子供が黙ってる……！」

リュウセイ「何だと!？」

イルム「リュウセイと大して歳変わらないと思うけどね……あんな。た。」

ルシア「聞き分けのない奴は子供と言って何が悪い？」

リュウセイ「うるせえ!! てめえらDCのおかげで世界中が戦争に巻き込まれたんだぞ!!！」

ピアン「この戦いは、地球人類が新たな時代を迎えるために必要な通過儀礼であり……陣痛なのだ。」

ルシア「そうさ、軟弱な連邦じゃこの先の未来は任せられない。だから俺達DCがいる。」

リュウセイ「ゴタクを並べやがって……! てめえらは単に世界を支配したいだけだろう! 違うか!!！」

ピアン「まだ若いお前には、そう見えるのだろうな、フフフ……」

リュウセイ「こ、この野郎……! 何がおかしいんだ!!！」

ルシア「吼えるだけなら、どんな馬鹿な犬にでも出来る。言いたい事があるんなら……自分の力で表現してみろ!!！」

リュウセイ「な、何っ……！」

ビアン「もっとも、お前達にこの究極ロボ「ヴァルシオン」を倒せればの話だな。」

ルシア（そんな異名にしてたんだ……ある意味、総帥らしいつちやらしいけど……）

リュウセイ「うるせえ！！究極ロボだが給食ロボだか知らねえが！この俺がブチ倒してやる！！」

ジャーダ「待てリュウセイ！あいつがどんな力を持っているか、まだかわらねえんだぞ！」

テツヤ「艦長！」

ダイテツ「構わん！奴の降伏勧告を受け入れるわけにはいかん！全機、ヴァルシオンへ攻撃を開始せよ！！」

ルシアのガリーオンはPT群へ攻撃を仕掛ける。

リュウセイ「この野郎！ビアンの息子が何だが知らねえが叩き潰してやる！！」

ルシア「テンザンと同じだな。」

リュウセイ「何！？あいつを知ってるのか！？」

ルシア「奴はバーニングPTの実績でDCに加入した。お前も同じ理由でそこにいるんだろっ？」

リュウセイ「確かにそうだが・・・俺は奴みたいにゲーム感覚で楽しんだり、ラトウー二を欠陥品呼ばわりしない!!」

ルシア「欠陥品・・・?」

リュウセイ「とにかく、俺はてめえらのやり方は気にいらねえ!!ここで倒してやる!!」

ルシア「やれるものならやってみるがいい!!」

リュウセイ「くらえ!!ハイパービームライホオ!!」

リュウセイが攻撃を仕掛けるも、ルシアは余裕で回避した。

ルシア「動きが直線的すぎる・・・これがかわせるか!T-LINKリッパー!!」

ガールオンからリッパーが発射され、敵のPT群を翻弄する。

アヤ「あ、あれは・・・!?!」

ライ「T-LINKリッパー・・・!」

リュウセイ「な、何であいつがあんなもん持ってたよ・・・!?!」

イングラム（ほう・・・となると奴も・・・偶然にとはいえ、最高級のサンプルが手に入りそうだな。）

ルシア「見たか?これこそ連邦が腐敗した証拠だ!こうもたやすく

お前らの兵器が手に入る。」

イルム「言ってくれるね。おたく、腹の底は総帥とか暗殺して権力を自分の手にするとか考えてない?」

ルシア「何だと!?!」

リュウセイ「た、確かに……アニメでも異星人の王子は必ずと言っていいほど自分の親父を暗殺しようとするよな……。」

ルシア「俺が……総帥を殺すわけがないだろ!!!! デタラメ抜かしやがって!!」

イングラム「イルム、奴の逆鱗に触れたようだぞ?」

イルム「何ともまあ……単純だな。」

ルシア「黙れ!!!」

ルシアはレールガンでグルンガストを攻撃するが、グルンガストの装甲ではダメージが入りにくい。

ルシア「くそ……! やっぱり特機は硬い……!」

イルム「あらあら必死になっちゃって……。」

イングラム「各機、先にヴァルシオンを叩くぞ。」

リュウセイ「了解! アンダーキャノン、ファイア!!!」

ライ「ツイン・ビームカノン、シュー!!」

イルム「ファイナル・ビーム!!」

ラトウーニ「ブースデットライフル、発射・・・!」

ハガネの部隊が一斉にヴァルシオンに攻撃するが、歪曲フィールドによって攻撃は全て軽減された。

ピアン「フッフ・・・どうした?お前達の力はその程度か?」

ガーネット「い、今の・・・見た!?!」

リュウセイ「あ、ああ・・・」

アヤ「ヴァルシオンは何かのフィールドで護られてる・・・?」

ガーネット「ラトウーニ!何か分かる?」

ラトウーニ「ヴァルシオンの機体周辺に均質化力場が発生してる・・・そのため、こちらの攻撃の運動エネルギーは歪曲され、境界面に沿って張力拡散してしまう・・・」

リュウセイ「それって・・・どういうことだよ!?!」

ライ「つまり、こちらの攻撃は、エネルギーフィールドのようなもので威力が落ちてしまうと言う事だ。」

リュウセイ「要はバリアで身を護ってるってわけか・・・!」

ライ「ああ、だがハガネのEフィールドとは比べ物にならん。」

リュウセイ「じゃあどうすりゃいいんだよ!?!」

イングラム「単純な話だ。力場に負荷を与え、張力拡散をさせつつ攻撃を続ける。」

イルム「気合い入れて集中攻撃し、相手のバリアをブチ破れっつてとですね?」

リュウセイ「なるほど。よし!やってやるぜ!」

ルシア「お前らに出来るかな・・・?」

ラトウーニ「リュウセイはヴァルシオンへ、私がああの機体の相手をする。」

リュウセイ「ああ!気をつけるよ、ラトウーニ!」

ラトウーニ「うん・・・」

ルシア「あの機体・・・ヒュッケバイン!?!」

ラトウーニ「リュウセイには近づけさせない・・・!」

ルシア「女の子!?!まさか・・・さっきリュウセイって奴が言ったラトウーニって・・・」

ラトウーニ「・・・」

ルシア「コッホ博士に何をされたのか知らないが・・・戦場に出てきたからには覚悟してもらっぞ！」

ジャーダ「ラトウーニだけにやらせるかよ！」

ガーネット「ラトウーニ！私達もあいつと戦っよ！」

ルシア「くそ・・・！また邪魔を・・・！」

ジャーダ「お前・・・総帥の息子ならラトウーニをこんな目にあわせたジジイを何で止めなかった！！」

ルシア「止める・・・！！？」

ガーネット「この子はね！スクールでの人体実験のせいで心を開かなくなってしまうたのよ！！」

ルシア「そんなことが・・・！アードラーの奴・・・！」

ジャーダ「な、何だ・・・？ホントに知らないみたいだぞ？」

ガーネット「とにかく、ラトウーニの未来のために私達が護ってあげるの！」

ジャーダ「そうだな・・・！たとえどんなことがあってもな！！」

ルシア「・・・まるで親子・・・だな。だが・・・ここで見逃すほど俺はお人よしじゃない！！」

ルシアが戦闘を続ける中、ピアンのヴァルシオンの戦闘が続いてい

る。

テツヤ「リオ、PT各機の状態は!?!」

リオ「苦戦しています!戦闘が長引けばいずれは……!」

ルシア「向こうはもうすぐ終わりか……」

ジャーダ「やべえぞ!あいつら押されてる!」

ガーネット「でもこいつに後ろ見せたら落とされるわよ!」

テツヤ「このままではヴァルシオン1機に全滅させられてしまう……!」

ダイテツ「……こうなったら、やむをえん。テツヤ大尉、艦首トロニウム・バスターキャノンのエネルギー充填を開始しろ。」

テツヤ「し、しかし……あれはまだ調整中……」

ダイテツ「それは承知している。だが、今こそがビアン・ゾルダークを倒す好機なのだ。」

テツヤ「し、しかし……充填には時間が掛ります。それに万が一発射に失敗したら……!」

ダイテツ「命令を復唱せんか、大尉!我々の最大の敵は目前にいるのだ!」

テツヤ「……りよ、了解しました。バスターキャノンのエネルギー

「充填を開始します！リオ！各機に充填までの時間を稼がせる！」

リオ「無茶です！これ以上の戦闘は・・・！」

マサキ「時間稼ぎなら俺がやってやるぜ！！」

ハガネからサイバスターが発進した。

テツヤ「マサキか！お前、大丈夫なのか！？」

マサキ「ああ、何とかな。心配かけてすまねえ。」

クロ（ニヤんか、前よりマサキの調子がいいみたいニヤ。クスハのあれが効いたのかしら）

クスハ「マ、マサキ君・・・」

マサキ「ありがとよ、クスハ。あのドリンク、味は最悪だったが、効き目はバッチリだぜ！」

クスハ「さ、最悪って・・・」

ルシア「何だ？ドリンク？最悪？何の事だ・・・？」

ビアン「もしかあの機体は・・・」

マサキ「てめえがビアンか、探したぜ。」

ビアン「お前は何者だ？」

マサキ「俺の名はマサキ！マサキ・アンドーだ！さあ、オッサン！  
ここで会ったが百年目だ！シュウの居所を教えやがれ！！」

ルシア「あいつが、シラカワ博士が言っていたサイバスターの操者・  
・・・」

ピアン「シュウ？シュウ・シラカワのことか？」

マサキ「ああ、そうだ！奴はどこにいる！？」

ルシア「知り合いつてのは本当だったのか・・・」

ピアン「そんなことはどうでもよいわ。要は・・・はたしてどれだ  
けの力を持っているか、だからな。」

マサキ「もったいつけてんじゃねえ！さっさとあいつの居場所を教  
えやがれ！！」

ピアン「見たところ、まだまだ青いな。私の敵ではない。これ以上  
相手をする必要もないか。」

マサキ「お、おい！ちょっと待てよ！カッコよく登場した俺の立場  
はどうなる！？」

ルシア「知った事か。」

マサキ「何だと！？」

ピアン「ふむ・・・若いな。こんなことにこだわっているようでは、  
私を倒すなど、夢のまた夢だ。」

マサキ「何っ……!?!」

そこにDCの飛行船からAMが出撃した。そこにエルザムの機体もいる。

エイタ「敵の増援部隊です!!」

テツヤ「おのれ……!万事休すか……!?!」

エルザム「ビアン総帥、お迎えに上がりました。」

ルシア「エルザム少佐……!?!」

ビアン「エルザムか。私はお前を呼んだ覚えはないぞ?」

エルザム「お戯れはどうかここまで。総帥のお身体は、総帥のものだけではありません。それにトロイ工隊のユーリアも総帥のお帰りを待っております。」

ビアン「フフ……よかろう。ハガネの力の見極めは終わった。これから引き上げるとしよう。」

エルザム「ルシア、お前は引き続き総帥の護衛を。」

ルシア「了解!」

マサキ「ま、待ちやがれ!!」

ルシア「総帥、少しお時間を……」

ピアン「うむ。」

ルシアはラトウーニ、ジャーダ、ガーネットに通信を繋げる。

ラトウーニ「……?」

ジャーダ「あいつ……通信を……?」

ルシア「ラトウーニと言ったな?……知らなかったとはいえ、アードラーの非道に気付けなかった。すまない。」

ラトウーニ「え……?」

ガーネット「あいつ……ラトウーニに謝った?」

ルシア「総帥。」

ピアン「うむ……よいか……今のお前達の力では、この私とDCを倒す事など不可能だ。」

マサキ「何だと……!??」

ピアン「では……次に会う時を楽しみにしておるぞ、ダイテツ……そして……ハガネの諸君。」

ピアンとルシアは戦闘空域から離脱、アイドネウス島に帰還する。

エルザム「各機へ。私は総帥を護衛しつつ、この空域を離脱する。」

DC兵「はっ！」

エルザム「ライよ……。ビアン総帥のお言葉を忘れるな。」

ライ「エルザム……！」

エルザム「また会おう、我が弟よ。」

エルザムと飛行船もビアンの護衛に向かった。

ダイテツ「バスターキャノンの充填を中止。残りの敵機を迎撃させる。」

テツヤ「りよ、了解です、艦長！」

ダイテツ（ビアンめ……。我々を倒す気などなかったのか……？）

DC本部 格納庫

ビアン「ルシア、私の我がままに付き合わせて悪かったな。」

ルシア「いえ、この目で総帥の戦い様を見られただけでも十分です。」

ビアン「そうか……。ところで少し聞きたい事があるのだが……」

ルシア「何でしょう？」

ビアン「このヴァルシオンだが……どう思う？」

ルシア「どう……と申されましても……」

ビアン「単純でいい、何処か良くて何処が悪いか、正直に答えてくれ。」

ルシア「な、何でまた……」

ビアン「実はリユーネにも専用のヴァルシオンを開発したのだが、ダサイと言われてしまったな……」

ルシア「あいつ……でも俺はこのままでいいと思いますけど？」

ビアン「何でもいい、今回はDCのルシアではなく、我が子ルシアとして答えてほしい。」

ルシア「え、ええ……あえて言うなら……カメラは複眼式はどうも……」

ビアン「確かお前は……」

ルシア「総帥はあのアニメの影響で開発したのでしょうが……俺的には俺が見てたアニメのリアルロボットのメインカメラが好きですね。ツインアイタイプと言ったでしょうか……あれが個人的にはヒュッケバインに似ててかっこよく……」

ビアン「……」

ルシア「も、申し訳ありません！出過ぎた発言を……！」

ビアン「……いや、参考になった。私は執務室へと戻る。」

ルシア「はっ！（やっば、内心怒ってるよ絶対……）」

そこにエルザムが歩み寄ってくる。

エルザム「ルシア。」

ルシア「少佐、何でしょう？」

エルザム「今から宇宙に上がってもらおうぞ。」

ルシア「宇宙に？」

エルザム「ああ、統合軍のジュネーブ降下作戦が行われる。その護衛をもらいたい。」

ルシア「しかし……何でまた？」

エルザム「先程ハガネが宇宙に上がった。恐らく宇宙に駐在しているヒリュウ改と合流し、降下作戦を阻止するためだろう。」

ルシア「たった二隻で降下作戦を……！」

エルザム「ハガネのトロニウムバスターキャノンとヒリュウ改の超重力衝撃砲があれば簡単に阻止される。経験のあるお前がいれば何かと動かしやすいだろう。」

ルシア「分かりました。」

エルザム「宇宙でマハトに着艦してくれ。以後はマイヤー総司令の命令に従うんだ。」

ルシア「はっ！（連邦の拠点、ジュネーブ……そこさえ落とせば連邦は終わりだ……！）」

第6話 完

## 第6話 ヴァルシオン（後書き）

ヴィレッタ「ルシア。」

ルシア「はい、もう好きにしてくださいな。」

ヴィレッタ「観念したようね。次はR・GUNに乗ってもらおうわ。」

ルシア「R・GUNか……これには乗ってみたい気はしてたんだよね。」

ヴィレッタ「楽しみにしてるわ。」

ルシア「期待しないでくれ……えーと……R・GUNと言えはやっぱり……」

ルシア「メタルジェノサイダー、チェンジ・オーバー!!!」

ルシア「火力を一点に集中させる!!!」

ヴィレッタ「前半は良かったけど後半はまだまだね。」

ルシア「……別にいいよそんなの……」

ガリオン タイプTT

ルシアのガリオンにT・LINKシステムを搭載させた機体。

T・LINKシステムが備わった事で念動フィールドとT・LINK

Kリッパーが使えるようになった。

## 第7話 ジュネーブ降下作戦

アイドネウス島 格納庫

ルシア（もうすぐ宇宙に上がるな・・・今度こそは八ガネを沈めてやる・・・！）

リョウト「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルシア「ん？あいつ・・・あんなどこで何を・・・おい。」

リョウト「あ・・・ルシア大尉・・・！」

ルシア「いいよ、別に固くならなくても、歳も近いし普通に話してくれ。」

リョウト「え、でも・・・。」

ルシア「いいんだよ、俺も普通に話す奴がないし。」

リョウト「う、うん・・・」

ルシア「で、ここで何を？」

リョウト「自分の機体は自分で見ておこうと思って・・・これから出撃だから。」

ルシア「出撃？」

リョウト「ハガネの宇宙進出を阻止するためだよ。トーマス隊長の部隊に入ってるね。」

ルシア「そうか・・・それで、何でお前がDCに?」

リョウト「バーニングPTって知ってるかな?」

ルシア「バーニングPT・・・まさか、テンザンと同じ・・・」

リョウト「うん。でも、僕はあまり戦うのは好きじゃないんだ・・・」

ルシア「それでいいんだ。」

リョウト「え?」

ルシア「あいつみたいに戦争をゲームと勘違いして戦うより、戦う事に慣れの方がまだいい。決して戦争で遊ぶような事はするな。」

リョウト「分かってるつもりだよ。」

ルシア「よかった、アドバンスド・チルドレンにお前のような奴がいて・・・」

リョウト「ルシアは今から何処に?」

ルシア「宇宙に上がるのさ。統合軍のジュネーブ降下作戦の護衛にな。」

リョウト「それじゃあ・・・僕達が作戦に失敗したら・・・!」

ルシア「大丈夫だ、万が一ハガネが上がってきても俺が何とかする。だから無駄に命を散らすなよ?」

リョウト「分かったよ、努力してみる。」

ルシア「ああ。」

ルシアは宇宙に上がり、マハトに着艦した。

統合軍旗艦　マハト　司令部

ルシア「マイヤー総司令。DC特務大尉、ルシア・ゾルダーク、ただいま到着しました。」

マイヤー「ご苦労。地球では大活躍だったそうではないか。」

ルシア「悪い意味で……ですか?」

マイヤー「そうではない、あのハガネ相手によくぞここまで生き延びてきたその悪運の強さを評価したのだ。」

ルシア「はあ……。」

マイヤー「ハガネと交戦経験のある貴公ならば、今回の作戦は必ずや成功するだろう。期待しているぞ。」

ルシア「はっ!」

そこに、リリーとゼンガーが入って来る。

リリー「マイヤー総司令、ハガネとヒリュウ改がこちらに接近中です。」

マイヤー「たった2隻で我々に挑む気が・・・」

リリー「万が一に備え、作戦をプランBへ移行を提案します。」

マイヤー「いや、この気を逃すわけにはいかん。エムデンとドレストンをハガネとヒリュウ改の迎撃に回せ。それと・・・トロイエ隊もだ。」

リリー「はっ!」

ルシア（トロイエ隊も来ていたのか・・・）

マイヤー「ゼンガー、お前にも出してもらっぞ。」

ゼンガー「はっ!」

ルシア「それでは、我々はこれで・・・」

マイヤー「この戦いの勝者こそが・・・地球圏の真の守護者となる。ゼンガーよ、地球連邦、DC、コロニー統合軍、それら3つの勢力を見てきた眼で結果を見届けよ。そして・・・己の進むべき道を行け。」

ゼンガー「・・・」

マイヤー「いつか来るべき時のために……よいな？」

ゼンガー「……承知。」

3人は司令室を後にした。

マハト 格納庫

ルシア「まさかゼンガー少佐が本当に連邦から来てたとは思っていませんでした。」

ゼンガー「久しいなルシア、精進しているか？」

ルシア「相変わらずですね。しているとは少し言い難いのですが……  
・何とかやっています。」

ゼンガー「ルシア、今回の戦い……苦難を極めるぞ？お前にそれが耐えられるか？」

ルシア「耐えてみせます……！地球圏の真の守護者は……俺達DCと統合軍のものです！」

ゼンガー「期待しているぞ。」

ルシア「はい！」

ゼンガー「……」

ルシア「どうしました？」

ゼンガー「お前を見ていると、ブルツクリンを思い出す。」

ルシア「ブルツクリン？」

ゼンガー「俺が所属していたATXチームの兵士だ。」

ルシア「やはり・・・元部下の相手はしずらいものですか・・・？」

ゼンガー「戦場で迷いを見せて生き残れはせん。お前も、俺の部下だからと言って情けは無用だぞ。」

ルシア「はい・・・」

ゼンガー「そろそろ出撃だ、行くぞ！」

ルシア「了解！」

宇宙空間      マハト周辺

トロイエ隊とルシア、ゼンガーが出撃した。

ユーリア「ルシア大尉、今回は私の指揮下に入ってもらおうぞ。」

ルシア「了解、だが非常時はこちらの判断で行動させてもらう。」

ユーリア「了解した。」

レオナ「久しぶりね、ルシア。」

ルシア「レオナか、アイトネウス島では会わなかったな。」

レオナ「あなたがビアン総帥の護衛に行ってしまったからよ。」

ルシア「ああ、その時にすれ違ったのか・・・」

ユーリア「無駄話はそこまでだ、ハガネとヒリュウ改がこちらに向かってきている。迎撃に出るぞ！」

レオナ「了解！」

ルシア「ユーリア隊長、ハガネの艦首にはトロニウムが積まれている。そこだけは狙わないようにしてくれ。でないと俺達が吹き飛ばすからな。」

ユーリア「了解、配慮しよう。」

前方にハガネとヒリュウ改が目視確認が出来た。

「  
C軍兵「ハガネ、ヒリュウ改、レンジ7に進入。本艦に接近中です。」

リリー「やはり敵はヒリュウ改の艦首超重力衝撃砲、あるいはハガネのトロニウム・バスターキャノンを我が方に対して使う気のようなのです。」

マイヤー「ならば、射程内に入る前に破壊せよ。」

リリー「はっ！トロイエ隊各機へ、ハガネ及びヒリュウ改の迎撃を。」

ルシア「了解！」

トロイエ隊が前に出て、後方で戦艦の砲撃を2隻に加えるが、バリアを展開され、全て防がれてしまう。

ユーリア「バリアか・・・！」

ルシア「あれはガリオンと同じブレイクフィールドだ。」

レオナ「なるほどね、テスラ・ドライブを搭載しているあの艦なら出来ない事もないわね。」

ユーリア「だが、それを損傷させればフィールドを維持出来まい。各機、ヒリュウ改の艦尾へ攻撃を！」

トロイエ兵「了解！」

トロイエ隊はヒリュウ改に接近するが、そこにジガンスクードが立ち上がる。

レオナ「あれは・・・ジガンスクード!?」

ユーリア「忌まわしき盾め・・・奴を落とし、ヒリュウを裸にする！攻撃開始！」

ルシア「まさか・・・ジガンスクードに出くわすとはな・・・！破

壊する！」

トロイエ隊、ルシア機がジガンスクードに攻撃を加える。

しかし、最強の盾であるジガンスクードには歯が立たない。

タスク「そんなもん効かねえぜ！」

レオナ「破れない……！」

ルシア「流石は最強の盾だ……特機クラスの火力じゃないと落とせないか……！」

ゼンガー「ルシア、後は任せろ！」

そこにゼンガーの搭乗機、グルンガスト零式がヒリュウ改に接近する。

ルシア「ゼンガー少佐！」

ゼンガー「最強の盾を破壊するには……最強の矛で立ち向かうのみ！」

零式が斬艦刀を振り被り、ジガンスクード目がけて斬りかかる。

ゼンガー「チエストオオオオオオ！」

ジガンスクードはバリアで身を護るが、斬艦刀の威力は凄まじく、破られる。

タスク「うわあああ!!」

ジガンスクードは衝撃でヒリュウ改の艦首に吹き飛ばされた。

ゼンガー「今だルシア!ヒリュウのテスラ・ドライブを!」

ルシア「了解!」

ルシアはゼンガーが開けたフィールドの穴から侵入し、艦尾のテスラ・ドライブ目がけて突進する。

ルシア「こいつさえ破壊してしまえば・・・ソニック・ブレイカー!!」

艦尾のテスラ・ドライブが破壊され、ヒリュウ改のブレイクフィールドが消失する。

ユーリア「今だ!撃て!!」

トロイエ隊は艦首を攻撃し、超重力衝撃砲を使用不能にさせた。

その時、ヒリュウ改からPT隊が出撃した。

ゼンガー「ルシア!ここは俺に任せ、マハトへ行け!」

ルシア「何故です!?俺も戦います!!」

ゼンガー「ならん!今ここでお前を死なせるわけにはいかん!早く行け!!」

ルシア「……了解……！」

ルシアは渋々、マハトまで後退する。

マハト周辺には降下用のカプセルが投下されようとしていた。

ルシア「こちらルシア機、ヒリュウ改の艦首超重力衝撃砲の無力化に成功。オペレーション・ユグノー、セミアイナル・フェイズ完了した！」

マイヤー「了解した、オペレーション・ユグノー、ファイナル・フェイズに移行！」

C軍兵「了解！オペレーション・ユグノー、ファイナル・フェイズ、スタート！」

C軍兵「ダイブシエル各機、降下を開始せよ！」

C軍艦長「ヒリュウ改の艦首超重力衝撃砲は使用不可、ハガネが位置やコースを変更しても、時間が掛る。最早に我々の作戦を阻止することは不可能です。」

マイヤー「……」

C軍艦長「総司令？」

マイヤー「ルシア。」

ルシア「はい？何でしょう？」

マイヤー「ハガネの艦長・・・ダイテツ・ミナセはどんな男かね？」

ルシア「腹の底では何を考えているか分からない人です。海中の部隊を回避するために大気圏脱出用のブースターで浮上したり・・・どんな劣勢な状況でも後退はおるか、突貫してくるほどです。」

マイヤー「つまり、諦めの悪いということだな。」

ルシア「しかし、今の位置からではハガネが砲撃を仕掛ける頃にはジュネーブは落されています。どの道、彼らは敗北します。」

マイヤー「そうかな・・・？」

ルシア「？」

そこに、マハトのレーダーが何かを感知していた。

ハガネがブレイクフィールドを使い、ヒリユウ改を押し出し急加速をさせていた。

〔軍兵〕「ヒリユウ改、加速！」

〔軍兵〕「ハガネが突入コースを変更！降下部隊へ向かっています！！」

ルシア「何だつて！？この状況で・・・！」

〔軍兵〕「ハガネがバスターキャノンを発射！！」

リリー「ルシア機！退避を！！」

ルシア「くそ！！」

ルシアが退避した直後、降下部隊のカプセルにバスターキャノンが放たれ、降下部隊が全滅する。

ルシア「まさか・・・ブレイクフィールドをぶつけて加速するなんて・・・！」

リリー「しかも・・・重力によるビームの歪曲まで計算に入れていたなんて・・・！」

マイヤー「テスラ・ドライブ搭載艦ならではの策か・・・敵ながら見事・・・！」

C軍兵「ヒリュウ改、突撃してきます！！」

ルシア「全艦で砲撃！マハトに近づけるな！！」

しかし、再びブレイクフィールドを展開していたヒリュウ改に攻撃は通じなかった。

ヒリュウ改から機動兵器部隊が発進する。

ルシア「あれはサイバスター・・・！マハトに突っ込む気か！！」

マサキ「喰らえ！！アカシック・バスター！！」

サイバスターが突撃し、マハトを貫いた。

ルシア「マハトが……!!」

その後も機動兵器群に部隊が次々と落とされていく。

そこにシュツバルトとビルドシュバインがマハトに向かっていった。

そこにユーリアとレオナが立ちはだかる。

ユーリア「マハトには行かせん……!」

イングラム「終わらせる……!!」

ビルドシュバインがサークル・ザンパーでユーリア機を切り裂いた。

ユーリア「うわああああ!!」

ユーリアのガーリオンが爆発し、戦死した。

レオナ「ユーリア隊長!!」

ルシア「くそ……! あいつら!!」

レオナ「ライデイス!!」

ライ「レオナ……お前に構っている暇はない!!」

ルシア「行かせるか!!」

ルシアがライの前に出た。

ライ「ちい……！またお前か！」

リュウセイ「ライ！援護するぜ！」

横からビルドラプターのビームが加えられ、ルシアは一時距離を取った。

そうする間にも、マハトは地球の重力に引かれ、落ちて行く。

リュウセイ「マハトが……沈む……」

ルシア「総司令は……総司令！」

ルシアはマハトのブリッジに向かった。

ライもマハトへ向かい始めた。

リュウセイ「ライ！」

ライ「俺は……俺はあの男を……！」

ルシア「総司令！早く脱出を……！総司令……！」

ライ「……！」

ルシアとライの目の前には、ブリッジに残っていたマイヤーの姿があった。

ライ「……父さん……！」

マイヤー「ライディースか……」

ライ「父さん！あなたはそんなところで何をしている！あなたは生きて責任を取らねばならない！こんな戦争を起こした責任を！！」

マイヤー「ライディース！我が息子よ……」

ライ「……………」

ルシア「……………」

マイヤー「お前達は……今後の地球圏の運命を担うのだ！」

ライ「な、何を……………」

マハトが爆発をし始め、ライは爆発で吹き飛ばされる。

ライ「うわあああ！！！」

ルシア「ライディーズ！」

ルシアも吹き飛ばされそうになるが、ブリッジにしがみついて離さない。

ルシア「総司令！今ならまだ間に合います！脱出を！！」

マイヤー「ならん……！ルシアよ……お前は早くアイドネウス島に帰還しろ……！来るべき決戦の日はもうすぐだ……！！」

ルシア「嫌です！！俺を・・・俺みたいな奴を統合軍に迎えてくれたのはあなたじゃないですか！！それを・・・ここで見捨てて行けっつて言うんですか！！こんなところで見殺しにしろっつて言うんですか！！！」

マイヤー「泣くでないルシア・・・我が人生・・・波乱続きであったが悔いはない・・・ここぞ我が散り場所よ・・・フフフフ・・・フハハハハハハ！！！」

マイヤーは最後に笑いながらブリッジの爆発に巻き込まれ、その爆発にルシアは地球に投げ出される。

ルシア「マイヤー総司令iiiiiiii！！！！」

悲しむ間もなく、警告音が鳴り響いた。

ルシア「・・・大気圏突入ユニット・・・展開・・・！地球へ降下する・・・！」

ルシアは地球に降下した。

地球に降下し、辺りを見渡すと、スペースノア級3番艦「クロガネ」が接近してきた。

ルシア「クロガネか・・・」

そこに通信が入った。

エルザム「こちらアイアン3、ルシア機、応答を。」

ルシア「エルザム少佐……………」

エルザム「クロガネの航行ルートに降下してくる者がいたと思えば……だが、お前が無事で何よりだった。」

ルシア「……………少佐……俺は……マイヤー総司令を……！」

エルザム「ルシア……報告を。」

ルシア「マハト……轟沈……！オペレーション・ユグノー……失敗です……！」

エルザム「了解した……」

ルシア「すみません……！俺が……俺がいながら……！」

エルザム「我が父上も覚悟の上だった。お前が責任を感じる必要はない。」

ルシア「……………」

エルザム「……………ルシアよ、決戦の時は近い。クロガネに着艦するんだ。」

ルシア「……………了解……」

エルザム（……………父上……………）

クロガネ 格納庫

ルシア「……………」

トーマス「おいおい、何しけたツラしてんだよ。特務大尉の名が泣くぜ？」

ルシア「トーマスカ……………」

トーマス「おいおい、一応俺の方が上官だぜ？」

ルシア「俺は信頼できる者にしか敬意を表さない…………大体、俺の方が上だろ……………」

トーマス（ちつ…………生意気なガキだぜ…………）

ルシア「ところで…………リョウトの姿がないんだが……………」

トーマス「あいつか？あいつなら…………爆弾になって死んでったよ……………」

ルシア「何だと…………！どついう事だ！」

トーマス「ハガネを内部から破壊して、宇宙に上げない作戦だったんだけどな。どついうわけか、敵さんはそれを見抜いてたらしい。」

ルシア「誰の指示だ…………！」

トーマス「アードラーのジジイだよ。ま、直接手を加えたのは俺だ

けどな。」

ルシア「貴様ああ!!！」

DC兵「ルシア大尉!!落ち着いてください!!！」

トーマス「熱い奴だねえ・・・それでよく指揮官が務まるな・・・。」

ルシア「・・・!!！」

DC兵「大尉!エルザム少佐がお待ちです!ブリーフィングルームに向かってください!!！」

トーマス「だってよ、さっさと行ってやんな。」

ルシア「この見返りは高くつくぞ・・・!トーマス・プラット!!！」

ルシアはそう吐き捨て、ブリーフィングルームに向かう。

トーマス（・・・まあホントは死んだかどうか俺も分からないんだけどな。まあなんにせよ、あいつがDCの総帥になることだけは御免だぜ。）

## 第7話 ジュネーブ降下作戦（後書き）

ピアン「ほお、ここで終わりかね。まあ一時の休息もよからう。しかし、そんなことで我がデイバイン・クルセイダーズを倒せるかな？ふふふふふ．．．ふははははは！！」

ルシア「あの、小説じゃあんまり関係ないんですが．．．」

ピアン「ところでルシア、あまり関係のない話なのだが．．．」

ルシア「何です？」

ピアン「グランゾンとご本尊、似てると思わないか？わしゃ一回間違えたぞ。」

ルシア「そんなの知りません！！」

## 第8話 冥王の島 暁の決戦

クログANE      ブリーフィングルーム

エルザム「現在、ハガネ及びヒリュウ改はアイドネウス島上空へ降下中だ。そこで我々クログANEの超大型回転衝角を使用し、ハガネを沈める。」

ルシア「もう拿捕など甘い事は許されない……そうですね？」

エルザム「そうだ、お前はラストバタリオンと共闘し、ヒリュウ改の迎撃に入ってもらおう。」

ルシア「ヒリュウ改には確か……ATXチームが所属しているはずでしたよね？」

エルザム「ああ、我が友、ゼンガーが所属していた部隊でもある。」

ルシア「ゼンガー少佐の部隊……一筋縄ではいかないようですね。」

エルザム「そうだ、心して挑んでほしい。では、解散だ。」

クログANE      格納庫

ルシア（いよいよ決戦か……テンザンやトーマスは当てにならない。テンペスト少佐は復讐で頭がいっぱい。ここは……俺が

頑張らなきゃ・・・」

格納庫にアラームが鳴り響く

DC兵「ハガネ及びヒリュウ改が降下を開始！各員、直ちに出撃せよ！」

ルシア「もう来たのか・・・絶対・・・総帥だけは俺が護ってみせる・・・」

エルザム「ルシア、ラストバタリオンがヒリュウ改の部隊と接触した。直ちに救援に向かってくれ。」

ルシア「了解！ルシア・ゾルダーク、ガリオン出ます！」

アイドネウス島 近海

ラストバタリオンとヒリュウ改の部隊が交戦状態に入っており、ラストバタリオンは苦戦を強いられていた。

カチーナ「まったくこいつら！何で指揮官機がこんなにウヨウヨいんだよー！」

ラッセル「カチーナ中尉、ブリーフィングで説明があった通り、この部隊はラストバタリオン。ピアン博士の親衛隊ですよ。」

カチーナ「うるせえな！！言われなくても分かってるよー！」

ラッセル「えええ・・・」

タスク「どうもジガンと相性悪いぜこいつは……！」

ブリット「これだけの数……押されている証拠ですね。」

キョウスケ「だが……まだ相手は切り札を隠し持っている。油断するな。」

エクセレン「そう言ってる間に何か来たわよ！」

ユン「艦長！戦闘空域にAMが一機進入！」

レフィーナ「直ちに迎撃を！」

ルシアが戦闘空域に躍り出た。

ショーン「ほう……あれはハガネを苦戦させ、本艦のテスラ・ドライブを損傷させた、白銀の流星……でしたかな？」

タスク「相変わらず見事な銀色ツスね。」

ギリアム（やはり……あいつもDCに……）

カチーナ「ちょうどいい！こいつのボディを赤く塗りつぶしてやるぜ……！」

ラッセル（中尉、まだ塗り潰す気だよ……）

ルシア「ラストバタリオンがもうこんなに……やはりATXチーム、侮れないな……」

ギリアム「各機、あの機体に乗っているのはルシア・ゾルダークだ。」

ブリット「ゾ、ゾルダークって……まさか……！」

キョウスケ「ピアノの息子……ということですね。」

ギリアム「ああ。一時期、俺達教導隊と共にいた男だ。油断するな。」

ラーダ「あの子も教導隊にいた……。」

エクセレン「あらら、もしかして傷つけたらパパに言いつけられるのかしら？」

タスク「それ何処の大金持ちの子ツスか少尉……。」

キョウスケ「単機でこちらに来たという事は……それなりの実力があるということだ。気を引き締めて行け。」

ブリット「了解！」

ルシア「あれがATXチーム……ん？あ、あれは……ヒュッ  
ケバイン!？」

ブリット「来たか！」

ルシア「形が違うな、新型か。だが……この俺を倒せると思うな  
！T-LINKリッパー!!！」

ルシアがT・LINKリッパを放つ

ブリット「させるか！チャクラム・シューター、GOー！」

ブリットがチャクラムでリッパを全て弾き飛ばした。

ルシア「何！？」

エクセレン「ナイスブリット君！じゃあお姉さんも張り切っていくわよー！！」

キョウスケ「エクセレン、タイミングを合わせろー！」

エクセレン「OKー！」

そこにATX計画の機体「ヴァイスリッター」と「アルトアイゼン」が接近してくる。

ルシア「あれがATX計画の機体・・・ゲシュペンストをベースに改良した機体か・・・」

エクセレン「それじゃ行くわよ！それぞれそれ〜！！」

エクセレンがオクスタン・ランチャーのBモードを連射しルシアを翻弄する。

ルシア「くそ！何て機動性だ・・・早すぎるー！」

タスク「少尉に便乗するッスー！！」

ルシア「ジガンスクード……！こいつがいなければ……少佐の家族は死なずに……！」

ルシアはブレイクフィールドを展開し、ジガンスクードに突貫する。

タスク「真正面からきやがったか……！」

ルシア「砕け散ろ……！ソニック・ブレイカー……！」

攻撃が当たる直前でタスクはバリアを展開し、攻撃を防いだ。

タスク「このジガンスクードをなめてもらっちゃ困るな……！」

ルシア「くそ……！やはり固い……！」

タスク「少尉！今ツス……！」

エクセレン「お釣りは取つといてね……！」

そこにまたエクセレンがBモードで攻撃を仕掛けてきた。

ルシアは咄嗟にジガンスクードから離れ、攻撃をやり過ぎた。

エクセレン「キョウスケ！パス……！」

キョウスケ「読み通りだ……！」

そこを上からアルトアイゼンがヒートホーンで斬りにかかって来る。

ルシア「な！？何て攻撃をするんだこいつは……！デイバイン・アーム！！」

ルシアは咄嗟にデイバイン・アームで受け止める。

エクセレン「素直に受け止めるなんて……お姉さん感激しちゃう！」

そこに後方からのビームでフィールドジェネレーターが破壊される。

ルシア「しまった！？こいつらの連携……生半可なものじゃない……！」

キョウスケ「ステーキ！もらった！」

キョウスケはアルトアイゼンの右腕に付いているリボルビング・ステークをガーリオンの右腕に一発撃ち込み、右腕を吹き飛ばした。

ルシア「うわあああ！？」

カチーナ「よっしゃ！直撃！！」

ルシア「くそ……！下がるしかない……！」

ルシアはアイドネウス島へ一時撤退する。

そこに突如エネルギー体がアイドネウス島の近海に降りそそいだ。

ユン「艦長！ハガネのトロニウム・バスターキャノンを確認！」

レフィーナ「アイドネウス島はどうなりました!？」

ユン「健在です!クロガネの妨害により射線がずれた模様!」

ショーン「しかし、これで活路は見出せたようですね。」

レフィーナ「これよりファイナルフェイズに移行します!ATXチームは直ちにハガネの部隊と合流し、要塞内部に進入してください!」

キョウスケ「アサルト1、了解!行くぞ!」

エクセレン「OK!」

ブリット「了解!」

アイドネウス島には既にハガネの部隊が到着し、ATXチームと合流していた。

アイドネウス島 要塞内部

イングラム「こちらはSRXチームのイングラム・プリスケンだ。ATXチームだな?」

キョウスケ「はい。」

イングラム「では今から我々と共にDC本部内部へ侵入する。」

リュウセイ「了解!」

エクセレン「あら？何も無いわね？」

ブリット「油断しないでくださいよ、エクセレン少尉。」

イングラム「おそらく・・・我々をここへ招き入れるのが目的だったのだろうな。」

マサキ「何だつてっ!？」

シロ「マサキ！前方に反応が!!」

そこにはヴァルシオンとグランゾンが立ちはだかっていた。

ビアン「よく来たな。だが、私とヴァルシオンを倒さぬ限り・・・DCは滅びぬ。私の真意を理解し、我が軍門に降れ。そして、共に地球の守護者となるのだ。」

リュウセイ「何・・・!？」

エクセレン「世界の半分くれてやるって奴？」

ブリット「違うと思いますけど・・・」

マサキ「シユウ！貴様も一緒か!!」

シユウ「どつやら、くされ縁というものらしいですね。」

マサキ「くされ縁だと・・・!？てめえもビアンと同じで世界征服が目的か!」

シュウ「まさか。そんなものに興味はありませんよ。私はただ、余計な異物を地球圏から排除したいだけです。」

キョウスケ「余計な異物・・・エアロゲイターのことか。」

シュウ「そう考えていただいても結構ですよ。」

ブリット「だったらDCに加担しないで俺達と戦えばいいじゃないか!！」

シュウ「知らない方もいらっしやるようですが・・・私が南極で何をしたのか、覚えていらっしやると思いますよ?」

マサキ「南極だと・・・!?!」

シュウ「そうです。あの時、私はゲスト・・・いえ、異星人の戦艦を攻撃する事によって、この星を彼らの手から間接的に救ったのですよ?」

エクセレン「ありがとう・・・って言いたいところだけど、シロガネまで沈めちゃうことはなかったんじゃないの?」

シュウ「私が行動を起こさなければ、今頃地球圏は異星人の支配を受けていたかも知れないのです。」

マサキ「でたらめを言うな!！」

ピアン「でたらめではない。あの時、EOT特別審議会から派遣されたアルバート・グレイは・・・異星人と和平交渉を結ぶための大

使だったのだ。」

ブリット「和平交渉・・・!?!?」

ライ「そうか。あの時、俺達が南極に派遣されたのは・・・式典の警備などではなく、万が一の事態に備えるためだったのか・・・!」

ビアン「だが、地球より高度な文明や技術力を持つ異星人と・・・対等な交渉を行う事は不可能だ。」

アヤ「じゃ、じゃあ・・・どうして彼らとの和平交渉を・・・?」

ビアン「連邦政府や連邦軍の一部の高官達は・・・異星人へ事実上の降伏をすることによって・・・地球圏と人類の存続を図ろうとしたのだ。」

マサキ「降伏!?!?」

ビアン「そうだ。彼らが持つ技術や兵器と引きかえにな。」

リュウセイ「そ、そんな馬鹿な・・・!群や政府の偉い連中は、最初から地球を護るつもりはなかったのかよ!?!?」

キョウスケ「・・・そういうことになるな・・・」

ビアン「そうだ。だからこそ、彼らは異星人を“ゲスト”と呼び、友好的な姿勢を見せようとした。」

リュウセイ「なら、俺達は今まで何のために戦って来たんだ!?!?」

ピアン「私はDCを結成し、異星人の脅威から地球圏をこの手で護ろうと決意した。」

キョウスケ「そして、連邦軍だけでなく、彼らに対しても宣戦布告を行ったというわけか。」

ピアン「そうだ。あの事件で連邦軍は・・・いや、我ら人類は、彼らと戦わざるを得なくなった。」

アヤ「だったら・・・どうして地球圏全体を戦争に巻き込む必要があったの!? あなた達DCが、素直に連邦軍へ協力すればいいことじゃない!」

ピアン「フッフ・・・協力が。私は以前から連邦軍へ協力をしてきた。その証拠として・・・お前達の機動兵器にも使われているEOT・・・すなわち、トロニウム・エンジンやテスラ・ドライブなどは・・・かつて、私が設立したテスラ・ライヒ研究所やEOTI機関が創り上げたものなのだ。」

エクセレン「てことは・・・協力したのに何だお前らはってきたわけね・・・」

シユウ「そうです。EOTを提供したのにも関わらず、連邦政府や連邦軍の一部の人間は・・・異星人と戦うことに臆し・・・あるところか彼らにこの地球を開け渡そうとしたのです。」

ピアン「私達はそんなことのためにEOTを解析し、ヴァルシオンやグランゾンを作ったのでない。全ては、この星を異星人の侵略から護るために取って来た行動だった。」

シュウ「しかし、軍や政府の高官、EOT特別審議会の人間は私達が作り上げた機動兵器を・・・自分達の身を護るために利用しようとしたのです。」

マサキ「ヘッ・・・だから、てめえらはそれを許せなかったってワケか。」

シュウ「それもありますが、彼らにこのグランゾンやヴァルシオン、DC、そして、この私を・・・利用することは不可能だと知らしめるのも目的でした。」

ブリット「そんなことのために南極基地の部隊を全滅させたっていうのか!？」

シュウ「ええ。ビアン博士の意志を軍や政府、EOT特別審議会・・・そして、世界へ伝えるため・・・彼らには尊い犠牲になってもらったのです。」

マサキ「尊い犠牲だと?ふざけやがって・・・!」

ビアン「今、この地球には宇宙からの脅威が迫りつつある・・・それに対抗するため、世界はDCという力の下に統一されねばならん。お前達が我が軍門に降らぬと言うのであれば・・・宇宙からの脅威に立ち向かうため、私の理想を実現するため・・・ここで死んでもらう。」

マサキ「うるせえ!戦争という方法でしか世界をまとめられねえ奴が・・・地球を危機から救う事なんて出来るか!」

ビアン「ならば、お前達の手で我らを倒し・・・この星を護ってみ

せたまえ！」

マサキ「言われるまでもねえ！俺はてめえらを・・・DCを倒す！」

キョウスケ「エクセレン、同時に仕掛けるぞ！」

エクセレン「了解！」

アルトアイゼンのスクエア・クレイモア、ヴァイスリッターのオクスタン・ランチャーBで攻撃するが歪曲フィールドで軽減された。

ピアン「どうした？それで終わりか？」

エクセレン「うっそー！？何あれ！？」

ラトウーニ「あの機体は特殊なフィールドで護られている・・・」

キョウスケ「報告にあった歪曲フィールドというやつか・・・生半可な攻撃は通用しない。」

ピアン「その程度ではこの地球圏を異星人から護ろうとするのは不可能だ。」

リュウセイ「やってやる！！！」

リュウセイのR-1がT-LINKナツクルで殴りかかる。

リュウセイ「理由は何であれ・・・多くの人間を戦争に巻き込んだてめえのやり方は許せねえ！！！」

ピアン「それこそ劇的な試練、耐えられぬ者は守護者の資格なし。」

リュウセイ「何様のつもりだああー!!」

R-1の攻撃が命中するが、歪曲フィールドで防がれ、R-1は弾き飛ばされた。

リュウセイ「うわ!？」

ピアン「その程度でよくここまで来られたものだな。返礼を受け取りたまえ!!」

ヴァルシオンは右腕の砲台をリュウセイ達に向ける。

イングラム「来るぞ、各機散開!」

ピアン「受けよ!クロスマツシャー!」

クロスマツシャーが放たれ、辺り一帯が破壊された。

ブリット「な、なんて威力なんだ・・・!？」

キョウスケ「DCの切り札なだけのことはあるな。」

エクセレン「そんな能天気な。」

イングラム（だが・・・さっきのリュウセイの攻撃で、フィールド干渉で綻びが生じる事は分かった。後は・・・）

ブリット「何かあいつのバリアを解く方法は……！」

キョウスケ「正面からぶち当たっても相殺されるだけだが、何か策があるはずだ。」

イングラム「策ならある。」

イルム「少佐、确实……ではないんですね？」

イングラム「だが、可能性は0ではない。エクセレン、ラトウーニ、ブリット、ライは後方から援護。」

エクセレン「え!？」

ラトウーニ「了解。」

ブリット「了解です!」

ライ「了解!」

イングラム「俺とリュウセイは相対距離200で歪曲フィールドへ干渉。その後、イルムとキョウスケは目標へ集中攻撃、FCSに頼るな。最後はマサキ、お前だ。」

マサキ「待て!あなた……何をする気だ!？」

イングラム「リュウセイと共に突破口を開く。」

マサキ「死ぬ気かよ!？」

イングラム「我々の機体ではヴァルシオンに有効なダメージを与えられん。だが・・・お前のサイバスターなら・・・」

マサキ「分かったぜ！」

イングラム「各機、仕掛ける！」

エクセレン「それじゃ行くわよ！三人とも！」

ブリット「フォトン・ライフル、ファイア！」

ラトウーニ「BMセレクト、ガンファイト。」

ライ「ツインビームカノン、シュー！」

エクセレン、ラトウーニ、ブリット、ライは遠方から攻撃を仕掛け、ヴァルシオンの気をそらす

ビアン「無駄なこと・・・」

その後、リュウセイとイングラムでヴァルシオンに接近し、歪曲フィールドに干渉する。

リュウセイ「T・LINKナツコオオオ！！」

イングラム「サークルザンバー、碎け散れ！」

ビアン「捨て身か、だが・・・無駄な足掻きだ。」

しかし、僅かに綻びが出来た。

リュウセイ「今だ！キョウスケ少尉！！」

そこにアルトアイゼンが急速接近してくる。

キョウスケ「撃ち抜く！！」

リボルビング・ステークを歪曲フィールドにぶつけ、上方に飛び上がる。

キョウスケ「イルム中尉！！」

そこにイルムのグルンガストが剣を構え、接近する。

イルム「必殺、計都羅？剣！！」

グルンガストの攻撃で歪曲フィールドが破壊された。

ビアン「何と・・・！！」

そこにサイバスターが突っ込んできた。

マサキ「とどめだ！！アアアカシクウ・バスターアアア！！」

サイバスターのアカシク・バスターがヒットする。

マサキ「うおおおおお！！」

ビアン「ぐ、ぐおおおおお！！」

その後、ヴァルシオンが大破した。

ピアン「フ、フフフ……よくぞ、ここまで成長した……これならば、大丈夫だろう。」

マサキ「な、何!？」

ピアン「年寄りの出番はここまでのようだ……未来はお前達のような若者が作っていく……」

マサキ「未来だと!?!?て、てめえは一体……!?!?」

ピアン「だ、だが……これだけは忘れるな……やがて来る脅威に立ち向かうのは……お前達の若い力だ……平和を求めるのはよい……だが、それにおぼれては……ならん……」

護るべきものがあるなら、それを護るだけの勇気と力を持ち続けるのだ……ぐっ……げふっ……

ど、どうやら……これまでか……」

マサキ「ピアン!?!」

ピアン「……リユーネ……ルシア……我が子たちよ……」

お前達の姿を最後に見れぬのが心残りだ……」

マサキ「リユーネ……?我が子……!?!?」

ピアン「フ、フフフ……先に逝くのは……親の宿命……ゆ……る……せ……」

そして、ヴァルシオンは大爆発を起こし、ビアンは戦死した。

マサキ「シュウ！次はてめえの番だ！！」

シュウ「ここであなた達と戦うつもりは有りません。」

マサキ「何！？」

シュウ「私はビアン博士から、この戦いの一部始終を見届けるように言われただけ。決して手出しは無用・・・とね」

マサキ「待ちやがれ！！」

シュウ「残念ですが・・・あなたと遊んでいる暇は有りません。宇宙で不穏な動きが見られるのでね。」

マサキ「どういうことだ！？」

シュウ「本当の戦いは・・・これから始まるのですよ。」

そして、グランゾンは転移して何処かへ行ってしまった。

そこに、機体の不調で遅れたルシアが駆け付ける。

ルシア「何だったんださっきの爆発は・・・」

リュウセイ「あ、あいつ・・・！」

ライ「まだいたのか・・・！」

ルシア「あ、あれは……！ヴァルシオンの残骸……！？」

エクセレン「わお！あれでまだ動けたの、あの子!？」

ルシア「まさか……父さん……父さああああん!!」

イングラム「……………」

ルシア「お前らが……お前らが父さんを殺したのか!!」

ルシアのガーリオンが部隊のド真ん中へ突っ込む。

ルシア「絶対に……絶対に許さん!!」

エクセレン「ブリット君！危ない!!」

ブリット「き、機体が損傷しているのに……何て早さだ……!」

ルシア「うあああああ!!」

ガーリオンが体当たりし、ヒュツケバインが弾き飛ばされる。

ブリット「うわあああ!!」

キョウスケ「ブリット!？」

そして、デイバイン・アームをヒュツケバインのコクピットを狙う

ルシア「まずは・・・貴様からだ!!」

エクセレン「ブリット君！返事をして!!ブリット君!!」

ルシア「死ねええええ!!」

突き刺そうとした瞬間、ビルドシュバインのサークル・ザンパーで腕が斬られた

ルシア「!？」

イングラム「殺しはしない、お前はいいサンプルになりそうだからな。」

ルシア「何を訳の分からないことを!!」

その後、コクピットすれすれでガーリオンの胴体を斬りおとした。

ルシア「ぐわああああ!？」

リュウセイ「教官・・・!そのパイロット・・・死んだのか？」

イングラム「いや・・・コクピットブロックは回収した。ビアンの子だ、DCの重要な情報が聞き出せるはずだ。」

ライ「簡単に口は割らないと思いますが・・・？」

イングラム「その時はまた方法を考える。ハガネに帰還するぞ。」

キヨウスケ「了解。」

ルシア「……………とう……さ……………」

第8話 完

第8話 冥王の島 暁の決戦（後書き）

カイ「ルシア、今回はゲシュペンストキックをやってもらっぞ。」

ルシア「カイ少佐まで……………」

カイ「これは俺が作ったモーシヨンだ、気に入ると思うが……………」

ルシア「少佐が作ったモーシヨン？面白そうですね……………やってみます。」

カイ「派手に叫ぶことを忘れるなよ？」

ルシア「分かってますって……………」

ルシア「すこしアレンジを加えてみるか……………!」

ルシア「長角！トルネード！キイイイック!!!!」

カイ「ほう……………」

ルシア「ど、どうです……………?」

カイ「他に比べればまだまだだな。」

ルシア「ちなみに……………他の人はどんなので?」

カイ「あれを見れば分かる。」

タスク「奥義！パンスト流星脚うううう！！」

エクセレン「爆裂回転！ サンセット・ボンバアアアツ！！」

クスハ「我に蹴れぬものなしっ！ちえすとーーーっ！！」

ラトウーニ「スウパア・ウルトラア！流星キイイイックウ！！」

リオ「悪！即！蹴りいつ！どっせえええいつ、と！！」

リュウセイ「ゲシュペンスト究極奥義！！アルティメット・キイイ  
イイック！！」

ルシア「……うわー……みんな濃いな……」

カイ「ぬ！？まずい！ルシア、すぐに耳を塞げ！！」

ルシア「はい？何を……」

キョウスケ「ここで叫ぶのはやぶさかじゃないが……」

ルシア「ああ、キョウスケがやるのか今度は……」

キョウスケ「究極ウツ！！ ゲESHUPENSOTTO！！ キイイ  
イイック！！！！」

ルシア「うがががが……！！」

カイ「ああ……遅かったか……」

エクセレン「ちょっとキョウスケ！？スピーカーとマイクが壊れちゃったじゃない!？」

タスク「さ、さすがマイクブレイカー……」

## 第9話 プリンス&プリンセス

???????

ビアン「ルシアよ……」

ルシア「父さん……」

ビアン「お前は私がいなくても、もう大丈夫だ。リユーネと仲良くするんだぞ？」

ルシア「待ってくれよ……！俺、まだ……言いたい事がたくさんあるんだ……！まだ……父さんにしてやりたい事がたくさんあるんだ……！だから……！行かないでくれよ！俺を……一人にしないでくれよ……！父さん……！父さああああああん……！！」

ルシアの叫びも空しく、ビアンはゆっくりと消えていく。

ルシア「……俺は……俺は……！！」

????「散々エラぶって総帥死なせてりゃ世話ねえっての。」

ルシア「……！！」

????「最初に見せた威勢は何処にいった？」

????「マイヤー総司令だけじゃ飽き足らず、ビアン総帥まで死なせるとはな。」

ルシア「やめてくれ……！」

????「所詮、貴様はその程度の男だったということじゃ。」

????「とんだクレイジーボーイだぜ。」

ルシア「うう……ああ……！」

????「貴様の父のおかげで何度も俺の復讐が失敗した。いい報いだ。」

????「アンタ……親父を死なせたね？アンタが拾われてなければこんなことにはならなかった。」

ルシア「うう……うわあああああ……！」

ハガネ 医務室

ルシア「……」

テツヤ「クスハ、彼の容態は？」

クスハ「全身打撲、骨折数箇所負っていますが、命に別状はありません。」

テツヤ「そうか……」

エクセレン「それにしても戦ったもの同士、同じ病室にいるなんて何か変な感じよね。」

リュウセイ「た、確かに……」

ブリット「笑い事じゃないですよ……まさかコクピットを貫かれそうになってたって聞いたときは、生きた心地がしなかったですよ……」

エクセレン「でもこの子……ホントに……?」

キョウスケ「ああ、ギリアム少佐から聞いたことがある。一時期、教導隊のスタッフとして修行していたらしい。」

イングラム「それも……全て父であるビアン博士のためにか……」

エクセレン「一番の親孝行ものね……」

マサキ「……」

キョウスケ「マサキが責任を感じる必要はない。仕方のなかったことだったんだ……」

マサキ「分かってる……」

リュウト「ルシア……」

イングラム「クスハ、彼の意識は？」

クスハ「まだ戻らないんです……でも、その内に意識は戻るかと思えます。」

イングラム「分かった。意識が戻り次第、俺達に報告してくれ。」

クスハ「はい。」

ルシア「……う……ああ……」

イルム「ん？意識が戻ったみたいだな。」

クスハ「いえ、うわ言だと思います。その証拠に眼が覚めていません。」

エクセレン「よっぽとピアン博士が死んでしまったことがショックだったのね……」

キョウスケ「自分を拾ってくれた、そしてここまで父親として育ててくれた恩を返したかったのだっただと思う。」

リュウセイ「（俺も……お袋が殺されたらこいつと同じことをしたんだろうな……）」

イングラム「彼の意識が戻り次第、召集をかける。以上だ。」

ライ「了解です。」

リュウセイ「なあ．．．ライ．．．」

ライ「どうした？」

リュウセイ「俺たちのやったことは．．．正しかったのか．．．？」

ライ「それは分らん。確かにビアン博士の言う通り、南極基地で起こったことは全て事実だろう。」

リュウセイ「．．．」

ライ「だからと言ってビアン博士のやったことの全てが正しかったわけじゃない。俺たちはそれを止めるために戦ったんだ。」

リュウセイ「ああ．．．すまねえ。こんなこと聞いちゃって．．．」

ライ「いや．．．いい。奴の意識が戻るまでゆっくり休め。」

ハガネ　ブリッジ

ダイテツ「どうだったかね？」

テツヤ「まだ意識は戻らないそうです。」

ダイテツ「そうか．．．」

テツヤ「もし．．．彼の意識が戻った後、どうなるのでしょうか．．．？」

ダイテツ「同じDCだったリヨウトと違って、あいつはDC総帥の息子だ。伊豆に帰還した後、身柄は拘束されるだろう。」

テツヤ「リヨウトの様にこちらに引き入れることは出来ない……ということですね?」

ダイテツ「あいつも私たちと一緒になるうなんて思いはしないだろう。酷な話だが……仕方がない。それより、今はDC残党がいる場所まで急ぐぞ。」

テツヤ「了解です。」

ハガネ 医務室

エクセレン「ブリットくん、どう?病院食おいしい?」

ブリット「おいしくないですよ……病院の食事なんて……」

クスハ「ごめんなさい……おいしくなくて……」

ブリット「い、いや!おいしい!おいしいよ!」

エクセレン「いいわよね、ブリット君は。クスハちゃんに看病されて。」

ブリット「ち、違いますよ!俺はATXチームの一員として一日も早い復帰を……!」

エクセレン「まあまあ！お邪魔みただから私、出るわね。じゃあまたね、ブリット君。」

そう言つてエクセレンは医務室から出て行つた。

ブリット「ちよつと！少尉！違いますつたら、少尉！」

ルシア「こ、ここは……………」

ブリット「あ……………」

クスハ「気がつきました？」

ルシア「お前……………ここは……………何処だ……………？」

クスハ「ここはハガネの医務室です。」

ルシア「ハガネ……………だと……………！ツツ！」

クスハ「あ、まだ起きちゃ駄目です！安静にしてないと……………！」

ルシア「離せ……………！何で俺がハガネなんかにいるんだ……………！」

クスハ「落ち着いてください！」

ルシア「離せと言っている！」

ルシアはクスハをはねのけ、その拍子にクスハが床に倒れる。

クスハ「キャ！」

ブリット「お前！何てことするんだ！！」

ルシア「何で敵に助けられなきゃいけないんだ……！俺は……！！」

ブリット「その子はな！お前の眼が覚めるまでずっと看病していたんだぞ！」

ルシア「だからなんで敵に助けられなきゃいけないんだ！！」

そこにハガネのクルー達が騒ぎを聞きつけ、駆けつけに来た。

ジャーダ「何かずいぶん騒がしいけど……何かあったのか！？」

リュウセイ「！？クスハ！大丈夫か！？」

クスハ「わ、私は大丈夫……」

ルシア「……………」

ブリット「その子がこいつを押さえていたら……………」

クスハ「はねのけられちゃって……………」

マサキ「何だと……！お前！クスハがどれだけ心配していたと思っただけだ！！」

ルシア「敵に情けをかけられる筋合いはない。」

ガーネット「強情な奴ね！そんなんじゃ女の子にモテないわよ！」

ルシア「年増女は黙ってる……！」

ガーネット「と、年増ですって！？私はまだそんな歳じゃないわよ……！」

ジャーダ「お、落ち着けて！」

エクセレン「ルシアって言ったわね……女の子にそんなこと言ったら駄目でしょ？お父さんに教えてもらわなかったの？」

ルシア「気安く父を語るな！！阿婆擦れが！！！」

エクセレン「あ、あば……お姉さん力チンと来たわよ……珍しくカチンと来たわよ……！」

キョウスケ「落ち着け、エクセレン。」

エクセレン「でもキョウスケ……！」

キョウスケ「お前が何を考えているかは知らん。だが……今は自分が捕虜になっていることだけは自覚してもらっぞ。」

ルシア「捕虜になる位なら……潔く死んでやる……早く殺せ……」

リュウセイ「てめえ……！」

リュウセイが殴りかかる直前、クス八の平手打ちが飛んだ。

クスハ「どうしてそんなことを平然と言えるんですか!！」

ルシア「貴様……!！」

クスハ「ここで死んでしまったら……それこそお父様を悲しませることになってしまふんですよ!そんなこと……一番させたくないのは分かっているはずなのに……!！」

リュウセイ「ク、クスハ……」

ルシア「……」

マサキ「……ルシア……て言ったな……」

ルシア「お前は……?」

マサキ「サイバスターの操者……て言えば分かると思うが……」

ルシア「お前が……サイバスターの……」

マサキ「あなたの父親……ビアンが最後に言ってたんだ……」  
『最後にお前達の姿を見れぬのが心残りだ。先に逝くのは親の宿命、許せ。』

ルシア「……そうか……」

キョウスケ「ルシア、捕虜として尋問が行われる。いいな?」

ルシア「……俺の情報は当てにはならんぞ……」

キョウスケ「それでもだ。クスハ、テツヤ大尉に報告を。」

クスハ「は、はい……」

ルシア「……………」

リョウト「ルシア……………」

ルシア「リョウト……！お前、生きていたのか！？」

リョウト「うん、ハガネのみんなに助けられてね……」

ルシア「でも、何でお前がハガネの奴らと……！」

リョウト「DCのやり方についていけなくなったのもあるけど……自分が何をすべきなのか、みんなのおかげで分かったんだ。」

ルシア「そうか……でもお前が生きていてくれて嬉しいよ。」

リュウセイ「何だ？リョウトと知り合い？」

リョウト「うん、あの時僕のリオンが墜落しちゃったでしょ？その時に知り合ったんだ。歳は近いから階級を気にしないで接してくれるって言われて……」

リオ「あらリョウト君、私には教えずにリュウセイ君には教えるのね？」

リョウト「え！？い、いや・・・そんなつもりは・・・」

ルシア「リョウト・・・面倒な奴に関わってしまったな・・・」

リョウト「ル、ルシアまで・・・そりゃないよ・・・」

ハガネ 一室

テツヤ「尋問のために部屋を換えた。寝たままでいいからこちらの質問に答えるように。いいな？」

ルシア「・・・ああ・・・」

テツヤ「まず、君の名前と所属を聞かせてもらう。」

ルシア「DC総帥直轄特務大尉、ルシア・ゾルダーク。」

テツヤ「現在もDCの残党が抵抗運動を続けている。それについて何か知っているか？」

ルシア「いや・・・ここに入ってからDCの情報は知らない。」

イングラム「だが、誰が指揮を執っているか検討はつくはずだ。」

ルシア「・・・可能性があったら、副総帥のアードラー・コッホだと思う・・・」

イングラム「アードラー・コッホ、スクールの創設者でもある人物だな。」

ルシア「ああ……ただ、スクールで何をしていたのかは俺も知らない。」

ラトウニー「……………」

テツヤ「では……DCが所有している秘密基地の場所は？」

ルシア「……………」

テツヤ「黙秘は許さんぞ？」

ルシア「基本、俺は本部からしか動かない。他の基地については知らん。」

イングラム「だが……何かしらデータがあるはずだ。」

ルシア「データは……見ていない。」

イングラム「それでよくDCの特務大尉が務まったな？」

ルシア「俺は……ただ総帥のために戦った……それだけで十分だったんだ……………」

テツヤ「そうか……クロガネの行方について、検討はつくか？」

ルシア「クロガネは……分からない。」

テツヤ「では……他に知っていることは？何でもいい。」

ルシア「一つ言えることは・・・アードラーの独断で行動していた時があった。リヨウトを爆弾代わりにしたり・・・裏で何か企んでいる様子があった。」

イングラム「その詳細については？」

ルシア「奴の考えていることは俺にもわからん。だが、何かしら起こることは確実だ。」

イングラム「そうか・・・最後に一つ、聞かせてくれないか？」

ルシア「・・・ああ・・・」

イングラム「我々と共に戦う気はないか？」

ルシア「何だと・・・！」

イングラム「今地球圏がどんな状況か、お前も理解しているだろう。そのために総力を決しなければならぬ。」

ルシア「・・・どんな状況であれ、父を殺したこの部隊に居座る気はない。」

イングラム「選択するのはお前自身だ。伊豆に到着すると同時に最後に答えを聞く、もし拒否すれば・・・伊豆で身柄を拘束される。何をされるのか、我々にも検討はつかん。」

ルシア「・・・覚悟はしている・・・」

そこに警報が鳴り出す。

エイタ『テツヤ大尉！リクセント公国からSOS信号！DC残党に襲撃されています！』

テツヤ「何！？」

ルシア「リクセント公国・・・あんな小国になんて・・・！」

イングラム「PT部隊の出撃をさせた方がいいな。ルシア、戦闘の様子はベッドに取り付けてあるモニターで確認できる。何か感ずいたらそれを報告してもらいたい。いいな？」

ルシア「・・・分かった・・・」

リクセント公国 海域

イングラム「各機、俺の指示があるまで近づくな。」

リュウセイ「了解！」

マサキ「しかし、何でDCの連中はリクセントを襲うんだ？あそこ観光地なんだろう？」

アヤ「あそこには確か金鉱山があるはずよ。目当てはそれかも・・・」

ライ「だが直接鉱山を襲うはずでは？」

アヤ「そっか・・・」

イングラム（目的は別にある・・・か・・・）

ルシア（戦闘が始まるな・・・どうにかしてDCと連絡は取れないんだろうか・・・？）

ハガネの部隊はリクセントを占拠したDC部隊と接触する。

テンザン「てめえら、それ以上近付くんじゃねえぜ！」

リュウセイ「その声は・・・!?!？」

ルシア「テンザン・ナカジマ・・・!まだDCにいたとはな・・・」

テンザン「ようリュウセイ!また会えてうれしいぜ！」

リュウセイ「性懲りもなく!」

テンザン「そういえばルシアって奴に会わなかったか？」

リュウセイ「あいつを知ってるのか・・・!?!？」

ライ「奴もDCの士官だ。ルシアの事は知っていて当然だな。」

イングラム「現在、我々の艦で捕虜として扱っている。」

テンザン「そうかい、んなまどろっこしい事せずにさっさと殺してくれよ。」

ルシア「何だと・・・!?!？」

アヤ「な・・・何ですって!？」

リュウセイ「テンザン! 同じ仲間だったんじゃないのかよ!？」

テンザン「知るかよ! 上からゴチャゴチャとウザかったんだよ、どうなっても知らねえよ!！」

リュウセイ「てめえ!！」

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

テンザン「それよりてめえら、さっさと武装解除しな。でねえと・・・  
・リクセントが血の海になるぜ?」

リュウセイ「何だと・・・!？」

ルシア（DCがリクセントに銃口を・・・! 父さんが築いたDCはこんな事をするためにあるんじゃない・・・!）

イングラム「サイバスター以外の各機は一時撤退、キョウスケとエクスレンは街の西側に回り待機。」

その後、サイバスターが一気に前に出た。

テンザン「何だてめえ! 俺の言う事が聞こえなかったのか!」

マサキ「武装解除すんのはそっちの方だ!」

テンザン「あ?」

マサキ「てめえらはもうサイフラッシュの射程に入ってるぜ！」

テンザン「チツ……！」

そこにテンペストのガールイオンが出てきた。

その腕には、リクセント公国の王女「シャイン・ハウゼン」が捕らわれていた。

マサキ「あ、あれは……！」

テンペスト「見ての通り、シャイン・ハウゼン王女は我々の手中にある。サイバスター、貴様が妙な素振りを見せれば……真つ先に王女が死ぬ事になるぞ？」

マサキ「卑怯な真似をしゃがって！」

シャイン「騙されてはいけません！！この者たちの狙いは私！私を殺そうとはしません！！」

ルシア（殺そうとしない……？あの王女に何か秘密があるのか……？こんなこと考えるのは……奴だけだ……！）

テンペスト「今のうちに撤退するぞ。」

テンザン「了解！」

リュウセイ「あいつら逃げる気か……？」

イングラム「エクセレン、最後尾のリオンを狙撃しろ。」

エクセレン「えええ!? そんなことしたら・・・!!」

イングラム「彼らは王女を殺さん。マサキとキョウスケは狙撃と同時に突撃、他の者はバックアップに回れ。」

キョウスケ「了解。」

ライ「少佐、王女の救出は?」

イングラム「ライ、お前に任せる。」

ライ「了解!」

エクセレン「王女様、耳を塞いでくれればいいけど・・・」

ヴァイスリッターは最後尾のリオンに狙いを定め、Eモードを発射し破壊した。

テンペスト「何!?!」

テンザン「チツ・・・あいつら!」

そこにサイバスター、アルトアイゼンが突撃してきた。

マサキ「そこだ! デイスカッター!!!」

テンザン「ぐわあああ!!!」

テンペスト「くそ・・・奴らめ・・・!ん?」

キョウスケ「教導隊も地に落ちたな!!」

アルトアイゼンのヒートホーンがテンペストのガーリオンの左腕を切断し、その拍子にシャインが落下したが、シュッツバルトが落下したシャインを受け止めた。

ライ「ご無事ですか?王女!」

シャイン「え、ええ・・・」

テンペスト「このままでは・・・撤退する!」

シャインが奪回されたのを見てDC残党は撤退を始めた。

ルシア（撤退したか・・・だが何でDCは小国の王女の誘拐なんて・・・）

ハガネ 個室

ハガネがリクセント公国の港に停泊していた頃、ルシアが入れられている個室の出入り口が開いた

ルシア「・・・誰だ?」

クスハ「具合はどうですか?」

ルシア「君か・・・」

クスハ「食事を持ってきました。」

ルシア「ありがとう・・・戦闘はどうなった？」

クスハ「戦闘は終了して、今はリクセントの港に停泊しています。」

ルシア「そうか・・・王女は？」

クスハ「ハガネにいらっしやいますよ。ライダー少尉に艦の案内をしてくれて命令してたんですけど、きつぱり断ってました。」

ルシア「ある意味、王族みたいな家系出身のライダー스가・・・不思議だ。」

クスハ「あ、これも飲んでください。」

ルシア「・・・何だこの・・・変な色をした液体は・・・」

クスハ「私があなたのために作った特製の栄養ドリンクなんです。カルシウムをたくさん入れたので骨折も早く良くなりますよ。」

ルシア「カルシウム入れただけでそんなにならないと思うが・・・」

クスハ「いやですか・・・？」

ルシア「（あの時の手前、断るわけにもいかな・・・）ありがとう、もらおうか。」

ルシアはクスハ汁・・・もとい、クスハ特製栄養ドリンクを飲みほ

した。

クスハ「どう……ですか？」

ルシア「……悪くない。」

クスハ「よかった！これで早く良くなるといいですね！」

ルシア「ああ、出来ればおかわりもいいか？」

クスハ「はい！」

そこに割り込むようにイングラムが入って来た。

イングラム「クスハ、彼の具合は？」

クスハ「大丈夫です。」

イングラム「そうか……ここは俺に任せてクスハはブリーフィングルームへ行ってくれ。」

クスハ「わ、分かりました。」

そう言っつてクスハは部屋を出た。

ルシア「……で、何の用だ？」

イングラム「モニターを見て分かっただろう？今のDCにお前の父、ピアン博士の意志があると思うか？」

ルシア「・・・ないな。」

イングラム「だが、俺達と戦うかはお前次第だ。お前が決める。」

ルシア「・・・俺は・・・地球を愛していた父が大好きだった。だから・・・DCに参加した。『何と目覚めるばかりの自然の照り映える事よ。何と太陽の輝いている事よ』。父の好きだった言葉だ。」

イングラム「旧西暦の詩人の言葉だな。」

ルシア「ああ。確かに今のDCには父の意志はない、けど・・・俺には止める義務がある。こんなことになったのも不本意だが父の責任だ・・・だから、俺がDCを止める。そのために・・・力を借りたい。このハガネのみんなの力を・・・」

イングラム「了解した。お前も今からこのハガネのクルーだ。よろしくな。」

ルシア「・・・階級は？」

イングラム「私の判断で少尉に任命する。」

ルシア「DC時代の指揮能力を見込んで・・・か？」

イングラム「そうだ。」

ルシア「なら・・・これからよろしくお願いします。イングラム少佐。」

イングラム「ん……?」

ルシア「言葉遣いはすっかりしると……教導隊時代のカイ少佐から仕込まれましたね。」

イングラム「フ……なるほどな。機体は量産型のゲシユペンストを用意する。カスタムもお前の要望には応えよう。今は療養に励め。」

ルシア「了解です。クスハの栄養ドリンクのおかげで何故か調子がよくなった気がします。」

イングラム「!?!?……あれを……飲んだのか?」

ルシア「ええ……少佐も?」

イングラム「あ、ああ……」

ルシア「中タイケた味でしたよ。だからハガネの部隊はこんなに強いんですか?」

イングラム「違う、断じて違う。」

ルシア「え……?」

イングラム「何でもない。では……俺はブリッジへ行く。お大事にな。」

そう言ってイングラムは足早に部屋を立ち去る。

ルシア「……………何で少佐、あんな引きつった顔してたんだろ……？」

そこにまた誰かが入って来た。

ルシア「今度は誰だ？」

シャイン「ライダー様！何処にいらっしやるのですかー！」

ルシア「な……！？シャイン王女！？」

シャイン「そのあなた！」

ルシア「は、はい？」

シャイン「ライダー様を見かけませんでしたか？」

ルシア「い、いや……見かけなかったが……」

シャイン「あ！あなたは……！ピアン博士の演説に隣にいらっしやった方ですね？」

ルシア「え？あ、まあ……たしかに父の隣にはいたが……」

シャイン「父？あなた……ピアン博士のご子息様ですか？」

ルシア「……そうだ。」

シャイン「そのピアン博士は……亡くなられたのですね……？」

ルシア「・・・ああ。」

シャイン「でも、近い内に父上はあなたに本当の答えを教えて差し上げられるでしょう。」

ルシア「・・・何かの予言か・・・？」

シャイン「私には分かりません。いずれ・・・。あ！ライダー様を探さなくては！それでは、ごきげんよう！」

そう言つて勢いよく部屋を出た。

ルシア「・・・父の本当の答え・・・か・・・。ていうか・・・ライダー様・・・ねえ・・・ライダーも面倒な子に目をつけられたものだな・・・。」

第9話 完

## 第9話 プリンス&プリンセス（後書き）

ルシア「うう……まだ耳が痛い……」

クスハ「大丈夫ですか？」

ルシア「あ、ああ……何とか……」

ジヨナサン「それじゃ今回は特別にグルンガスト式式に乗せてやる  
う。」

ルシア「ほう……グルンガスト式式……では遠慮なく。」

ルシア「天地無双！！計都瞬獄剣！！横一文字斬イイイイイ！！  
！」

ジヨナサン「ほう……噂通りだな。お前が良ければの話だがテス  
ラ研のテストパイロットにならないか？」

ルシア「いえ、俺はもう行きたいところは決まっていますから。」

クスハ「お疲れ様でした。ルシアさん、これどうぞ。」

ルシア「ん？これは？」

エクセレン「あ、あれは……」

カチーナ「破壊力抜群の……」

タスク「クスハ汁・・・・・・・・！」

ルシア「ありがとう、もらおうか。」

クスハ「・・・・・・・・どう・・・・・・・・ですか？」

ルシア「う・・・・・・・・！？」

エクセレン「う・・・・・・・・？」

ルシア「う・・・・・・・・うう・・・・・・・・！！！」

カチーナ「やべえぞ！！早く医者呼んで来い！！！」

ルシア「うまい！うますぎる！！！」

タスク「何ですとおおおお！！？」

ルシア「うまいぞこれ！！しかも何か分かんが疲れがどんどん取れるぞ！！！」

マサキ「そりゃまあ・・・・・・・・効き目だけは抜群にあるからな・・・・・・・・」

シロ「経験者は語るニヤ。」

クロ「ていうか・・・・・・・・クスハの栄養ドリンク飲んで平気ニヤのって  
どうかニヤ・・・・・・・・」

クスハ「喜んでもらえて嬉しいです。」

ルシア「ブリットがづらやましいよ！毎日こんなつまいの飲めるんだからさ！」

ブリット「え！？い、いや……どうかな……ハハハハハ……」

アヤ「も、もしかして……ルシアって……」

リュウセイ「味覚音痴？」

ギリアム「俺の読みが当たっていたか……」

## 第10話 つかの間の休息

地球連邦軍極東支部 伊豆基地

ハガネ ブリーフィングルーム

アヤ「みんな、集まってるわね？」

リュウセイ「なあアヤ。新しく入る奴って一体誰なんだ？」

エクセレン「こういうのって転校生を待つような感じでワクワクするわよね？キョウスケは誰が来ると思う？」

キョウスケ「ある程度、予想はしている。」

ライ「ああ・・・ある程度・・・な。」

ガーネット「何よ二人とも、分かり切った顔しちゃって。」

ジャーダ「一体誰が来るってんだ？」

アヤ「紹介するわ、入って。」

ブリーフィングルームに入って来たのは

ルシア「・・・・・・・・」

連邦制服を着たルシアの姿だった

リュウセイ「あ、新しいお仲間って……！」

アヤ「ええ、今日からこの艦の配属になった……」

ルシア「ルシア・ゾルダーク少尉です。以後よろしく。」

ライ「大尉、何故彼を……？」

アヤ「イングラム少佐の決定よ。異論は一応聞いておくけど……」

ライ「いえ、少佐が決定したのなら異論はありません。」

ルシア「アヤ大尉、ちょっといいですか？」

アヤ「ええ、いいわよ。」

ルシア「俺が療養をしていた時のことだが……不適切な発言をこの場を借りてお詫びしたい。申し訳なかった。」

エクセレン「あら、素直な子ね。お姉さん全然気にしてないわよ。」

キョウスケ「今度とつちめるって言ったの誰だ？」

エクセレン「いやんキョウスケ、真に受けないでよね。」

ジャーダ「ホラ、あいつもああ言ってたんだ。許してやるっぜ。」

ガーネット「初めから許すつもりだったけど？」

ジャーダ「え？そうだったのか？」

ガーネット「だって・・・あの時、自分は全く関係なかったのにラトウーニに謝ってくれてたし・・・根はいい子だって思ってたから・・・」

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガーネット「お父さんを倒しちゃった私達を軽蔑するのも無理はなかったし・・・これでお相子つてことでいいかな？」

ルシア「ああ、ありがとう。」

リョウト「改めてよろしく、ルシア。」

リオ「よろしく!」

リュウセイ「よろしく頼むぜ!」

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

イルム「どうした？んな驚いた顔して？」

ルシア「いや・・・何でもあっさり俺を受けいれてくれるんだろうと思って・・・」

リュウセイ「何だよ、これから一緒に戦う仲だろ？」

ライ「背中を預け合う者同士、拒否的な態度をとるわけにもいかなだろ。」

カチーナ「ま、強いて言うならあたしはまだ信用してねえけどな。」

ラッセル「中尉こんな時に・・・すみません。」

ルシア「いや、俺は俺の戦いをするだけだ。だからカチーナ中尉の言ってることも否定はしない。」

タスク「まあカチーナ中尉の言ってる事はともかく・・・これからよろしくな。」

ルシア「ああ、よろしく。」

アヤ「じゃあルシアには早速PTのシミュレーター訓練に入ってもらうわ。」

ルシア「はい。」

アヤ「相手は・・・どうする?」

リュウセイ「はいはい!!俺やるぜ!」

カチーナ「新人を絞るにやいい機会だ。覚悟しろよ?」

タスク「ああ・・・ルシアに同情するよ・・・」

ラッセル「中尉・・・いくらなんでも絞るのは・・・」

ルシア「いいぞ、実力を見せておかなくちな。」

カチーナ「ほう・・・言ってくれるじゃねえか。おい、オクト小隊全員で相手するってのどうだ？」

タスク「それイジメやん・・・」

ラッセル「でもいいんですか？3対1は無勢なんじゃ・・・」

ルシア「俺は一向に構わん。」

カチーナ「おっしゃ！そうと決まればシミュレータールームに行くぞー！！」

ライ「ルシア、いいのか？」

ルシア「ああ、ここで信用を獲得しとかないと後に響くからな。」

マサキ「なあ、その前に聞きたい事があるんだけどよ。」

ルシア「何だ？」

マサキ「ピアンが言ってたリユーネって・・・誰なんだ？」

ルシア「ああ、リユーネのことか・・・あいつは父の娘さ。」

マサキ「娘・・・」

ルシア「今はどうしてるか俺にも分からないけどな・・・じゃ、俺は行くぞ。」

リユーセイ「頑張れよ！ルシア！」

ルシア「ああ。」

ハガネ シミュレータールーム

カチーナ「ラッセル、タスク、準備はいいか？」

タスク「こっちはOKっすよ。」

ラッセル「大丈夫です。」

ルシア「スタンバイOK。」

カチーナ「新人にあたしらの実力を思い知らせてあげな！」

タスク「へーい……」

カチーナ「後……もし負ける事があれば百叩きだぞ。」

ラッセル「が、頑張ります……！」

ロバート「みんな、準備はいいね？」

ルシア「OKです。」

ロバート「それじゃあシミュレーターを起動させるよ。」

シミュレーターが起動し、ルシアのモニターにゲシユペンストが3  
機見えた。

ルシア「あれがカチーナ中尉のゲシュペンストか・・・あれで角が生えてたら隊長機らしいのに。」

タスク「キョウスケ小尉のアルトが間に合ってるけどね。」

カチーナ「無駄口叩いてる暇があんならさっさと仕掛けねえか！！  
3分で決めるぞ！」

ラッセル「さ、3分ですか！？」

タスク「無理言わんで下さいな、相手誰やと思ってるんねん・・・」

カチーナ「誰であろうと叩きのめす！！いいな！」

ラッセル「りよ、了解！」

キョウスケ「気をつけるルシア、3機に囲まれたらアウトだぞ。」

ルシア「そんなへマをするとでも？」

エクセレン「まああれだけキョウスケとやり合っても生きてた位だし、OKじゃない？」

ルシア「武装は・・・スラッシュリッパーにマシンガン・・・ブーステッド・ライフルか・・・それだけあれば十分。」

カチーナ「ラッセル！遅れるな！」

カチーナのゲシュペンストは一気に前に出る。

ラッセル「中尉！迂闊すぎます！！」

ルシア「ホントに迂闊だな……」

既にルシアはブーステッド・ライフルで狙いを定めていた。

タスク「中尉！狙われているっす！！」

カチーナ「何！？」

ルシア「ブーステッド・ライフル……発射！」

ブーヅテッド・ライフルが放たれ、コクピットに直撃した

カチーナ「わあああ！！」

ラッセル「カチーナ中尉！」

ルシア「指揮系統が崩れた……もらっ！」

そのまま続けてラッセル、タスクのゲシュペンストのコクピットも狙い撃った。

ロバート「シミュレーター終了。お疲れさん。」

ルシア「タイム0045、使用弾薬3、機体損傷率0。こんなものだな。」

エクセレン「うわー……カチーナ中尉達がいとも簡単に……」

リュウセイ「すげーぜ・・・無駄な動きが全然なかったぞ・・・」

ライ「強いて言うならカチーナ中尉の迂闊な動きをしていなければもう少し時間はかかっていただろう。」

キョウスケ「確かにな。」

カチーナ「クソ・・・！」

タスク「やっぱDCの大尉は伊達じゃなかったな・・・」

リオ「リュウト君！次は私達よ！」

リュウト「ええ！？何で急に・・・！」

リオ「早く！！！」

ルシア「リュウト、俺は別に構わんぞ。」

リュウト「う、うん・・・分かったよ・・・」

シミュレーターのモニターに2機のゲシュペンストが割り込んできた

リオ「さあ行くわよ！！！」

リュウト「リオ、相手は狙撃に長けてる。障害物を上手く使って接近するんだ。」

リオ「分かったわ！」

ルシア「狙撃だけと思つなよ・・・！」

リオとリョウトが慎重に接近して行動するが、先回りしたルシアのゲシュペンストがリオの真上に現れる。

リオ「ウソ!?いつの間に!?!」

ルシア「迂闊だな!ビームソード！」

そのまま飛び下り、リオのゲシュペンストを真っ二つに斬った

リオ「キャアアアア!！」

リョウト「リオ!！」

ルシア「人の心配してる場合か?スラッシュリッパー！」

スラッシュリッパーがリョウトのゲシュペンストを切り裂く

リョウト「うわああ!!ダメージレベル80%オーバー・・・ここまでか・・・」

ロバート「シミュレーターを終了するぞ。」

シミュレーターカプセルから3人が出てきた。

リョウセイ「すげー!ホントにすげーよ!！」

アヤ「流石は教導隊を師匠に持ってただけのことはあるわね。」

リオ「負けちゃった・・・」

リョウト「仕方がないよ、ルシアはDCの中でも強かったんだから。」

ライ「ルシアは遠距離、近接と共に長けているようだな。」

キョウスケ「強いて言うなら狙撃が得意と見たな。」

エクセレン「あらん、もう間に合ってるわよ?」

キョウスケ「お前は遠距離型だろ。」

ロバート「彼の場合はどちらかという狙撃型だね。」

ライ「となると狙撃型の武装が必要になって来るな。ブーステッド・ライフルでも十分だが、それを超える射程を持ったものがあるといいかもしれん。」

ロバート「分かった、早速イングラム少佐に報告しておくよ。」

ルシア「お願いします、オオミヤ博士。」

そこにエイタが入って来た。

エイタ「みんな、ここにいたのか。」

リュウセイ「どうした?」

エイタ「艦長から半舷休息の許可が下りたんだ。」

エクセレン「わお！久しぶりの休みね！」

ルシア「半舷休息か・・・」

タスク「お前はとうすんだ？やっぱりPTの訓練しなきゃダメだよな？」

ルシア「そうだな。イングラム少佐に頼んでプログラムを・・・」

そこにイングラムが入って来た

イングラム「その必要はない。」

アヤ「イングラム少佐？」

イングラム「ルシアにはラトウーニとジャーダ達と共に王女の護衛についてもらいたい。」

ルシア「え？俺が・・・？」

イングラム「王女からの要望だ。引き受けてくれるか？」

ルシア「命令なら従いますが・・・でも何でまた？」

イングラム「何でも日本の観光をしたいそうさ。」

リュウセイ「な、なんて呑気なお姫様なこと・・・」

ルシア「しかし、この格好では目立つのでは……」

イングラム「そこは心配ない。ガーネットが用意してくれている。」

ルシア「はあ……」

アヤ「いい機会じゃない？DCにいた頃、張り詰めた環境でばかり過ごしていたから……行ってきてあげたら？」

ルシア「……そうします。」

ガーネット「じゃじゃ！早速来て！」

ルシア「え！？ちょっと待ってくれ！引っ張らなくても……あたたた。」

ガーネットはルシアを引っ張ってシミュレータールームから出た

タスク「いいよな、護衛とはいえ遊びに行けてさ。」

ラッセル「護衛も立派な任務だと思いますが……」

カチーナ「フン。」

東京 浅草 雷門前

ラトウーニ「あ……この服装はやっぱり目立つんじゃない……」

シャイン「私のそばにいますから釣り合う格好をしてもらわないと。」

ラトゥーニ「でも・・・ジャード達は・・・」

シャイン「お黙りなさいませ。いいの、そちらの方が似あってるんだから。」

ラトゥーニ「あ、ありがとうございます・・・」

ガーネット「どう？似あってると思うんだけど・・・今流行りのジャケットとかジーンズとか組み合わせてみたんだけど・・・」

ルシア「・・・・・・・・・・・」

ジャード「何かしっくりこないって顔してるな・・・」

ルシア「いや・・・こういう格好は慣れてなくて・・・」  
「ロロリや教導隊では軍服しか着てなかったから・・・」

ガーネット「いい機会じゃない！すっごくかっこいいよー！」

ルシア「そ、そうかな・・・？」

シャイン「それじゃ、浅草寺へレッツゴー！」

ジョイス「・・・・・・・・・・・」

シャイン「あ、いえ・・・参りましょう・・・ですわ・・・」

ラトウニー「・・・はい・・・」

ルシア（執事が厳しくて有り難い・・・）

ジョイス「しかし、ラトウニー様やルシア様にシャイン様のボディガードをお願いしてしまつてよろしいので？」

ガーネット「あ、気にしないで。この子、生身でも強いから。スイーパーポリス数人分の働きをするわよ。」

ジャーダ「・・・セキュリティ・ポリスだつつの。」

ルシア「この際、どっちだつていいと思うが・・・」

シャイン王女達と共に浅草寺を歩く。

ガーネット「さっきの見てるとどっちが年上か分かんないわよね。」

ジャーダ「あの服の事、シャイン王女に教えたのはお前だろ？」

ガーネット「さ、さあ・・・どうだつたかしら？」

ルシア「面白がつてないか・・・？」

ガーネット「あの位、刺激した方がいいのよ。あの子は・・・」

ジャーダ「ま、最近明るくなつてきたよな。」

ガーネット「何だ、分かつてるじゃない？」

ジャーダ「よっぽど馬鹿だと思ってる？」

ガーネット「イエス・アイドウ。」

ジャーダ「オーノー。」

ルシア「なあ……ラトウーニなんだが……」

ガーネット「何？」

ルシア「昔は……そんなにひどかったのか？」

ジャーダ「ひどかったも何も、俺達にも心を許してなかったからな。」

ガーネット「でも、今は誰とでも仲良くしてるからもう大丈夫かな。」

ルシア「……そうか……」

ジャーダ「お前が責任を感じる必要なんてないさ。」

ルシア「え？」

ガーネット「だって、知らなかったんでしょ？」

ルシア「それは……まあ……」

ジャーダ「いいんだよ、その分ラトウーニと仲良くしてくれよ？」

ルシア「・・・了解。」

シャイン「そのあなた。」

ルシア「え？俺の事・・・ですか？」

シャイン「はい！ルシアと言いましたわね。私の事はよろしいので自由に見学をしてきなさいませ。」

ルシア「え！？だが、俺の任務は王女の護衛であつて・・・」

シャイン「いいんですの！今まで大変な目に遭つたと聞き及んでいましたので・・・」

ルシア「・・・まさか、俺を休ませるためにあんなことを・・・？」

ガーネット「いいんじゃない？ここは私達で見しておくから。」

ルシア「だが・・・」

ジャーダ「かたっ苦しい奴だな・・・いいんだよ、たまには。」

ラトウーニ「ルシア・・・私は大丈夫だから・・・王女の言つ通りにして。」

ルシア「・・・分かった、適当に回つたらすぐ戻る。」

ルシアはシャインとは別方向へ歩く

浅草寺周辺

ルシア（何で王女は俺にあんな事を……。リクセントが代々持っている予知能力が……。考え過ぎかな？……。でも、ラトウーニ……。プライベートでいつもあんな格好してるのかな……。？）  
考えているところにガラの悪い人にぶつかる。

不良「おい！何処に目ん玉つけてんだ兄ちゃん！」

ルシア「すまない。」

不良「怪我しちまったじゃねえかよ！どう落とし前付けてくれんだ  
！！」

ルシア「オトシマエ……。？」

不良「何か腹立つ野郎だな……。やっちまえ！！」

ルシア（何だこいつら……。？地球の人間はみんなこうなのか？）

????「待ちやがれ！！」

不良「！？」

????「ぶつかっただけで怪我なんてするわけねえだろ！」

不良「んだとこのガキ！！」

不良達が少年に殴りかかるも、返り討ちにあってしまう。

不良「な、何だこのガキ・・・強え・・・」

ルシア「・・・・・・・・・・」

???「おら！本当の怪我したくなきゃとつとと浅草寺から消えやがれ！！」

不良「チツ！覚えとけ！！」

そして不良達はそそくさと撤退する。

???「あんだ、大丈夫か？」

ルシア「あ、ああ・・・君は？」

コウタ「俺はコウタ、コウタ・アズマだ。」

ルシア（な・・・アズマだと・・・！？）

コウタ「ん？どうした？」

ルシア「あ、いや・・・コウタか・・・さっきはありがとう。」

コウタ「なあ・・・お前、あんな素っ頓狂な顔していると危ないぞ？」

ルシア「と言われてもな・・・」

コウタ「んだよはつきりしない奴だな！男ならビシッと決めることは」

シヨウコ「ちょっとお兄ちゃん!!」

コウタ「うわ!?!シヨウコ!?!」

シヨウコ「何が、うわ!?!シヨウコ!?!よ!!勝手に何処にでも行くんだから……!」

コウタ「待て待て!これはこいつが不良に絡まれていたから助けたわけで……」

シヨウコ「え?そうなの?」

ルシア「本当だ、変な連中に絡まれていたところを助けてもらった。礼を言う。」

シヨウコ「い、いえ……それはどうも……」

ルシア「?」

シヨウコ（か、かつこいい……!一体何処の人かしら……コロニーの人だったりして……!もしかしたらモデルかも……!）

コウタ「シヨウコ?何顔赤くしてんだよ?」

シヨウコ「うるさいわね!!何でもないわよ!」

コウタ「わ、わけわかんねえ……」

ルシア「ではこれで失礼する。」

シヨウコ「あの！お名前は・・・？」

ルシア「ルシア、ルシア・ゾルダークだ。」

シヨウコ「ええ！？」

コウタ「ルシアか、また会おうぜ。」

シヨウコ「ちょっとお兄ちゃん！この人ゾルダークって・・・あの・・・！」

コウタ「んだよ、ザルソバがどうかしたかよ？」

シヨウコ「ゾルダークよ！ゾルダーク！！ニュース見てなかったの！？この人、DCの総帥してた人と子供よ！ピアンって人の息子！！」

コウタ「何だって！？お前が・・・！」

ルシア「ああ・・・確かにそうだ・・・」

コウタ「テメエ・・・テメエの親父のせいでもだけの人が迷惑したかわかってんのか！！」

ルシア「それは十分承知している。」

コウタ「それだけで済みますのかよー！！」

ルシア「今さらどうこう出来るものでもない。俺には・・・謝る事

しか出来ない。」

コウタ「お前……」

シヨウコ「やめようよお兄ちゃん……この人、お父さんを亡くして落ち込んでるんだよ……」

コウタ「わ、悪い……」

ルシア「いや、いい。ところで、一つ聞きたい事があるんだが……」

シヨウコ「何？」

コウタ「何でも聞いてくれよ、力になるぜ。」

ルシア「あのな……」

浅草寺 雷門前

シャイン「ルシア遅いです!!」

ルシア「すみません、遅くなりました。」

ジャーダ「お前みたいなガチガチの軍人が遅れて来るなんて……」

ルシア「悪いか？」

ガーネット「全然、それくらいがちょうどいいのよ。」

ルシア「……ずいぶん買い込んだんだな。これみんな食べ物？」

シャイン「はい！カミナリオコシにヤキソバ、タコヤキ、みんなウマ……いえ、とても美味しゅうございました。」

ラトウーニ「シャイン王女が店ごと買い取ろうとして大騒ぎだったの……」

ルシア（さ、さすが一国の王女……底が知れない……）

ジャーダ「さて、今度はルシアの番だ。」

ルシア「え？」

ガーネット「ホラホラ！まだ時間はあるし、行きたいところあったら何でも言つて。付き合つから。」

ラトウーニ「ガーネット、ルシアは日本を知らないから聞いても無理だと思う……」

ルシア「いや、1か所だけ行きたいところがあるんだ。」

ジャーダ「ほう……で、何処だ？」

ルシア「アキバハラ。」

ガーネット「は！？秋葉原！？」

ジャーダ「な、何でそんなところに・・・」

ルシア「色々と・・・ね。」

シャイン「それじゃあアキバラにレッツゴ・・・まいりまじょうですわ。」

アズア研究所 地下室

キザブロー「・・・・・・・・・・・・・・・・」

数時間前、ルシアはキザブロー・アズマの家を訪ねていた。

キザブロー「そうか・・・ピアノは逝きおつたか・・・」

ルシア「はい・・・・・・・・」

キザブロー「悲しくはないのか？」

ルシア「いえ、父も覚悟の上だったと思います。でないと・・・D  
Cを立ち上げたりはしません。」

キザブロー「そうか・・・強くなったな。」

ルシア「そんなことはありません・・・たった一人の肉親も護れなかつた俺が・・・」

キザブロー「……で、この後はどうするつもりなんじゃ？お前がよければ研究所でわしの手伝いをさせてもいいんじゃないぞ。」

ルシア「ありがとうございます。でも、俺にはまだやる必要があります。DCを……アードラーの独断で動いているDCを止めなければいけません。でないと……いずれコウタ達も巻き込まれます。」

キザブロー「そうか……お前さんが決めたことじゃ、止めはせぬよ。」

ルシア「そろそろ戻らなくてはいけないので……博士、お体に気をつけて。」

そして、ルシアはアズマ研究所を後にし、シャイン達と合流した。

キザブロー「EOTI機関でロボット工学を教えいていたあどけない少年が、まさかあそこまで成長するとは……あ奴なら……  
・ロアに選ばれるやもしれんな……」

## 第10話 つかの間の休息（後書き）

ルシア「さあこの調子でドンドン行こう!」

エクセレン「あらあら、だんだんこっちのペースになっちゃってるわね、ルシア君。」

ルシア「意外に楽しくなってきたからな。で、次は何だ?」

ブリット「次はシンプルに量産型ゲシユペンストに乗ってみたらどうだ?」

ルシア「懐かしいな・・・教導隊の時にちょっと乗った程度だったけど・・・やってみるか。」

ルシア「BMセレクト、インファイト!アレンジ! ジェット・ダイバー!」

エクセレン「あらら、もう私が教えることは何もないわ。」

ブリット「教えてましたっけ?」

ルシア「ああでも・・・なんか身体がこってるな・・・ずっとコクピットに座りっぱなしだったからな・・・」

ブリット「そういう時は運動が一番! さあ、打ち込み1万本を一緒にやろう!」

ルシア「遠慮しておく、ていうか何日かけてやるつもりだよそれ。」

クスハ「そういう時はお風呂が一番、本を読みながら3時間入つてると疲れも取れますよ。」

ルシア「それも遠慮する、のぼせてたら大変だし。」

マサキ「だったら爽快にひとつ飛びすればスカッとするぜ！」

クロ「マサキ、それじゃ体のコリは治らないニヤ。」

シロ「大体からマサキはそのまま帰ってこなくなるニヤ。」

マサキ「うるせえ!!！」

リーダー「体のコリなら・・・ヨガが一番よ。」

ルシア「ヨガ？」

リーダー「ええ、体のコリに効くアサナがあるの。やってみる?」

エクセレン「あ、ルシア君・・・やめといた方がいいわよ?」

ブリット「そ、そうそう・・・。」

タスク「お前・・・しばらく骨がブランブラになるぞ・・・?」

カチーナ「骨がブラブラになるのはともかく、めっちゃくちゃ痛いぞ?」

ルシア「ヨガってそんなもんじゃないのか?」

ラーダ「物は試しよ。さ、一緒に来て。」

ルシア「お願いします、ラーダさん。」

キョウスケ「……行つたな。」

ラッセル「だ、大丈夫かな……？ルシア少尉……」

ルシア「んぎゃあああああああああ！……！」

エクセレン「あ、ものすごい音と叫び声が……」

ブリット「やっぱり……ヨガは駄目だ……」

タスク「南無……」

## 第11話 リューネとルシア

伊豆基地 食道

ジャーダ「よう、リュウセイ。戻ったぜ。」

ガーネット「ほら、ジャーダ！荷物を部屋に入れるまでがお買いもの！」

リュウセイ「おわ！？また買い込んだなあ・・・おい。」

ジャーダ「おう、Dコンの音楽ソフトをたくさんな。しばらく退屈はしねえぜ。」

リオ「ただいま！ふうふう、おなかいっぱい・・・」

リョウト「そりゃあれだけ食べれば・・・」

エクセレン「そっちは二人してどこへ行ってたの？」

リョウト「横浜の中華街です。」

リオ「ところで・・・王女様は？」

ガーネット「あれ？一緒に帰って来たのに・・・」

リュウセイ「ま、ライがいるからそのうち・・・」

シャイン「ああん、ライディ様あっ！」

ライ「う……！」

リュウセイ「ほら来た！モテる男はつらいねえ、ライ君。」

ライ「あのかな……」

シャイン「ご一緒出来なくて、寂しかったですわ！」

ライ「王女、ラトウーニ達がいたはずでは……」

ラトウーニ「……大変……だった……」

ルシア「え？」

シャイン「怖かったでございます！知らない人が、私を……！」

ライ「知らない人？」

ルシア「ラトウーニ、何があつたんだ？」

リュウセイ「何だよ……お前王女と一緒にいたんじゃないのかよ？」

ルシア「その王女から別々に行動しろと命じられたからな。その通りにしただけだ。」

ジャード「違うだろ？お前をリフレッシュさせようとした王女の気遣いさ。」

リュウセイ「あ、頭の固い奴だなあ……で、何が大変だったんだ？」

ラトウニ「見知らぬ他人についていくのは王女の方……連れ戻すこと数十回……」

ルシア「そ、そんなことが……」

ライ「王女……どういふことですか？」

シャイン「ご、ごめんなさい……。私、日本へ来るのは初めてで……つい物珍しくて……」

ジャーダ「浅草寺近くで、グレート雷門の着ぐるみについていつちまった時は大変だったよ……」

ガーネット「あと、バンプレキッドにもね。そういう所は年相応って言うか。」

リュウセイ「ま、何にせよ……色男は大変だねえ、ライディ君？」

ライ「貴様、他人事だと思つて……！」

ルシア「……」

ラトウニ「どうしたの？」

ルシア「いや……その格好だと普段より見違えるな……て思つただけ……」

ラトウーニ「……………!」

ルシア「ご、ごめん……………」

マサキ「しかし、見事に雰囲気が変わるよな?」

シロ「ホント、別人ニヤ。」

ラトウーニ「あ、あんまり見ないで……………」

ガーネット「とかいいつつも、見せたい相手はいるんじゃないの?」

ラトウーニ「……………」

リュウセイ「ん?どうした?」

ラトウーニ「な、何でもない!」

ルシア「お、おい…………ラトウーニ?」

ラトウーニは走って食堂から出てってしまった。

ガーネット「フッフ…………いい傾向かも。」

ジャーダ「でも相手が鈍感君だからな。」

リュウセイ「??」

ルシア「ラトウーニ…………一体どうしたんだ?」

ジャーダ「あら、こっちにもいたよ鈍感君。」

ルシア「何の事だ？」

エクセレン「にしても・・・ルシア君も結構買い込んでるじゃない？」

ジャーダ「ああ、こいつ秋葉原に行きたいと言い出してな。」

リオ「ええ！？」

リュウセイ「な、何買ったんだ・・・？」

ルシア「DVD BOXだ。」

リュウセイ「これ・・・バーンブレイド3じゃねえかよ!？」

ルシア「それはついだ。俺の見たかったものがBOXで売ってたから買ったんだ。」

リュウセイ「これのことか？何だリアル系かよ・・・」

ルシア「ダメなのか？」

リュウセイ「いや、ダメとかじゃないけど・・・」

ルシア「父がよく見てたものでな、見ておこうかと思って秋葉原に行ったんだ。」

リョウト「ビ、ビアン総帥がバーンブレイドを……」

エクセレン「あらら……あのおじ様、意外な一面を持っていたのね……」

リユウセイ「何だよ……言ってくれば俺の貸してやったのに……」

ルシア「持つてるのか？」

リユウセイ「そりゃもちろん！ロブが編集してくれた名場面集もバツチリ押さえるぜ！」

ライ「リユウセイ……ルシアをそっちの世界に引き込まないでくれないか？」

リユウセイ「何言ってるんだよ！バーンブレイド好きに悪い奴はいねえよ！」

ルシア「……父もか……？」

リユウセイ「もちろんだぜ！じゃあ早速俺の部屋でたっぷりバーンブレイドを……」

その時、警報が鳴り出した。

オペレーター「総員、直ちにハガネ、ヒリユウ改へ乗艦せよ！繰り返し、総員、直ちにハガネ、ヒリユウ改へ乗艦せよ！」

リョウト「乗艦だって……？」

リュウセイ「何かあったのかよ？」

ルシア「わからん、だが何か起こったことは確実だな。」

リュウセイ「じゃ、バーンブレイドはお預けだな。」

ルシア「後でもいいさ。さ、早く乗艦しよう。」

ハガネ、ヒリュウ改は宇宙に上がり、PT部隊を出撃させた。

そこには、ルシアの量産型ゲシユペンストMk-?もいる。

イングラム「各機へ、敵は1機だけだが識別はDCだ。油断せずにかかれ。」

ルシア「了解。」

リョウト「ルシア、いきなりの実戦だけど大丈夫？」

ルシア「心配ないさ、PTには乗ったことがあるからな。それに・  
・異星勢力が迫ってきている。そんなことも言ってもらえないしな。」

クロ「それにしても、正面から1機で突っ込んで来るニヤんて・  
・」

シロ「まるでマサキみたいだニヤ。」

マサキ「思い切りが良くていいじゃねえか。それぐらいの度胸を持った奴なら、案外DCのお偉いさんかも知れねえな。」

ルシア「だが宇宙にはそんな者はいないはずだ。」

タスク「どういつこった？」

ルシア「おれが知る限りでは全員、DCの地上部隊を指揮している。それに、一機だけで向かえるほどの機体・・・ヴァルシオンクラスの機体はないはずだ・・・」

ライ（もしや、エルザムか・・・？）

ユン「DC機、来ます！」

PT部隊の前に

赤い髪を生やした、まるで人間の女の子のような機体が現れた。

イルム「な・・・何だ、ありゃ!？」

ブリット「キョウスケ少尉!あの機体、女の子の姿をしていますよ!」

キョウスケ「こちらでも確認した。PTやAMではなさそうだな。」

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

イングラム「ルシア、心当たりはないのか？」

ルシア「い、いえ・・・あのような機体は初めてみます・・・・・・・・」

けど・・・どこかリユーネに似ているような・・・気のせいかな？」

エクセレン「わお、いいんじゃない？外装だけ引っぺがしてヴァイスちゃんに被せようかしら？」

ライ「・・・顔が尖るぞ。」

イルム「やれやれ・・・どのどいつがあんな趣味的なモンを作ったんだ？」

タスク「さすがにあれば守備範囲外ツスね・・・」

リユウセイ「カ・・・」

ガーネット「カ？蚊にでも刺されたの？」

リユウセイ「可愛い・・・！」

ラトウニ「え・・・？」

ガーネット「あ、あんだねえ・・・そういう趣味だったの？」

イルム「守備範囲広いな、お前。」

エイタ「艦長！DC機から通信が入りました！」

ダイテツ「受信しろ。」

リユーネ「ようやく会えたわ、ハガネ！！！」

リオ「女の子の声!?!」

ルシア「この声……!やはりそうか……!」

マサキ「誰だ、お前?」

リユーネ「あたしの名前はリユーネ・ゾルダーク!あなた達に殺されたビアン・ゾルダークの娘よ!」

リョウト「ビ、ビアン博士の……!?!」

マサキ「そういや、ビアンもルシアも子供……娘がいるって言うてやがったな……」

リユーネ「あんたらにとっては敵だったんだろうけど……あたしにとってはたった一人の親父だったんだ!」

マサキ「!」

リユーネ「そりゃ、お世辞にもいい親父とは言えなかったさ。」

ルシア「……………」

リユーネ「でもね……カタはつけさせてもらおうよ!」

ルシア「待て、リユーネ。」

リユーネ「その声……まさか……!」

ルシア「ああ、俺だ。」

リユーネ「な、何であんたが連邦と一緒にいるのさ!!」

ルシア「今のDCに父、ピアノの遺志はない。それに、こんなことをしてもなにも始まらない。復讐は・・・復讐を生むだけだ。」

リユーネ「知ったようなことを!!大体・・・あんたが一番近くにいたってのに・・・!」

ルシア「確かにそうだ・・・俺もお前と一緒に連邦を皆殺しにしようと思っていたさ。けど、今俺たちがするべきことは、目の前にいるエアロゲイターから地球圏を護ることだ!

こんなところで甲い合戦をすることじゃない!!」

リユーネ「血の繋がってないあんたなんかに言われる筋合いはないよ!!」

ルシア「これだけ言ってもわからないのか・・・!」

マサキ「へえ、あのピアノのおっさんの娘っていうから、どんなにかつい顔の女かと思ったけど・・・意外とかわいいじゃないの。」

ルシア「は!？」

リユーネ「な・・・何を言ってる!!」

マサキ（おや、こいつ・・・意外と鈍情なんだな。）

ルシア「ところで・・・ひとつ聞きたいことがある。」

リユーネ「何だ!?!」

ルシア「お前、DCには加入してないはずだよな?」

リユーネ「・・・今のDCは親父の作ったものとは違う!あたしはあんなものとは一切関係ない!」

ルシア「だったら後ろにいるジーベルの艦隊は何なんだ!」

リユーネ「え!?!」

そこにAM部隊を引き連れたコロニー統合軍が現れる。

リユーネ「あいつらは・・・!?!」

キョウスケ「コロニー統合軍の残党か。」

カチーナ「あのDCの女、あたしらを畏にはめたのか!?!」

キョウスケ「まだそうと決まったわけじゃないが・・・どうなっている?」

ルシア「少なくとも、リユーネはジーベルと組むことはない。」

ジーベル「クッククク・・・ここでヒリュウ改とハガネを沈めれば・・・俺の立場は絶対的なものとなる。そうすればあのゼンガー・ゾンボルトに大きな顔をさせずにすむ。」

エクセレン「あらら、ジーベル・ミステル・・・生きてたのね。」

ガーネット「知ってんの？」

エクセレン「まあね。使う手はセコいわ、しつこいわで・・・女には嫌われるタイプの男って感じ。」

ジーベル「リユーネ・ゾルダーク、お前がビアン総帥の娘なら、志を共にした我々へ手を貸せ！ここでハガネとヒリュウ改を沈め、連邦を倒し・・・我らコロニー統合軍とDCで世界を再統一するのだ！！」

リユーネ「・・・・・・・・・・」

マサキ「お前、本当にDCと関係ないのか？」

リユーネ「くどい！！それほど言うんなら証拠を見せてやるよ！」

リユーネの機体、ヴァルシオーネはランゼンの中央に立つ。

リユーネ「行くよ！！サイコブラスター！！」

ヴァルシオーネのサイコブラスターはランゼンの部隊を全滅させる。

ジーベル「何！？貴様、我々を裏切ったか！？」

リユーネ「裏切りだって！？裏切ったのはあんただろ！親父の作ったDCやマイヤー総司令のコロニー統合軍は・・・毒ガスなんて使おうとしなかったはずだよ！」

ルシア「なんだって！？」

ジーベル「・・・何のことだ？」

リユーネ「とぼけたって無駄さ。あんたが毒ガスを使ってコルムナを手に入れようとしたことは知ってるんだからね！」

ライ「彼女の話は本当なのか？」

ラーダ「ええ・・・。私たちが何とか食い止めたおかげでコルムナは無事だったけど・・・」

リオ「な・・・何て奴なの！宇宙ステーションで毒ガスを使うなんて最低よ！許せない！」

ルシア「ジーベル・・・どう言い訳するつもりだ！」

ジーベル「ほう・・・これはこれは、DC本部でご活躍したルシア大尉じゃないか・・・。」

ルシア「答えろ！！何故コルムナに毒ガスなんかを！！」

ジーベル「フン・・・。マイヤーやビアンは非情に徹し切れなかったからこそ戦争に敗れて死んだのだ。だが、俺は違う！目的のためには手段を選ばん！」

タスク「あらら・・・こりやまた悪役お決まりのセリフだな。」

エクセレン「なりふりの構わなさなら負けないつもりだけどね。」

ルシア「ああ・・・ビアン総帥とマイヤー総司令を侮辱した罪・・・

その身を持って償わせてやる!!」

リユーネ「あんた達、邪魔するんじゃないよ!」

ルシア「何?」

リユーネ「あいつらはあたしが仕留めるんだ!あんたらの相手は後でやってやる!」

ジーベル「全機、攻撃開始。」

ルシア「リユーネ、お前だけにやらせるわけにはいかない。」

リユーネ「勝手にしな!」

ルシア「その口調・・・もう少し何とかならないか?」

リユーネ「うるさい!!」

ルシア「わかったわかった・・・それじゃ、久しぶりにゲシュペンストの力、確かめさせてもらう!」

戦闘が始まり、C軍戦力が除除に削られていく。

キョウスケ「撃ち抜く、止めてみる!!」

アルトアイゼンのリボルビング・ステーキがバレリオンを一撃で粉砕する。

マサキ「魔法剣、エーテルちゃぶ台返し!」

クロ「・・・そんな技ニヤいニヤ。」

イルム「計都羅？剣！うおりやあああ！！」

サイバスターのディスカッター、グルンガストの計都羅？剣が敵A  
Mを次々と斬っていく。

リュウセイ「念動拳、T-LINKナツコウ！！」

ルシア「ジェットマグナム！！」

R-1のT-LINKナツクル、量産型ゲシュペンストMk-？の  
ジェットマグナムで敵を殴り倒す。

ルシアのゲシュペンストがジーベルの戦艦、ペレグリンに接近する。

ジーベル「ビアン総帥がいなくなり、臆病風に吹かれて連邦に寝返  
るとはな。」

ルシア「お前なんかと一緒にするな！俺は・・・今の、大義のない  
DCや統合軍に地球の未来は救えないと判断しただけだ！！」

ジーベル「大義など出世の足しにもならん。むしろ足をすくわれ  
かねん。ビアンやマイヤーのようにな。」

ルシア「貴様・・・俺の前でその発言したことを後悔させてやる！  
！」

ジーベル「攻撃しろ、奴はもうDCとは無関係の人間だ。」

ペレグリンが主砲でルシア機を攻撃するが、全て避けられる。

ルシア「策にばかり固執する奴の攻撃なんて！」

マサキ「ルシア！まとめていくぞ！」

ルシア「了解！」

マサキ「いけ！ハイファミリア！」

クロ「行くニャ、シロ！」

シロ「OKニャ！」

サイバスターのハイファミリアでペレグリン周辺の敵を牽制している隙をつき、

ルシア機はペレグリンまで接近する。

ルシア「くらえ！」

ペレグリンにとりつき、動力部をマシンガンで至近距離で破壊する。

ジーベル「おのれ！奴をはたき落とせ！」

リユーネ「まだあたしがいるよ！クロスマツシャー！」

ヴァルシオーネのクロスマツシャーが対空迎撃システムを破壊する。

ジーベル「ええい！ここは退くしかないか……！俺の退路を確保させる！！」

ペレグリンが反転し、他のAM群も撤退を始める。

ルシア「くそ……ここで倒しておきたかったが……さすがに火力がないな……」

リユーネ「さあ、これで邪魔者はいなくなった。ケリをつけさせてもらうよ……」

リユーセイ「マサキ！」

マサキ「みんなは手を出すな！あいつの相手は俺がする。ピアノにとどめを刺したのはこの俺だからな。」

リユーネ「!?」

ルシア（やはりそうか……ハガネの部隊でヴァルシオンを仕留められるといえばサイバスターしかいなかったからな。）

リユーネ「くらいな！！ディバインアーム！」

ヴァルシオーネがディバインアームで斬りかかるが、サイバスターはディスカッターで受け止める。

マサキ「聞け！今は地球人同士で争ってる場合じゃねえ！！」

リユーネ「うるさい！あたしはあんたを倒す！」

ルシア「マサキ、リユーネは口で言っても聞くやつじゃない。こころは力押しでいくしかないぞ。」

マサキ「わかってらあ!!」

サイバスターがヴァルシオーネのディバインアームを弾き飛ばし、ヴァルシオーネの喉元にディスクッターをつきつける。

リユーネ「くっ……!!」

マサキ「ピアンとやりあった俺ならわかる!手段はどうあれ、あいつは本当に異星人から地球圏を護るつもりだった。」

リユーネ「……………」

マサキ「お前はそうじゃねえのか!??」

ルシア「……………」

マサキ「ピアンは本当の役目を俺たちに託した、俺は……そんな気がする。」

リユーネ「……………アハハハハ!やっぱり勝てなかったか。でもこれですつきりした。」

ルシア「え…………?」

リユーネ「親父は親父、あたしはあたし。あたし、あんた達が気に入ったよ。」

マサキ「リユーネ・・・」

ルシア（どうやら、わかってくれたみたいだな。）

リユーネ「特にマサキ、あんた・・・結構いい男だしね。」

ルシア「は？」

リユーネ「あたしに可愛いなんて言ってくれたのはあんたが初めてだよ。」

マサキ「な、何言ってるんだ。」

リユーセイ「あ、あのさ。一応俺も・・・」

ライ「お前が可愛いと言ったのは彼女の機体の方だろうか。」

ルシア「確かに。」

リユーセイ「相変わらずツッコミが厳しいねえ・・・」

リユーネ「ま、あんたらと一緒にいた方が面白そうだしね。それに、あたしも異星人と戦うつもりで木星から帰ってきたし・・・どう？あたしもハガネに乗せてくれないかな？」

マサキ「お、おいおい。強引な奴だな・・・」

イルム「イングラム少佐、どうします？」

ルシア「少佐、俺からもお願いします。あの機体、ヴァルシオーネ

は有効な戦力になります。」

イングラム「そうだな。艦長には俺の方から話しておく。」

リユーネ「話が早くて助かるよ！」

ルシア「少佐、ありがとうございます……」

その時、ルシアの頭に念が走った。

ルシア「グ……!!」

リユウセイ「どうしたルシア!？」

ルシア「く……来る……!!」

ガーネット「来るって何が？」

ハガネのセンサーに何かの反応が出た

エイタ「L5宙域に空間の歪みが発生！」

テツヤ「何っ!？」

ダイテツ「L5宙域の映像を出せるか？」

エイタ「映像、出します！」

その映像には、空間の歪みから何かが出てくる様子が映っていた。

そこから出てきたのは、巨大な白い球体だった。

レフィーナ「こ、これは……!」

ショーン「まさか、エアロゲイターのものでしょうか?」

エクセレン「お、大きすぎでしょ!?!」

キョウスケ「奴らの要塞と取った方がいいな。」

ダイテツ「各機に帰還命令を出せ。」

テツヤ「了解!」

イングラム（……今はそれが妥当だな……）

ルシア（何だ……?あれが来た瞬間、何かが走った……一体何なんだ……?）

ハガネ 格納庫

リュウセイ「うゝむむむ。見れば見るほど可愛い……。とても口ポットとは思えねえな。」

リョウト「この機体……。もしかしたら、ヴァルシオンの系列機か何かじゃないかな?」

リュウセイ「マジかよ!?!」

リョウト「うん。サイズは全然違うけど似たような武器を持っているし・・・」

リユーネ「あなたの言うとおりだよ。ヴァルシオーネはヴァルシオーンの2号機みたいなものだよ。」

マサキ「だったら何であんな格好をしてんだ？」

リユーネ「あたしが親父に頼んだのさ。でなきゃ、あのイカついヴァルシオンに乗せられるところだったからね。」

マサキ「別にあれでもいいじゃねえかよ。」

リユーネ「だって・・・あのデザイン、あたしの趣味じゃないもん。」

マサキ「だからって、女の子の姿ってのもどうかと思うけど・・・」

リウセイ「ふ〜ん、親父さんのロボットか・・・」

リユーネ「今は形見になっちゃったけどね。」

マサキ「リユーネ・・・」

リユーネ「そういう湿っぽいのはなし。親父は親父、あたしはあたしだって言ったでしょ?」

マサキ「ああ。」

リユーネ「それにさ、あんた達に親父を止めてもらって良かったとも思ってるんだ。」

リョウト「どうして?」

リユーネ「力におぼれてしまった人間のたどる道は決まってるからね。」

リョウト「……………」

リユーネ「あ、ごめんごめん。結局湿っぽくなっちゃったね。」

リユウセイ「にしても親父さんってすごいよね。」

リユーネ「でもヴァルシオンだけはいただけないかな?」

そこに機体から降りてきたルシアが歩いてきた

ルシア「……………」

リユーネ「あ、いつけない!あんたの前で親父を馬鹿にしたら……」

ルシア「……………」

リョウト「どうしたのルシア?顔色が悪いけど……」

リユーネ「もしかしてさっき言ったこと気にしてる?それなら……めん……頭に血が上ってつい……」

ルシア「いや、いい……」

リュウセイ「なんなら医務室までついて行ってやるけど……」

ルシア「大丈夫だ、少し疲れただけだから……クスハの栄養ドリンクでも飲んで休んでるよ……」

そう言つてルシアは格納庫から出て行つた。

リョウト「ホントに大丈夫かな……？」

シロ「あのボールみたいな奴が出てきたところからあんな調子ニヤ。」

リユーネ「ホントにどうしたのかな……？」

リュウセイ「ちょっと待て？今あいつ、クスハのドリンクがどつつて言つてたよな……？」

マサキ「ああ、それが……あ！」

リユーネ「え？何のこと？」

リュウセイ「俺たちの仲間でクスハつて子がいるんだけど、そいつの作る栄養ドリンクがめちゃくちゃ不味いんだよ。」

クロ「マサキは一度それ飲んで気絶してるニヤ。」

マサキ「それを自ら進んで飲むって……」

リユーネ「ああ、あいつ意外とそういうの人と違うんだ。余程記憶がなくなる前は質素な生活してたんだろうなって。」

リユウセイ「いや、質素な生活しててもあれはさすがに……。」

リョウト（ルシア……あれが出てきてから急に調子が悪くなったけど……ホントに大丈夫かな……？）

ハガネ 自室

ルシア「くそ……！まだ頭痛が治まらない……！一体あれは……あの要塞は一体何なんだ……！」

ネビーイム 内部

レビ「アタツド。」

アタツド「どうされましたか？レビ様。」

レビ「ここに転移してくる瞬間、一瞬だが念を感じたぞ。それも、強力な念を……。」

アタツド「このネビーイムまで届くほどの念動力者が地球に……？」

レビ「まだ分かん。しかし、もしや先に送られたサンプルやも知れん。」

アタツド「まさか、あ奴にそれほどの念があるわけがありません。」  
レビ「いや、あれから成熟したのかも知れん。地球人のサンプル同  
様、刈り取るとしよう……。」

第11話 完

## 第11話 リューネとルシア（後書き）

ルシア「魔装機神リメイクおめでとう!!」

リューネ「な、なんでアンタが盛り上がるのさ!？」

ルシア「いや、正直嬉しいよ。今まで版權がどうかで出ないかも  
って思ってたから。」

マサキ「ていうか2000年頃から画作してたらしいぜ、それから  
10年経っちまったけど。」

ルシア「ラ・ギアスのことはあまり知らないし、いい機会だよ。」

リューネ「あんた、まさカラ・ギアスに行けると思ってたない？」

ルシア「え?だめなのか?」

マサキ「別に来るのはいいんだけどよ。PTやAMじゃ絶対持たない  
ぜ。」

リューネ「そうそう、いくらルシアが強くてもラ・ギアスの魔装機  
には歯が立たないかもしれないよ?」

ルシア「じゃ、じゃあ特機なりなんなり見繕うから・・・」

マサキ「そんなに行きたいのかよ・・・」

リューネ「ま、別にいいけど。あたしとマサキの邪魔だけはしない



## 第12話 蛇の毒牙

ハガネ      ブリッジ

ルシア「俺を伊豆基地に？」

ダイテツ「ああ、今エアロゲイターが各主要都市に攻撃を開始し、ハガネとヒリユウ改はその迎撃に出なくてはならない。だが、全員が出たのではシャイン王女がいる伊豆基地が攻撃された場合、最悪の事態になりかねん。」

イングラム「そこで、お前には単独で伊豆基地に帰還してもらい防衛の任務に就いてもらう。」

ルシア「しかし・・・俺一人で務まるのでしょうか・・・？」

ダイテツ「伊豆基地にはカイ少佐もいる。彼の指揮の元、動いてくれ。」

ルシア「カイ少佐か・・・分かりました。行きます。」

ダイテツ「レイカーが伊豆基地を留守にしている。ハンスには気を付ける。」

ルシア「ハンス・・・ん？どこかで聞いたような・・・？」

イルム「ハンス中佐はな、キョウスケがテストしていたビルドドラプターを搭乗者ごと爆破したんだ。」

ルシア「え！？それでよく生きてましたね・・・キヨウスケは。」

イルム「何かと悪運だけは強いからな、あいつは。」

イングラム「確かに、ハンス中佐には気を付けたほうがいいな。お前の入隊を断固として反対した男だからな。」

ルシア「やはり・・・DC総帥の息子だから・・・ですよ？」

ダイテツ「だがレイカーの働きがけでお前はこの艦にいられたのだ。」

ルシア「レイカーと言うと・・・あの時エルザム少佐と交信していた・・・直接の面識はなかったのですが、帰ってきたらお礼を言わなくてはいけませんね。」

ダイテツ「フ・・・そうだな。」

イングラム「では、小型艇を用意する。ルシアは機体の積み込みを。」

ルシア「了解。」

そして、ルシアは伊豆基地に降り、機体を基地に運び出す。

伊豆基地 食堂

カイ「ルシアか、久しぶりだな。」

ルシア「カイ少佐！お久しぶりです！」

カイ「ほう・・・教導隊時代よりたくましくなったな。」

ルシア「エルザム少佐達のおかげでもありますが・・・父のおかげでもあります。」

カイ「やはりあの時、佐世保に攻撃を仕掛けてきたリオンのパイロットはお前だったのか。」

ルシア「もしかして、あの緑のゲシユペンスト・・・カイ少佐が？」

カイ「ああ、お前の流れる攻撃を見て確信した。」

ルシア「道理で攻撃が先読みされたと思いましたよ。まさかカイ少佐がああゲシユペンストに乗っていたなんて・・・」

カイ「あの機体には愛着があつてな。それにしても思い出すなあ・・・俺の説教で泣きベソかいてたお前が、今じゃ一端のパイロットとは。」

ルシア「ま、まだ覚えてたんですか・・・」

カイ「当たり前だろ、真正面から突っ込む奴があるか。」

ルシア「ハハハ・・・この事、誰にも言わないでくださいよ？特にハガネにいる連中には・・・」

カイ「ガハハハ！その程度で恥ずかしがるとは、まだまだだな！」

ルシア「は、はあ……」

そこに一般兵が入ってきた。

一般兵「ルシア少尉、ハンス中佐がお呼びです。」

ルシア「ハンス中佐が？」

カイ「やばいな……今レイカー司令はジュネーブに出向いている。何をするかからんぞ。」

ルシア「大丈夫ですよ、これでもリユーネ譲りで生身でも鍛えてますから。」

カイ「そうか？だが、油断はするなよ？」

一般兵「では、こちらです。」

一般兵に連れられ、案内された先は

シャイン王女がいる部屋だった。

シャイン「あら？ルシアですか？」

ルシア「シャイン王女！？それにジョイスさんまで……」

ジョイス「ルシア様、何の御用事で？」

ルシア「いえ、ハンス中佐に呼ばれたと思ったたらここに……一体何が……？」

そこにハンスが部屋に入ってきた。

ハンス「……………」

ルシア「あ、ハンス中佐。」

ジョイス「何かあったのですかな？」

ハンス「王女を別の場所に移動させたい。」

ルシア「なんですって……？」

ハンス「この極東支部も安全な場所とは言えなくなって来たのでな。」

ジョイス「はて……。レイカー様からそのようなお話は聞いておりませんが？」

シャイン「その話……本当でございますか？」

ジョイス「シャイン王女……？」

シャイン「爺、とても嫌な予感がする。そこへ行ったら……私は……」

ルシア（例の予知能力か……）

ハンス「ハハハ、何をおっしゃいますか。」

シャイン「いえ、私は行きとつございませぬ。」

ハンス「時間がありません。急いでご用意を、あなたを必要としている者達の所へ行くために……」

ルシア「ハンス中佐、俺に何か用があったのではないのですか？」

ハンス「フフフ……用はあるさ。」

その瞬間、ハンスは懐から拳銃を取り出し、ルシア目がけて撃った。

ルシア「!？」

咄嗟に避けたが、右肩に被弾してしまう。

ルシア「ゲ……!」

ジョイス「ルシア様!？」

ハンス「チツ、急所を外したか……まあいい。王女、こうなりたくなければ俺と来てもらおうぞ。」

ハンスが王女を抱え、走り去った。

シャイン「離して!! いやああ!!」

ジョイス「王女!!」

ルシア「ジョ、ジョイスさん……」

ジョイス「ルシア様！大丈夫なのですか！？」

ルシア「お、俺は大丈夫……それより、早くここから逃げてください……！」

ジョイス「あなたはどうかさるおつもりですか！」

ルシア「お、恐らく……奴はタウゼントフェスラーでここを出るはず……足止めをしなくては……！」

ジョイス「いけません！そのお身体で出撃なさっては……！」

ルシア「ハンス中佐……いや、ハンスを逃がした俺の責任です……！ジョイスさんは早く……！」

252

伊豆基地の外では、

ハンスがタウゼントフェスラーでシャイン王女を運び出そうとしていた。

サカエ「ハンス中佐！何をなさるつもりなのです！？」

ハンス「お前に説明する必要はない。」

サカエ「な……！」

ハンス「機体を発進させる。」

一般兵「了解です。」

サカエ「や、やむを得ん……。輸送機を取り押さえる！」

伊豆基地からメッサー隊、カイとルシアのゲシュペンストが発進した。

カイ「ゴースト1よりT5へ！直ちに停止せよ！」

ハンス「そうはいかん。人質の命が惜しければ、私の邪魔はするな。」

カイ「人質だと!？」

ルシア「カイ少佐……。奴は……。シャイン王女を拉致したんです！」

カイ「何だと!？」

シャイン「降ろして！私をどこへ連れていくつもりなの!?!ライデイ様あつ!！」

サカエ「シャ、シャイン王女!？」

カイ「ハンス中佐、何の真似だ!？」

ハンス「フン……。貴様の暑苦しい面と隣の臆病者の面も今日で見納めだということだ。」

ルシア「臆病者じゃないぞ・・・！」

カイ「暑苦しくて悪いか！どういう意味だ！？」

ルシア「そうか・・・！以前にアードラーが言っていた内通者って・・・ハンスのことだったのか！」

サカエ「ルシア君！その話は本当なのか！？」

ルシア「はい・・・！恐らくDCが・・・」

オペレーター「基地周辺に所属不明機が多数接近！」

サカエ「何！？」

その瞬間、基地周辺へ攻撃が入り、メッサー隊とPT格納庫が爆破された。

ルシアとカイは何とか攻撃を回避できた。

カイ「ぬう！！！」

ルシア「く・・・っ！！！」

オペレーター「格納庫大破！迎撃機、発進できません！」

サカエ「な、何だと！？」

カイ「どうしたルシア！いつもの調子が出てないぞ！」

ルシア「すみません・・・先ほどハンスに銃撃をくらってしまいまして・・・」

カイ「何！？そんな体で出てきたのか！」

ルシア「それよりも・・・敵がきます！」

伊豆基地にDCのAM部隊が侵入してきた。

サカエ「あ、あれは・・・DCの残党！？」

カイ「ルシアが言っていたことは本当だったようだな！」

サカエ「だからハンス中佐は警戒レベルを下げてやつらを基地へ導いたというのか・・・！」

カイ「よりもよってDCと内通していたとは・・・許せん！！」

トーマス「首尾はどうだい？ハンス中佐。」

ハンス「アードラーの依頼通り、シャイン王女の身柄を確保した。」

トーマス「グット！これで例のお宝は頂きだな。」

ルシア「あのガリオンは・・・トーマス・プラットか！」

サカエ「カイ少佐、ハガネとヒリュウ改が間もなく基地へ帰還してくる！それまで何とか持たせてくれ！」

カイ「了解!!」

ルシアはゲシュペンストをタウゼントフェスラーに進める。

カイ「ルシア!その体では無理だ!早く後退しろ!!」

ルシア「シャイン王女を拉致され、ハンスを逃がしたのはこの俺です……!俺がT5を止めます……!」

カイ「駄目だ!後退を!!」

ルシア「後で説教なり何なり好きにしてください……!けど今は奴を止めることが先決です!!」

カイ「……わかった、敵を退けたら覚悟しておけ!!」

ルシア「了解!!」

ルシアはタウゼントフェスラーに狙いを定める。

ルシア「推進部さえ破壊してしまえば逃げられまい……!」

トーマス「おっと、そうはさせねえぜ!」

そこにトーマスのガリオンが攻撃を仕掛けてくる。

ルシア「ぐ……!邪魔をするな、トーマス!」

トーマス「お?誰かと思えばルシア大尉殿じゃねえか!親父がおっ死んで連邦に寝返ったのか?」

ルシア「お前に関係ない……！俺は、この地球圏を護るために・  
・ピアン総帥とマイヤー総司令の遺志を継ぐために戦っている！連  
邦もDCも関係ない！！」

トーマス「相変わらずの青臭っぷりだな！戦争を楽しめれば異星人  
だろうと何だろうと関係ねえよ！」

ルシア「貴様はまだゲーム感覚で……！」

トーマス「いい加減テメエの顔は見飽きてんだ。ジ・エンドといこ  
うぜー！」

トーマスがバースト・レールガンで攻撃してくる。

ルシア「さすがにガリオンみたいにひらりとはいかないが……  
これくらい……！」

直撃を何とか避け、ルシアはマシンガンでガリオンを狙う。

ルシア「当たれ！」

しかし、弾は当たらない。

ルシア「ぐ……！右腕が言うことをきかない……！」

トーマス「ほう……スパイは暗殺に失敗したが、負傷はさせたん  
だな。」

ルシア「何だと……！」

トーマス「そのまま大人しくしてればよかったものを・・・何でその体で出てきた？」

ルシア「お前には関係のないことだ・・・！」

トーマス「そうかい！」

ガリオンがブレイク・フィールドを展開した。

ルシア「まずい・・・！」

トーマス「これでシューアゲンだぜ！！！」

ガリオンがルシア機に向かってきた。

カイ「ルシア！ここは任せろ！！！」

そこにカイのゲシュペンストが前に出てきた。

ルシア「駄目です少佐・・・！ブレイク・フィールドはゲシュペンストでは破れません・・・！」

カイ「破れるさ、拳一つあればな。」

トーマス「ハッ！その貧弱な拳で何ができるってんだ！」

カイ機はガリオンめがけて突進する。

カイ「拳一つで戦えるとは言わん！」

トーマス「砕け散りな!!」

カイ「だが・・・拳一つを甘く見るなよ!!」

カイ機は左腕の損傷を顧みず、ブレイク・フィールドごといでガーリオンをつかんだ。

トーマス「な!?!」

カイ「ジェット・マグナム!!」

プラズマ・ステークが炸裂し、ガーリオンの右腕を破壊した。

ルシア「拳一つでブレイク・フィールドを・・・!」

トーマス「なんつう野郎だ・・・!」

DC兵「少佐、ハンスが戦闘区域を出ました。」

トーマス「(今の戦力でハガネとヒリュウ改の相手をするのはナンセンスだな。) お前らは残って基地を破壊しろ!」

トーマスが伊豆基地から撤退した。

残りのAM群が2機に迫る。

ルシア「まずい・・・! 囲まれたか・・・!」

カイ「ルシアを護りながら敵を撃破は難しい・・・どうすれば・・・

！」

そこに指令室から通信が入った。

オペレーター「ハガネとヒリユウ改が来ました！」

その時、猛スピードで2機を取り囲んでるAM群のど真ん中に割り込む機体が見えた。

マサキ「ルシア、大丈夫か！」

ルシア「マ、マサキか・・・！」

クロ「チャージ完了ニヤ！」

マサキ「くらえ！サイフレーザーッシュ！！！」

サイバスターがサイフラッシュを放ち、取り囲んでいたAM群を全機破壊した。

カイ「ふう・・・ようやく一難去ったか・・・」

ハガネとヒリユウ改が伊豆基地に現れる。

ダイテツ「参謀、シャイン王女は？」

サカエ「も、申し訳ありません・・・。ハンスに連れ去られました・・・」

レフィーナ「そ、そんな・・・！間に合わなかったのですね・・・」

ライ「くっ……!」

リュウセイ「あ、あの野郎! DCのスパイだったのかよ!!」

リユーネ「その上、女の子を誘拐するなんて……DCも地に墮ちたもんだね!」

カチーナ「よし!裏切り者と王女を追いかけようぜ!」

キョウスケ「いや……。今はDC部隊を撃滅させるべきだ。」

カチーナ「おいおい!今なら王女を助けにいけるだろうが!」

リュウセイ「このままハンスの野郎を見逃していいってのかよ!?!」

キョウスケ「優先順位をはき違えるわけにはいかん……。今はなすべきことは敵機のせん滅と基地の防衛だ。」

ライ「今はまだ……。奴らは王女の身に危害を加えない……。そういうことか?」

キョウスケ「ああ。それに、ここで伊豆基地を失うわけにはいかないだろう?少尉。」

ライ「……。了解した。」

カチーナ「……。よくまあ、そこまで割り切れるもんだぜ。」

エクセレン「割り切っていないわよう……。結構根に持つタイプだし。」

「  
キョウスケ「ハンス・ヴィーパー……あの男とのケリは必ずつけ  
る。俺なりの流儀でな。」

エクセレン「ほらね。」

ルシア「グ……!!！」

カイ「ハガネ、聞こえるか！ルシア機を収容し、手当をしてくれ！  
ハンスに右腕をやられたらしい！」

リュウセイ「ええ!？」

マサキ「お、お前……そんな体で戦ってたのかよ!？」

ルシア「ハ、ハンスの思惑に気付かなかった俺の責任だ……これ  
くらい……!」

カイ「駄目だ!!強制収容しても構わん!ルシア機を回収してくれ  
!」

マサキ「俺が行くぜ!」

サイバスターはルシア機をハガネに収容した。

エイタ「ルシア機の収容を確認!至急、衛生兵を!」

テツヤ「各機、発進!敵部隊を撃破しろ!」

ハガネ、ヒリュウ改からPT部隊が発進し、敵を迎え撃った。  
さほど多くもなく、なんなく敵部隊を退けることに成功した。

伊豆基地     ブリーフィングルーム

リュウセイ「教官、ハンスとシャイン王女を乗せた輸送機はどこに向かっているんだ？」

イングラム「不明だ。T5はこちらの警戒網を突破し、行方をくらませた。」

ルシア「みんな、すまない・・・俺が近くにいなから・・・！」

リュウセイ「お前が悪いわけじゃねえよ！ハンスに撃たれて、それどころじゃなかったんだから。」

リオ「それよりも、何とかして王女を助けなきゃ！」

ライ「今の状況で、うかつに動くのは危険だ。」

リオ「で、でも！」

ライ「王女が連れ去られ先はおろか、DC残党の本拠地すら判明していない。そして・・・俺たちの頭上にはホワイトスターが鎮座していることを忘れるな。」

リオ「より巨大な敵を倒すために、王女を見殺しにするっていうんですか！？少尉はそれでいいんですか！？」

ライ「……！(あの時と同じか……カトライア義姉様の時と……)」

クスハ「リオ……言い過ぎよ。ライデイス少尉だって、シャイン王女のことを心配して……」

リオ「！ご、ごめんなさい……」

ライ「気にするな。連れ去られた者は取り返せばいい。彼女はまだ生きているのだから。」

リオ「はい……！」

イングラム「今後の作戦は、レイカー司令が伊豆に戻り次第決定される。各員はそれまで待機、いいな？」

ルシア「了解……」

イングラム「リュウセイ、ライ、お前たちはアヤが戻り次第、特別訓練に入ってもらおうことになる。」

リュウセイ「特別訓練って……一体何をするんだ？」

イングラム「それについては……後ほど説明する。」

伊豆基地 格納庫

ルシア「みんな、ヴァルシオーネのコクピットでなにしてるんだ？」

マサキ「ルシア、もう大丈夫なのか？」

ルシア「ああ、これくらい一日もすれば操縦だって……」

リーダー「あまり無茶はだめ、許可が下りるまで出撃は禁止よ。」

ルシア「は、はい……それで、一体何を……？」

リユーネ「リーダーとリョウトにメモリーを調べてもらってるの。」

ルシア「メモリー？」

リユーネ「ヴァルシオーネは親父が造った機体だから……メモリーにDCの情報が入ってるんじゃないかと思ってね。」

ルシア「DCの情報が……？」

リユーネ「うん。もしかしたら、残存部隊が拠点にしてる秘密基地の位置なんかわかるかも知れないし。」

ルシア「そうか……それで王女が監禁されている場所の特定ができるということか……！」

リユーネ「ちょっとセコいやり方だけど、今のDCをこのままほっとくわけにはいかないからね。」

ルシア「すまん、リユーネ。本当なら俺も一緒に戦わなきゃいけないというのに……」

リユーネ「いいよ別に。無理して死んでもらっても困るし。ところで・・・どう？何かわかった？」

リョウト「シークレットデータのファイルらしき物は見つかったけど・・・」

ラーダ「プロテクトがあと一步の所で解除できないの。」

リユーネ「ふん・・・」

リョウト「ここに表示されているパスワードの続きさえわかればいいんだけど・・・」

ルシア「えーと・・・」のさばる悪を何とする『？何だこのパスワード？』

リョウト「何かは分からないけど、この後に続く言葉があるらしいんだけど・・・」

リユーネ「何だ、そんなの簡単よ。続きに『天の裁きは待っておれぬ』って入れてみてよ。」

リョウト「う、うん・・・」

リョウトが端末にコードを入力すると、プロテクトが解除された。

ラーダ「プ、プロテクトが解除されたわ・・・！」

リユーネ「でしょ？」

ルシア「おい、リユーネ。さっきのつてもしかして……」

マサキ「そうだぜ、何だよあれ？」

リユーネ「あれ、あたしの好きな古い日本の時代劇のオープニングナレーションなんだ。」

ルシア「必殺……って奴だったよな？」

リユーネ「そそ、それぞれ。」

マサキ「へへえ……。お前って、結構物知りなんだな。見直したぜ。」

リユーネ「え？あたしを？」

マサキ「ああ。」

リユーネ「ありがと。お世辞でも嬉しいよ。」

ルシア「何を言ってるんだか……」

リーダー「あら、何か映像が出てきたわ。」

リユーネ「映像？」

リーダー「ええ、データに添付されていたみたいね。」

映像が映され、そこに映っていたのは

ビアン・ゾルダークだった。

ビアン『リユーネ。』

リユーネ「親父……!?」

ルシア「ビアン総帥……!」

ビアン『……お前がこの映像を見ているころ、私はこの世にいないだろう。』

ルシア「……………」

ビアン『……私の死後、予想され得る状況に対処できるよう、このデータをヴァルシオーネに残しておく。これをどう使うかはお前の望むようにするがいい……』

リユーネ「……………」

リョウト「! ラーダさん、このデータを見てください!」

ラーダ「DCの各種計画書、EOTのデータ、エアロゲイターのデータ……どれも重要度の高い情報ね。」

リョウト「これなら、DCの残存部隊の本拠地の位置を絞り込むことが出来るかも知れませんよ。」

マサキ「それ、すげえじゃねえか!」

シロ「ホントだニヤ!」

リユーネ（・・・親父・・・後のことも色々と考えてたんだね。）

ルシア「ん？まだ映像は続いてるぞ？」

ピアン『それと、近くにルシアがいるのなら、同じく添付したデータを渡してくれ。これは他の誰にも漏らしてはいかん。ルシアと仲良くするんだぞ。』

リユーネ「親父・・・」

ルシア「・・・（父さん・・・）」

ラーダ「ルシア宛てのデータはこれね。」

リョウト「これにもプロテクトが掛ってるみたいだね。」

ルシア「それは俺の方で解除しておくよ。そろそろ医務室に戻らなきゃいけないからな。」

ラーダ「わかったわ。もし、DCの拠点データだったら伝えてね。」

ルシア「わかりました。」

伊豆基地 病室

ルシア（一体何のデータが入ってるんだ・・・？）

ルシアはデータにアクセスすると、パスワードの入力を促してきた。

ルシア（このパスワード・・・俺の好きなアニメの名セリフじゃないか・・・！）

そこに書かれていたのは

『この魂の炎、極限まで高めれば』

ルシア（この後に行くのは・・・『倒せないものなど、何もなし』）

パスワードを入力し、プロテクトが解除される。

ルシア（これは・・・アイドネウス島の構図？・・・ん？こんな場所なかったはずだぞ！一体これは・・・！）

第12話 完

## 第12話 蛇の毒牙（後書き）

ルシア「ああ・・・余計に体が痛くなっちゃったよ・・・」

エクセレン「そういえばさ。私、気になることがあるんだけど？」

ルシア「何だよ？」

エクセレン「ルシア君って、恋人とかいるの？もしくは想い人。」

ルシア「は！？い、いきなり何を聞くとせば・・・どうだろうなあ・・・ハハハハ。」

エクセレン「じゃあ私たちが予想してあげるね！えーと・・・レオナちゃん？」

タスク「そりゃ聞き捨てならねえな。」

ルシア「ただの知り合いでしかない。」

レオナ「そうよ、それになんでタスクがそんなこと言うの？」

タスク「え！？あ、いや・・・別に・・・」

リュウセイ「俺たちそんなにDCやコロニー統合軍のことは知らないし・・・ライ、何か知ってるか？」

ライ「恋人とは違うと思うが・・・リリー中佐やトロイエ隊のユリアアでは？」

リュウセイ「意外なところでヴィレッタ隊長だったりして！」

ショーン「いえいえ、恐らくオペレーターのユンだと私は思いますが……」

ガーネット「意外性ならシャイン王女つてのはどう？」

シャイン「私にはライディ様という心に決めた人がいます！ですから私、お断りします！」

ルシア「お前ら勝手な妄想してんじゃねえよ！！つーか王女、勝手に決め付けないでくれないか？」

エクセレン「え、じゃあ一体誰なの？DCにそんなに女の子いないし……」

ルシア「……一応DCにはいる。」

リュウセイ「いるのかよ!？」

クスハ「誰なんです？」

ルシア「それは……OG2までお待ちください。」

ブリット「え？どういことだ？」

### 第13話 鋼の救世主 ヴァルシオンV

伊豆基地 司令部

ダイテツ「何？アイドネウス島だと？」

ルシア「はい、父が遺したデータにアイドネウス島の構成図が出てきました。」

テツヤ「構成図？何かあったのか？」

ルシア「長いことこの島にいますが・・・隠しフロアが存在していたことがわかったんです。」

ダイテツ「隠しフロア？」

シヨーン「これは、ピアン博士が遺した秘密兵器の在り処を指しているのではないのでしょうか？」

ルシア「まだ分かりませんが、アイドネウス島に何かがあるのは間違いないと思います。」

レフィーナ「しかし、私達はジュネーブの防衛任務に就かなくては いけません。一人で向かわせるのは危険かと・・・」

ダイテツ「ならば、我々も共に向かえばいい話だ。」

ルシア「ダイテツ艦長・・・」

レイカー「そうだな、ルートを考慮してもアイトネウス島経由での航行は十分に可能だ。」

ルシア「司令、いいのですか？」

レイカー「今は多くの戦力を必要としている。有効な戦力増強ができる可能性があるなら上も文句は言わないだろう。」

サカエ「しかし、それでは予定時刻までの到着は不可能です。」

ルシア「なら途中で降りてアイトネウス島に向かいます。その後、ジユネーブで合流すれば問題ないかと。」

ダイテツ「そうだな、なら出港予定を少し早めよう。何かあるか分からんからな。」

ルシア「ありがとうございます！」

ハガネとヒリュウ改が出港し、アイトネウス島付近に着いた。

ハガネ 格納庫

リュウセイ「なるほど、それで艦長達は出発時間を早めたってわけか。」

ルシア「みんな、迷惑をかけて申し訳ない。」

エクセレン「別にいいわよん。例の秘密兵器が気になるし。」

ブリット「まだ秘密兵器と決まったわけじゃないですよ。」

キョウスケ「だが、この賭けはのつてみる価値はある。大当たりなら今後の戦局が有利になるかもしれん。」

ラッセル「でも、当たらなかつたら無駄足に……………」

タスク「大ハズレだつたら何があるんだろうな……………」

エクセレン「男同士の秘密のものつて言う線もあるかもしれないわね。」

ライ「ピアン博士がそんなことするわけないだろ。」

イングラム「大体、その程度ならロックを掛ける必要がない。」

キョウスケ「もう少し真面目に考える。」

エクセレン「ル、ルシア君……………このメンツ怖い……………」

クロ「自業自得ニヤ……………」

リユーネ「でも、ホントに一人で大丈夫なの？」

マサキ「何なら俺達だけでも……………」

ルシア「いや、いいんだ。サイバスターとヴァルシオーネが欠けてしまったらジュネーブ防衛が不利になってしまう。後から急いで合

流すから気にしないでくれ。」

マサキ「ま、まあそこまで言うならいいけどよ。」

リユーネ「でも、親父が遺したもものって・・・なんだろ?」

ルシア「俺が思うには、新型のAMかもしれない。」

カチーナ「あのガーリオンとかよりも上の奴か?」

ルシア「それは言ってみないと分からないな・・・」

イングラム「そろそろ降ろす時間だ、ルシアはメッサーに乗り、ア  
イドネウス島に上陸してくれ。」

イルム「誰かさんみたいに迷わずに戻ってこいよ。」

ルシア「了解。」

マサキ「それって俺のことかよ・・・」

シロ「ルシアは方向音痴じゃないから心配ニヤいニヤ。」

クロ「代わりに極度の味音痴ニヤ・・・」

ブリット「い、言えてるかも・・・」

ルシア「ハハハ・・・それじゃ、行ってくるよ。」

ルシアはメッサーでハガネから離艦し、アイドネウス島に向かった。そこには連邦軍が駐留していた。

ルシア「こちらハガネ所属のルシア少尉です。着陸許可をお願いします。」

基地司令「了解、話はレイカー少将から聞いている。着陸を許可する。」

アイドネウス島に着陸し、データにあったフロアへと目指す。

ルシア「この先は行き止まりのはずなんだがな……」

歩いて行くと、鉄の壁が見えた。

ルシア「データだと隠し扉があるはずなんだが……」

ルシアが壁に触れると、壁が激しい音を出し、扉が開かれた。

ルシア「壁が……初めから俺が触れたら開く仕組みになっていたのか……」

中に入っていくと、広い空間に入った。

ルシア「こ、これは……!？」

ルシアの目の前にあったのは……銀色のヴァルシオンだった。

ルシア「こんなものが……頭部のデザインが違うが間違いなくヴ

アルシオンだ……！」

ピアン『ルシアよ。』

ルシア「父さん……！」

ピアン『この声が聞こえているのならリユーネと再会できたのだな。私はヴァルシオーネ同様、お前専用のヴァルシオンも開発していたのだ。』

ルシア「まさか、あの時聞いたヴァルシオンの指摘はこの時のために……！」

ピアン『ゲシュペンストとヒュツケバインを元に頭部を作り上げた。気に入ってくれると嬉しい限りだ。』

ルシア「……」

ピアン『正直、あの時の指摘はショックであった。お前なら気に入ってくれると思っていたからな。』

ルシア（や、やっぱり気にしてたんだ……）

ピアン『おっと、話がずれたな。これはダブルGのプロトタイプに当たる機体だ。これからの戦いのデータは今後のダブルGのためになる。有効に使ってくれ。』

この究極ロボ ヴァルシオン……否、鋼の救世主 ヴァルシオンVで、地球圏に真の平和を勝ち取るのだ！」

ルシア「……父さん……ありがとう……！血は繋がっていないけど……あなたは……最高の父親でした……！このヴァルシオンで……エアロゲイターから地球を護り抜きます……！」

そのころ、ハガネ、ヒリュウ改は とある基地でDC部隊と交戦していた。

テンペスト「フフフ……この時を待っていたぞ！」

マサキ「あ、あのロボットは……！」

リユーネ「親父のヴァルシオン!?」

ブリット「ヴァルシオンは1機だけじゃなかったのか!?」

エクセレン「一匹いたら後5万匹いるってやつ？」

ブリット「……それはゴキブリです。」

キョウスケ「しかも数が多すぎる。」

エクセレン「わお！気の利いたツッコミあげっす！」

タスク「エクセレン少尉、能天気すぎますやん……」

テンペスト「……そうだ。おれはこのヴァルシオンによって16年前の復讐を果たす！」

キョウスケ「あの声・・・テンペスト・ホーカー少佐か。」

リユーネ「・・・くっ!」

マサキ「お、おいリユーネ!？」

シロ「マサキ!？」

マサキ「シロ!クロ!出るぞ!」

ハガネからヴァルシオーネとサイバスターが発進する。

マサキ「リユーネ!勝手に飛び出すんじゃないねえ!」

シロ(つて、マサキも飛び出しちゃったじゃニヤいか・・・)

クロ(シロ、そんなヤこと言ってる場合じゃニヤいニヤ。)

テンペスト「ピアン総帥の娘・・・。木星圏から戻って来ていたのか。

リユーネ「あなたの復讐なんかに興味はないけどさ!そのためにヴァルシオンを使おうなんて、あたしは許さないよ!」

テンペスト「お前に許しを乞う気などない。俺の悲願を達成するために必要だっただけだ・・・」

そう、このヴァルシオンの量産先行型・・・ヴァルシオン改がな!」

マサキ「あいつら、ヴァルシオンを量産する気か!？」

テンペスト「その通り。ヴァルシオンの数が揃えば連邦を倒すなど容易い！」

リユーネ「そんなもの、あたし達が全部叩き壊してやるよ！」

テンペスト「我が妻や娘への手向けだ……貴様らを地獄へ送ってやる！」

ジャーダ「教導隊のエリートが、ただの復讐鬼に成り下がったのかよ！？」

テンペスト「復讐鬼？ そうだとも……俺は、16年前、ジガンスクードを奪ったテロリストごと……スペースコロニー『ホープ』の隔壁を破壊した者達を決して許しはせん！」

タスク「ラーダさん達から聞いたホープ事件のことか！？」

テンペスト「そうだ。妻や娘はその時に死んだ！ 連邦の無能共の愚か極まりない策によってな！！」

タスク「あなたの気持ちはわからんでもねえがな……復讐するならば時と場所を考えやがれ！ 今は地球人同士で戦ってる場合じゃねえんだぞ！！」

テンペスト「黙れ！ 俺は待ったのだ……16年間も！ この手で連邦に復讐する機会を！ それを貴様らなどに邪魔されてたまるものか！！」

ラトウーニ(悲しい過去・・・それを振り切れてないのね・・・)

タスク「て、てめえ・・・!!」

キョウスケ「聞く耳を持つな、タスク。戦う理由は、人それぞれ違う。」

タスク「合点・・・!あいつに見せてやるッスよ、俺達の戦う理由って奴を!」

キョウスケ「出撃するぞ。」

ハガネ、ヒリユウ改からPT隊が発進する。

イングラム「各機へ。敵があれだけの数で基地を攻撃していたとは思えん。伏兵に気をつける。」

キョウスケ「了解。」

テンペスト「お前達はPTを、俺はハガネとヒリユウ改を狙う。」

DC兵「了解!」

ラッセル「カチーナ中尉!敵がきます!」

カチーナ「わかってる!堕ちやがれ!!」

カチーナ、ラッセルのゲシュペンストが攻撃し、敵AMを落としていく。

ラッセル「中尉！ヴァルシオンがヒリユウに！」

カチーナ「ちっ！タスク、聞こえるか！デカブツを食い止める！」

タスク「合点承知！くらえ！ワイドブラスター！」

ジガンスクードがワイドブラスターを放つが、ヴァルシオン改に当たらない。

テンペスト「ジガンスクード・・・忌まわしき盾め・・・！！」

そこに、ストークの艦隊が近づいてきた。

ハンス「さしものヴァルシオンとは言え・・・手こずっているようだな、テンペスト。」

テンペスト「ぐ・・・ううう・・・うう・・・！！」

ハンス（ん？致命傷には見えないが・・・）

キョウスケ「ハンス・・・！」

ハンス「ほう、まだ生きていたのか、キョウスケ・ナンブ。さすがにしぶといな。」

キョウスケ「おれなりのやり方でケリをつけさせてもらうぞ、ハンス・ヴィーパー・・・！」

ハンス「生意気な口を。誰のおかげであるの時、死なずに済んだと思っっている？あ？」

イルム「よく言っぜ。」

ハンス「こんなことなら、あの時、ビルドラプターごと爆破しておくべきだったな。」

キョウスケ「残念だったな。．．．だが、おれは甘くない。ここで確実にとらせてもらう。」

エクセレン「わお．．．あんまし熱くないですよ？キョウスケ。」

ブリット「多分．．．無理ですね。」

ハンス「楽しみにしよう。．．．攻撃開始だ、テンペスト少佐。」

テンペスト「く．．．くくく．．．そうだ．．．復讐だ．．．復讐．．．」

ハンス「何をしている、少佐？機体に異常でもあったのか？」

テンペスト「ふ．．．ふ．．．ふ．．．ふ．．．」

リュウセイ「あいつ．．．様子が変だぜ！？」

ラーダ「もしかして．．．！？」

テンペスト「ふ、ふふふ、復讐だ．．．復讐．．．連邦に復讐を．．．復讐．．．」

ハンス「どうした、テンペスト少佐！？」

テンペスト「潰す・・・連邦を潰す・・・レイラとアンナを殺した  
奴は皆潰す・・・粉々に潰す・・・粉々に・・・」

エクセレン「なんか・・・やばい感じじゃない？」

ラトウーニ「・・・」

ラーダ「恐らく、ヴァルシオン改のマン・マシン・インターフェイスが・・・機能向上と引き替えに、彼の精神へ異常な影響を与えているのだと思うわ。」

リュウセイ「何だって!？」

ブリット「さつきまでは大丈夫だったじゃないですか!」

キョウスケ「誤作動か・・・いや、最初からこうなる仕掛けだったのかもしれない。」

ラトウーニ「あれは・・・崩壊しかかった精神がろうじて肉体に張り付いている状態・・・私、あの人達と同じ様な状態になった人をスクールで見た・・・ああなったら、もう終わらせてあげられない。」

イングラム「各機へ。敵を撃破し、この区域を突破するぞ。」

キョウスケ「了解。」

ハンス「予定外のイベントが起こったが、キョウスケ・ナンブ。お前達を潰すことに変更はない。」

キョウスケ「俺にもだ。お前に死んでもらうことに変わりはない。」  
ハンス「フン。貴様らのデータは全てこちらにある。我々に勝てる  
と思うなよ。」

ハンスが従えているAM部隊が攻撃を開始する。

ブリット「シシオウブレード！チエストオオオオオ！！」

ヒュツケバインMk-?のシシオウブレードがガーリオンを斬り散  
らす。

エクセレン「オクスタンEモード、どぞぞぞ！！」

ヴァイスリッターのオクスタンランチャーEモードの砲撃でAM群  
を撃ち落とす。

ライ「我が敵を切り裂け！ビームチャクラム！！」

リョウト「サークルザンパー！はああああ！！」

R-2のビームチャクラム、ビルドシュバインのサークルザンパー  
がバレリオンを切り裂いていく。

キョウスケ「裏切りの代償は払ってもらおうぞ……！！」

ハンス「戦況もわからぬ愚か者が……！貴様らがいくら……」

キョウスケ「聞く耳は持たん。覚悟してもらおう！！」

ハンス「フン、そんな欠陥機で何ができる？」

キョウスケ「貴様を撃ち貫くことはできる！」

ハンス「生意気な……！」

キョウスケ「エクセレン！タイミングを合わせるぞ！」

エクセレン「はいはい、いつものことだもんね。」

ヴァイスリッターはオクスタンランチャーBモードでハンスが搭乗しているストークの主砲を破壊する。

その隙にアルトアイゼンがストークのブリッジめがけて突進してくる。

キョウスケ「……とつた……！」

ハンス「ば、馬鹿な！貴様……！」

キョウスケ「撃ち貫くと言ったぞ……！」

ハンス「おのれ……貴様などに！あの時、確実に始末していれば……！」

キョウスケ「ジョーカーが切られてないのに、勝負を焦ったお前の負けだ。」

ハンス「お、愚か者め……！じ、人類が生き延びる術はアースク

レイドルしか・・・！」

キヨウスケ「黙れ。」

アルトアイゼンは至近距離からクレイモアをストークに浴びせる。

ハンス「う、うおおおおお！！！」

ストークは海に沈んだ後、大爆発を起こした。

キヨウスケ「俺の・・・勝ちだ・・・！」

エイタ「か、艦後方に敵艦が接近！！！」

テツヤ「何！？」

DCの陸上戦艦、ライノセラスがハガネの真後ろに接近していた。

ジーベル「フン、スパイごときを倒したところでいい気になりおつて。」

リユーネ「ジーベル！？」

ジーベル「策は敵が気付いた時にはもう終わりなのだよ。ハガネに攻撃を集中しろ！」

シヨーン「まずいですな・・・この位置からでは援護射撃ができません・・・。」

レフィーナ「向かえる者はいないのでですか！？」

ユン「PT隊は交戦中！ハガネの救援に間に合いません！」

ジーベル「これで、DCが俺のものに……」

マサキ「くそ！この位置じゃサイバスターでも間に合わねえ！！」

リユーネ「一体どうすれば……！？」

????「その役目、任せてもらおう！！」

リユーセイ「！？」

その瞬間、強力な砲撃がライノセラスに直撃する。

ジーベル「何！？あと一歩のところ……！！」

ジーベルのライノセラスが停止した。

リユーネ「あ、あれはクロスマツシャー！？」

マサキ「お、おい。これって……まさか……！！」

海の方を見ると、海面を切って接近してくる物体があった。

基地上空で停止し、頭部のツインアイカメラが光る。

ブリット「ま、またヴァルシオンが……！！」

アヤ「でも、頭部が違うわ。」

イングラム「ゲシユペンストとヒユツケバインを合わせたようなものだな。」

エクセレン「あの額の角があるからヒユツケちゃんの方が割り増しになってるわね。」

ジーベル「な、何だこのヴァルシオンは・・・！」

ルシア「相変わらず策に溺れる奴だな。ジーベル。」

リユーネ「そ、その声・・・ルシア!？」

マサキ「まさか・・・ビアンが遺した遺産って・・・!？」

ルシア「ああ、このヴァルシオン・・・いや、ヴァルシオンVだ。」

リウウセイ「ヴァルシオンV・・・5体合体してるのか？」

ルシア「は？」

ライ「お前はこんな時に何を言っている・・・。」

ルシア「一応、コアシステムとして小型のシュヴェールトがあるが・・・。」

エクセレン「わお！海から来たのはそのため？」

ルシア「・・・あの・・・。」

キョウスケ「少し黙ってる、エクセレン。」

ジーベル「おのれ……！連邦に寝返った貴様などに……！」

ルシア「ジーベル！コロニーに住む人々を危険にさらした罪……その身で償え！」

ヴァルシオンVの右腕の砲台をライノセラスに向ける

ジーベル「俺がこんなところで……！い、いずれは、ゼンガーやアードラーを倒し……DCの頂点に立つ俺が……！」

ルシア「お前が立つのは……地獄の火の中で十分だ！フォトンビーム……！」

ヴァルシオンVのフォトンビームがライノセラスに直撃する。

ジーベル「ぐわあああああ……！」

ライノセラスが爆発した。

リユーネ「クロスマッシャーじゃない!?!」

ルシア「ああ、こいつのクロスマッシャーは背部ユニットから発射出来るようになってるんだ。」

テンペスト「貴様……ルシアか……！」

ルシア「テンペスト少佐……！ヴァルシオンに乗っているのですか!?!」

タスク「ルシア！奴を倒すのに協力してくれ！」

ラトウーニ「彼はヴァルシオン改に搭載されているマン・マシン・インターフェイスで精神が崩壊しかかっているの。」

ルシア「なんだって……!?」

ラトウーニ「だから……終わらせてあげて。」

ルシア「……わかった、行くぞ！タスク！」

タスク「合点承知！」

テンペスト「まずはジガンスクード……貴様からだ!!」

ヴァルシオン改はデイバインアームで斬りかかり、ジガンスクードは盾で防いだ。

テンペスト「そのジガンスクードのせいで妻と娘が死んだ……俺はあの時の復讐を遂げる！貴様は死ね!!呪われた盾と共に!!」

ルシア「させない!!」

ヴァルシオンVが間に入り、デイバインアームで切りあう

ルシア「それほどまでに復讐するのはわかります！けど今俺達の上にはエアロゲイターがいるんですよ！」

テンペスト「俺には関係ない！」

ルシア「何を言ってるんですか！！奴らを放っておいたら・・・もつと多くの人々が死んでしまっんです！！」

タスク「そうだ・・・そうさせないためにジガンは生まれ変わったんだ！今度こそ、多くの人達を護る盾として！！」

ジガンスクードのジガンナックルがヴァルシオン改に炸裂する。

ルシア「クルセイド・ミサイル！」

ヴァルシオンVの両脇腹からミサイルが撃たれ、ヴァルシオン改に直撃する。

テンペスト「黙れええええええ！！連邦に与する者には死を！！それはお前とて例外ではないぞ！！ルシアアアア！！！！」

ヴァルシオン改がヴァルシオンVにクロスマツシャーを撃とうとする。

ルシア「ま、まずい！？」

その時、ヴァルシオン改に何かが体当たりしてきた。

テンペスト「だ、誰だ！？」

レオナ「テンペスト・ホーカー少佐、あなたの行動やビアン総帥やマイヤー総司令のご遺志に反しています。」

ルシア「レオナ・・・！？」

タスク（あいつ・・・トロイ工隊の・・・よかった、生きてたんだ。）

テンペスト「黙れええええ！！俺は復讐を・・・復讐を遂げるうううう！！！」

レオナ「・・・ならば！」

レオナのガリオン・カスタムはブレイクフィールドを展開し、ヴァルシオン改に突撃する。

テンペスト「ぐ・・・！！！」

ルシア「テンペスト少佐・・・これで終わりにします。」

ヴァルシオンVのユニットにエネルギーが集まる。

ルシア「クロスマツシャー！！！」

クロスマツシャーが放たれ、ヴァルシオン改を半壊させる。

ルシア「今だ、タスク！」

タスク「もらった！！！」

ジガンスクードがヴァルシオン改を掴む

タスク「シーズサンダー！！！」

そのままヴァルシオン改を押しつぶした。

テンペスト「ぐああああああ!!」

ヴそのままヴァルシオン改が落下していく。

テンペスト「復讐だ、復讐の、復讐のために、復讐を誓った故に……」

ラトウーニ「……死んだ人の意志を確認することなんて……出  
来ない。」

ルシア「少佐……レイラさんやアンナちゃんは……こんなこと  
は望んでないはず……」

ラトウーニ「……あなたは、進むべき道を間違えたの……だから……  
もう家族の所へ帰ってあげて……」

ルシア「あなたの戦いは……もう16年前に終わっていたんです  
よ……」

テンペスト「!!」

その瞬間、ヴァルシオン改が大爆発を起こし、テンペストは戦死し  
た。

ルシア「少佐……何で……何で、進むべき道を間違えてしまっ  
たんですか……!くそ!!」

ラトウーニ「……」

ユン「敵機的全滅を確認！」

シヨーン「どうやら、DCは本気でこちらを足止めする気のように  
すな。」

ダイテツ「急ぐぞ、ジュネーブ陥落は時間の問題だ。」

エイタ「艦長！DC艦隊が本艦の航路上からこちらに接近中です！  
！」

テツヤ「何！？」

シヨーン「こうなったら、強行突破するしかありませんな。」

レフィーナ「ええ、もう一刻の猶予もありません……！」

ダイテツ「各機を収容後、すぐに敵陣を突破するぞ！」

テツヤ「了解！」

ルシア（テンペスト少佐……あなたの分まで戦います。少佐の家  
族のような悲劇を繰り返さないために……）

### 第13話 鋼の救世主 ヴァルシオンV（後書き）

ゼンガー「ルシア、稽古をつけてやる。来い。」

ルシア「ゼ、ゼンガー少佐・・・俺、もうヴァルシオンがあるんですけど・・・」

エルザム「お前が今後、剣術特化の特機に乗らないとは限らないのでな。ゼンガーはそれを思っけて稽古をつけてくれるそうだ。」

ゼンガー「うむ。」

ルシア「な、なら・・・剣術以外でやりませんか？例えば・・・そうだ！特機に乗って戦闘して経験を重ねていくっていう・・・」

ゼンガー「馬鹿者が！！」

ルシア「ヒツ！？」

ゼンガー「鍛錬なくして実戦が務まるものか！！それでもピアン博士の意思を受け継ぐ戦士か！！」

ルシア「いや、言いたいことはよく分かるんですけど・・・強いと言うなら俺、剣使わないし・・・」

エルザム「何を言っている？お前のガリオンやヴァルシオンには付いているではないか。」

ルシア「それと斬艦刀と一緒にしないでください！エルザム少佐！

「！」

ブリット「大丈夫だよルシア。俺も稽古に付き合うから。」

ルシア「……………」

ゼンガー「行くぞ！！打ち込み2万本！！」

ブリット「はいいいい！！」

ルシア「前より倍に増えてるし……！！」

ヴァルシオンV（ルシア専用）

ビアン・ゾルダークが所有していたヴァルシオンの3号機。

自分が倒れた時のためにルシアに遺した最後の地球防衛兵器である。パーソナルカラーは銀色。

しかしビアンのヴァルシオンとは違い背中ユニットから2門式のクロスマツシャーが発射できるようになっている。敵の牽制に両脇腹からミサイル、本来のクロスマツシャーの部分には強力なビーム砲が搭載された。量産系に装備されなかったメガ・グラビトンウェーブが使える。しかし頭部のデザインが大幅に変えられ、複眼カメラはツインアイカメラに換えられている。（ルシアが前もって言った指摘を参考にしたと思われる。）後にダブルGに使用されるABMDシステムが搭載され、機体の柔軟性が向上した。T-LINKシステムも搭載されたが、脳波でモーションパターンを選定するのみで、念動フィールドは展開されない。

動力源はビアンが秘密裏に隠し持っていたトロニウム・エンジンで動いている（後々起こる事態のため、報告したトロニウムより一つ

多く所有していた。しが、出力保持の課題はクリアできていないため、補助動力も搭載されている。

コア・システムとして小型化したシュヴェールトから本機に進入し、緊急時には脱出が可能。

武装

クルセイド・ミサイル

フォトンビーム砲

デイバイン・アーム

クロスマツシャー

メガ・グラビトンウェーブ

特殊能力

歪曲フィールド

## 第14話 聖十字軍 陥落

ハガネ 格納庫

レオナ「では、DC部隊がリヨン湾に上陸したと・・・？」

イングラム「そうだ。AM部隊とヴァルシオン改のおかげで、我方はかなりの劣勢を強いられている。」

レオナ「旧態依然とした連邦軍では、AMを主体としたDCに対抗しきれないですね。」

ルシア「面には強いが・・・点には弱い・・・ということか。」

キョウスケ「俺たちは・・・その逆か。」

ラトウーニ「少佐、私達は友軍の援護に・・・？」

イングラム「いや。敵の侵攻は予想以上に速い上に、こちらも黒海で足止めを食ってしまった。当初の予定通り、母艦の機動力を生かしてアルプスを超え・・・ジュネーブへ直行する。」

エクセレン「うーん、まったく、敵もせっかちさんねえ。もっとムードってものを・・・」

キョウスケ「敵にそんなものは関係ないだろ。」

ライ「ああ、全くだ。」

イングラム「遊びではないのだぞ。」

ルシア「お前は緊張感というものを知らんのか。」

エクセレン「な、ルシア君・・・そっちについたのね。」

ルシア「は？」

キョウスケ「放っておいてもいいぞ。」

イングラム「いずれにせよ、ヴァルシオン改の相手は我々がせねばなるまい。」

ライ「前回の機体が実験段階のものだとしたら・・・最悪の場合、敵は王女をヴァルシオン改に・・・？」

ラトウニー「・・・!!」

ルシア「アードラーならやりかねんな・・・」

エクセレン「まあまあ、確実にそうと決まったわけじゃないんだから。ちよつと色男さん？空気を読んでもらわないとねえ。」

ライ「・・・」

エクセレン「恋する度に傷つきやすい、女心がわかってないんじゃない？」

キョウスケ「恋は関係ないだろう。」

レオナ「女心も、ではなくて?」

タスク（いや、それは関係あると思っけど。）

イングラム「無駄話をしている時間はないぞ、エクセレン。」

エクセレン「タ、タスク君……やっぱりこのメンツ……きつい……」

タスク「少尉も懲りないツスね……」

エクセレン「あ、でももしヴァルシオン改が出てきてもルシア君がいるから大丈夫じゃない?」

ルシア「え?」

タスク「なるへそ、目には目を、ヴァルシオン改にはヴァルシオンVってことツスね。」

エクセレン「そゆこと。」

ルシア「……搭乗者ごと破壊しそうで怖いんだが……」

リュウセイ「でも、こういうスーパーロボットって弱点とかあるんじゃないのか?」

ルシア「確かにヴァルシオンは後ろに回られると攻撃ができないし、逆に制御系が背部にあるからそこを突けば……」

ラトウーニ「万が一、シャイン王女が乗っていたとしても……!」

ライ「助けられる・・・そうだな？」

ルシア「背部は動力部から離れてるから誘爆の危険はない、コクピットブロックも首の付け根の近いところにあるから、PTで引っぺがしても搭乗者に影響はないし、すぐに助けられるはずだ。」

リュウセイ「やったな、ライ！」

ライ（まだ安心は出来ないが・・・希望は見えてきたか。）

エクセレン「じゃあ、その時私たちは手足を狙うってことにしない？」

ルシア「え？」

エクセレン「ラトちゃん、一緒に王女を助けましょ。」

ラトウーニ「はい・・・！」

ルシア「そういえば、ラトウーニ・・・メガネ替えたか？」

ラトウーニ「うん、シャイン王女がくれたものなの。こっちの方が似合っつて・・・」

ルシア「そうか・・・俺も出来る限り協力する。一緒にシャイン王女を救出しよう。」

ラトウーニ「うん・・・！」

ルシア（そして、父さんの答えを覚えてくれた礼もしなくちゃいけないからな。）

連邦本部　ジュネーブ

ジュネーブがDC部隊に包囲されていた。

そこにヴァルシオン改の姿もあった。

議員「大使、早くへりへ！ここはもう駄目です！！」

アルバート「くっ……！ここへは直接攻撃をしないはずではなかったのか！？」

テンザン「ヘッヘッへ……俺達が本気を出せば、連邦政府の本部なんざイチコロだったの！」

議員「あ、あれは……まさか、ヴァルシオン！？」

アルバート「う……ぬ……議長は！？シュトレゼマン議長はどこへ行かれたのだ！？」

議員「すでに脱出されています！」

アルバート「な、何……！？わ、私を……見捨てたというのか！？」

テンザン「ま、政治家に恨みはないんだけどよ。見せしめが必要だからな。サクッと逝っちまいな！」

ヴァルシオン改は本部に向かってクロスマツシャーを放つ

それと同時に展開していた部隊も総攻撃を仕掛ける。

アルバート「う、うわああああああ!!」

テンザン「へへ・・・へへ・・・いいぜ、このヴァルシオンはよ。究極ロボってのも伊達じゃねえ。ビアン総帥も最初からこいつをジュネーブへブチ込めば良かったのによ。」

リリー（所詮・・・彼らのような者にビアン総帥やマイヤー総司令の大義を理解することは不可能か・・・だからこそ、総司令は私に最後の使命を託された・・・）

テンザン「ったく、アードラーもこんないいモノを出し惜しみしやがって・・・おまけに、さんざんフカしてたゼンガーの野郎もいやしねえ。マジでムカつくぜ。」

そうだ、この戦いが終わったら殺そう。そうだ、それがいいっての。それがいい。それがいいっての、ヒヤハハッ!

一般兵「中佐！ハガネとヒリュウ改が接近中です!!」

リリー「来たか・・・各機、迎撃を！よろしいか、テンザン？」

テンザン「殺っちまおう。どいつもこいつも・・・殺っちまおう・・・ふ、ふふふ・・・そうだ、それがいい・・・」

リリー「！まさか・・・!?!?」

一般兵「敵艦、突入してきます！」

ハガネ、ヒリュウ改がジュネーブに進入し、PTが発進する。

キョウスケ「……本部は無事か……!？」

イルム「残念ながら、一足遅かったみたいだな。」

ルシア（当然の報い……だな。地球を売り渡そうとしなければ、こんなことには……）

リョウト「や、やっぱり……ヴァルシオン改が……!」

テンザン「ふふ……ふははは……!」

リュウセイ「あいつ……テンザンか!？」

テンザン「ひやは、ひやはは……!」

マサキ「な、何だあいつ……!」

ルシア「様子がおかしいぞ……」

ラーダ「まさか、前回のテンペスト少佐と同じで……!？」

テンザン「血祭りだ……血祭りに上げてやるぜえ……どいつもこいつも！ヒャーッハッハッハア!!」

リュウセイ「お、お前もヴァルシオンに……!？」

テンザン「ああ、そうだ！おかげで気分は最高だったの！！このマシンのおかげでお前らが虫ケラみたいに見えるぜ、リュウセイ！ヒヤッハッハ！！」

ルシア「よりによってお前がヴァルシオンに乗るなんてな……！」

テンザン「出てきやがったな裏切り野郎が！！オメエのヴァルシオンよりマシだったの！！」

ルシア「貴様……！！」

テンザン「今まで上から偉そうにかっこつけやがってよお……待ってる、すぐにブツ殺してやるからよ！！」

リュウセイ「もうやめろ、テンザン！！」

テンザン「馬鹿か、てめえは！？俺たちや戦争ゲームやってんだぞ！降りてどうするんだっての！！」

リュウセイ「まだ言うか！！」

テンザン「潰してやるぜえ！潰す、潰す、潰す、潰すううう！！」

ライ「……リュウセイ、もう何を言っても無駄だ。テンペストのことを忘れたのか？」

リュウセイ「……！！」

テンザン「そこを動くなよ、お前ら！虫ケラみたいにプチっつとつぶしてやるぜ、プチプチっとなあ！！」

リュウセイ「テンザン・・・そんなになってまで・・・！」

テンザン「ヒヤッハハ、相変わらずカッコいいなあ、てめえは。あかっこいい、カッコいい！だがな、てめえだって俺と同じ人殺しなんだぜ！？」

リュウセイ「う・・・！」

ルシア「惑わされるな、リュウセイ！俺達は人殺しのために戦ってるんじゃない！」

リュウセイ「ルシア・・・」

イングラム「リュウセイ・・・やつはすでに自我を失いつつある。直ちに破壊しろ。」

リュウセイ「破壊・・・！」

イングラム「戦場で感傷など不要。倒すか、倒されるか。それだけだ。」

リュウセイ「・・・！」

テンザン「さあ、ラストバトルだ！みんなプチプチ潰してやるぜ！ヒヤッハッハッハッハッハア！！」

リュウセイ「テンザン・・・！てめえは・・・俺が止めてやる！！」

エクセレン「キョウスケ・・・」

キョウスケ「俺達はやるべきことをやるだけだ。感傷は必要ない。少なくとも今はな。」

ルシア「テンザンに教えてやる・・・俺達がただの戦争屋じゃないってことをな！」

イングラム「リュウセイ、イルム、ラトウニ、マサキ、ルシアはテンザンのヴァルシオンへ向かえ。」

イルム「了解！」

5人が敵陣を突破し、テンザンのヴァルシオン改に近づく。

マサキ「デイスカッター！」

テンザン「ヒヤッハア！！！」

サイバスターがデイスカッターで斬りかかるが、ヴァルシオン改はデイベインアームで受け止める。

イルム「まずはこいつだ！ブーストナックル！」

グルンガストのブーストナックルはヴァルシオン改のフィールドで防がれる。

テンザン「打つ手なしってか！」

イルム「そいつはどうか？」

ルシア「デイバインアーム！」

ヴァルシオンVのデイバインアームで背部のユニットを破壊した。

ルシア「チツ、片方だけか……」

テンザン「このムシケラ共があああああ！！！！」

ヴァルシオン改はクロスマツシャーを連発するが、照準が定まっておらず、流れ弾が味方にあたってしまう。

マサキ「な、何だありゃ……」

イルム「完璧に狂ってやがるな。」

ルシア（これはまさか……アドラーが開発したゲーム・システムじゃ……）

リリー「艦前方、敵のヴァルシオンへ攻撃を！」

ルシア「そ、その声は……！？」

レオナ「リリー中佐……！」

リリー「あなた……まさかルシア大尉！？」

ルシア「今は少尉です。何でリリー中佐がアドラーの側に付いているんですか！」

リリー「……………」

ルシア「答える気がないのならそれでもいいです……けど、マイヤー総司令はこんなことは望んでいないはずです！」

リリー（やはり……彼らが……）

そこにグレイストークが戦闘空域に進入する。

アードラー「フヒヒ……そろそろチェックメイトといくかのう。」

キョウスケ「ちっ……増援か……！」

アードラー「奴らを倒せば、世界はわしのものじゃ。」

テンザン「おほ!?アードラーのジジイじゃねえか!待ってるよ、こいつらの次はてめえを殺ってやるからな!ヒヤハハハハ!!」

アードラー「むう……。やはり、テンザンも駄目じゃったか……ならば切り札を出すとするか。完全な切り札をな……」

グレイストークからヴァルシオン改が出てきた。

ガーネット「また出た!?!」

マサキ「チツ……!いつたい何機あるってんだ!?!」

ジャーダ「あれで打ち止めと願いたいところだが……」

ルシア「だが・・・誰があれに乗っているんだ？」

ラトウーニ（・・・まさか・・・）

リユーネ「アードラー・コツホ！いい加減にしなよ！親父のヴァルシオンを・・・！DCをいのように利用したオトシマエ・・・このあたしがきつちりとつけてやるよ！！」

ルシア「俺のことを忘れないでほしいね。」

テンザン「いいねえいいねえ！盛り上がるじゃねえか！トリプルヴァルシオンってか！」

リユーネ「黙りな！そのインチキヴァルシオン・・・まとめて叩き潰してやる！！」

アードラー「フン、何も知らぬ娘がいきがりおって・・・」

ルシア「アードラー・・・！」

アードラー「ルシアが生きていたとはもう・・・ハンスも役に立たん男じゃ。」

ルシア「何で・・・何でピアン総帥の遺志に反している！」

アードラー「お前達の父親は優秀な男だったが、下らぬ理想を持っていたのが欠点じゃった。」

リユーネ「なんだって!？」

アードラー「この戦いに勝った方が地球圏の守護者となる。下らん。まったく下らん理想じゃ。」

ルシア「貴様……！」

アードラー「あの男は、敵であつても使える戦力は自らの懐に取り込もうとした……そこに隙が生まれ、敗れたのじゃ。真に地球人類の生存を願うなら……愚民共を抹殺し、優秀な人間だけ残せば良いものを。そうすれば、こちらの“負担”も減る。」

ルシア「そんな思想……地球人類の生存とは言わない！ただの独裁だ……！」

キョウスケ「……ゼンガーもその理想に乗ったということか。」

アードラー「ゼンガー？姿が見えんようだが、どこぞへ逃げおつたか。」

キョウスケ「お前のような男の下で働くことを正しいと思わんからだろう。それで驚きはしない。」

リリー「……」

アードラー「一兵士風情が何を言うか。ワシはDCの力を純粹に世界征服……いや、肅清のために使う。そして、地球圏の戦力をワシのもとに結集し……異星人共を討ち滅ぼすのじゃ。」

リユーネ「今のあんたらにどんな力があるっていうのさ……！」

アードラー「フヒヒ……ならば、見るがいい！ゲーム・システム

とヴァルシオン改の力をな!!」

ヴァルシオン改は市街地付近に移動する。

シャイン「・・・ヴァルシオン・・・改・・・起動終了・・・」

ラトウーニ「！」

カチーナ「何だ!？」

ライ「今の声・・・! 貴様、そのヴァルシオンには!？」

アードラー「最高の機体に最高の素材!これがワシの切り札じゃよ!」

リオ「あ、あのヴァルシオンにはシャイン王女が・・・!？」

アードラー「その通りじゃ。王女の予知能力とゲーム・システムを組み合わせれば・・・ヴァルシオン改は攻防に優れた能力を発揮する完璧な機動兵器となる!」

アヤ「な、何てことを・・・! 年端のいかない女の子を無理やりパイロットにするなんて!」

ラトウーニ「・・・それがあの男のやり方・・・許せない・・・!」

イングラム（・・・訓練を受けていない王女でも戦闘が可能・・・ならば・・・ゲーム・システムの正体は無人機の制御装置だな。だが、人間の脳を借りなければならぬのなら・・・今のT-LIN

Kシステムと同じく、マン・マシン・インターフェイスとしては未完成か。)

アードラー「さあ、どうする？貴様らに王女ごとヴァルシオンを破壊することが出来るかのう？」

シャイン「・・・標的・・・確認・・・攻撃・・・開始・・・」

ラーダ「完全に制御されかかっている・・・？あ、あれでは王女の人格が保つのはあと数分・・・！」

マサキ「それが過ぎれば、テンザンと同じことになっちまうのか・・・！」

ルシア「だが・・・こちらの思った通りの展開だな。」

エクセレン「じゃあ手はず通りについてことで！」

キョウスケ「先頭不能にする。・・・直撃はさけるよ。」

カチーナ「だがそれで王女を助けられる保証はあるのかよ!?!」

イングラム「各機へ。人格が崩壊する前にゲーム・システムを破壊しろ。王女の人格は保って後4分だ。」

タスク「問題だらけじゃないツスカ！」

リュウセイ「ラトウーニ！テンザンは俺達に任せてシャイン王女を！」

ラトウーニ「リュウセイ・・・！」

リュウセイ「あの子を助けたいんだろ？」

イルム「ここは俺達に任せておけ。」

ルシア「ラプターなら背部に回りやすいはずだ、行け！」

ラトウーニ「は、はい！」

ビルドラプターが反転し、シャインのヴァルシオンに向かう。

イングラム「各機散開！仕掛けるぞ！」

キョウスケ「了解！」

ヴァイスリッター、ヒュツケバインMk-？、R-GUNが同時にヴァルシオン改に攻撃した。

ABフィールドを展開し、攻撃を防いだが、アルトアイゼンが左腕にリボルビング・ステークを撃ち込む。

キョウスケ「くらえ！」

左腕を破壊され、ヴァルシオン改が落下する。

そこにビルドラプターがヴァルシオン改に接近する。

ラトウーニ「シャイン王女！」

シャイン「……………ラ……………ラト……………う、うああああー!!」

ヴァルシオン改がディバインアームで斬りかかろうとするが、後ろからR-2のビームチャクラムが絡まり、動きが止まる。

シャイン「ラ……………ライディ……………様……………」

ライ「シャイン王女、あなたに架せられた呪縛を……………解く!!」

R-2のツイン・マグナライフルがヴァルシオン改の背部に直撃し、ヴァルシオン改が停止した。

ルシア「やったか!?!」

アードラー「な、何じゃと!?!あやつら、ゲーム・システムを破壊しおった!?!」

キョウスケ「今だ! シャイン王女を救出しろ!」

アードラー「ぐぐ……………大切な実験道具を! ええい、貴様らに奪われるくらいなら、このワシが!」

リリー「……………これ以上、あの男に非道な真似をさせるわけにはいきません! 主砲、発射用意。目標、グレイストーク!」

アードラー「な、何じゃと!?!」

リリーのストークはグレイストークを攻撃した

キョウスケ「何だ……………? 仲間割れ……………?」

アードラー「貴様……！」

リリー「今のうちです！ライディース様、レオナ……王女を助けなさい！」

ライ「リリー中佐……！」

ラトウーニ「シャイン王女をヴァルシオン改から救出しました！」

イルム「やれやれ。あのストークが隙を作ってくれたおかげだな。」

ルシア「リリー中佐……」

リリー「気にすることはありません。これは……総司令から私に与えられた使命……」

ライ「父から!？」

アードラー「使命じゃと!？うぬぬ！最初からそのつもりでワシの元に来おったのか!!裏切り者は死ねい!!！」

リリー「!!!」

グレイストークの主砲がリリーのストークに直撃した。

リリー「……うつつ！総員に退艦命令を……!!！」

アードラー「フヒヒ……愚かな女め。ワシに逆らったのが運の尽きじゃ!ビアンやマイヤーと共に地獄で己の無能さを呪えい!!！」

ルシア「アードラー！貴様あー！！」

リリー「……………ありがとう……………」

アードラー「む？あの女、何を？死を目前に血迷いおったか。」

リリー「最後まで見守ってくれたことを……………感謝します……………  
ゼンガー・ゾンボルト。後はあなたに……………託します。」

アードラー「なっ……………!?!?」

リリー（ああ……………マイヤー様……………今、お傍に……………）

リリーのストークが轟沈した。

レオナ「リリー中佐……………!?!」

ライ「くっ……………!」

そこに、ゼンガーのグルンガスト零式が出てきた。

ゼンガー「……………」

ブリット「ゼンガー隊長!?!」

イルム「チツ、ややこしい時に!こうなったら……………!」

キョウスケ「イルム中尉！様がおかしい、待ってくれ。」

アードラー「どこで油を売っておった！ゼンガー！」

ゼンガー「……………」

キョウスケ「…………ゼンガー。助けられたんじゃないのか？……おまえは、それを見殺しに…………」

ゼンガー「言うな、キョウスケ。」

キョウスケ「!?」

ゼンガー「時には…………誇り高き戦士の魂…………その最後を見届けねばならんことも…………ある…………」

アードラー「当然じゃ。裏切り者に明日はない。遅れてきたことは不問にしてやる。貴様の零式でハガネとヒリュウ改を沈めるのじゃ！」

ゼンガー「黙れ…………！裏切り者に明日はない…………それは貴様とて同じこと！」

アードラー「!?」

ゼンガー「俺は今こそ使命を果たす！」

アードラー「使命じゃと!?」

ゼンガー「そう！我が使命とは異星人に対抗しうる戦力を見出し、鍛え上げること！」

ブリット「やっぱり、隊長は……!」

エクセレン「もう、回りくどいわねえ。だけど……時は来たみたいね。」

キョウスケ「器用に立ちまわれる男でもない。……それは俺たちも同じだ。」

ゼンガー「そして、アードラー……お前達のように本来の目的を見失い、私欲に走るDC残党を倒すこと!そのために俺は裏切り者の汚名を受け、数多くの同胞の犠牲を乗り越えて、ここまで来た!」

アードラー「フン……貴様など所詮はビアンやマイヤーの亡霊に過ぎんわ。」

ルシア「貴様……!」

ゼンガー「ルシア、奴に口は通用せん。ここで終わらせるのだ!」

ルシア「……了解!」

リュウセイ「まずはテンザンからだ!」

テンザン「リュウセイ!潰してやる!潰してやる!」

ヴァルシオン改はクロスマツシャーを撃つが、攻撃は当たらない。

リユーネ「くらいな!」

ルシア「クルセイド・ミサイル!」

ヴァルシオーネのハーパービームキャノン、ヴァルシオンVのクルセイド・ミサイルを撃つが、全てABフィールドで防がれてしまう。

テンザン「そこか！リュウセイ！！」

ヴァルシオン改はヴァルシオンVにクロスマッシャーを撃った。

歪曲フィールドで防ぎ、小破で済んだ。

リユーネ「あいつ、何を・・・」

ルシア「もう限界が近いのかもしれない・・・」

イルム「このままじゃラチがあかねえ！マサキ！あいつのバリアーを破ってくれ！」

ルシア「その後で俺達も仕掛けよう。リュウセイ、とどめはお前がやってくれ。」

リュウセイ「わかった、テンザンは俺が止める！」

マサキ「行くぜ！アカシック・バスター！！」

サイバスターのアカシック・バスターでABフィールドを破った。

イルム「計都羅？剣！！」

テンザン「ヒヤッハア！！」

グルンガストの計都羅？剣を避けようとして上昇し、片足が斬られた。

リユーネ「まだだよ！ダイバインアーム！」

ヴァルシオーネのダイバインアームがヴァルシオン改の右腕を斬りおとす。

ルシア「リユーネに続くぞ！ダイバインアーム！！」

ヴァルシオンVのダイバインアームでもう片方の背部ユニットを破壊する。

テンザン「プチッと潰れるおお！！」

ヴァルシオン改がクロスマツシャーをヴァルシオンVに向ける。

ルシア「しまった！？」

リユーセイ「うおおおおお！！」

テンザン「ヒャ・・・ハ！？」

リユーセイ「T・LINK、ソオオド！！」

R-1のT・LINKソードがヴァルシオン改に直撃する。

リユーセイ「波ああ！！」

ヴァルシオン改が爆発しながら落下していく。

ルシア「……終わりだな……」

テンザン「へっ……へへへ……マジでゲームオーバーたあな……」

リュウセイ「テンザン……」

テンザン「忘れんじゃねえぞリュウセイ、ルシア。俺はお前らと同類だ……いずれお前らも同じ運命になるぜ……」

ルシア「……」

テンザン「そう……戦争って言う最高のゲームでなああ！！ヒヤは！ヒヤハハハ！！ヒヤハハハハハハハハハハ！！！」

テンザンの叫び声と共にヴァルシオン改は大爆発を起こした。

リュウセイ「テンザン……俺とお前は違う……俺には仲間がいる……ライヤアヤ達のような仲間が……」

ルシア「……テンザン……ゲームは……バーニングPTだけにしておけばよかったんだ……馬鹿野郎が……！」

アードラー「お、おのれ……テンザンまでもが！こうなったら一時撤退じゃ！ワシが……ワシが生きてさえいれば……！」

リュウネ「逃げようたってそうはいかないよ！」

ルシア「お前の悪行もここまでだ！アードラー！！！」

アードラー「ワシが・・・ワシが人類を導かねばならんのだ・・・」

ルシア「貴様にそんなことができるはずもない！」

リユース「これ以上、DCをあんたの好きにはさせない！」

ヴァルシオーネ、ヴァルシオンVはグレイストークに攻撃をするが、全てEフィールドで防がれる。

アードラー「エネルギー・フィールドを後方に集中させる！絶対にここから生きて逃げるのじゃ！」

ルシア「くそ！あれじゃ追いつけない・・・！」

しかし、その進路上にグルンガスト零式が立ちはだかる。

アードラー「な、いつの間になんか！？」

ゼンガー「ピアン総帥やマイヤー総司令が課した劇的な試練は、ここで終わりを告げる！」

アードラー「う、裏切り者が何を言うか！貴様らなどにワシの理想を・・・」

ゼンガー「黙れ！！！」

アードラー「！！！」

ゼンガー「そして聞け！！我はゼンガー！ゼンガー・ゾンボルト！  
！悪を断つ剣なり！！大義を失ったDCは！今日この地で、零式斬  
艦刀によって潰えるのだっ！！」

グルンガスト零式の斬艦刀がグレイストークのEフィールドを破壊  
する。

ゼンガー「DCはお前の死を以て壊滅する！！」

アードラー「ば、馬鹿な……！ワ、ワシはビアンやマイヤーなど  
とは違う……！！DCを……せ、世界を……支配する男じゃぞ  
！！ここでワシが死ねば、人類に未来はない！何としてもアースク  
レードルへ帰らねば！！」

ルシア（アースクレイドル……やはり、地球にもあったのか……  
）

アードラー「あ、あそこへ行けば、貴様らやエアロゲイターと言え  
ども、手出しはできん！！脱出じゃ！脱出するぞ！小型機を用意せ  
い！！」

しかし、アードラーの周りには誰もいない。

アードラー「！？……な、何じゃ！？誰もおらんのか！？ワシを  
捨てて、逃げおったのか！？ま、待て、待つのじゃ！ワシを置いて  
いくとは何事じゃ！！」

ルシア「完全に見捨てられたな……」

ゼンガー「ルシア、とどめはお前が撃て。そして、過ちの道を進ん

だDCを終わりにしろ。」

ルシア「少佐……了解！」

アードラー「ワ、ワシを脱出させる！脱出させるのじゃー！脱出させてくれええええええ……！！！」

ルシア「アードラー。ピアン・ゾルダークの子、ルシア・ゾルダークの名の元に、ここでDCは陥落する！！メガ・グラビトンウェーブー！！」

ヴァルシオンVのメガ・グラビトンウェーブが直撃し、グレイストークは消滅した。

アードラー「ぎゃあああああー！！！」

ゼンガー「マイヤー総司令……我が使命、今こそ果しました……！！」

ルシア「DCの同胞達よ！これ以上の戦闘行為は無意味だ！直ちに撤退し、来るエアロゲイターに対抗するために力を結集せよ！！」

DC兵「ル、ルシア様……」

DC艦長「ピアン総帥のご息様の命に従い、撤退を開始する。各機、撤退を開始せよ！」

残ったDC部隊はジュネーブから撤退した。

エイタ「DC部隊、撤退を開始しました！」

リユーネ（親父……ケリはきつちりにつけたよ……）

ルシア（父さん……）

テツヤ「これで、DCの中枢部隊は全滅……」

ダイテツ「残るはアースクレイドルと、あの男か……」

キョウスケ「ゼンガー隊長。」

ゼンガー「フ……俺をまた隊長と呼んでくれるか。キョウスケ・ナンブ。」

ルシア「少佐、アードラーの口ぶりからしてアースクレイドルにいらっしゃったんですね？何かわかりませんか？」

ゼンガー「ルシア、クレイドルの責任者ソフィア・ネット博士は……地球人同士の戦闘を良しとせず、純粹に人類の未来を案じている人物だ。アードラー達が死んだとなれば、お前達に敵対することはあるまい。」

キョウスケ「隊長がそう言うなら信じるが……しかし……」

ブリット「隊長……。自分は隊長にお願いがあります。隊長の力を自分達に貸してください。」

ゼンガー「……俺はお前達と共に行くことは出来ん。」

カチーナ「なんでさ！？あなたの目的はわかった。DCとも決着が

付いたじゃないさ！」

ライ「王女も無事保護することが出来た。・・・自分はとやかく言うつもりはありません。」

リュウセイ「そうだよ。ただ裏切ったわけじゃないんだろ？」

ルシア「俺からもお願いします。ゼンガー少佐！」

ゼンガー「使命のためとは言え、俺が今まで犯してきた罪は重すぎる。・・・いまさら連邦に戻ることはできません。」

ブリット「しかし！」

ゼンガー「さらばだ。お互い命があればまた会うこともあるだろう。・・・」

キョウスケ「隊長・・・」

ゼンガー「俺がお前に教えることはもう何もない。いや、初めからなかったのかもしれない。お前の信じる道を行け。立ち塞がるものは全て撃ち貫いて、だ。」

キョウスケ「・・・了解。」

ゼンガーはジュネーブからどこかへ行ってしまった。

ブリット「ゼンガー隊長！！」

エクセレン「追っっちゃダメよ、ブリット君」

ブリット「なぜです!?!」

エクセレン「あの人の気持ちを察してあげなさいな。・・・去る者は追わず、よ。」

ブリット「わ、わかりました・・・」

キョウスケ「ブリット、あの男とは、必ずまた会う時が・・・共に戦う時が来る。地球とエアロゲイター・・・この戦いが続く限りは

」

ルシア「大丈夫さ、ブリット。ゼンガー少佐は絶対に戻ってくる。だから・・・」

その時、ルシアに念が走った。

ルシア「ゲ・・・!?!」

エクセレン「ど、どうしたのルシア君!?!」

ブリット「まさか、また頭痛が・・・?」

」  
リーダー「変ね、あの時もそうだけど異常は見られなかったのに・・・」

ルシア（まただ・・・! ホワイトスターが現れた時もそうだが・・・  
・一体この頭の頭痛は何なんだ・・・!）

第14話  
完

第14話 聖十字軍 陥落（後書き）

ルシア「ギリアム少佐……」

ギリアム「ん？どうした？」

ルシア「俺、なんか……疲れました。正直付いていきません……」

ギリアム「そうか……あんなにお前が楽しそうにする姿を始めて見て嬉しかったのだがな。」

ルシア「え……？」

ギリアム「前のように教導隊やDCでの張り詰めた環境よりは幾分マシだと思うが……？」

ルシア「……そうですね、今まで同僚には恵まれませんでしたが。ありがとうございます！」

ギリアム「フ……読みどおりだな。」

ルシア「どんだけ読み好きなんですか少佐……ところで……」

ギリアム「どうした？」

ルシア「何かもう一言ほしいんですけど……いいですか？」

ギリアム「何か一言？うーん………ヒーロー戦記もよろしく！」

ルシア「………気長にバーチャルコンソールに出るまで待ちます………」

## 第15話 知り難い記憶

ハガネ      ブリーフィングルーム

ガーネット「みんな、みんな！王女様が目を覚ましたわよ！」

タスク「無事かあ！良かったぜ！」

ガーネット「それに、ルダールさんも無事だつて！」

エクセレン「わお、いたれりつくせりじゃない！……って、どこにいたの？」

ジャーダ「アースクレイドルに軟禁されてたんだとよ。今、こっちに向かつてるそうだ。」

ラトウーニ「王女……変なこと……されなかった？」

シャイン「少しされましたけど……何でもないですわ。」

タスク「にしても気丈だねえ。てっきり泣きじゃくってるもんだと思ってたんだけど。」

シャイン「……皆様、私を助けて下さって本当にありがとうございます。」「

ガーネット「ううん、お礼なんて。でも、ホントにしっかりしてるわよね。あたしだったら、大泣きしちゃうかも。」

ライ「王女が目を覚ましたと聞いたが・・・」

シャイン「ライディ様・・・!」

ライ「お、王女・・・?」

シャイン「私・・・私・・・とても心細かったでございます。でも・・・嬉しかったです。ライディ様やラトウーニが白馬に乗って助けに来て下さって・・・」

ライ「白馬?・・・とにかく、<sup>ご</sup>無事で・・・」

エクセレン「女の子の憧れよねえ、白馬の王子様って・・・ラトちゃんが乗ってるのはどうかと思っけど。」

タスク「つーかめちゃめちゃ泣いてるやん・・・」

エクセレン「泣けるっていうのは、安心したからよん。・・・色男さん、おわかりかしら?」

ライ「ああ。だから、しばらくこのままで構わん・・・」

ラトウーニ「でも、私達だけじゃない。ルシアがヴァルシオンの弱点を教えてくれなかったら、どうなったか・・・」

タスク「おろ?そっぴやあいつがないな。」

ライ「そっぴやあいつがいなければ王女を助けるどころか止められもしなかっただろう。」

エクセレン「どうしたのかしらねえ・・・ルシア君も王女様の救出に積極的だったのに・・・」

レオナ「それが、機体から降りた途端に倒れたらしいのよ。」

ラトウニー「え・・・!?!」

レオナ「医務室に運ばれて・・・ラーダさんが診たところでは大丈夫みたいなんですけど・・・」

ライ（ホワイトスターが出現する寸前でも同じ頭痛を訴えていた。一体彼は・・・）

???

ルシア（な、何だここは・・・俺はいつたい・・・）

???'「ホントにやるのか?」

???'「ああ、こ奴には例の力が備わっていない。候補に上がっておきながらな。」

???'「もつたいたいねえ、出来ればあたしの元で働いてもらいたいところだけど・・・」

???'「仕方あるまい、こ奴にはアレと共に地球へ送る。環境適応試験のためにな。」

???'「でもいいのかい?この子は・・・」

「????」フン、同情する余地はない。こ奴は我が家系の恥だ。」

「????」だが、それだけの理由で……!」

「????」言つたはずだ。同乗の余地はないと。」

ルシア(う、ウソだろ……これって……俺……!?)

ハガネ 医務室

ルシア「!?!?」

ラーダ「あら、目が覚めた?」

ルシア「ラーダさん……俺はいつたい……?」

ラーダ「あなた、機体から降りた瞬間倒れたのよ。」

ルシア「俺が……?」

ラーダ「ええ。あなた、ホワイトスターが現れる直前でも同じ様な頭痛をしてたわね?」

ルシア「……」

ラーダ「もしかして……記憶が戻りそうになってるんじゃない?」

ルシア「……相変わらず、父の養子になる前の記憶はありません。」

「  
リーダー「そう？ならいいんだけど・・・一応痛み止めの薬を出して  
おくわ。」

ルシア「ありがとうございます。」

リーダー「・・・この子の記憶・・・戻らない方がいい様な気がする  
わ・・・」

ハガネ 食堂

ジャーダ「やれやれ、DCとの決着がついたはいいが・・・」

リョウト「政府や軍の中枢部の復旧には時間がかかりそうですね。」

タスク「やっぱり、無駄足かよ・・・」

リョウト「でも、DC戦争は終わったんだ・・・それだけで良しと  
しておかないと・・・」

カチーナ「これから、あたしらはどうすんのさ？」

イングラム「先の戦いで、EOT特別審査議会のメンバーが死亡し  
たため・・・我々がジュネーブにいる理由はなくなったが・・・復  
旧の目処がつくまでは防衛のため、ここへ駐留することになるだろ  
う。」

カチーナ「結局、足止めかよ？」

リョウト「仕方ありません。今、ここにエアロゲイターの攻撃を受けたら、取り返しのつかないことに……」

ジャーダ「ああ。連中にとっちゃ、進行をおっぱじめる絶好の機会だぜ。」

ガーネット「ちょっと、不吉なと言わないでよね。ホントに攻めて来たらどうするの?」

ジャーダ「今の状態じゃ、尻尾まいて逃げるしかねえなあ。」

ガーネット「どこにそんな尻尾があるってのよ!」

ジャーダ「わっ、馬鹿!何すんだよ!?!」

カチーナ「気楽な連中だぜ。」

タスク「ちょっとつらやましい……」

ハガネ 格納庫

リユウセイ「……うん、こっち側のモーターは、もう限界だな。」

ラトゥーニ「……格闘戦のやり過ぎ……交換するしかないと思う。」

リユウセイ「やり過ぎだったって、R-1は格闘戦用だぜ?それに、

こいつの予備パーツなんて……」

ラトウーニ「大丈夫。標準型PTに近い機体だから、ゲシユペンスのパーツで代用が利く。」

リュウセイ「へえ、そうなんだ。お前、メカも詳しいんだな。大したもんだぜ。」

ラトウーニ「え？べ、別にそんな……」

リュウセイ「じゃあさ、こっちのモジュールは何なのかわかるか？」

ラトウーニ「？」

リュウセイ「前から気になってたんだけど、何に使うかマニュアルにも載ってねえし……」

ラトウーニ（これは……変形用の……？R-1には、R-ウイ  
ング以外の変形パターンがあるというの……？）

イルム「ほう……あいつら、いい感じじゃないの。」

エイタ「ホントですね……」

マサキ「よお、二人して何やってんだ？」

イルム「馬鹿、声掛けるなつての！見つかったまうだろ！」

エイタ「早くこっちに！ほら、クロとシロも！」

シロ「ニヤ、何ニヤんだ？」

クロ「あ、もしかして……」

イルム「勘違いするなよ？俺は上官としてだな……」

エイタ「中尉、中尉！あっちの方もいい感じですよ。」

イルム「何、どれどれ……？」

クスハ「……これで終わりよ、ブリット君。アイスシールは3時間後に替えてね。」

ブリット「ありがとう、クスハ。」

クスハ「でも、コクピットハッチに頭をぶつけちゃうなんて……ブリット君も見かけによらずドジな所があるんだ？」

ブリット「え？ま、まあ……見かけはともかく……」

クスハ「大丈夫……？顔色がちょっと悪いみたい。」

ブリット「いや、その……（クスハに気を取られて頭をぶつけたなんて言えない。）」

クスハ「もし良かったら、栄養ドリンクを作ってあげるけど……」

ブリット「ホ、ホントかい！？じゃあ、ぜひ！」

クロ「……マサキに続いて、また犠牲者が一人増えたニヤ……」

マサキ「ああ、あいつ・・・気の毒によ。」

エイタ「あれ？ルシア少尉も飲んだんじゃなかったっけ？」

シロ「ルシアは全然平気ニヤ。」

イルム「むしろ、自ら進んで飲んでるからな。」

マサキ「ホント、あいつの味覚はどうかしてるぜ。」

イルム「それにしても、なかなか上手いアプローチだな、ブリットのやつ。」

エイタ「いや、あれただの素ですよ。」

シロ「言えてるニヤ。」

マサキ「で、これが上官としての・・・何なんだ？」

イルム「務めだよ、務め。風紀の乱れは士気の乱れにつながるからな。」

クロ「・・・偉そうニヤこと言えニヤいと思うニヤ。」

ルシア「そうだな、これは上官の務めじゃない。ただのおせっかいってやつだ。」

エイタ「ル、ルシア少尉!？」

ルシア「それに・・・マオ・インダストリーの社長、リン・マオと絶縁状態の人に言えることなのか、疑問だ。」

イルム「な！？お前・・・それをどこで！？」

ルシア「伊豆基地にいたときに、カザハラ博士から教えてもらいました。」

イルム「な、あのクソ親父・・・！余計なことを・・・！」

ルシア「でも、イルム中尉とリン社長が元PTXチームだとは思いませんでしたよ。」

イルム「ああ、その話が元になつて・・・」

ルシア「いえ、リン社長との関係を教えてもらった後に・・・」

イルム「・・・あのクソ親父・・・！」

シロ「そう言ってるけどルシアはどうニヤんだ？」

ルシア「え？」

イルム「そ、そうさ。DCにいた時とか・・・」

ルシア「・・・いない。」

エイタ「ホントですか？」

ルシア「ああ。」

イルム「まあ確かに知る限りじゃ男ばかりだったな。」

ルシア（ホントはアイビス、ツグミ、スレイがいるんだが・・・言ったら面倒なことになりかねん。）

イングラム「ここにいたか、ルシア。」

ルシア「イングラム少佐、どうかしましたか？」

イングラム「お前の機体のことで話がある。」

イルム「ヴァルシオンVのことですか？」

イングラム「ああ、機体のデータをこちらに提出してもらいたい。」

ルシア「俺は構いませんが・・・一体何を？」

イングラム「今後のためだ。それと、前にあつたお前のゲシュペンスト改造は見送られることとなった。」

ルシア「ええ、ヴァルシオンがありますから大丈夫です。」

イルム「でも、そんな風に改造したかつたんだ？」

ルシア「みんなの意見を参考に、ブーステッド・ライフルを高射程、高威力化したものを装備させたのですが・・・今の状況だと難しいですね。」

イルム「まあ、機体もそれに合わせなきゃダメだからな。今からじ

や間に合わないな。」

イングラム「仕方がないことだ。では、ヴァルシオンのデータ取りに立ち会ってもらおうぞ。」

ルシア「了解です。」

イングラム（フッフ・・・ヴァルシオンだけでは足りない位なのだがな・・・）

ジュネーブ周辺

エアロゲイターの攻撃が降伏期限前に開始された。

そして、ここジュネーブにも侵攻しつつあった。

テツヤ「くっ！降伏期限前に攻撃を仕掛けてくるとは・・・」

ダイテツ「大尉、エアロゲイターが律儀に期日を守る保障など、どこにもなかったのだ・・・！ワシらの常識だけで、連中を押し量っていたこと自体が間違っていたのかもしれない。」

テツヤ（そ、そうだ・・・敵は地球人じゃない。我々とは異質の知的生命体なんだ・・・）

ダイテツ「それに、DCとの戦いを意味のないものにするわけにはいかん！」

テツヤ「りよ、了解です！」

エイタ「敵機、転移出現します!!」

エアロゲイターの無人機が出現し、同時にハガネ、ヒリュウ改のP  
T部隊が出撃する。

リユーネ「休む暇もないってのかい!!」

エクセレン「ここんどこ、戦闘続きよねえ。女の子のことも考えな  
いでほしいわよねえ。」

ガーネット「あ、それ、わかるわかる。いろいろあるのよね。」

クスハ「色々つて、なんですか?」

ガーネット「うーん・・・クスハにはまだ早いかな?」

ジャーダ「何の話だ、オイ。」

タスク「ス、スツゲエ気になる・・・」

キョウスケ「・・・敵組織が一つ減ったからといって、気を抜くな  
・・・一番厄介な相手だぞ。」

タスク「わかってますよ。胴元から仕掛けて来てる・・・ってこと  
ツスからね。」

カチーナ「その割には半端な布陣だな。何か隠してるんじゃないのか?」

イングラム（こちらの様子見か？それとも……）「各員、警戒を怠るな。攻撃を開始する。」

ルシア「……………」

ブリット「どうした？」

ルシア「……さつきから頭が……」

リョウト「大丈夫？調子が悪いなら下がった方がいいんじゃない？」

ルシア「大丈夫だ、戦闘に支障はない。」

エクセレン「うん、ルシア君ってすごい真面目ちゃんね。」

ルシア「お前はもう少し真面目にするべきだな。」

キョウスケ「確かに。」

エクセレン「なによもう！二人して！」

ルシア（くそ……！さつきから頭痛が治まらない……！一体何が来るっていうんだ……！）

アヤ「私が牽制をかけるわ！ライ、リュウはその隙に！」

ライ「了解です、大尉！」

リュウセイ「おっしゃ！行くぜえ！」

アヤ「レーザーキャノン、発射！」

R-3はレーザーキャノンを撃ち、固まっていたメギロードを撃ち落とし散開させた。

ライ「くらえ！ビームチャクラム！」

リュウセイ「念動拳、T-LINKナツコオ！！」

R-2のビームチャクラム、R-1のT-LINKナツクルで敵を蹴散らす。

キョウスケ「これだけのベアリング弾・・・かわせるか！」

エクセレン「では、撃ちまくり天国へようこそ〜！」

アルトアイゼンのスクエア・クレイモア、ヴァイスリッターのオクスタン・ランチャーWモードで確実に敵を減らす。

マサキ「いけ！カロリックミサイル！」

リユーネ「くらいな！」

ルシア「フォトンビーム、ファイア！」

サイバスターのカロリックミサイル、ヴァルシオーネのハイパー・ビームキャノン、ヴァルシオンVのフォトンビーム砲で敵を全滅させた。

その時、ジュネーブ上空に巨大な物体が出現した。

リオ「な、何なの、あれ!？」

タスク「で、でけえ……!ありやジガンスクード以上だぜ!」

レオナ「機体の大きさと形状から見て、拠点攻撃や防衛用機動兵器のようね。」

ジャーダ「ヒュ〜、敵さん、本気だつてことかい……!」

ルシア（何だ……!あの機体から何かを……!）

リュウセイ「冗談じゃねえ!これ以上、ここをやられてたまるかよ!」

ライ「熱くなるな、リュウセイ。あの機体が拠点攻撃用ならば……その攻撃力は推して知るべし、だ。」

アヤ「つつ……!」

ラーダ「どうしたの、アヤ!？」

アヤ「あ、あの機体から強力な念波を感じます……!」

ラーダ「待って、調べてみる……レベル7……!?!それに、この波長パターンは!」

アヤ「あ、あの機体には人が乗っているの……!?!」

イングラム（……サンプルの調整は終了しつつあるようだ。だ

が、あれを送り込んでくるというとは……)

ルシア「くっ……!!」

シロ「ルシア、大丈夫かニヤ!？」

ルシア「あ、ああ……(くそ!さっきからあの機体から干渉される……!)」

イングラム「……艦長、早急に各機を回収し、ここから撤退した方がいいと思われます。」

ダイテツ「どういうことか?敵はまだ残っているのだぞ。」

イングラム「彼らは空間転移技術を保有しています。あの新型をオトリにし、MAPWの類を転移出現させてきたら……我々はここで全滅します。」

リュウセイ「きよ、教官……何言っただよ!？」

ダイテツ「その根拠は?」

イングラム「……今までのデータを踏まえた上でも推測です。」

キョウスケ「……」

ダイテツ「ジュネーブを見捨てるわけにはいかん。攻撃を続行せよ。」

イングラム(当然の答えだな。ならば、せめて各機を母艦の近くに

集結させねば……」

ルシア「くそ……あの機体のパイロット……何がしたいんだ……！」

イングラム「各機へ。母艦を中心にして陣形を組み、敵機と戦闘しろ。」

リュウセイ「ど、どういうことだ!？」

イングラム「反論は許さん。俺の命令に従え。いいな？」

リュウセイ「りよ、了解……。母艦の近くにいりゃいいんだな。」

ルシア「マサキ、リユーネ、奴の動きを止めてくれ。」

マサキ「おい、何する気だよ。」

ルシア「いいからやれ!!」

リユーネ「ど、どうしたのさ……!!」

ルシア「あ、すまん……。とにかく、ここで奴を落とすぞ。」

クロ「とにかく牽制ニヤ!」

マサキ「おう! ディスカタター、霞斬り!!」

サイバスターのディスカタターで敵の兵器を攻撃する。

リユーネ「これでもくらいな、クロスマツシャー！」

ヴァルシオーネのクロスマツシャーで敵の動きが止まった。

ルシア「答える、何故俺に干渉してくる？」

「???」

ルシア「答える気がないのならこの場で破壊してやる！」

シロ「ど、どうしたんだニヤ・・・いつもと雰囲気・・・」

マサキ「お、おい・・・ヤバくないか・・・？」

リユーネ「でも、止めても聞く奴じゃないし・・・」

ルシア「俺に・・・干渉するな！クロスマツシャー！！」

ヴァルシオンVがクロスマツシャーを撃つが、フィールドで防がれてしまう。

ルシア「な、何・・・！」

「???」

敵の兵器が背部に翼状にエネルギーを放出し、ヴァルシオンVを通り過ぎるよう<sup>に</sup>に攻撃、ヴァルシオンVに直撃する。

ルシア「うわあああ!?!」

リュウセイ「ルシア!!」

????「……………」

敵の兵器が転移し、撤退した。

テツヤ「撤退した!?各機、迎撃を!!」

エイタ「ま、待ってください!上空にさらなる重力震反応が!!」

テツヤ「敵の増援か!?!」

エイタ「い、いえ……これは……!ミサイルです!多数のミサイルらしき物が転移出現しました!!」

テツヤ「数は!?!」

エイタ「お、おおよそ50基です!攻撃予測範囲はジュネーブ全域!命中まで約240秒!!」

テツヤ「な、何だと!?!」

ダイテツ「うぬ……!イングラム少佐の推測は正しかったということか……!」

テツヤ「艦長!!」

ダイテツ「直ちに各機を回収!この空域から離脱する!!」

テツヤ「し、しかしそれでは!!」

ダイテツ「あのミサイルの数……!我々では防ぎきれん……!」  
テツヤ「う……!!」

ダイテツ「3分以内に各機を回収し、全速で離脱する!いいな!」

テツヤ「りよ、了解です……!」

イングラム「聞こえたな?各機、直ちに艦に帰還しろ。」

ルシア（くそ……!これで終わったと思うなよ……!）

P T部隊は近くに艦に帰還した。

エイタ「各機の回収を完了!!」

ショーン「またしてもこの様な撤退をしなければならぬとは……!」

レフィーナ「しかし、ここで私達が倒れるわけにはいきません。最大船速で離脱を!」

ユン「了解!」

ハガネ、ヒリユウ改がジュネーブを撤退した後、ジュネーブにミサイルの雨が降り注ぎ、壊滅した。

クスハ「ルシアさん、大丈夫ですか？」

ルシア「あ、ああ……」

クロ「でも、あのルシアが何も考えずに攻撃するなんて珍しいニヤ。」

シロ「マサキが道を迷わない位珍しいニヤ。」

マサキ「余計なこと言うなッての!!」

リユーネ「でもホントにそうだよ、何かあるんならあたし達に教えてもらえないかな？」

ルシア「……何故かはわからないが……あの機体からやたらと干渉されてな……」

ラーダ「干渉……？（アヤの時もそうだったけど……一体何の関係が……）」

ルシア「それに……お前らの敵になってしまっんじゃないかと思っ……怖かったんだ……」

マサキ「それはもう昔の話だろ？」

ルシア「いや、それよりも……もつと恐ろしい形で……」

マサキ「何だよはつきりしない奴だなあ……」

リユーネ「大丈夫、もし敵に回ったとしても何とかするからさ。」

ルシア「……………お前の場合、本気で殺されそうだな。」

リユーネ「なによそれ！！せつかく励ましてやったのに……………！！」

マサキ「いや、大体あってるかもな……………」

シロ「言えてるニヤ。」

リユーネ「何よあんた達まで！！」

ルシア（いや……………その方がいいのかもしれない……………地球にとっても……………みんなにとっても……………）

ネビーイーム 内部

アタッド「どうでしたか？レビ様。」

レビ「やはりあの者はデータ通り、環境試験用のサンプルだったな。」

ヴィレッタ（たしか、イングラムが言っていた……………）

レビ「ヴァイクルに予想以上の念の逆流を発生させるほどまで成長した……………放っておくわけにはいかない。」

アタッド「では、回収の方はアウレフにさせましょう・・・」

ヴィレッタ「それは問題ない。帰還と共に回収すると言っていた。」

アタッド「フフフ・・・思わぬ収穫だねえ・・・これでこちらの戦力も増強できる。」

レビ「最終的には・・・あれの出現を防げる。奴はあれを起動させるキーでもあるのだからな。」

ヴィレッタ「・・・」

アタッド「それが地球人の手に渡りでもしたら、とんでもないことになるからねえ・・・」

レビ「アタッド、回収後の調整は任せるぞ。」

アタッド「は・・・」

ヴィレッタ（確かにデータ上ではそうだが・・・それなら何故試験体にそのような処置を・・・？）

第15話 完

第15話 知り難い記憶（後書き）

ヴィレッタ「あなたがここに来て結構長くなるけど・・・どう？慣れた？」

ルシア「慣れたには慣れたけど・・・まだちょっとな・・・」

アヤ「別にすぐについてわけでもないから、慌てずにね。」

ルシア「そうだな。ところでヴィレッタ大尉。」

ヴィレッタ「何かしら？」

ルシア「ヴィレッタ大尉って意外に天然だって聞いたことがあるんだが・・・どうなんだ？」

ヴィレッタ「・・・・・・・・・・任せるわ、アヤ。」

アヤ「え！？え、ちょ、ちょっとどこ行くんですか！？隊長!？」

ルシア「無理やりはぐらかしたよあの人・・・・・・・・・・」

## 第16話 ファーストコンタクター

日本 伊豆下田海岸

エクセレン「リオちゃん、ガンバガンバ！」

リュウセイ「すげ〜！リュウネ、めっちゃ速い！」

マサキ「あいつ、水中モーターでも付けてんじゃねえのか？」

ブリット「いや、いくら何でもそれは……」

タスク「とか言ってる内に……」

ラトウーニ「……勝負がついたみたい。」

クスハ「二人とも、お疲れ様。」

リュウネ「……あたしの勝ちだね、リオ。」

リオ「リュウネにはかなわないなあ。泳ぐの無茶苦茶速いんだもん。オリンピックに出られるよ、きつと。」

リュウネ「小さい頃から、親父に色々な特訓を受けさせられてたおかげだよ。」

リオ「ふ〜ん……だから運動神経がいいのね。」

エクセレン「っていうか……3時間しかお休み貰ってないんだか

ら、のんびりすればいいのに・・・ね、ブリット君。」

ブリット「・・・クスハ、君は泳がないのか？」

クスハ「なんかリオとリユーネに圧倒されちゃって・・・」

エクセレン「ぐぬ・・・このナイスバディを無視？ホントなら鼻血  
ピューなはずなのに。」

タスク「ブリットはクスハの水着以外、見えてないんすよ、きつと。」

エクセレン「ん、キョウスケが付き合ってくれなかったから、  
せめてブリット君に見せつけようと思ったのに。」

タスク「俺がバッチリ見てるツス！いや、眼福眼福！」

リオ「・・・レオナがここにいなくて良かったわね。」

シロ「いたらツッコまれるニヤ。」

タスク「それでもいいから、レオナちゃんの水着が見たかったなあ。  
・・・」

アヤ「ライもレオナも日焼けするのが嫌だって言ったものね。」

リオ「それにしても、アヤ大尉とエクセレン少尉の水着って大胆で  
すよね。」

アヤ「え？そ、そう？ガーネットの見立てなんだけど・・・」

リオ「でも、実はそういう趣味だったりして。」

アヤ「どうして?」

リオ「ほら・・・制服はノースリーブ、パイロットスーツもハイレグでしょ?」

アヤ「あ、あれは私が頼んで作ってもらった物じゃないの。それに、制服も上着があるのよ、実は。」

エクセレン「何にせよ、その水着ならきつとイングラム少佐を悩殺できるわよん。」

アヤ「そ、そうかしら。」

リュウセイ「でも、教官は動じなさそうだけどなあ」

アヤ「・・・・・・・・」

リュウセイ「ん?どうかしたのか?」

アヤ「う、ううん。何でも。」

リユーネ「ね、ね、マサキ。この水着どう?」

マサキ「あ?何でそんなこと俺に聞くんだ?」

クロ「マサキ、もう少し気の利いたこと言えニヤいの?」

マサキ「気の利いたことお？」

リユーネ「ほら・・・可愛いとか、似合ってるぜとかさ。」

ルシア「どの口が言ってるんだ？」

その瞬間リユーネに頭を叩かれる。

リユーネ「うるさいよこの朴念仁!！」

ルシア「あたたた・・・少しは加減しろよ!！」

マサキ「・・・確かに自分で言うのはな・・・」

リユーネ「ちょっと!何なのよマサキまで!!--他に言うことないの!?!」

マサキ「あゝわかったわかった。うるせえな、ったく。いいか?一度しか言わねえから、耳の穴かっぽじってよく聞けよ。」

ルシア（ホントに言うのか・・・?）

リユーネ「う、うん。」

マサキ「よし・・・可愛いな、似合ってるぜ。」

リユーネ「え?ホント?」

クロ（ってマンマニヤ。）

シロ（しかも、リユーネは自分でネタふつといて、真に受けちゃってるし。）

ルシア「・・・お互い苦勞するな。馬鹿な相棒持っていると・・・」

クロ「全くニヤ。」

マサキ「おいそこ！聞こえてるぞ！！」

リユーネ「あたしはアンタの相棒になった覚えはないっつもの！！」

ルシア「まずい！？逃げるぞ！クロ、シロ！」

シロ「捕まったら三味線にされるニヤ！」

クロ「それだけは嫌ニヤ！」

マサキ「おい待て！何でお前らがルシア側についてんだよ！？」

リユーネ「3人まとめて三味線にしてやるんだから！！」

ルシア「うわ、本気がよ！？」

シロ「全力で逃げるニヤ！」

タスク「あゝあ、何やってんだかあいつら・・・」

エクセレン「んふふ、でもルシア君も大分馴染んできたんじゃない？」

ラトゥーニ「確かに、前よりみんなと打ち解けてるような気がする．．．」

リオ「あ、ルシアがリユーネに捕まったわ。」

リユーネ「さあ覚悟してもらおうか！」

ルシア「ギ、ギブギブ．．．．．」

エクセレン「ホラホラ、二人共そこまでにしときなさい。」

ルシア「す、すまない．．．エクセレン。」

エクセレン「んふふ、礼には及ばないわよん。」

ルシア「あ、そうだマサキ。」

マサキ「ん？どうした？」

ルシア「クロとシロはファミリアって言ってたよな？」

マサキ「それがどうかしたのか？」

ルシア「いや．．．俺もこんな奴が欲しいな．．．なんて。」

クロ「残念だけど、誰でもファミリアが持てるわけじゃニヤいニヤ。」

シロ「ファミリアは魔装機神操者でないと持つことはできニヤいニヤ。」

ルシア「そうなのか・・・」

マサキ「ていうか、ファミリアなんて持って何する気だよ？」

ルシア「サイバスターのハイファミリアみたいな攻撃ができればな  
ゝ・・・なんて前から思ってたな。」

クロ「・・・ルシアもファミリア使いが荒らそうニヤ予感がする  
ニヤ。」

シロ「でも、マサキより使い方は荒くなさそうだニヤ。」

マサキ「それ俺の使い方がガサツだって言いたいのかよ!？」

ブリット「あ、みんな。そろそろ時間が・・・」

リオ「え？もうそんな時間なの？」

ルシア「仕方ないさ、早く基地に戻ろう。」

ハガネに乗り込み、SRXチームはミーティングでRシリーズは合  
体訓練のため、中国へ向かっていた。

ハガネ　ブリーフィングルーム

アヤ「ヴァリアブル・・・？何、それ？」

リュウセイ「ヴァリアブル・フォーメーション。俺が考えた合体の

時の合言葉ぞ。」

アヤ「やっぱりね……。いかにもあなたが考えつきそうなことだわ。」

ライ「ヴァ、ヴァリ……。？大尉、どういうことなんです？」

アヤ「私もよく知らないんだけど……。日本のロボットアニメは合体する時に叫ぶらしいの。」

エクセレン「あ、それ……。聞いたことがあるわ。レッツ何々とか、パイル何々とかって言うんでしょ？」

ルシア「チェンジ何々スイッチオン、なんてのもあるな。」

リュウセイ「そうそう……。ちなみにパイルなら合身な。」

ライ「……。掛け声など、ナンセンスだな。」

リュウセイ「何だと！？てめえにヤスパロボ魂ってモンがねえのかよ！」

ライ「ない。」

リュウセイ「いや、そんな……。あっさりと……。」

ルシア「……。確かに合体で叫び声はリスクが高いな。合体するんだと敵に悟られやすい。それに合体の隙は敵にとってチャンスではない。早々に合体できるようにはしないと……。」

リュウセイ「ストップストップ!!んなこと言ったらロボットアニメ全部否定することになっちまうぞ!」

ルシア「……俺は現実的なことを言ったんだが……」

リュウセイ「同じだ、同じ!」

アヤ「はいはい、二人ともそこまでよ。もうすぐ演習区域に着くから、準備よろしくね。」

ライ「了解です。」

その時、警報が鳴りだした。

アヤ「!?!」

中国 北京

エアロゲイターの無人機が下りてきた。

ハガネ、ヒリュウ改がPT隊を出撃させた。

イルム「いいいな?市街地に降りた敵機をすべて片付けるんだ!」

キョウスケ「了解。」

ブリット「クスハがない…?中尉、クスハはどうしたんですか?」

イルム「忒式の調子が良くないらしい。SRXチームと一緒に、出撃は遅れるそつだ。」

ブリット「そうですか・・・」

タスク「いいトコ見せられなくて残念だったな、ブリット。」

ブリット「な、何言ってるんだ。俺は別にそんなつもりで・・・」

エクセレン「まあまあ。嫌よ嫌よも好きのうち・・・てね。」

キョウスケ「意味がわからんぞ。」

ルシア「そんなことより迎撃だ。行くぞ！」

タスク「合点承知！こいつで吹っ飛ば、ブラスター！！」

ジガンスクードのワイドブラスターで固まった敵を撃ち落とす。

レオナ「ソニックブレイカー、アタック！」

ラトウーニ「チャージ完了・・・撃つわ！」

イルム「ブーストナックル！」

ガリオンのソニックブレイカー、ビルドラプターのHTBアンダーキヤノン、グルンガストのブーストナックルで敵を減らしていく。

エイタ「上空に重力震反応！大型飛行物体が転移してきます！」

テツヤ「識別は!?!」

エイタ「04、フラワーです!」

テツヤ「南極の時と同じ奴・・・敵の戦艦か!」

フリーレが転移し、人型の機動兵器が出現した。

マサキ「あれは・・・人型の機動兵器・・・!」

キョウスケ「みんな、気をつける。敵の新型のお目見えだ。」

マサキ「あいつら、あんな物を持ってやがったのか・・・!?!」

リョウト「サイズがPTやAMと同じだ・・・!もしかして・・・?」

イルム「ああ。本来、パーソナルルーパーやアーマードモジュールは・・・エアロゲイターの人型機動兵器に対抗するために開発されたものでな。」

リョウト「・・・彼らがあんな物を持っているって・・・わかっていたんですか?」

イルム「親父の話じゃ、メテオ3にそれっぽい情報があったそうだな。」

ルシア「持ってても不思議じゃない・・・?」

イルム「もっとも、連中が本当にあんな物を持っているかどうかは

賭けだったらしいが……」

リョウト「……………」

イルム「何にせよ、今までもバグスやバード、スパイダーは前座・  
・あの人型そこが本命。つまり、連中は本腰を入れてきたってこと  
さ。」

キョウスケ「……………新たなカードか。それを俺たちに切ってきた理  
由はなんだ……………」

エクセレン「あ、わかった！私の実力と魅力に気づいて、誘拐しに  
来たとか！？ああ……………私って罪な女……………」

キョウスケ「つまらんことを言っていないで、戦闘に集中しろ。」

エクセレン「んもう、ホントだったらどうするのよお。」

キョウスケ「油断はするな……………奴らの目的が何であろうとな。」

そこにR-1、R-2、R-3、R-GUN、グルンガスト式式が  
戦闘区域に進入してきた。

リョウセイ「みんな、遅くなってすまねえ！」

キョウスケ「奴らは新しいカードを切っていた。気をつけてくれ。」

リョウセイ「ああ。遅れた分は何とか取り返してみせるぜ。」

イングラム「ライ、R-2パワードの調子はどうだ？」

ライ「出力が若干不安定ですが、戦闘には支障ありません。」

イングラム「アヤ、お前の方は？」

アヤ「念の逆流を感じますが・・・許容範囲内です。やれます。」

ブリット「クスハ、機体の方は大丈夫なのか？」

クスハ「上手く動かないけど・・・何とか頑張ってみるわ。」

ブリット「無理をするなよ。」

クスハ「うん……。心配してくれてありがとうおつ、ブリット君……」

イングラム「俺とクスハは母艦の護衛に回る。他の者は敵機を迎撃しろ。」

ルシア「了解！」

アヤ「私が牽制をかけるわ、テレキネシス・ミサイル、発射！」

ライ「続けて行きます！ハイゾルランチャー、シューー！！」

R-3パワードのテレキネシス・ミサイル、R-2パワードのハイゾルランチャー散弾モードで敵を牽制する

リュウセイ「そこだ！T-LINKナツコオー！！」

ルシア「デイベインアーム!!」

マサキ「おらおらおら!!」

リユーネ「落ちな!」

R-1のT-LINKナックル、ヴァルシオンV、ヴァルシオーネのデイベインアーム、サイバスターのディスカッターで敵を迎撃していく。

イングラム「・・・頃合いか」リウセイ、ライ、アヤ。パターンOOCのプロテクトを解除する。SRXに合体しろ。」

ライ「!!」

アヤ「えっ!?!」

リウセイ「ま、まさか・・・今!?!」

イングラム「そうだ。SRXによって、敵機を一気に殲滅する。」

ルシア（合体しただけで戦局が覆せるのか・・・?）

ライ「テストをせず、いきなるOOCを行うなんて・・・!」

アヤ「それに今は戦闘中です!」

イングラム「だからこそだ、Rジリーズの合体は、戦闘中に行うことを前提とされている。」

アヤ「た、確かにそうですが・・・」

ライ「・・・危険過ぎます。失敗をすれば、他の機体まで巻き込むことに・・・!」

イングラム「どうした・・・?自信がないのか?」

ライ「!」

リュウセイ「・・・!」

イングラム「リュウセイ。自分が軍に入った目的を・・・戦う理由を思い出せ。今、ここでOOCを成功させなければ・・・」

リュウセイ「・・・わかったぜ、教官。」

ライ「リュウセイ・・・!」

リュウセイ「ライ、やるしかねえ。この場を何とかするためにOOCを・・・」

ライ「・・・」

アヤ「・・・」

リュウセイ「SRXの合体を成功させるんだ・・・!」

ライ「・・・危険な賭けだぞ。」

リュウセイ「覚悟の上だ。ライ、アヤ・・・頼む。お前達の力を俺

に貸してくれ。」

ライ「・・・ああ。」

アヤ「やりましょう、リュウ。」

リュウセイ「教官、聞いての通りだぜ。」

イングラム「では、パターンOOCのプロテクトを解除する。各機へ。SRXチームは戦線から離脱する。なお、援護は不要だ。各個の戦闘に専念しろ。」

キョウスケ「・・・了解。」

エクセレン「んじゃ、お手並み拝見といきましょつか。」

リュウセイ「ああ、行くぜ！ライ、アヤ！」

SRXチームが戦線を離脱する。

アヤ「念動フィールド、ON！トロニウムエンジン、フルドライブ！各機、変形開始！！」

リュウセイ「行くぜ！ヴァリアブル・フォーメーション！！」

イングラム（さあ・・・お前達の力を見せてみる。）

アヤ「う・・・ああっ・・・！！うっうっ！！」

念動フィールドが切れ、機体が合体せずに落下してしまった。

リュウセイ「うおあっ!?!」

ライ「くっ、念動フィールドが!失速する!?!」

リュウセイ「うあああ!?!」

アヤ「きゃあああ!?!」

ライ「うぐっ!?!」

キョウスケ「失敗・・・!?!」

マサキ「みんな、無事か!?!」

リュウセイ「う、うつつ・・・!だ、駄目だ・・・バラけちゃった・・・!?!」

キョウスケ「マサキ!」

マサキ「ああ、わかってる!こっちで敵を引き付けるぜ!」

ルシア「守りは俺がやる!態勢を立て直せ!」

リュウセイ「す、すまねえ、みんな!」

ライ「このままでは他の機体の動きを乱す!一時後退するぞ、リュウセイ!」

リュウセイ「あ、ああ!アヤ!大丈夫か!?!」

アヤ「・・・・・・・・・・」

リュウセイ「アヤっ!?!」

ライ「大尉・・・・・・・・!気絶しているのか・・・・・・・・!?!」

イングラム「フツ。」

リュウセイ「!?!」

イングラム「フッフ・・・・・・・・」

リュウセイ「イ、イングラム教官!?!」

イングラム「どうやら、これまでのようだな。」

R・GUNがR-3に接近する。

アヤ「う、うう・・・・・・・・イングラム・・・・・・・・少佐・・・・・・・・」

イングラム「アヤ、せめてもの情けだ。苦しませように・・・・・・・・  
殺してやる。」

アヤ「えっ!?!」

R・GUNはツイン・マグナライフルでR-3を破壊した。

リュウセイ「ア、アヤアアアアア!?!」

ライ「大尉ッ！！」

ルシア「な、何が起こったんだ……！？」

リーダー「イングラム少佐……！？」

ガーネット「う、嘘でしょ！？」

キョウスケ「R-GUNがR-3を撃墜……誤認なのか……！？」

マサキ「何の真似だ！イングラム！！」

イングラム「フッ……」

リュウセイ「イ、イングラム教官……こ、これはどういふことなんだ？どうして……どうしてアヤを！？」

イングラム「……彼女は欠陥品だった……だから、処分したまでだ……」

リュウセイ「け、欠陥品……！？教官、何を……」

キョウスケ「読めた、そういうことか……！」

リュウセイ「キョウスケ！？」

キョウスケ「この戦い……もう一つの選択肢がある。お前は地球を裏切ってエアロゲイター側につくことを選択したのか？」

イングラム「違う。」

キョウスケ「何……!？」

イングラム「何故なら……俺はエアロゲイター側の人間だからな。」

マサキ「な、何だと!？」

イングラム「俺は。エアロゲイターの特殊作業員なのだ。」

マサキ「特殊……作業員!？」

リュウセイ「ほ……本当なのか……?教官は……今まで俺達を……だましていたのか!？」

イングラム「そうだ。」

リュウセイ「う……嘘だろ……?今まで一緒に戦ってきたのに……!」

イングラム「俺にとって、お前達は地球人の単なるサンプルに過ぎない。出会った時から……それ以上の感情は持っていないのだ。」

リュウセイ「な、何だと……?俺達が……サンプルだと!？」

イングラム「ああ。俺にとって、お前は部下や戦友なのではなく……あくまでも、サンプルナンバー55番に過ぎない。」

リュウセイ「な……!？」

ルシア「サンプルだと・・・!?!」

イングラム「俺を憎め、リュウセイ・ダテ。そうすれば、お前の力は目覚める。俺の追い求める力がな・・・」

リュウセイ「て、てめえ!アヤが・・・アヤがどんな気持ちで・・・どんな気持ちでてめえに撃たれたのか、わからねえのか?!?」

イングラム「言ったはずだ。そういう感情は持ち合わせていない、と。」

リュウセイ「な・・・に・・・!?!?」

イングラム「さあ・・・あがけ、俺の目の前で。」

リュウセイ「あ・・・あの野郎・・・!」

タスク「チツ・・・!ハンスよりタチが悪いぜ!!騙しのテクニクは認めてやるが、とんでもねえ種明かしをしゃがって!!」

リョウト「ど、どうすればいいんだ・・・」

キョウスケ「迷う必要などない。俺は敵だ、と公言したからには・・・倒すしかあるまい・・・!」

ルシア「イングラム少佐・・・いや、イングラム!」

イングラム「フ・・・データ以上の成長だな。ファーストコンタクトターよ。」

ルシア「何!？」

イングラム「お前はメテオ3と共に地球に送られた環境試験用サンプル・・・俺と同じ、エアロゲイター側の人間だ。」

ルシア「!？」

マサキ「なんだって!？じゃあルシアは・・・!」

リユーネ「異星人だっていうの!？」

イングラム「そうだ。お前は念の力を十二分に発揮出来ず、地球環境調査の面目で母星から追放されたのだ。」

リョウト「そんな・・・!メテオ3と落ちてきた確証はないのに・・・!」

レオナ「いいえ、十分考えられることよ。いくらメテオ3が直前で減速したとはいえ、落下地点周辺にいたら普通は助かるはずがないわ。」

カチーナ「そっぴやホワイトスターとジュネーブのデカブツが現れる直前、頭痛をしてやがったな・・・」

ラッセル「失った記憶に刺激されてそうだったんじゃ・・・!」

イングラム「違う。記憶を奥底に眠らせたまま、地球に送りつけられただけだ。実際は記憶喪失ではない。」

ルシア「う、嘘だ……！」

イングラム「お前は鍵を握っている。だから、俺のところに来い。記憶を蘇らせて、俺達の元についてもらおう。」

キョウスケ「鍵だと？」

ルシア「違う……！俺は……バルマー人じゃ……！？な、何だ今のは……！知らないはずの単語が……！？」

イングラム「エアロゲイターの元の名前が言えるまで回復したようだな。」

ラーダ「まさか、今まで見たエアロゲイター関連の物を見たことで、眠っていた記憶が戻りかけて……！？」

イングラム「だがまだ完全ではない。もう一度言う、俺のところに来い。バルマー人として、俺達の元へ来い！」

ルシア「違う……！俺は異星人じゃない……！れっきとした地球人だ……！ネビーイムには行かない……！俺は……バルマー人なんかじゃない……！」

イングラム（思ったより回復が早いな、その方が都合はいいがな。）

マサキ「おい！しっかりしろ、ルシア！！」

リユーネ「しっかりしなよ！地球を護るんじゃないの!？」

ルシア「く……う……う……！！！」

キョウスケ「まずい……！完全に混乱してしまっている……！」

イングラム「その様子では離脱は困難だろ。」

ヴァルシオンVの近くにフリーレが転移してきた。

ユン「フラワーが転移してきました……！」

ショーン「まさか、ルシア君を無理やり回収するつもりで……！？」

ルシア「フリーレ……！？」

イングラム「安心しろ。記憶を戻し、サンプルを刈りつくした時、母星に……お前の故郷に帰れるのだ。母星で本当の親に会えるぞ。」

ルシア「ち、違う……俺の父は……ビアン……ビアン・ゾル  
ダークだ……！」

ルシアに念が走った。

ルシア「な、何だ今のは……！俺は……本当に……嘘だ……  
嘘だああ……！」

イングラム（そうだ……その調子で記憶を取り戻せ……）

リュウセイ「やめろ、イングラム……！」

R-1がヴァルシオンVの前に立ち、R-GUNに銃を向けた。

イングラム「そうだ……。その怒りだ、リユウセイ。」

リユウセイ「ふざけんな！俺はてめえの興味のために戦ってるんじゃないやねえ！！」

イングラム「では、俺が何のためにお前を軍に引き入れたと思っているのだ？」

リユウセイ「黙れ！！イングラム教官……。いや、イングラム・プリスケン！俺はてめえを絶対に許さねえ！！」

ライ「ルシア！今のうちに離脱しろ！」

ルシア「違う……。俺は地球人だ……。バルマー人じゃない……。違う……。俺は……。！」

ライ「くっ……。！」

イングラム「ライ……。やはりSRXチームには3人の能力者が必要だった。」

ライ「能力者！？ならば、そうでない俺も用済みだと言うのか！？」

イングラム「ああ、そうだ。おまえは間に合わせの要員……。」

ライ「……。！」

イングラム「計画が進めば、必要がなくなる存在だ。」

ライ「くっ……！俺は……リュウセイや大尉にこの義手の痛みを……俺のような苦しみを味わってほしくなかった！」

イングラム「しかし……それが力を生み出す源となる。」

ライ「黙れ！俺が貴様の素性にもっと早く気付いていれば……！」

イングラム「フ……」

ライ「イングラム……俺が必要ないと言ったな。だが、貴様を倒すまでR-2のシートは俺の物だ……！」

リュウセイ「G・リボルヴァー、ファイア！」

ライ「切り裂け！ビームチャクラム！」

R-1のG・リボルヴァー、R-2のビームチャクラムで攻撃するが、R-GUNはそれを回避する。

イングラム「お前達の動きは手に取るようにわかる。」

キョウスケ「とんだイカサマ師だったようだな、イングラム・プリスケン。」

イングラム「フフ……博打の世界では露見しなければ、不正とは言うまい。……現実も同じだ。」

キョウスケ「同感だ。だが……イカサマがばれたからには、それ相応の代償を払ってもらう……現実と同じにな！」

エクセレン「何でか、私って男運がないのよね。少佐のことも目に付けてたのに。」

イングラム「俺は良いサンプルに恵まれた……。キョウスケ・ナンプ、ブルックリン・ラックフィールド……。そして、エクセレン・ブロウニング……。特にお前はな。」

エクセレン「……。新手的口説き文句かしら？」

キョウスケ「聞く耳を持つな、エクセレン。仕掛けるぞ！」

エクセレン「ええ……。少佐、私……。珍しく怒ってるのよね！」

キョウスケ「ここで叩き潰す……。！」

アルトアイゼン、ヴァイスリッターが攻撃を仕掛け、R-GUNを追い込む。

イングラム「流石だな。だが、ファーストコンタクターだけは確実に持ち帰らせてもらう。」

キョウスケ「何……。！？」

ヴァルシオンVの前にいたフレがスパイダーネットを撃ち、ヴァルシオンVを拘束した。

エイタ「ヴァ、ヴァルシオンVが捕獲されました！！」

テツヤ「主砲で敵艦を叩き落とせ！ルシアを救出しろ！！」

エイタ「だ、駄目です！敵艦は艦首前方に強力なバリアを展開しています！！」

テツヤ「確実にルシアを連れ去る気か・・・！」

ダイテツ「機関、最大船速！艦首部分にエネルギー・フィールドを集中させる！！」

テツヤ「か、艦長！？」

ダイテツ「敵艦のバリアなど、直接叩き割ればよい！！」

????「その役目は我々に任せてもらおう。」

ダイテツ「む！？」

エイタ「艦長！こちらへ急速接近してくる物体が！！」

ダイテツ「何者だ！！」

エイタ「こ、これは・・・戦艦！？しかも、本艦と同型艦です！！」

テツヤ「同型艦だと！？」

ダイテツ「まさか、クロガネか！？」

そこにクロガネが進入してきた。

LB兵「側距データ確認！距離2507、仰角21コンマ3！」

エルザム「よし……艦首超大型回転衝角、始動！」

LB兵「了解！回転衝角、始動！」

エルザム「テスラ・ドライブ、出力最大！」

クロガネが艦首超大型回転衝角を使い、フーレに突撃する。

エルザム「クロガネ、突撃いつ！！敵艦のバリアを叩き割り、ルシアを救い出せ！！」

クロガネの艦首超大型回転衝角がフーレに直撃、破壊された。

エイタ「ク、クロガネが敵艦を……！」

テツヤ「どういっつもりだ!?!」

ルシア「エ、エルザム少佐……」

エルザム「こちらアイアン3、エルザム・V・ブランシュタインだ。これより貴艦を援護する。」

レオナ「エルザム少佐！私達を助けてくれるのですか!?!」

ライ「エルザム、何の真似だ！」

エルザム「フツ……見てわからんのか？」

ライ「何……!?!」

エルザム「少なくとも、私は自分の敵が何者なのか見極めているつもりだ。」

ダイテツ「……協力を感謝する。」

テツヤ「よろしいんですか、艦長!？」

ダイテツ「こちらの手の内を知り尽くしたイングラム少佐が裏切ったのだ……!今の我々には彼を倒す手段を選んでいる余裕はない!」

テツヤ「りよ、了解です!」

イングラム「ルシアの捕獲には失敗したか……」

マサキ「イングラム!!俺はてめえみたいに人の命を何とも思っ  
ねえ奴が許せねえ!!」

イングラム「では……シユウ・シラカワと同じように俺を追い続けるか?」

マサキ「てめえらみたいな連中を放っておけるか!!」

イングラム「裁きの日が近付いている今……力なき者は死あるのみ。俺はその真理を理解を……行動しているだけに過ぎない。」

マサキ「そんな屁理屈で納得がいくか!!」

イングラム「フツ……愚かな……」

マサキ「愚かで結構！俺は魔装機神操者の名にかけて、てめえをブツ倒す！！」

サイバスターが攻撃態勢に入る。

マサキ「くらえ！アカシック・バスター！！」

アカシック・バスターがR-GUNに直撃する。

イングラム「フツ・・・R-GUNを行動不能に陥らせるとはさすがだな。」

だが、俺は今のところ優秀なサンプルであるお前達を殺すつもりはない・・・これからは敵としてお前達を引き出してやる。」

そこに青い機動兵器が現れる。

ヴィレッタ「イングラム、迎えに来た。」

イングラム「ご苦労だった。」

ヴィレッタ「サンプルの回収は終了したが・・・ファーストコンタクターはどうする？」

イングラム「問題ない。記憶が戻りつつある今、放っておいてもこちらに来るだろう。」

ヴィレッタ「了解、これより撤退する。」

イングラム「では、さらばだ。お前達のさらなる奮闘に期待してい

る・・・」

イングラム達は北京から撤退した。

リュウセイ「ま、待ちやがれ！イングラム！！」

ライ「・・・追っても無駄だ。奴らは空間転移を行った・・・！」

リュウセイ「う・・・ぐ・・・！」

マサキ「あ、あの野郎・・・！」

イルム（くっ・・・俺もヤキが回ったもんだぜ・・・少佐の正体に気付かなかったとは・・・！）

キョウスケ（・・・ジュネーブの時から、奴には疑いをかけていた・・・だが、確証をつかむのが遅かったか・・・）

リユーネ「ルシア、大丈夫！？」

ルシア「・・・」

リユーネ「ルシア！？」

ラーダ「意識を失っている・・・！早く収容して！」

エルザム（・・・薄々、感ずいてはいたが・・・ついにこの時が来たな・・・。ルシア、お前に課せられた試練は膨大なものとなる。それに耐えられるか・・・？）

第16話

完

## 第16話 ファーストコンタクター（後書き）

マサキ「なあ、今思っただけだよ……」

リユーネ「何？マサキ。」

マサキ「お前のヴァルシオーネとルシアのヴァルシオン。あれって全部ビアンが作ったのか？」

ルシア「あの人以外に誰がいるんだよ？」

リユーネ「まあ……ルシアのヴァルシオンはちょっと……ね……」

ルシア「おい、そりやどどういう意味だよ？」

リユーネ「なんかさ、パツと見ダサイのよね……前のヴァルシオンよりはマシにはなっただけど……」

ルシア「んだと、お前のヴァルシオーネも何だよあれ。見た目はともかく頭部の表情変わるとか気持ちの悪い。」

リユーネ「何よ、あれがいいんじゃない！ホント親父に似て悪趣味なんだから！」

ルシア「どう見たってそっちの機体の方が悪趣味だろ！！」

マサキ「なあ……それ……お互いにビアンの事、馬鹿にしてないか？」

## 第17話 生きたEOT

ハガネ　ブリッジ

リュウセイ「何だつて！？俺達とRシリーズが出撃禁止！？」

ライ「しかも、ルシアを査察部に……」

テツヤ「……一時的な処置だ。」

リュウセイ「何でだよ！大尉！？」

ライ「自分達はイングラム少佐直属の部下であり……Rシリーズは彼を中心に開発された機体だからですね。」

テツヤ「そうだ。ルシアは異星人だったと言うことが露見してしまった以上、我々にとって不本意だが……お前達とRシリーズは軍査察部の調査を受けることになる。」

リュウセイ「さ、査察部って……どういうことだよ！？」

ライ「つまり……俺達もイングラム少佐同様、軍上層部の人間に疑われているということだ。」

リュウセイ「なっ……！」

テツヤ「俺はお前達を疑いはずが……RシリーズはEOTを駆使した機体だ。少佐によってどんな仕掛けをされているかわからん。特にSRXとR-2はトロニウム・エンジンで動く以上、何かあつ

たら致命傷となる。

ただし、お前達の身の潔白については、司令や艦長達からも査察部へ働きかけてもらっている。Rシリーズの調査結果がシロと出た場合は、最優先で現場へ復帰できるようにするつもりだ。」

ライ「了解しました。」

リュウセイ（くそっ……！これじゃイングラムを倒すどころか、クス八を助けることだって出来やしねえ。あいつは……イングラムはホワイトスターで俺達を嘲笑ってるってのに……！！）

伊豆基地 拘置所

リュウセイ（くそ……こんなところに入ってる間にみんなは戦ってるってのに……！！）

ライ「……………」

リュウセイ、ライの向かいにルシアが入る。

ルシア「……………」

リュウセイ「ルシア！大丈夫か？」

ルシア「…………あれのどこが尋問だよ……ほとんど拷問だろ……」

リュウセイ「拷問!？」

ルシア「ああ。洗いざらい情報を言えと・・・殴られもした。これで何が目か分からない・・・」

リュウセイ「くそっ・・・!ルシアが一体何したってんだよ!地球を護るために戦ったつてのに・・・!」

ルシア(多分、EOT特別審議会のカール・シュトレゼマンが一枚噛んでいるんだろう・・・異星人の情報は少しでも多く手に入れて、対等の立場になりたがって・・・)

ライ「ルシア、記憶の方は・・・?」

ルシア「大分欠落してるが・・・ある程度は・・・」

リュウセイ「・・・」

ルシア「笑えるだろ?地球を侵略してきた異星人が地球を護ってるんだ・・・皮肉にもほどがあると思うだろ?」

ライ「・・・」

ルシア「俺はメテオ3と共に来た、生きたEOTさ・・・そんな奴が地球を護る資格なんてなかったんだ・・・」

リュウセイ「そんなことねえよ!!ルシアは頑張っつて奴らと戦っつてきたじゃないか!」

ルシア「リュウセイ……」

リュウセイ「そりゃ最初は俺達と敵対してたさ。けど、それとルシアが異星人だつてことは全然関係ない話だ。地球を護る気持ちに異星人も地球人も変わらねえよ！」

ルシア「……………」

ライ（リュウセイも言えるようになってきたか……………」

リュウセイ「それにさ、ロボットアニメでも敵の異星人が地球側について戦ってくれるって展開もあるし、これはこれでいいと思うぜ？」

ルシア「……………まさかこんなところでロボットアニメの話が出るとは思わなかったな……………」

ライ「全く、少し見直した俺が馬鹿だった。」

リュウセイ「何だよライまでよ！？せつかく励まそうとしてやったつてのに……………」

ルシア「大体からその異星人の協力者は必ずと言っていいほど死んでるぞ？」

ライ「そ、そうなのか……………」

ルシア「ああ。」

リュウセイ「例外もあるけど……………ごめん、例えが悪かったよ。」

ルシア「ハハハ……でも、ありがとう。少し気が楽になったよ。」

リュウセイ「ああ、いいってことよ。」

そこに一般兵が現れ、ルシアの独房が開かれた。

一般兵「ルシア・ゾルダーク少尉、貴官の疑いは晴れた。釈放だ。」

ルシア「どういうことだ？」

一般兵「異星人との関係性が調査の結果、シロと判断された。それだけだ。」

リュウセイ「そんなあっさり……!!」

ライ（そう簡単に疑いが晴れるとは思えない……裏で何かがあったことは確実だが……一体……？）

ハガネ ブリーフィングルーム

ガーネット「おかえりルシア！心配してたのよ。」

ジャーダ「その傷……何かされたのか？」

ルシア「ああ、査察官はよほどエアロゲイターを憎んでいたらしい。ほとんど拷問だよ。」

リオ「ひどい……！」

リョウト「でも、こうやって戻ってきたことは……」

ルシア「ああ、関係性はゼロと判断された。」

ラトウーニ「よかった……」

カチーナ「よかねえよ……！」

ラッセル「カチーナ中尉……！」

カチーナ「こいつの仲間のせいでクス八がさらわれて、敵側になっちまったんだぞ！」

ルシア「何……！クス八が!？」

リョウト「ルシアは知らないだろうけど……北京の戦いでクス八がいなくなっただ。」

ルシア「それで、次に会った時には……」

リオ「敵側になってしまったの……」

カチーナ「オメエならクス八の助け方とか分かるんじゃないのか？  
同じエアロゲイターの間人なら。」

ルシア「……先ほども言った通り、俺が異星人であったこと  
しか知らない。」

カチーナ「まだしらはつくれるつもりか!?!」

エクセレン「ちょ、ちょっとカチーナ中尉! ルシア君だって困惑してるのよ? そんなの分かるわけが・・・」

カチーナ「どうだか、イングラムと同じで隠してるに違いないぜ。」

ルシア「・・・本当に知らん。」

カチーナ「だったら腕づくでも聞き出してやる!?!」

ルシア「!?!」

カチーナがルシアを殴りかかろうとした瞬間、間にラッセルが入りルシアをかばった。

ラッセル「ぐっ・・・!」

カチーナ「な・・・ラッセル・・・!」

ルシア「何で・・・」

ラッセル「カチーナ中尉・・・いい加減にしてください! ルシア中尉だってイングラム少佐が口にするまでは、自分が異星人だったなんて知らなかったんですよ!」

ルシア「ラッセル・・・」

カチーナ「・・・」

ラッセル「クス八少尉もさらわれて混乱するのは分かります。けど、それとルシア中尉のことは関係ありません！殴るのですたら、自分を殴ってください！！」

ルシア（あの内気なラッセルがこつも強く言えるとは……）

カチーナ「……分かったよ。ホントはあたしもこんなことしても何の解決にもならないのは分かってたさ。けど……イングラムの野郎が裏切ってからイラついてたまんなかったんだ。」

エクセレン「え〜と……とりあえず、ルシア君のことは解決した……てことでいいかしら？」

カチーナ「ああ、すまねえな。ルシア。」

ルシア「いや……いい……」

ラッセル「よかった……」

ルシア「ところで……俺が中尉ってどういうことだ？」

エクセレン「ああ、まだ言ってなかったわね。レイカー司令の指示でパイロットは曹長、少尉は一階級戦時昇進されたのよ？」

ルシア「俺が……？」

リオ「ええ、私とリョウト君も少尉よ。」

ルシア「てことは……」

エクセレン「ええ、マイダーリンも中尉に昇進、しかも部隊指揮官に選ばれたのよん？」

ルシア「そうなのか？」

キヨウスケ「ああ、カチーナ中尉やイルム中尉は辞退、ルシアはいなかったことで俺が抜擢された。」

ガーネット「でも絶対ルシアがいたら指揮官になれたかもね？」

ジャーダ「そういえばそうだな、DCで指揮官経験もあるし。」

ルシア「いや、この部隊の勝手は分らん。よく分かってるキヨウスケの方が適任だろう。俺がその場においても辞退するつもりだ。」

カチーナ「それあたしらが自分勝手だと言っててるようなもんじゃねえか……」

タスク「あれ？カチーナ中尉ってそうじゃなかったツスカ？」

カチーナ「百叩きにされたいのか、タスク!!」

タスク「え、えらいスンマヘン……」

マサキ「ここにいたのか、ルシア。」

ルシア「マサキか、何か？」

マサキ「ダイテツのおっさんが俺達に囿役をやってってくれてよ。」

リユーネ「囿？」

マサキ「ああ。エアロゲイターが俺達をピンポイントで狙ってるかどうか確かめるためにだつてさ。」

リユーネ「なるほどね。あたし達がオトリになって、北京の時みたいに連中が出てくれば……」

エクセレン「ダイテツ艦長達の予想は大ピンポンってことね。」

マサキ「ま、サイバスターとヴァルシオーネは目立つ機体だし……足も速いから、囿役には最適ってこつた。」

リユーネ「わかつたよ。」

エクセレン「わお！リユーネ、もしかしてこれってラブラブチャンネル到来じゃなあい？」

ルシア「何言つてんだか……でも、いくら二人の機体でも深追いは禁物だ。油断するなよ？」

マサキ「ルシア、お前にも囿役の命令が出てるぜ。」

ルシア「何……！」

エクセレン「あらら……ひょっとしてルシア君はお邪魔虫って奴？」

ルシア「何でそうなるんだよ……」

シロ「おいら達も一緒だから、そんニヤことニヤいニヤ。」

クロ「シロ、そういう意味じゃニヤいわよ。」

ルシア「でもちよつと待ってくれ・・・俺はついさつき帰ってきたばかりだぞ？それなのに・・・」

キョウスケ「いや、いくらサイバスターやヴァルシオーネでも多数の敵を相手にすることになれば危険だ。艦長達は冷静な判断ができ、尚且つ戦闘力が高いヴァルシオンVが使えるルシアを抜擢したんだろう。」

ルシア「そういうことなら・・・」

エクセレン「ま、いいでしょ。ルシア君、不純異性交遊がないように目を光らせなさいよ？」

ルシア「は・・・？」

マサキ「いいから、さっさと行こうぜ。今はリュウセイ達の方も頑張らなきゃならねえんだしよ。」

ルシア（そつだ・・・リュウセイ達は未だに査察部だ・・・先に出た俺が頑張らねば・・・）

エクセレン「あ、ルシア君。ちよつと耳貸して？」

ルシア「なんだよこんな時に・・・」

エクセレン「いいからいいから。あのね・・・」

ルシア「………何で俺がそんなことを聞かなきゃならないんだ？」

「  
エクセレン「まあまあ、妹の恋路を見守るのがお兄ちゃんの役目よ。」

ルシア「単に俺が年上なだけだ。兄妹って関係じゃない。」

エクセレン「おねがひ、いつか私のバニーちゃんを見せてあげてから。」

ルシア「な、何言ってるんだお前!？」

エクセレン「後で情報も送るわ。じゃ、頑張ってる来てね。」

ルシア「はあ……分かったよ。」

DC基地跡地 上空

リユーネ「ねえ、ダイテツ艦長が指定した場所って、ここなの？」

マサキ「ああ。何でもDC戦争の時に放棄された基地らしいぜ。」

リユーネ「なるほど。ここならエアロゲイターと戦っても、周りへの被害が少なくて済むってわけね。」

ルシア「とにかく、ここで待機だ。うまくいくといいんだが……」

その時、ルシアのDコンからメールが入った。

ルシア（ん？エクセレンからのメールか……仕方ない、聞いてみるか。）

ルシアはリユーネにプライベート通信で交信する。

リユーネ「？ プライベート通信？」

ルシア「な、なあ……リユーネ、ちょっと聞きたいことがあったな。」

リユーネ「何？」

ルシア「マサキとはどうなんだ？」

リユーネ「どうって……何のことなのさ？」

ルシア「い、いや……お前がマサキに……ホ、ホの字じゃないかってことで……」

リユーネ「は！？そんなことないよ！」

ルシア（ホントだ、書いてある通りのリアクションとったな……どれだけすごい情報網なんだ？エクセレンは……）

リユーネ「からかわないでよね！別にマサキとはなんでもないんだから！」

ルシア「そうか・・・その調子じゃ何も無いみたいだな。」

リユーネ「当たり前だよ。あんな鈍い奴、相手にしたって時間の無駄だもん。」

ルシア「いや・・・案外、年上にモテてそうだから・・・もしかしたら、年上からアプローチがあったりするかも知れん。」

リユーネ「そ、そうなの？」

ルシア「いや、よく分からんが・・・」

リユーネ「ていうか、ルシアからそんな話を振るなんておかしいよ。」

ルシア（し、しまった！？エクセレンからの情報をそのままにし過ぎてしまった・・・！）

リユーネ「ねえ、何かあったの？」

ルシア「じ、実は言うと・・・エクセレンから色々と・・・」

リユーネ「あの人か・・・まったくもう・・・」

ルシア「ごめんな、変なこと聞いてしまって・・・けど一応兄妹としても心配で・・・」

マサキ「おい、お前ら何やってんだ！敵の反応があったぞ！！」

リユーネ「！！」

そこに、グランゾンとヴァルシオン、メギロードが出現した。

マサキ「!?!」

リユーネ「あ、あれは・・・!」

マサキ「グランゾンとヴァルシオン!」

リユーネ「そ、そんな・・・!あのヴァルシオンは親父専用の・・・!ど、どついつとよ!?!」

ルシア「お、おい・・・二人とも何言ってるんだ!?!」

シロ「ニヤ、ニヤンであの2体がこんニヤ所に!?!」

クロ「マサキ、ここはいつたん引きあげた方が・・・!」

マサキ「いや、こいつはおかしいぜ。グランゾンはともかく、ピアンのおっさんが生きてるはずはねえ。」

シロ「だったらあれは偽物だっていうんニヤ!?!」

マサキ「・・・そいつを確かめる。奴らに仕掛けるぜ、二人とも!」

リユーネ「わ、わかったよ!」

ルシア「ちよっと待て!奴らって何のことだ!?!どう見たってあれは・・・!」

シユウ「ククク・・・まったく、無知とは罪ですね・・・マサキ。」

マサキ「！ シユウ！！」

シユウ「あなたでは私に勝てないとまだわからないのですか？」

マサキ「てめえ！あの時、しばらくは何もしねえって言ったのはウソだったのか！？」

シユウ「ホワイトスターの時の話ですか？私の言葉を信じるとは、相変わらずお人好しですね。」

マサキ（こつちの誘いに引つ掛かりやがらなかった・・・まさか、本物だつてののか？いや、でも何かが違うぜ。あの野郎はノコノコと意味もなく現れるような奴じゃねえ。それに何よりも・・・サイバスターがああグランゾンに反応していねえ・・・！）

ピアン「リユーネよ。・・・何故、私に刃を向けるのだ？」

リユーネ「お、親父・・・！ホントに生きてたつていうの！？」

ピアン「無論だ・・・私がああ程度で死ぬような男ではないということ、お前が一番よく知っているはずだ。」

リユーネ「でも、親父は・・・異星人と戦うために地球を・・・！」

ピアン「その目的に偽りは無い。だからこそ、私の力を貸そうというのだ。」

リユーネ「なんだって!?!」

ピアン「お前たちだけでは、ゲストやエアロゲイターに勝てん。過去のわだかまりを捨て、私の下へ来い、リユーネよ……」

リユーネ「違う……! 親父はあたしにそんなことは言わないよ! それに、あれほど可愛がってたルシアには何も言わないなんておかしい!」

ピアン「だが、今こそ地球人類が力を合わせて異星人と戦わねばならぬ時だ。つまらぬことにこだわっている場合ではない。」

リユーネ「ルシアのこともつまらないことなのかい!?!」

ピアン「……………」

ルシア「おい! マサキ、リユーネ! さっきから誰と喋ってるんだ!」

マサキ「とりあえず、本物だろうが、偽物だろうが……相手がシユウなら戦うまでだ!」

リユーネ「あいつは親父じゃない! 化けの皮をはがしてやるよ!」

ルシア「マサキ! リユーネ! 俺の声が聞こえないのか!?!」

シユウ「ワームスマツシャー!」

グランゾンはワームスマツシャーをサイバスターに向かって撃つが、ひらりと避ける。

マサキ「やっぱりおかしい・・・シユウはここまで手抜きで攻撃するはずは・・・」

ピアン「クロスマツシャー、発射！」

ヴァルシオンはクロスマツシャーをヴァルシオーネに狙い攻撃するが、分身でかわした。

リユーネ「やっぱりあいつは親父じゃない、親父がここまで詰めが甘い攻撃はしてこない！」

山奥に赤いエゼキエルが転移してきた。

アタッド「フフフ・・・。見事に引つ掛かったねえ。しかも、お目当てのサイバスターが。あれをサンプルとして持ち帰れば、あたしの立場も向上するってものさね。」

ルシア「マサキ！リユーネ！ここにグランゾンとヴァルシオンなんかいないぞ！それはメギロード・・・じゃない、バグスだぞ！」

アタッド「ほう・・・あれがファーストコンタクターかい・・・けど、奴にはあたしのマインドコントロールが効いていないし・・・トラウマシャドーも見えていない。」

ルシア「きつと近くに幻覚を見せている奴がいるはずだ・・・！」

アタッド「本星ではどんな奴か、気になるところだね。直接調べてみるとするか。」

ルシア「目標補足！やはり近くにいたか……！二人に何したか知らないが……お遊戯はそこまでにしてもらう！」

ヴァルシオンVはアタツドのエゼキエルに接近する。

アタツド「フフフ……記憶の方はどうだい？ファーストコンタクトー？」

ルシア「お前までイングラムと同じことを……！」

アタツド「アウレフはどうだったか知らないけど、あたしの回収は少々手荒いよ？」

ルシア「俺はそっちにつく気はない！俺は……第2の故郷である地球を護る……！」

アタツド「だったら……多少五体が欠落しても文句を言うんじゃないよ……！」

エゼキエルはオルガ・キャノンの発射態勢に入った。

アタツド「オルガ・キャノン……死ぬかどうかはあなたの運次第さね……！」

オルガ・キャノンが発射された。

ルシア「歪曲フィールド、全開……！」

ヴァルシオンVは歪曲フィールドで防ごうとするが、防ぎきれずダメージを受ける。

ルシア「どこかにトラウマシャドーの制御装置があるはずだ……！」

ルシアは念を研ぎ澄ませ、装置の場所を探った。

ルシア「見えた！フォトンビーム……！」

フォトンビームを発射させ、エゼキエルに直撃させる。

アタッド「！？ しまった、トラウマシャドーの制御装置が！？」

ルシア「やはりそこにあつたか……！（けど、幻覚の正体まで記憶が蘇ってくるとは……そろそろマズイかもな……）」

マサキ、リユーネの目の前にいたグランゾン、ヴァルシオンがメギロードに変わる。

マサキ「！？」

リユーネ「バグス！？」

マサキ「どういうことだ！？」

ルシア「やっと正体が暴けたか……」

マサキ「正体！？じゃあ、やっぱり……あのグランゾンとヴァルシオンは偽物かよ……！」

ルシア「二人揃って白昼夢……エクセレンが喜びそうな展開だな。」

仕掛人は俺の目の前にいるおばさんの仕業だ。」

アタツド「おば……！？おのれ、こうなったらお前だけでも……！」  
アタツドは待機させていた兵器群を転移させてきた。

ルシア「やはりセガリアとハバククを出してきたな。けど……こ  
つちも準備は出来てるんだよ！」

そこにハガネとPT部隊が進入してきた。

キョウスケ「無事か？三人とも！」

ルシア「ああ、色々あったが……何とか囹役は成功したぞ。」

エクセレン「ルシア先生、生徒は無事ですか？」

マサキ「誰が生徒だ！」

ルシア「誰が先生だっつーの……」

エクセレン「それはいいとして……どうだった？」

ルシア「ああ、多分エクセレンが好きそうなシチュエーションだぞ  
？」

エクセレン「わお！後でそのドキドキタイムを聞かせてね！」

キョウスケ「……マサキ、リユース。任務中はほどほどにな。」

マサキ「真に受けるんじゃないっつーの！」

リユーネ「あたし達、何もしてないよ！」

ルシア（……今思うと、エクセレンの頼み……断っておくべきだったかな……？）

リユーネ「もういいから！さっさとこいつら片づけようよ！」

ルシア「全く……ん？Rシリーズの機体が出てる？まさかリユーセイ達が！？」

リユーセイ「ああ。」

ルシア「大丈夫だったのか？」

リユーセイ「ああ、俺は自分がやるべきことをやる。そう決めたんだ。」

ルシア（リユーセイの奴……急にふっきれたな……一体何があったんだ？）

リユーセイ「とにかく、目の前の敵を片づけるぞ！」

ルシア「ああ！」

キョウスケ「各機、攻撃を開始だ……！」

アヤ「二人とも、フォーメーションRで行くわよ！」

ライ「了解です、大尉！」

リュウセイ「先に行くぜ！チェンジ、R-ウィング！」

アヤ「ストライクシールド！」

R-3のストライクシールドで敵をけん制する。

ライ「続いて行きます！ハイゾルランチャー、シュー！」

R-2のハイゾルランチャーで敵を一気に落としていく。

リュウセイ「残った敵は俺に任せる！T-LINKナツコオ！」

R-1で残った敵が一扫された。

ルシア「負けられないな……！行くぞ、マサキ、リュウネ！」

マサキ「おお！」

リュウネ「行くよ！クロスマッシャー！」

マサキ「アカシック・バスター！！！」

ルシア「メガ・グラビトンウェーブ！！！」

サイバスター、ヴァルシオーネ、ヴァルシオンVの猛攻で敵が一扫される。

エクセレン「あらあら、みんな張り切ってるわねえ。じゃ、私は隊

長機の相手をさせてもらおうかしら?」

キョウスケ「油断するなよ、エクセレン?」

アタッド「ほう・・・あなたの身体、なかなか興味深いねえ・・・」

エクセレン「おばさま? 私はそっちの趣味はなくてよ?」

アタッド「お前までおばさん呼ばわりをするか!! もう許さん!」

エクセレン「あら・・・気に張っちゃって・・・」

キョウスケ「無駄口を叩くな、エクセレン。」

エクセレン「はいはい。じゃ、ご退場願いましょつか!」

ヴァイスリッター、アルトアイゼンがアタッドのエゼキエルに攻撃を仕掛けるが、全てよけられてしまう。

アタッド「は! 口ほどにもないねえ。」

エクセレン「それはどうかしらん?」

キョウスケ「まだカードは残っている。」

アタッド「何・・・?」

ルシア「こっちだ!」

エゼキエルの真上にヴァルシオンVがディバインアームを構えて突

っ込んでくる。

アタツド「何!?!」

ルシア「帰ってイングラムに伝えておけ。俺は・・・バルマーと決別するってな! デイバインアーム!」

ヴァルシオンVのデイバインアームでエゼキエルの頭部を斬りおとした。

アタツド「チ・・・! まさか、やられちまうなんてね。サンプルは手に入れられなかったが、収穫は充分にあつたよ。」

ルシア「負け惜しみを・・・!」

アタツド「あんた、あたしらバルマーと決別したからには生きて帰れると思わないことさね! じゃ、次に会える時を楽しみにしておくよ・・・フフフ。」

アタツドは転移で撤退をする。

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エイタ「敵機の全滅を確認!」

テツヤ「やはり艦長達の予想は当たっていましたか・・・」

ダイテツ「ああ、これからのことは伊豆に戻ってから考えるとしよう。ところでルシア中尉。」

ルシア「は、はい・・・」

ダイテツ「良かったのか？自分の母星と決別を宣言してしまつて。」

ルシア「・・・正直、母星のことは少し未練があります。けど、それと地球侵略は別です。俺は・・・父の愛したこの地球を護るために戦います。」

ダイテツ「・・・そうか、それを聞いて安心した。これからも頑張つてくれ。」

ルシア「・・・はい！」

ハガネ     データ室

ギリアム「久しぶりだな、ルシア。」

ルシア「ギリアム少佐、呼ばれて来たのはいいんですが・・・一体何か？」

カイ「ああ、お前に見てもらいたいデータがあつてな。」

ルシア「え？カイ少佐が何でハガネに・・・！」

カイ「お前は査察部にいたから分からないだろうが・・・俺もハガネに配属になつたんだ。」

ルシア「そうなんですか・・・」

カイ「そうだ、あの時の説教がまだだったな？」

ルシア「う……！あの時アイドネウス島に行ったから忘れてた……！」

カイ「覚悟しておけよ？まあマサキもいるから寂しがることはないぞ？」

ルシア「な、何でマサキが……」

ラトウーニ「ルシアが査察部に入ってしまった時に一度勝手に出撃してしまった時があったの。」

ルシア「そ、それで……」

ギリアム「カイ少佐、話を戻しましょう」

カイ「ああ、すまん。」

ギリアム「前に敵の指揮官機の行動データをルシアにも見てもらいたくてな。」

ラトウーニ「これが映像データよ。」

ラトウーニはモニターに青いエゼキエルの映像を映し出す。

ルシア「これは……青いエゼキエル？」

カイ「いや、俺達はナイトと呼称している。」

ルシア「あ、そうなんですか・・・」

ギリアム（ナイトの正式名称か・・・俺の予想が正しければ・・・このままいけば・・・）

カイ「この動き、見覚えがないか？」

ルシア「え」と・・・！？　こ、これは・・・まさか・・・！？」

カイ「やはり・・・わかったか・・・」

ルシア「なんで・・・なんでカーウアイ大佐の動きをしているんですか！？」

ギリアム「それには俺達も疑問視している。何故、カーウアイ大佐の動きをしているのか・・・」

ルシア「確か、あの時タイプSのテスト中に行方不明になって・・・」

カイ「ああ、お前がタイプSに乗りたいたと駄々をこねた後に・・・」

ラトウーニ「ルシアが駄々をこねることってあったんですか？」

ルシア「ちょっとカイ少佐！？あんまりそういうのは口にしないでください！」

カイ「何を恥ずかしがっておるか、この程度で・・・」

ルシア「うう・・・不憫だ・・・ラトウーニ。」

ラトウーニ「わかってる、みんなには内緒にしておく。」

ルシア「あ、ありがとう・・・。っと、話を戻すと・・・あのナイトにはカーウアイ大佐が乗っていると・・・?」

ギリアム「それは俺にもわからん。だが、何らかの形でカーウアイ大佐のデータか、カーウアイ大佐自身が向こうに渡ったことは間違いないな。」

ルシア「もし・・・もし、カーウアイ大佐が乗っていたら・・・」

カイ「・・・ルシア、今回ばかりはどうにもならないかもしれんぞ。」

ルシア「けど約束したんです！カーウアイ大佐は・・・俺が一人前になったらタイプSをくれてやるって・・・!」

カイ「・・・そうだったな。カーウアイ大佐はお前をえらい可愛がっていたからな。」

ギリアム「それについては追って調査をする、だが最悪の事態は覚悟をしなければいけないぞ?」

ルシア「は、はい・・・」

カイ「さて・・・じゃあマサキを呼んで来い。」

ルシア「う……やっぱりやるんですか……?」

カイ「当たり前だ、ぐずぐずせずに呼んで来い！ダツシュュ!!」

ルシア「は、はい!!」

ルシアはダツシュュでマサキを呼びに行った。

ギリアム「フ……昔を思い出しますね。」

カイ「ああ、俺の説教で泣きべそかいてた頃が懐かしいよ。」

ラトウーニ「あのルシアが……信じられない……」

カイ「あ、これルシアに口止めされてるんだったな。ラトウーニ、このことは……」

ラトウーニ「はい、内緒にします。ルシアも昔は失敗続きだったことが知れましたので。」

カイ「フ、あいつの記憶が戻りそうになってるってことで安心して口が軽くなっちゃった……」

ギリアム（……ルシアの記憶……俺の予想が正しければ、最悪の事態を招くかもしれんな……）

## 第17話 生きたEOT（後書き）

シュウ「おや、ここで終わりですか？」

ルシア「まあ・・・1話で一気に進めるわけにもいきませんし・・・」

シュウ「ちょうどいい機会です。これを読んでいる方々に重要な情報をお教えしましょう。」

ルシア「え？」

シュウ「実は、この小説はアクセスすることに1文字づつ文章が減っていくシステムが組み込んであります。」

ルシア「え!？」

シュウ「何度も何度も読み込んでいくと、どんどん文字が減っていき、最終的には小説自体が消滅してしまいます。ククク・・・こうしてる間にも文字が消滅していきますよ・・・?」

ルシア「な・・・!」

シュウ「無論、冗談です。フフフフ・・・」

ルシア「シラカワ博士・・・冗談に聞こえないです・・・」

第18話 SUPERROBOT-X

八ガネ 個室

ルシア「陽動作戦？」

ギリアム「ああ、ダイテツ艦長達は我々が優先的にエアロゲイターに狙われていることを逆手にとり、連邦軍宇宙主力艦隊の集結をオペレーションSRWが始まるまで囷役を務めることになった。」

ルシア「なるほど・・・人型も俺達だけにしか仕掛けてないということもありますからね。」

カイ「ああ、何の因果か知らんが俺達は敵に気に入られたらしい。」

ルシア「奴らはサンプルを回収すると言っていました。俺達は地球人の代表に選ばれた・・・と言ったところですね・・・」

カイ「・・・ルシアがこの艦にいることも一つだな。奴らはお前を欲しがっている・・・」

ルシア「俺は奴らと決別しました。奴らの都合は知ったことではありません。」

カイ「そうだな。そろそろ出撃だ、行くぞ。」

タクラマカン砂漠 上空

そこにエアロゲイターの無人機が展開していた。

カチーナ「今回は人型はなしか、単なる偵察部隊だったのか？」

キョウスケ「あるいは陽動部隊か・・・」

ルシア（もう偵察する必要はないはず・・・何か裏がありそうだな・・・）

ブリット「・・・」

エクセレン「どうしちゃったの、ブリット君。愛しのクス八ちゃんのことでも考えてたの？」

ブリット「・・・そうです。」

エクセレン「あら・・・マジなのね？」

キョウスケ「ブリット、戦闘に余計な感情を持ち込むな。」

ブリット「いえ、あの子は・・・クス八はこの俺が助け出します。これだけは譲れません。」

エクセレン「んふふ、お姉さんは応援するわよ。」

キョウスケ「個人の感情だけで戦えると思うな。」

ブリット「う・・・」

キョウスケ「だが、ブリット。言ったからにはやってみせる。」

ブリット「!・・・は、はい!!」

キョウスケ「アサルト1より各機へ。攻撃開始だ。油断はするなよ。」

タスク「まとめて吹き飛ばすぜ!ギガ・ワイドブラスター!!」

ジガンスクードのギガ・ワイドブラスターで無人機群を減らす。

レオナ「甘く見なくてよ?ソニック・ブレイカー!!」

カチーナ「どきやがれ虫共!!」

ラッセル「当たれ!!」

ガリオンのソニック・ブレイカー、カチーナ、ラッセルの量産型ゲシュペンストMk-?のメガ・ビームライフルで敵の数を減らしていく。

アヤ「来る・・・!!」

マサキ「来るって・・・何が?」

アヤ「ま、間違いない・・・あの人・・・来る!!」

遺跡付近にグルンガスト式式がエアロゲイターの人型機動兵器を従えて出現した。

クスハ「……………」

ブリット「ゲルンガスト式！クスハか！？」

ルシア「ホントにクスハが奴らに……………」

キョウスケ「ならば…………少佐もここに？」

続いて、行動不能にしたはずのR-GUNが出現してきた。

カチーナ「R-GUN！？何故あいつらがあれを持っていやがるんだ！？」

ラトウニ「あの機体はイングラム少佐が開発したもの…………エアロゲイターの技術なら複製するのは容易なのかも…………」

リュウセイ「イングラム！貴様！！」

イングラム「久しぶりだな。まだ生きていたか。」

リュウセイ「！！」

イングラム「お前たちのおかげでいいサンプルデータを入手することが出来た。少なくとも、お前たちには感謝という感情を持てるようになった。」

リュウセイ「な、何だと！？俺たちを裏切つてよくも！！」

アヤ「少佐！あなたは…………！！」

イングラム「……………」

アヤ「あなたは、本当にエアロゲイターの人間なんですか！？私たちの敵なんですか！？」

イングラム「そうだ。」

アヤ「……………」

イングラム「アヤ、その様子では未だにT-LINKシステムをフルドライブさせることが出来ていないようだな。」

アヤ「私が欠陥品だというのなら……何故あの時、私を殺さなかったんです！？」

イングラム「お前に新たな利用価値を見出したからだ。しかし、チャンスは2度までしか与えんぞ。」

アヤ「やはり、あなたは私たちのことを……………」

イングラム「そう……お前はSRXの単なる念動力供給システムにしか過ぎず……リュウセイ・ダテという戦闘制御装置の補助でしかない。ブリットにとって、クスハがそうであるように。」

ブリット「な、何！？」

アヤ「あ、あなたという人は……………」

マサキ「これ以上は問答無用だな、ヤツは本気だぜ！」

イングラム「そうだ。お前達が俺のことをどう思おうと勝手だが・  
・ここで死にたくなければ、全力でかかって来るがいい。」

リュウセイ「ほざきやがったな!!」

ブリット「くそ!よくも・・・!!」

キョウスケ「二人とも、熱くなるな。ヤツは俺たちをあおっている。  
」

ルシア「挑発に乗るな、奴の思う壺だぞ。」

リュウセイ「あ、ああ・・・分かってるぜ、ルシア、キョウスケ中  
尉・・・」

ブリット「自分を見失えば・・・負けた。」

イングラム（フッフ・・・よく自制が効くようになったな。だがこ  
れならどうだ？）

クスハ「ブリット君・・・」

リュウセイ「!クスハか!?!」

ブリット「やっぱりイングラム少佐に!?!」

クスハ「あなた達・・・私を助け出したいんでしょ?」

ブリット「!?!」

クスハ「でも無駄よ、だって……私はイングラム少佐のものだから……」

ブリット「クスハ!！」

リュウセイ「お、お前……!！」

ルシア（マインドコントロールで操られている……これを解除する方法はただ一つ……）

クスハ「ねえブリット君……私のこと好きなんでしょ？もし、あなたがイングラム少佐を倒せたら……あなたのものになってもいいわ。」

ブリット「クスハ……一体何を!？」

リュウセイ「ブリット、イングラムの相手は俺たちがやる。お前はクスハを助けるんだ。」

ブリット「あ、ああ!分かった!！」

キョウスケ「ブリット、お前が弐式のT-LINKシステムを破壊してクスハを救助しろ。」

ブリット「え!？」

キョウスケ「ラーダさんから、それが最も可能性の高い方法だと聞いた。」

ブリット「!!」

ラーダ「前回の戦闘で、クスハはあなたに対して最も強い念……いえ、反応を示していた。だから、あなたならあの子の心を引き寄せることができる。」

ブリット「ほ、本当ですか!?!」

キョウスケ「賭けてもいい、後はお前しだいだ。」

ブリット「……なら分が悪いということですね。だけど、必ず助けて見せます!」

キョウスケ「いい返事だ。よし、アサルト1より各機へ。ブリットを援護しつつ、式式を行動不能にし……残りの敵を殲滅しろ。」

イングラム「さあ来るがいい。俺が選り出したサンプル達よ……」

リュウセイ「頼むぞブリット!!」

ブリット「ああ!任せろ!」

ルシア「クスハ……必ず戻って来いよ。じゃないと、またお前の栄養ドリンクが飲めなくなるからな。」

クスハ「ブリット君……あなたは私には勝てないわ……私の手にかかって死にたい?」

ブリット「俺はもう迷わない!必ず、お前を助け出してみせる!!」

ルシア「頼むぞ、ブリット！」

イングラム「アタツドから聞いているぞ。バルマーと決別したそうだな。」

ルシア「ああ、バルマーの記憶はもう関係ない！俺はこの地球を護る！バルマーなぞ知ったことか！！」

イングラム「そうか……そのせいで……」

ルシア「何のことだ？」

イングラム「……離反したお前が知る必要はない。」

R・GUNがツイン・マグナライフルをヴァルシオンVに向ける。

イングラム「お前に眠る力……呼び起こされるわけにはいかない。」

R・GUNがツイン・マグナライフルを撃つがルシアはそれを回避する。

ルシア「どうしたイングラム、その程度か？」

ライ「続いて行くぞ、ルシア！」

イングラム「力の差を見せ付けられても向かってくるとは……お前らしくないな、ライデイス。」

ライ「ああ、まったくだ。だが俺は……リュウセイやマサキ、キ

ヨウスケ達と出会って・・・戦いの何たるかを改めて学んだような気がする。」

イングラム「フツ・・・」

ライ「お前はいずれ超えなければならぬ壁だった。こつなることを俺は心のどこかで望んでいたのかも知れない。」

イングラム「ならば命を賭けてこの俺を超えてみる！」

ライ「ああ！そうさせてもらおう！！」

マサキ「どの面下げて現れやがった！イングラム！！」

イングラム「こちらにも都合がある。サンプルの成長具合を確かめねばならぬのでな。」

マサキ「テメエはそうやって、こつちをはぐらかしているんだろうが・・・俺は騙されねえぜ！」

イングラム「利用されているわけではない、ということか？」

マサキ「利用だと？その基準は何だ？テメエが勝手に決めてるだけじゃねえのか！」

イングラム「・・・」

マサキ「テメエが何を企んでいようが、俺には関係ねえ！俺の邪魔をするってんならブツ倒すまでだ！！」

ライ「ハイゾルランチャー、発射！」

マサキ「行け！ハイファミア！！」

R-2のハイゾルランチャー、サイバスターのハイファミアで攻撃するが、全て回避された。

イングラム「何か足りないようだな？」

キョウスケ「イングラム、貴様はやりすぎた。報いを受けてもらおう！」

イングラム「キョウスケ・ナンブ、内なる力を解き放て。そうすればお前はより良いサンプルとなる。」

キョウスケ「何・・・？」

イングラム「お前の力を最大限に引き出すにはエクセレンという犠牲が必要だ。」

キョウスケ「！！」

エクセレン「あら・・・言ってくれちゃって・・・」

ギリアム「お前がイングラム・プリステン少佐か。」

イングラム「む・・・？この男は・・・」

ギリアム「・・・」

イングラム「何者だ、貴様・・・!?」

ギリアム「お前と同じような宿命・・・並行する世界をさまよう宿命を背負った者・・・とだけ言っておこう。」

イングラム「何だと・・・!?」

ギリアム「だが、互いの進む道は違ったものになるだろう。俺にはそれがわかる。」

イングラム「・・・お前の目的はなんだ？」

ギリアム「ある者達の追跡調査・・・だった。」

イングラム「だった？」

ギリアム「ああ。今はお前達と戦うことが最優先なのでね。」

イングラム「フツ・・・とんだイレギュラーが紛れ込んでいたようだな。」

リュウセイ「イングラム！テメエが何を考えているのかわからねえが・・・俺はこれ以上テメエの思い通りにはならねえ!!」

イングラム「フツ・・・その様子ではどうやら母親の秘密を知ったらしいな。」

リュウセイ「うるせえ!!! テメエみてえに人のことを何とも思っ  
ねえ奴を許しておけるか!!!」

ギリウム「狙い通りの位置だ。くらえ！」

ゲシュペンスト・タイプRはニュートロン・ビームを発射する。

イングラム「ぐう！あの男に油断は禁物か……！」

リュウセイ「今だ！」

カイ「俺達を欺いた罪……その身で償え！ジェット・マグナム！」

カイの量産型ゲシュペンストMk-?のジェット・マグナムでR-GUNを殴り飛ばす。

リュウセイ「次はこつちだ！T-LINKナツコオ！」

続いてR-1のT-LINKナツクルで右腕を破壊する。

ルシア「こいつもくらえ！クルセイド・ミサイル！」

ヴァルシオンVのクルセイド・ミサイルでR-GUNの動きを封じる。

イングラム「ぐっ……それでこそ……クラス・ギボルの資格が……」

ルシア（クラス・ギボル……？）

キョウスケ「喋るな。」

アルトアイゼンがR・GUNのコクピットにリボルビング・ステークを向ける。

キョウスケ「貴様は・・・潰す!!」

ステークがR・GUNのコクピットを撃ち貫いた。

リュウセイ「やったか!？」

キョウスケ「待て、奴の様子が・・・」

イングラム「フ、フフ・・・素晴らしい。素晴らしい力だ・・・  
どうやらお前たちは俺の予測を超えつつあるようだな。」

リュウセイ「負け惜しみを言うんじゃない!!」

イングラム「よからう。ならば、お前たちに見せてやる。このR・GUNの真の姿をな」

R・GUNの頭上に何か降り注ぎ、機体を変異させた。

ルシア「!？」

タスク「ば、化けやがった!？」

マサキ「何だありゃあ!？」

ライ「R・GUNの強化改造機・・・いや、サイズがPTとは違う・・・!!」

マサキ「ていうよりでかくなつたぞ!？」

イングラム「フフフ・・・これが新たなR-GUN・・・R-G  
UNリヴァールだ。」

リュウセイ「!・・・リヴァール・・・」

レオナ「好敵手ですって?人を馬鹿にしたような名前ね・・・」

イングラム「遊びはそこまでだ。成長不良なサンプルは、消去しなければならぬぞ。」

マサキ「あの野郎・・・どこまでも人をナメた真似を!！」

キョウスケ「みんな、攻撃をイングラム少佐に集中させるんだ。あの機体・・・侮れんぞ。」

イングラム「では・・・本気でやらせてもらう。遠慮は不要だぞ。フフフ・・・遠慮はな。」

ギリアム「もしや・・・彼の目的は・・・?」

ルシア（何だ・・・今一瞬・・・イングラムじゃない何かが・・・!）

ブリット「みんな!」

ルシア「ブリットはクス八に集中しろ!ここは俺達が押さえる!」

ブリット「ルシア・・・分かった!」

クスハ「ブリット君……。」

ブリット「クスハ！目を覚ましてくれ！！」

ヒュツケバインMk-？のフォトン・ライフルがグルンガスト式式の中枢部分に直撃する。

クスハ「うっつ……む、無駄よ……ブリット……君……」

ブリット「！式式が怯んだ？」

クスハ「せめて私の手で殺してあげる……」

ブリット「斬られる前に斬れ……リシュウ先生とセングー隊長の教えに背くことになるけど……やってやる！来い！！グルンガスト式式！！」

クスハ「さよなら……ブリット君。」

グルンガスト式式は計都瞬獄剣を取り出す。

クスハ「天に凶星、地に精星……必殺、計都瞬獄剣……！」

計都瞬獄剣でヒュツケバインMk-？の左腕を破壊した。

ブリット「ぐあ……肉を切らせて骨を絶つ！」

ヒュツケバインMk-？は右腕でシシオウブレードを抜いた。

ブリット「一意専心、狙いは一つ！式式のT-LINKシステム！  
！」

エクセレン「ブ、ブリット君！！」

キョウスケ「いける……！」

ブリット「クスハアアア！！！」

ブリットの呼びかけでクスハは一瞬、正気を取り戻す。

ブリット「チエストオオオオ！！！」

シシオウブレードでグルンガスト式式の頭部……T-LINKシステムを破壊した。

リオ「クスハ！ブリット君！！！」

キョウスケ「あえて敵の攻撃を受け、Mk-?の腕を一の太刀としたか。」

リオ「え！？」

ブリット「ふうっ……」

クスハ「う、うっ……」

ブリット「キョウスケ中尉……任務完了しました。」

キョウスケ「よくやった、ブリット。」

エクセレン「わお！やるじゃないブリット君！！」

ブリット「ええ・・・何とか・・・」

クスハ「ブリット・・・君・・・？」

ブリット「クスハ！大丈夫か！？」

クスハ「う・・・うん・・・聞こえてたよ・・・ブリット君の・・・声・・・」

ブリット「クスハ・・・！？しっかりしろ！クスハ！！」

ルシア「ブリット落ち着け！クスハは気を失っただけだ！ダイテツ艦長、式式の収容を！」

ダイテツ「了解した。式式を収容せよ！」

エイタ「了解！」

イングラム「フフフ・・・サンプルを取り戻したか・・・」

キョウスケ「勝負はこれからだ・・・行くぞ！」

イルム「イングラム少佐、覚悟してもらうぜ！計都羅？剣・暗剣殺！！」

キョウスケ「クレイモア！抜けられると思うな！」

アルトアイゼンのスクエア・クレイモアでR・GUNリヴァーレを牽制し、グルンガストの計都羅？剣・暗剣殺でダメージを与える。

マサキ「こうなったら奥の手だぜ！」

ルシア「マサキに便乗するぞ！」

マサキ「こいつでとどめだ！コスモノヴァー！！」

ルシア「消え失せる！メガ・グラビトンウェーブ！！」

サイバスターのコスモノヴァ、ヴァルシオンVのメガ・グラビトンウェーブでR・GUNリヴァーレを中破に追い込む。

イングラム「いい攻撃だ・・・だがまだ足りん！もう一押しだ！」

リュウセイ「!？」

キョウスケ「R-1に狙いを定めた！？いかん！」

イングラム「リュウセイ、お前の動きは見切っている。何故なら・・・俺はお前の教官だったからな！」

R・GUNリヴァーレの胸部が展開する。

イングラム「さあ・・・耐えられるか？リュウセイ。わが一撃・・・このアキシオン・バスターに！」

アキシオン・バスターが放たれ、R-1に直撃する。

リュウセイ「ぐああああ!!い、イングラム!!」

R-1が吹き飛ばされ、行動不能になった。

リュウセイ「う……ぐ……!!」

アヤ「リュ、リュウ!!」

ラトウニ「リュウセイ!?!」

キョウスケ「あ、あのダメージでは……!!」

エクセレン「ちょっと!?!マジでやばいんじゃない!?!」

ルシア「いくらR-1が対エアロゲイターに特化されていてもこれでは……!!」

リュウセイ「う、うう……ぐ……ち、ちきしょう……!!」

イングラム「非力だな、リュウセイ・ダテ。」

リュウセイ「て、てめえ……!!」

イングラム「その程度では、俺やエアロゲイターを倒すことなど出  
来んぞ!!」

リュウセイ「く、くそ……!!こ、このまま……利用されるだけ  
で……終わってたまるか……!!このままあいつに負けてたまる  
かあああ!!!!」

突然R - 1のモニターが付き始める。

リュウセイ「!!!」

???「RTレベル、一定値ヲ オーバー・・・パイロット及び  
機体ノ 生存ヲ優先シ・・・T-LINKシステム カラ ウラヌ  
ス・システムへ 移行。」

リュウセイ「な、何だ・・・!?!」

イングラム（ようやく作動したか。）

ラーダ「システムが切り替わった・・・!?!」

リュウセイ「R - 1・・・お前、まだやれるのか・・・!?!」

???「現在ノ 戦況ヲ 打開スルタメ・・・「ONLY ONE  
CLASH」ノ プロテクト解除ヲ 要請スル」

リュウセイ「そ、それは・・・」

ライ「こ、この数値は・・・!エンジン出力も安定して・・・!」

アヤ「ライ・・・!」

ライ「賭けてみるか・・・このチャンスに・・・!」

アヤ「!?!」

ライ「こちらR - 2・ダイテツ艦長へ・・・パターンOOCのプロテ

クト解除許可を要請します。」

ダイテツ「!!！」

アヤ「ライ!!！」

ライ「超権行為は承知の上です。しかし……いつまでも足踏みをしているわけにはいきません。」

テツヤ「ライ！Rシリーズを合体させるというのか!？」

ライ「ええ……イングラムの狙いはそれです!そして……今の状況を打開するには……あえて奴の思惑に乗ってみることも必要かと。」

ダイテツ「イングラムの隙を誘うというわけか……!」

ライ「それに、何よりも……ここまでの仕打ちをうけて、黙っているわけには……!」

ダイテツ「……いいだろう。パターンOOCのプロテクト解除を許可する!」

テツヤ「か、艦長!!！」

ダイテツ「大尉、いずれはやらねばならんことだ。ワシも少尉の賭けに乗るとしよう。」

エクセレン「あっちゃ……キョウスケの病気が移ってない?スったら大損じゃ済まないわよ?」

キョウスケ「茶化すなエクセレン。やるからには結果を出してもら  
うぞ。ライディース少尉。」

ライ「了解した。アヤ大尉、よろしいですね？」

アヤ「わ、わかったわ・・・」

ライ「リュウセイ、少しでも様子がおかしい時はフォーメーション  
を解除する。いいな？」

リュウセイ「ああ・・・！イングラムの野郎に俺の意地を見せてや  
る・・・！」

ルシア「頼むぞ、リュウセイ。」

リュウセイ「行くぜ、ライ、アヤ！ヴァリアブル・フォーメーショ  
ンだ！！！」

アヤ「念動フィールド、ON！トロニウムエンジン、フルドライブ  
！各機、変形開始！！！」

ライ「了解！プラス・パーツ、パージ！」

リュウセイ「今度こそ決めてやる！ヴァリアブル・フォーメーショ  
ン！！！」

R-1、R-2 パワード、R-3 パワードが合体し、SRXが完成  
する！！

リュウセイ「天下無敵のスーパーロボットオオオ!!!ここに見参!  
!」

エクセレン「わお!ドッキング成功!」

イングラム「ようやく合体に成功したか、リュウセイ!」

リョウト「あ、あれがSRX・・・!Rシリーズの本当の姿・・・  
!」

タスク「すげ〜、見た目のインパクトが。特に眼なんか。」

エクセレン「そうね〜、なんかどっかで見たことあるような・・・  
ないような・・・」

ルシア「そこはあえてつつこまないが・・・これが合体したRシリーズの姿か・・・」

リュウセイ「アヤ!大丈夫か!?」

アヤ「ええ、保たせてみせるわ。私のことは気にしないで」

リュウセイ「俺はSRXでイングラムと戦う。いいんだな?」

アヤ「あの人が私達の・・・地球の敵に回るといふのなら、私もみんなと一緒に戦うわ!それが・・・私がここにいる理由だから・・・  
!」

リュウセイ「よし・・・。ライ、機体の方はどうだ?」

ライ「サーボモーターとTSチューブが保ちそうにない。この状態で戦えるのはせいぜい3分間だ。」

リュウセイ「さ、3分・・・!?!」

ライ「いいな?3分後に合体を強制解除する。それまでに・・・」

リュウセイ「分かってる!お前の賭け・・・無駄にはしねえ!!」

イングラム「来い・・・リュウセイ!」

ルシア(何だ・・・この感じ・・・俺はこれを待ち望んでいた・・・?)

イングラム「さあ、来い。俺がSRXの相手になつてやる!」

リュウセイ「そうやって、余裕をぶちかましていられんのも今のうちだ、イングラム!!」

アヤ「イングラム少佐・・・あなたが私達の敵に回るといふのなら・・・私はあなたと戦います!!」

イングラム「そうだ・・・それでいい。」

リュウセイ「行くぞ!SRX!お前の力を受けてみる!!」

SRXは空高く跳びあがる。

リュウセイ「イングラム!そこを動くなああ!!ブレードキィィイ  
イック!!」

SRXのブレードキックがR・GUNリヴァーレの装甲を掠める。

イングラム「俺を倒すのではなかったのか？リユウセイ。」

タスク「まだ俺達がいるぞ！ワイドブラスター！！」

ジガンスクードのワイドブラスターがリヴァーレの右腕を半壊させる。

イングラム「何・・・！！」

ルシア「くらえ！ダイバインアーム！！」

ヴァルシオンVがダイバインアームで斬りかかるが、リヴァーレのロシユブレードで受け止められてしまう。

イングラム「その程度か？」

ルシア「今だ、リユウセイ！ライ！アヤ大尉！」

アヤ「T・KINKフルコンタクト！」

ライ「Z・Oソード射出！」

リユウセイ「全てを斬り裂け、SRX！！」

SRXが胸部を展開し、Z・Oソードを構える。

リユウセイ「天上天下・・・無敵斬りいいいい！！」

直前でヴァルシオンVが離脱し、SRXの天上天下無敵斬りでリヴァールを大破させた。

イングラム「フ．．．今回の目的は達成した。では、また会おう．．．サンプル達よ。」

イングラムのリヴァールが転移し、撤退した。

エイタ「敵機の反応、消えました！」

テツヤ「クスハは？」

エイタ「生命に別状はないようです。」

テツヤ「そうか。彼女を助けられただけでもよかった．．．」

ダイテツ「よし、大尉。各機に機関命令を出せ。」

テツヤ「はっ！」

リュウセイ「．．．．．（くそ！まるでイングラムのおかげで合体に成功したみたいじゃねえか．．．！一体あいつは．．．！一体、何を考えていやがるんだ．．．！）」

ルシア「．．．．．」

ハガネ 医務室

クスハ「・・・ブリット君・・・」

ブリット「！ 気がついたのか？」

クスハ「・・・私・・・北京で・・・エアロゲイターに捕まって・・・それから・・・」

ルシア「いい、無理に思い出すな。」

ブリット「そ、そうだよ。こうやって無事なんだからさ。」

クスハ「・・・でも、何かあったんでしょ・・・？私・・・」

ブリット「な、何でもないって。気にしなくても大丈夫、大丈夫。」

ルシア（言えるわけがないよな・・・だが、暗示系の洗脳で助かった、直接制御されていたら今頃・・・）

クスハ「・・・ブリット君、嘘をつくのが下手ね・・・」

ブリット「う・・・！！」

クスハ「・・・みんなに迷惑かけたのね・・・ごめんなさい・・・本当に・・・」

ブリット「クスハ・・・」

クスハ「それから、ブリット君・・・ありがとう。」

ブリット「ありがとうって・・・？」

クスハ「私を助けてくれたの、ブリット君なんでしょ……？」

ブリット「え！？い、いや、その……みんなが力を貸してくれたおかげさ。」

クスハ「でも、ブリット君が一番強く私を呼んでくれていた……そんな気がするの……」

ブリット「クスハ……」

ルシア「クスハ、お前に伝えなければいけないことがある。」

クスハ「ルシアさん？」

ルシア「実は俺は……エアロゲイター側の人間……異星人なんだ。」

クスハ「え……！」

ブリット「クスハ、ルシアは異星人でもこの地球を護る為に戦う気持ちは本物だ。だから……」

クスハ「分かってるわ、何となくルシアさんは私たちと違うなと思っていた時があったの。でも異星人だったなんて……」

ルシア「クスハ、元気になったらまた栄養ドリンクを頼むぞ。」

クスハ「はい！」

ルシア「じゃあなブリット、後は任せた。」

ブリット「え？あ、ああ・・・」

ルシア（邪魔者は退散するかね・・・クスハ、お前が受けた仕打ち  
は必ずイングラムに返してやるからな。）

第18話 SUPERROBOT-X(後書き)

ルシア「フアアアアア……」

リユーネ「どうしたの、寝不足？」

ルシア「ああ、DS版魔装機神にはまってな……やっと3週目までいったところだよ。」

リユーネ「何処まで行ったの？」

ルシア「後は邪神ルートと細かいところを回るだけだ。」

マサキ「何だよまだそんなところなのか？」

ルシア「マサキは何処まで行ったんだ？」

マサキ「とつくにイベントCGコンプしたけど？」

ルシア「はあ！？あれだけあったCGをコンプリート!？」

マサキ「あれ位ちよろいもんだぜ？」

ルシア「くそ……!この悔しさを何にぶつければ……ゼツカラセツ辺りにぶつけるか。」

クロ「それ、八つ当たりニヤ。」

## 第19話 極寒の方舟

マサキ「南極う？何でそんな地の果てまで行くんだ？」

カチーナ「・・・放棄されたはずのコーツランド基地で、何かやっている連中がいるらしい。あたし達はそいつらが何者なのか調べに行くのさ。」

マサキ「ちえっ、あそこにはあんましいい思い出がねえんだよな。」

シロ「まったくニヤ。地上でグランゾンと出くわしたのはあそこだし。」

クロ「おまけに死ぬほど寒いニヤ。」

ルシア「寒いのは当たり前だぞ、南極だからな。」

エクセレン「まあ、寒さに関係なくアツアツでラブラブな人達もいるけどね。ね、リユーネ。」

リユーネ「さあ、誰のこと？もしかして、医務室にいる二人の事？」

エクセレン「あら、上手いこと切り返してきたわね・・・」

リユーネ「そう何回も同じネタでからかわれちゃ、たまないよ。」

マサキ「お前ら、何の話してんだ？」

リユーネ「ブリットとクスハの話。おかげでラーダが風邪をひかな

くても済むって言ってたよ。」

マサキ「風邪をひかねえだと？何でだよ？」

ルシア「マサキ、ホントに分からないのか？」

マサキ「何だよルシアまでよ。」

カチーナ（こりゃ余程だね。あたしでもわかるってのにさ。）

ルシア「そういえばSRXが合体不可能になっただって聞いたけど・  
・原因は何なんだ？」

リョウト「SRXの念動フィールドとエンジンの出力、各部間接への負荷の問題からパーツの消耗が激しすぎたんだ。」

ルシア「なるほど、SRXはEOTの試作機だ。限られた時間では  
そうなるのも不思議じゃないな。」

カチーナ「お前、結構その手も詳しいよな？」

リョウト「そういえばルシアってロボット工学にも精通してるよね、  
何故だい？」

ルシア「EOTI機関時にロボット工学を覚えてくれた教授がいて  
な。その人に教えてもらったんだ。」

エクセレン「それじゃ将来の夢は自分のロボットを作ることかしら  
ん？」

ルシア「いや・・・いつかは自分のカスタム機を作ろうかと思っ  
ね。手始めにゲシュペンストの方を・・・」

マサキ「最終的にはヴァルシオンをか？」

ルシア「あれにはトリニウムが積まれている、いつかは改善策を立  
てないとな。」

リョウト「トリニウム！？ヴァルシオンにトリニウムが積まれてる  
のかい！？」

ルシア「ああ、おかげで総帥のヴァルシオンより攻撃力が高くなっ  
ている。」

リユーネ「それで親父のヴァルシオンより破壊力が上がってるわけ  
か・・・」

キョウスケ「みんな、南極基地に近付いてきた。出撃準備をしてく  
れ。」

ルシア「何かあったのか？」

キョウスケ「南極基地に異変があったようだ。その調査任務だ。」

ルシア「了解した。」

南極基地周辺

基地内部からシロガネが発艦した。

カール「シロガネの調子はどうだ？レンジ・イスルギ社長……」

レンジ「問題はありません、議長。修理作業はパーフェクト……この艦は予定通りの時刻に出航できます。」

カール「フン……さすがはDCのリオンシリーズを量産したイスルギ重工といったところか。だが、信用面ではどうかな。」

レンジ「と、申されますと？」

カール「おまえはEOTI機関時代からビアン・ゾルダークに接近し……DCの兵器製造を一手に引き受けて大きな利益を得た。しかし、ビアンが死んだと知れば手のひらを返し……私の下へやってきた。果たしてそんな男を信用することが出来るか？」

レンジ「お戯れを、議長。利益を追求するのは、企業として当然の行為です。つまらぬ理想を掲げ、曲を選ぶモア・インダストリーなどと一緒にしてもらっては困ります。」

カール「フン……まあよい。シロガネとこの基地を修復したお前の功績は認めよう。」

レンジ「ありがとうございます。で、例のお話ですが……」

カール「わかっておる、お前をシロガネの乗艦を認めよう。」

レンジ「ご配慮感謝いたします。是非、この目でホワイトスターを見ておきたいもので。もしかしたらビジネスパートナーになれるや

も知れませんか。ところで議長……ひとつ気になることがあるのですが……」

カール「ニブハル・ムブハルと……ルシア・ゾルダークのことが？」

レンジ「左様で。特にニブハル・ムブハル……あの男は本当に我々をホワイトスターへ導くつもりなのですか？」

カール「もはやエアロゲイターと正面きつての交渉は絶望的だ。それ故あの小僧から情報を聞き出そうとしたが……口を割らなかつた。地球圏の安泰を図るには、ニブハルを介して、直接彼らの統治者と話し合うしかない。」

レンジ「あの男と行動を共にすれば、エアロゲイターに攻撃されずに済むという話はわかりますが……信用するのは危険かと。」

ニブハル「これはまた、随分と失礼なおっしゃりようですね。」

レンジ「……!!」

ニブハル「私はあなた方に先見の明があると判断し、国賓待遇でお迎えしようというのですぞ?」

レンジ「口先だけでは何とでも言えるものだぞ。」

ニブハル「フフ……あなたも同様にね。」

レンジ「噂ではルシア・ゾルダークの釈放を強要したのはお前だと聞いているぞ?」

ニブハル「滅相な、見ず知らずの青年を何故私が危険を冒してまで助けなければいけないので？」

カール「今はつまらぬ言い争いをしている場合ではない。一刻も早くシロガネで・・・」

その時、シロガネの警報が鳴りだす。

クルー「議長！氷原下に高熱減体の反応が！」

カール「何・・・！」

クルー「こ、これは・・・戦艦！？」

南極の氷原からクロガネが飛び出してきた。

クルー「そ、そんな馬鹿な！大陸氷を突き破ってきた・・・！？」

レンジ「な、何という無茶な真似を・・・！貴重なスペースノア級を壊す気か！」

エルザム「私はクロガネ艦長、エルザム・V・ブランシュタインだ。」

カール「ブランシュタイン？マイヤーの息子か・・・」

エルザム「そちらはEOT特別審議会のカールシュレーゼマン議長とお見受けした。」

カール「・・・そうだ。」

エルザム「では・・・その昔番艦シロガネでいずこへ行かれるつもりなのか、お答え願いたい。」

レンジ「何故、そんなことを教えねばならんのだ。」

カール「よかろう・・・マイヤーの息子よ。お前の質問に答えよう。」

レンジ「議長？」

カール「我々はこのシロガネで地球から一時脱出するのだ。」

エルザム「母星の危機に立ち向かおうとする者達を見捨て・・・自分達だけで逃げ出すおつもりか？」

カール「否。我々は人類の種の保存のため、エアロゲイターと直接交渉を行うのだ。」

エルザム「・・・その行為が新たな火種を地球へ呼び込むことを承知の上でか？」

カール「私は戦うことしか能のない軍人とは違う。地球を代表する政治家として・・・人類の未来を確保するために、ホワイトスターへ赴くのだ。」

エルザム「やはり、行き先はあの白き魔星か・・・人類の未来のためという理念は間違っではないなまい。だが・・・お前達の暗躍が、結果として地球圏をさらなる危機に追い込んでいるのがわからんか？」

カール「政治とはそういうものだ。軍事力に頼るしかなかったマイヤーやビアンの下にいた貴様には理解できぬことだろうがな。」

エルザム「己の身の保全のために民衆を欺き、あまつさえ母星を売ろうとするお前達の考えなど・・・理解する気はない。」

カール「ならば、どうするつもりだ？このシロガネを沈めるか？」

エルザム「・・・・・・・・・・・・・・・・」

????「少佐！俺にやらせてください！」

そこにハガネより先行してきたヴァルシオンV、ルシアが進入する。

エルザム「ルシアか・・・・・・・・！」

ルシア「さつきから聞いていれば調子に乗りやがって・・・・・・・・！俺達軍人が戦うことしか能がないなら、お前ら政治家は目の前の危機から逃げ出す臆病者の集団だ！」

レンジ「あ、あれはヴァルシオン・・・・・・・・！」

カール「あれはハガネ所属のヴァルシオンVだ。まだ生きていたとはな、ルシア・ゾルダーク。」

ルシア「カール・シュトレゼマン議長か。異星人の飼い犬になるのが望みか？」

カール「飼い犬だと？」

ルシア「今現在のエアロゲイターはサンプルと称し、次々と軍人を捕えている。お前らみたいな戦う力も持ってない政治家はその知識を利用される。それにシロガネが接收されかねない。」

エルザム「ルシア、言葉を慎め。」

ルシア「いや、奴らが欲しがっているのは戦闘能力だけだ。政治家は眼中にないから殺されるのがオチだな。」

カール「それはないな、我々はエアロゲイターと和平交渉へ向かう、いずれは地球の危機は回避される。」

ルシア「まともに話を聞くとでも思うのか？」

カール「貴様よりは聞き分けがあるとは思うがね。」

ルシア「貴様……！シロガネごと消し飛ばしてやる……！」

エルザム「いい加減にしないか、ルシア……！」

ルシア「！？ エルザム少佐……！」

エルザム「大義を見失い私情に走るとは何事か……！おまえのその力はこのことに使われていいものではない……！」

ルシア「クツ……！」

クログネの警報が鳴りだす。

LB兵「重力震反応を感知！エアロゲイターの機動兵器が転移出現します！」

エルザム「！」

エアロゲイターの戦艦、フリーレが転移出現し、機動兵器が出撃する。

レンジ「エ、エアロゲイター！何故、奴らがここに！？話については聞いていないのか！？」

ニブハル「先程、あなたがおっしゃられたとおり・・・我々も一枚岩ではございませんので。」

ルシア「大体から異星人に地球人の常識が通じると思っていたのか？」

レンジ「う、うぬぬ・・・ここまで来て死んでなるものか！」

ニブハル「心配はいりません。どうやら、あのクロガネは我々を守るためにここへ来たようですから。」

レンジ「それは本当か！？」

カール「よし・・・。シロガネの出向準備を急がせる。」

LB兵「エルザム少佐、いかがなさいますか！？」

エルザム「シロガネを防衛する。私のトロンベを回せ。Mk-？の方をな。」

ルシア「少佐！あんな腰抜け共なんて守る価値はありません！」

エルザム「諸々の事実を説明せねばならん。そのためにはシュトレ  
ーゼマンが必要だ。無論、シロガネもな。」

クロガネから黒いヒュッケバインMk-？が出撃する。

エルザム「では、クロガネは任せるぞ。」

DC艦長「しかし、少佐とルシア様だけでは！」

エルザム「構わん。それに・・・DC戦争中、統合軍がマオ社から  
手に入れたこの機体・・・ここで性能を確かめておきたい。」

DC艦長「りよ、了解しました・・・」

エルザム「ルシアはシロガネの防衛を、今は私情を捨てて彼らを護  
れ。」

ルシア「・・・了解。」

エルザム「よし・・・では行くぞ、トロンベよ！」

敵機動兵器は2人に攻撃を仕掛ける。

エルザム「唸れ、チャクラム！」

ヒュッケバインMk-？トロンベのチャクラム・シューターがゼガ  
リアを切り裂く。

AI「……………」

ゼガリアがシロガネにオブディカル・ライフルで攻撃を仕掛ける。

レンジ「な……!?!」

ヴァルシオンVが歪曲フィールドを展開し、シロガネを護った、

ルシア「不本意だが……今だけ護ってやる。」

ヴァルシオンVが反撃態勢に入る。

ルシア「クロスマツシャー!!!」

ヴァルシオンVのクロスマツシャーでゼガリア群を蹴散らす。

エルザム（さすがに敵があれだけだとは思えん。増援が現れた場合はこちらが不利になるか……）

その時、ヒュツケバインMk-?トロンベがゼガリアに取り囲まれた。

エルザム「くっ、不覚!」

ルシア「エルザム少佐!!!」

そこにグルンガスト零式が現れる。

エルザム「あれは……」

ルシア「グルンガスト零式……！」

ゼンガー「我が名はゼンガー！ゼンガー・ゾンボルト！悪を断つ剣なり！！」

グルンガスト零式がヒュツケバインMk-？トロンベに取りついたゼガリアに接近する。

ゼンガー「一刀！両断っ！！」

取りついたゼガリアを斬艦刀で両断した。

ゼンガー「……我に断てぬものなし！」

エルザム「……生きていたか、我が友よ。」

ルシア「ゼンガー少佐！？」

ゼンガー「敵に隙を見せるとは……貴様らしくないな、エルザム。」

エルザム「フツ……。その物言い、相変わらずだな。」

ゼンガー「再会を喜んでいる暇はない。我が指名を果たすため助太刀に来た。」

エルザム「助かる。ならば、久々に馬を並べて戦うとしよう。」

そこに緑の量産型ゲシュペンストMk-？とゲシュペンスト・タイプRが進入する。

カイ「どうにも連絡が遅いと思ったら・・・敵と交戦状態にあったとはな。」

ギリラム「あれは・・・グルンガスト零式にヒュツケバインMk-  
?か。」

ルシア「カイ少佐、ギリラム少佐も・・・!」

エルザム「ギリラムもいるのか。」

ギリラム「久しぶりに教導隊全員が揃いましたね。」

カイ「ああ、そうだな。」

ルシア（この感じ・・・みんな教導隊時代に戻ったみたいだな。）

カイ「今はとにかく、シロガネを防衛するぞ!」

ゼンガー「応っ!!!」

ギリラム「いけ!スラッシュ・リッパ!」

ゲシュペンスト・タイプRのスラッシュ・リッパが敵小型機を撃  
墜する。

カイ「ジェット・マグナム!!」

ルシア「デイバイン・アーム!」

量産型ゲシユペンストMk-?のジェット・マグナム、ヴァルシオンVのデイバイン・アームでゼガリアを撃墜する。

そこに遅れてきたハガネとヒリユウ改が進入してきた。

ジャーダ「あ、あのドリル艦は・・・！」

ガーネット「参番艦のクロガネが何でこんなところに!？」

エクセレン「おまけにボスの零式もいるなんて・・・！」

ライ「あの黒いヒュツケバイン・・・もしや、エルザムか!？」

レオナ「！ エルザム少佐・・・!？」

エルザム「レオナ、それに・・・ライデイスか。」

テツヤ「艦長、間違いありません。あの艦は我々が乗っていた・・・  
参番艦のシロガネです！」

ダイテツ「ああ。密かに修理されていたようだな・・・」

カール「ハガネに告ぐ。私はEOT特別審議会議長、カール・シユ  
トレーゼマンだ。」

レフィーナ「シユ、シユトレーゼマン!？政界の黒幕が何でこんな  
所に!？」

ショーン「・・・ジユネーブで死んだわけではなかったようですな。」

テツヤ「シロガネで自分達だけ逃げ出すつもりなのか!？」

カール「言葉に気をつける。私は地球人類の未来のため、異星人との直接交渉に赴くのだ。」

ダイテツ「エアロゲイターに降伏しようとしたお前達がか？」

カール「一介の軍人が関与する問題ではない。お前達は黙ってこの艦を防衛すればよい。」

ダイテツ「……………」

テツヤ「艦長……!」

ダイテツ「やむを得ん。PT部隊出撃、シロガネを防衛せよ。」

テツヤ「し、しかし!」

ダイテツ「お前の気持ちはわかる。だが、状況を見誤ってはならん。今の我々の敵はエアロゲイターなのだ。」

テツヤ「りよ、了解……!PT部隊、出撃せよ!」

ハガネ、ヒリュウ改からPT部隊が出撃する。

ライ「リュウセイ、パターンOOCは……」

リュウセイ「ああ、わかってる。SRXへの合体はなしてことだな。」

「????」・・・どうやら、役者がそろったようね。なら、こちらも任務を遂行させてもらおうわ。」

フリーレから敵機動兵器の増援が現れる。

マサキ「行くぜ！サイフラアアッシュー!!」

サイバスターのサイフラッシュでシロガネ周辺の敵が一掃される。

リユーネ「これでもくらいな、クロスマツシャー!!」

ヴァルシオーネのクロスマツシャーで残りの敵を殲滅する。

キョウスケ「全弾持つていけ!!」

エクセレン「たーまや〜!!」

アルトアイゼンのスクエア・クレイモア、ヴァイスリッターのオクスタン・ランチャーEモードで敵を減らす。

ルシア「ここは敵艦を叩いた方がいいな・・・エルザム少佐!!」

エルザム「分かった、ゼンガーとルシアで敵艦を頼む!!」

ゼンガー「承知!!」

エルザム「G・インパクトキャノン接続!!」

ヒュッケバインMk-?トロンベがG・インパクトキャノンの発射

態勢に入る。

エルザム「撃て、トロンベよ!!」

G・インパクトキャノンがフーレに直撃し、バリアが弱まる。

ルシア「今だ!クロスマツシャー!!」

ヴァルシオンVのクロスマツシャーでフーレのレギオン・イレイザーの砲塔をつぶす。

ゼンガー「斬艦刀・疾風怒涛!!」

グルンガスト零式の斬艦刀でフーレを轟沈させた。

ゼンガー「我らに断てぬものなし!」

レンジ「おお、敵艦が沈むぞ!これで助かった・・・!」

カール「後はホワイトスターで彼らとの交渉をするのみ・・・」

フーレが爆発し、そこにエゼキエルが現れる。

ヴィレッタ「油断したわね・・・!」

レオナ「! まだ残っていた!?」

イルム「いかん、シロガネが・・・!」

ヴィレッタ「さあ、覚悟なさい!」

レンジ「こ、これはどういうことだ!? ニブハル・ムブハル!?!?!  
……!?!?ぎ、議長!あの男の姿が見当たりませんぞ!」

カール「な、何……!?!?は、謀りおつたか、ニブハル……!?!」

ヴィレッタ「今まで地球圏を混乱させて来た罪を……その命で贖  
いなさい!?!」

レンジ「な、何故だ!?何故えええええ!?」

カール「お、おのれ、ニブハル!この私を……!」

エゼキエルはカールとレンジのいる第一艦橋を破壊した。

ヴィレッタ「これでお膳立ては終わったわ。また会いましょう、ハ  
ガネ、そしてヒリユウ改……」

エゼキエルが転移し、撤退する。

ニブハル「……やれやれ、前回の南極会談の時といい……  
どうも芝居が過ぎたようですね。それに……まさか、彼らがあのよ  
うな手段に出るとは。おかげで今までの苦労が水の泡です。」

しかし、彼をハガネに戻したことは正解だったようですね。おかげ  
で貴重なデータを入手することができました。本国には結果のみを  
報告するとして……しばらくの間、この星の監視は哀れな放浪者  
達に任せるとしましょうか。」

ルシア（あそこにはニブハル・ムブハルがいたはずだ……一体ど

こに・・・?)

南極基地 格納庫

カイ「シロガネの被害は軽傷で済んだようだな。」

ギリウム「ええ、ピンポイントで第一艦橋のみを破壊したようです。」

ルシア「カール・シュトレゼマンとレンジ・イスルギだけを狙った感じがありますね・・・?」

カイ「釈然としない結果だな・・・」

エルザム「では、我々はこれで失礼させていただきます。」

ゼンガー「ルシア、キョウスケとブリットにも日々の精進を忘れぬよう伝えておいてくれ。」

ルシア「待つてください二人共!」

エルザム「ルシア・・・?」

ルシア「今の地球圏はエアロゲイターの脅威にさらされています! それには少佐達の力も必要なんです! お願いです! ハガネのみんなと同行してください!」

カイ「ルシア・・・」

ギリアム「エルザム、ゼンガー、彼の案は飲むべきだと思う。これからの戦い・・・全員が一丸となって臨まなければいけない。それはお前達も承知しているはずだ。」

エルザム「・・・・・・・・・・」

カイ「これだけのメンバーがそろえばエアロゲイターにも十分に対抗できる。ルシアの頼みを叶えてやってくれ。」

エルザム「・・・・・・・・・・分かりました。」

ゼンガー「成長したな、ルシア。」

ルシア「いえ、先程の戦いも私情に走ってしまい、議長共々シロガネを破壊してしまうところでした。俺はまだ未熟です・・・・・・・・」

ゼンガー「そうか、なら俺が直々に稽古をつけてやる。覚悟しておけ。」

ルシア「はい！」

エルザム（我が弟よ・・・私を許せとは言わん。だが、来るべき日のために、共に戦おう・・・）

自動惑星ネビーイム

イングラム「ヴィレッタ、任務御苦労だったな。」

ヴィレッタ「イングラム……」

イングラム「何かあったのか？」

ヴィレッタ「レビとジュデッカの同調に問題があるようだ。」

イングラム「そうか。彼女でも手に負えんか……」

ヴィレッタ「ジュデッカに万が一のことがあれば、『最後の審判者』が起動してしまう……そうなれば、地球どころか私達の命にも関わることになる……」

イングラム「……あれは、バルマー人が造り出した完全かつ愚かな安全装置だからな。」

ヴィレッタ「……ネビーイームの創造者について、何か新しく判明したことはあったの？」

イングラム「……いや、プロテクトは未だに解けない。バルマーの名、作戦内容、それに伴う情報……それ以外は不明だ。」

ヴィレッタ「チャンバーはあるものの、パルシエムは私達二人だけ……やはり、変ね。」

イングラム「そのためには、何としてもファースト・コンタクターが必要だ。欠けた記憶、創造者、バルマー……それらの正体がわかる。俺はそう思っている。」

ヴィレッタ「……イングラム……あなたが私の与えた最初の……そして、本当に任務……それを覚えていて？」

イングラム「本当の任務・・・だと？何だ、それは？」

ヴィレッタ「私はあなたの分身・・・そして、肉親でもある。」

イングラム「そう、だ。」

ヴィレッタ「だから・・・与えられた任務は必ず果たすわ。」

イングラム「・・・・・・・・・・・・・・・・」

第19話 完

第19話 極寒の方舟（後書き）

ルシア「フアアアア・・・」

エルザム「なんだルシア、寝不足か？」

ルシア「す、すみません少佐・・・気の抜けたところを・・・」

カイ「いや、たまには肩の荷を下ろすことも必要だ。ゆっくり休め。」

エルザム「今コーヒーを淹れる。」

ルシア「エルザム少佐のコーヒーかあ・・・久しぶりですね。」

ゼンガー「ふむ、もらおう。」

ギリアム「いたどうか。」

ルシア「はあ・・・やっぱりエルザム少佐のコーヒーは最高だなあ・・・」

ギリアム「ああ、そうだな。」

ゼンガー「エ、エルザム・・・これは・・・！」

ルシア「アレ？ゼンガー少佐、酔ってませんか？」

エルザム「少しブランデーを入れすぎたか・・・」

カイ「確かに、少し濃いな。」

ギリアム「フツ……読み通りだな。」

ルシア「でも、俺でも酔わないのに……相変わらずの下戸っぷりですね。」

ゼンガー「い、言うな……ルシア……!」

第20話

オペレーションSRW 始動

ハガネ 食堂

ルシア「パ、パーティだつて？」

エクセレン「そそ、私達の機体は最終調整中だし、決戦前の前祝い  
つてことで。」

ラッセル「いいんでしょうか？この大事な時にそんなことして・・・  
」

エクセレン「固いこと言わない。大事な時だからこそ、なの。みんなの  
団結力を高めるためにもね。」

タスク「とか何とか言つて・・・ただ飲みたいだけじゃないツスか  
？」

エクセレン「えへへ、バレちゃった？」

ルシア「顔に書いてあつたしな。」

リオ「じゃあ、お料理とかもいりますね。」

エクセレン「そうね。あ、でも・・・私はお酒調達係だから、そつち  
の方はよろしくね。」

エルザム「料理なら私達に任せてもらおう。」

ルシア「俺も手伝いますよ、エルザム少佐。」

リオ「え？ルシアってお料理出来るの？」

ルシア「教導隊時代に少佐に教えてもらってね。」

リオ「最近は何の人もお料理できないと色々困るからね。そうだが、レオナ、手伝ってくれな？」

レオナ「え！？・・・どうして？」

リオ「だって、あなた・・・なんでもソツなくこなすじゃない。料理の方もバツチリでしょ？」

レオナ「そ、それは・・・」

ルシア「えーと・・・これでクス八とラトウーニ、ガーネットにユン、アヤ大尉にラーダさんが加われば・・・和・洋・中・韓・印のフルコースが出来るな。」

リオ「よし、頑張っちゃおうと！」

エクセレン「わお！楽しみ楽しみ！」

ラッセル「では、自分は場所と食材の手配をしてきます。」

タスク「よし。んじゃ、俺はマジックのネタでも仕込んでくか。」

レオナ「・・・」

タスク「ん？どうした、レオナ？深刻な顔しちゃってさ。」

レオナ「な・・・何でもなくてよ。」

タスク「そうかい？じゃあ、楽しみにしてるぜ、ドイツ料理。」

レオナ「え、ええ・・・」

ルシア（エルザム少佐・・・レオナってまさか・・・）

エルザム（ああ、だが何事も経験が大事だ。私が指導する。）

ルシア（大丈夫なのかな・・・？）

そして、数時間後・・・

ジャーダ「YEAH！サンキュー、エブリバディ！！」

イルム「いい声だったぜ、ジャーダ！」

ジャーダ「へへ、どうも。アンコールは作戦成功後ってことで！」

リユーネ「ふん、ジャーダって歌が上手いなだね。」

ラトウーニ「連邦軍に入る前はデビュー寸前まで行ってたって。」

リユーネ「納得。プロでも食べていけるよ、きっと。」

タスク「レディース・アンド・ジェントルメン！今からこの箱に入  
って、あわれ串刺しとなる運命の美女は・・・ガーネット・サンデ  
イ少尉とエクセレン・ブラウニング少尉です！さあ、拍手拍手！！」  
ガーネット「は〜い！」

エクセレン「よろしくう！」

リュウセイ「な、何だ、あの格好！？」

キョウスケ「バニーガールだ。」

リュウセイ「いや、そりゃ見ればわかるけどよ・・・」

イルム「いよつ、ご兩人！待ってたぜ！」

ブリット「しよ、少尉！そんな恰好で恥ずかしくないんですか！？」

エクセレン「とか何とか言っちゃって・・・水着はシカトしたくせ  
に、これは見るのね。」

ガーネット「もしかして、網タイツ好き？」

ブリット「いや、むしろウサミミが・・・」

マサキ「なに言ってんだ、お前？」

ルシア「ま、まさかあの時言ってたバニーのコスチュームって・・・」

エクセレン「んふふ、ご名答。どお？」

ルシア「……分かん。」

エクセレン「あら、この美貌の良さが分からないなんて……ムツリ君もいいとこね。」

ルシア「誰がムツリだ。」

クスハ「ブリット君、大丈夫？鼻血出てるけど……」

ブリット「う……。そ、それより、キョウスケ中尉！いいんですか！？」

キョウスケ「……止めてどうなるものでもない。好きにやらせておけ。」

ブリット「は、はあ……」

ルシア「ああいう性格の女は止めたら止めたで面倒になるからな。」

エクセレン「……やっぱり後でとっちめようかしら……」

ジャーダ「タスク！いいから先進めろ、先！」

タスク「了解、了解！」

リオ「さあ、みなさん。料理はまだたくさんありますから、どんどん食べてくださいね！」

リョウト「……おいしい。一流シェフ顔負けだよ、リオ。」

ライ「ああ、大したものだな。」

ユン「ライ少尉にそう言ってもらえると自信が持てます。これもどうぞ。」

ラーダ「私とユンで作った特製トドクカリーよ。お試しあれ。」

ライ「ではいただきます……う！」

ルシア「どうした、ライデイス？」

ライ「……す、すまない、水を……」

ラーダ「あら……？ やつぱり、普通の人には辛すぎたかしら？」

マサキ「普通って……。人を実験台にすんなよな。」

リョウト「インドと韓国のコラボレーションじゃ、辛いのは当たり前だよな……」

エクセレン「タスク君……串が刺さってる。」

タスク「あれ？ おかしいな……。少尉、太ったんじゃないスか？」

リユーネ「ねえ、タスク。刺す串を間違ってるんじゃない？」

タスク「あ、ホントだ。これ、仕掛けがない方だった……」

カチーナ「やれやれ、とんだオチだぜ。」

エクセレン「んもう、しょうがないわねえ。せっかく、こんな格好までしたのに・・・じゃ、ガーネット。第二ステージに行つとく？」

ガーネット「オッケー！そっちが本命だもんね。」

タスク「よう、ラッセル。レオナがどこにいるか知らねえか？」

ラッセル「いえ・・・」

レオナ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

タスク「お、来た来た。俺、レオナの料理を楽しみにしてたんだぜ。んじゃ、いただきまーす！」

レオナ「あ・・・待って！」

タスク「むぐむぐ・・・・・・・・むぐつ！？」

アヤ「ど、どうしたの!？」

タスク「むぐぐぐ・・・・・・・・！」

ラッセル「タ、タスク・・・・・・・・！」

タスク「う、うん・・・・・・・・キュウ。」

シロ「た、倒れちゃったニヤ！」

アヤ「タスク、しっかりして！」

レオナ「ご、ごめんなさい……。実は私、料理が全然ダメで……」

ルシア「エ、エルザム少佐がいたのにこれかよ……」

エルザム「レオナ、大丈夫だ。これから改善していけばいい。」

レオナ「は、はい……」

クロ「どんニヤ人にも欠点はあるものニヤのね……」

リュウセイ「おいルシア、例の対決をするぞ。」

ルシア「ホ、ホントにやるのか……?」

ライ「対決?」

リュウセイ「ああ、超合金バーンブレイド3の三段変形対決だ。」

アヤ「バ、バーンブレイド?」

マサキ「つーかルシアがそんなもん持って……」

ルシア「ここにある。」

クロ「ちゃっかり持ってたニヤ……」

イルム「じゃあお二人さん、準備はいいか?」

リュウセイ「こっちはOKだぜ！」

ルシア「問題ない。」

リオ「レディ……GO！」

リュウセイ「おらおらおらおら！」

ルシア「くっ……この……！」

リュウセイ「コールドブレイド！次は……！」

ルシア「あれ？これどうやるんだっけ……？」

リュウセイ「ブレイクブレイド！」

ルシア「あ！間違えた、こっじゃない！」

リュウセイ「バーンブレイド！俺の勝ちだぜ！」

ルシア「できたコールドブレ……あれ？」

マサキ「形が歪じゃねえか。」

リョウト「判定は……3対0でリュウセイ君の勝ち！」

リュウセイ「よっしゃー！」

ルシア「ああくそ負けたよ……」

カイ「ルシアのあの様な姿・・・初めて見るな。」

ギリラム「ええ、教導隊や統合軍、DCにいた頃はこんな時間はありませんでしたからね。」

カイ「成長したとはいえ、まだあいつは子供だ。息抜きの時間も必要だろう・・・」

伊豆基地　　ブリーフィングルーム

サカエ「・・・対ホワイトスター攻略戦は大きく4段階に分けられる。まず、フェイズ1ではPT・AM部隊と宙間戦闘機部隊で敵機を陽動し・・・HOSジャマーでかく乱をかけ、敵戦力を分散化を図る。」

次に、フェイズ2では第2次防衛線上の選管からホワイトスターに向けてMAPWと・・・MARVを搭載した核ミサイルを発射する。」

ブリット（か、核も使うのか・・・！）

サカエ「フェイズ2が失敗に終わった場合、艦隊は可能な限りホワイトスターに接近し・・・ヒリュウ改の超重力衝撃砲、ハガネのトロニウム・バスターキャノンなどで一斉砲撃を仕掛ける。以上がフェイズ3だ。」

イルム「それでも駄目だった場合は？」

サカエ「最終のフェイズ4へ移行・・・要塞内部へPT特殊部隊・・・すなわち、お前達も部隊を内部へ送り込んで中枢部を破壊する・・・以上が、対ホワイトスター攻略戦の概要だ。」

キョウスケ「・・・了解。」

エクセレン「・・・てことは、今回の作戦の大本命は私達ってことになるかも知れないのよねえ？」

レオナ「本命というより鉄砲玉ですね。」

カチーナ「望むところじゃないさ。異星人との決着を人任せにする気もねえしよ。」

キョウスケ「敵要塞内部の強行突破か・・・おれ向きの作戦だ。」

タスク「こんな大勝負、滅多にねえ。くっつ、燃えてきたぜ！」

ライ「レイカー司令、質問があります。SRXの合体許可は出るのですか？」

レイカー「うむ。合体のタイミングは現場の判断に任せる。」

ライ「・・・最悪の場合はSRXのトリウム・エンジンを爆弾代わりにしろと？」

マサキ「おい、ちょっと待てよ。それじゃ特攻じゃねえか！」

レイカー「・・・理解して欲しい。次の作戦は我々にとって最後の対抗手段なのだ。ハガネとヒリュウ改、そしてお前達の護衛で多数の犠牲も出るだろう。しかし、我々はいかなる手段を使ってもこの戦いに勝たねばならん。作戦失敗は、人類の滅亡を意味する。」

マサキ「だがよ、成功すればこの戦いは終わるんだろ？」

レイカー「ああ、そうだ。」

マサキ「なら、やってやる。もう人が死ぬのも、燃える街を見るのも厭だからな。俺達で、必ずホワイトスターを破壊してやるぜ！」

リュウセイ「ああ・・・！」

キョウスケ「どうやら、今が全額賭けする時らしいな。・・・いこう。」

ルシア（この戦いが終われば・・・俺はバルマーと本当の決別ができる。必ずこの地球を護つて見せる・・・！）

レイカー「作戦開始時刻は明後日2300だ。なお、現時刻より今回の作戦名を『オペレーションSRW』と呼称する。では、諸君の健闘を祈る。以上、解散だ。」

サカエ、レイカーがブリーフィングルームから出た。

ブリット「オペレーションSRW・・・」

タスク「なあ、SRWって何の略だ？」

ブリット「さあ・・・?」

エクセレン「ええっと、Sはセクシーで、Rはロマンス、Wはウェポンよん。」

ブリット「せ、セクシー・ロマンス・ウェポン?本当ですか、先生?」

エクセレン「そりゃもう・・・めくるめく感じよん。」

タスク「どんな武器やねん。」

キョウスケ「誰が命名したんだ?・・・しかし、決まっているなら仕方あるまいが・・・」

ライ「・・・そんなことはないと思うが」

エクセレン「ノリの悪いことで」

タスク「・・・結局エクセレン少尉も知らないってことツスね。」

ブリット「じゃあ、何なんだろう?」

ルシア「うん・・・駄目だ、思いつかない。」

リュウセイ「へっ、決まってるじゃねえか。SRWってのはな、SUPER ROBOT WARSの略さ!」

タスク「おいおい、リュウセイ・・・いくら何でもそりゃねえだろ。」

マサキ「寝ぼけてんのか？」

ライ「出直してこい。」

エクセレン「リュウセイ君は退学ね。」

リュウセイ「ツ、ツッコミ敵しいねえ。」

ルシア「なるほど……そういつことか。」

エクセレン「こっちはこれで納得しちゃってるわよ。」

ホワイトスター 宙域

オペレーションSRWが開始された。

エイタ「第5、第6航空隊、及び第13混成小隊、S08フィールドで敵機動部隊と接触！」

ユン「第7航空隊、及び第8、第9混成小隊、E13フィールドからの陽動に成功！」

オペレーター「第4、第5艦隊、第2次防衛線上に到達！」

ノーマン「よし、HOSジャマー発動。フェイズ2に移行せよ。」

オペレーター「了解！アーク1より各艦へ！これよりフェイズ2に移行する！」

テツヤ「こちらステイル2、了解！」

ショーン「ドラゴン2、了解。」

ノーマン「第4、第5艦隊に伝達！核ミサイルを発射せよ！」

オペレーター「了解！」

ショーン（これでホワイトスターを破壊できればいいのですが……）

エイタ「核ミサイル群、目標到達まであと10秒……9……8……」

ホワイトスターに核ミサイルが着弾する。

ジャーダ「やったか！？」

ラトウーニ「違う、あれは……！」

ギリラム「命中前に爆発した……！？」

ノーマン「要塞周辺に強力なエネルギーフィールドの発生を確認！ミサイルは全弾防がれました！」

ノーマン「な……！」

オペレーター「目標に損害なし！さらなるフィールド発生……！」

レフィーナ「そんな・・・！核爆発を完全に防ぐなんて・・・」

シヨン「恐らく、ホワイトスターは積層状の結界で防御されているでしょうな。」

レフィーナ「積層状・・・！」

シヨン「つまり、衝撃で表層が破壊されても、内層の結界が発生する・・・それを瞬時の内に繰り返し返しているでしょう。あれを破るには、至近距離からの一点集中攻撃しかありませんな。」

ハガネ、ヒリユウ改の警報が鳴り響く。

レフィーナ「何事です！？」

ユン「！艦長、重力震反応が！！」

撃たれははずの核ミサイルが転移してきた。

テツヤ「何！？ミサイルだけを転移させてきた！？」

エイタ「ヒューエンデンとアリゾナが狙われています！回避、間に合いません！」

核ミサイルが戦艦二隻に着弾し、轟沈する。

テツヤ「！！」

ダイテツ「2隻とも轟沈か・・・！」

エイタ「さらに転移出現してくる物体あり！戦艦クラスです！！」

ハガネ、ヒリユウ改の前にフーレの艦隊が転移出現し、機動兵器が出撃してきた。

テツヤ「奴らめ、艦隊戦を挑む気か！」

シヨーン「ふむ……。ジュネーブの時と同じように我が艦隊の頭を潰しにきたか・・・」

レフィーナ「それとも、私達にさらなる試練を与えに来たか・・・ですね？」

シヨーン「ええ。先程の戦法なら、我々の艦を沈められるはずですからな。」

ノーマン「やむをえん。これよりフェイズ3に移行し・・・至近距離からの艦隊砲撃でホワイトスターの破壊を行う！全艦は何としても敵艦隊を突破し、指定ポイントに到達せよ！」

ダイテツ「PT部隊を出撃させろ！何としても指定ポイントに到達する！」

テツヤ「了解！」

ハガネ、ヒリユウ改からPT部隊が出撃する。

キョウスケ「こちらアサルト1だ。聞いての通り、戦艦の防衛を最優先で頼む。」

ブリット「要は味方の戦艦を全部、目標ポイントへたどり着かせればいいんですね？」

キョウスケ「ああ。」

エクセレン「んじゃま、おじ様方のエスコートといきましょうかね！」

リュウセイ「ライ！SRXに合体だ！」

ライ「了解！」

Rシリーズが合体しSRXになった。

リュウセイ「よし！合体完了！」

ライ「リュウセイ。」

リュウセイ「何だ？」

ライ「わかっているな。大尉のこと・・・」

リュウセイ「ああ。ヤバくなったらR-3を切り離すんだろ？」

ライ「フツ・・・お前も頭の回転が速くなつたな。」

リュウセイ「うるせえ。宇宙空間なら脚はただの飾りだ。なくても戦える。それに・・・最悪の場合、SRXは俺一人で動かしてやる。その代わり、サポートを頼むぜ。」

ライ「誰に向かってそれを言っている？」

リュウセイ「へっ……。アテにしてるぜ、ライ。」

ライ「俺もな。」

ルシア「とにかく、立ち塞がる奴らを優先に落とすぞ！」

マサキ「行くぜ！アカシック・バスター！！！」

サイバスターのアカシック・バスターでフーレの動力部を破壊した。

リュウネ「まとめてかかってきな！サイコブラスター！！！」

ヴァルシオーネのサイコブラスターで無人機群を一掃する。

ルシア「クロスマッシャー、発射！！！」

ヴァルシオンVのクロスマッシャーでフーレを撃沈した。

ゼンガー「立ちふさがる者は全て斬り捨てるのみ！チエストオオオオオ！！！」

エルザム「行くぞ、トロンベ！」

ヒュッケバインMk-?トロンベのロシユセイヴァーでゼガリアを斬り、グルンガスト零式の斬艦刀でフーレを両断する。

リュウセイ「いけえええええ！ガウンジエノサイダー！！！」

SRXのガウンジェノサイダーでフーレを撃沈する。

ライ「リュウセイ！敵の大群が接近しているぞ！」

リュウセイ「わかってる！テレキネシス・ミサイル発射！」

ブリット「G・インパクトキャノン接続！GO！」

ルシア「メガ・グラビトンウェーブ！」

SRXのテレキネシス・ミサイル、ヒュッケバインMk-?のG・インパクトキャノン、ヴァルシオンVのメガ・グラビトンウェーブで敵大群を一掃する。

エイタ「突破口が開けました！」

テツヤ「機関最大！目標ポイントまで全速前進！」

ハガネ、ヒリュウ改、アーク1、シロガネは目標ポイントに急行する。

エイタ「目標ポイントに到達しました！」

ダイテツ「よし！一気にこの宙域を突破する！」

ユン「艦長、本艦は目標ポイントの到達に成功しました！」

レフィーナ「機関、最大船速！この宙域を突破します！」

連邦軍艦長「貴官らの援護に感謝する！」

オペレーター「目標ポイントへ到達！」

ノーマン「このままホワイトスターに急行するぞ！」

オペレーター「了解！」

そこに大型ミサイルが転移してきた。

ノーマン「何っ……!?!？」

オペレーター「お、大型ミサイルが転移出現!!！」

ノーマン「緊急回避!!！」

回避が間に合わず、アーキューに直撃した。

オペレーター「きゃああああつ!!！」

ノーマン「うぬっ……まだだ!まだ沈んではならん!!ホワイトスターに一矢報いるまでは……!!！」

キョウスケ「各艦の突破を確認した!各機、続け!!！」

ルシア「……キョウスケ、少しいいか？」

カイ「ルシア、一体どうした？」

ルシア「敵の攻撃でテスラ・ドライブが損傷しました。応急修理は出来るので先に行って下さい。」

ギリアム「・・・わかった。」

マサキ「なら俺も残ろうか？サイバスターならすぐに・・・」

ルシア「いや、大丈夫だ。先に行ってくれ。」

キョウスケ「わかった、遅れるなよ。」

ルシア「わかってる。」

TP部隊はハガネ、ヒリュウ改を追っていった。

ルシア「・・・・・・もういいんじゃないんですか？」

暗礁区域からグランゾンが現れた。

シュウ「私の気配に気づくとは流石ですね。」

ルシア「ヴァルシオンVにも似たような装置がありますから。それにしても、見てるだけっていうのは関心しませんね。」

シュウ「私の力がなくとも、あなた達なら大丈夫でしょう。」

ルシア「そんなものなのですかね・・・」

シュウ「ルシア君、この戦いが終わっても、また新たな戦いが起きます。その時あなたは・・・どうしますか？」

ルシア「決まっています、この手で地球を護る。今も、そしてこれ

からも変わりません。」

シュウ「……それを聞いて安心しました。では、皆さんのところに戻ってください。」

ルシア「ええ、マサキにはこの事は黙っておきます。後々面倒なことになるかねませんからね。」

シュウ「そう言っただけだと助かります。」

ルシア「では……シラカワ博士。」

ヴァルシオンVはホワイトスターに向かう。

シュウ「……私はメテオ3の監視に戻りましょう。万が一の事態に備えねばありませんからね。」

第20話 完

ルシア「うん……………」

マサキ「どうした？」

ルシア「最近変な夢見るんだよ……………」

マサキ「どんなだ？」

ルシア「リユーネに腕相撲で負けて…………腕がもげてるんだよ。」

マサキ「おいおい！どんだけグロテクスな夢見てんだよ！？」

リユーネ「私が何だって？」

ルシア「な、何でもない！」

リユーネ「まあいいや。ねえ、腕相撲しない？」

ルシア（こ、これって正夢！？）

リユーネ「どうしたの？早くしようよ。」

ルシア「……………あ！ヴァルシオンVが俺を呼んでいる〜！」

リユーネ「ちよつと！アンタ今日非番でしょ！待ちなさいよー！！」

エクセレン「んふふ、兄妹仲が良くでお姉さん感激よん。」

クロ「多分そうじゃニヤいニヤ。」

イルム「しかもネタパクリかよ・・・」

## 第21話 白き魔星を撃て

ホワイトスター 周辺宙域

エイタ「第3、4艦隊と第14、17航宙隊が全滅！敵機動部隊が第3次防衛線を突破しました！」

テツヤ「第1次防衛線付近まで食い込んでいるのは我々だけか……！」

エイタ「アーク1より入電！我、操舵不能！我、操舵不能！」

テツヤ「何！？」

エイタ「ああつ！グレートアークが……！！！」

グレートアークに攻撃が集中し、撃沈された。

エイタ「ご、轟沈です……！」

ダイテツ「ノーマン少将……！！！」

テツヤ「艦長！このままでは艦隊が全滅します！」

ダイテツ「うぬっ……！エイタ、ホワイトスターとの相対距離は……！」

エイタ「58000です……！」

ダイテツ「ヒリュウ改とシロガネ、PT部隊は!?」

エイタ「クロガネの援護により健在です!本艦の後方で敵艦と交戦中!」

ダイテツ「ならば、クロガネと共にシロガネを後方援護に回せ!本艦はこれよりホワイトスターへ突撃する!」

テツヤ「しかし、艦長!本艦の……いえ、ヒリュウ改の火力を合わせたとしても……ホワイトスターの破壊どころかエネルギーフィールドすら破られるかどうかも定かではありません!」

ダイテツ「わかっておる!ここは最後の手段を使うしかない!」

エイタ「そ、それはフェイズ4……PT部隊による要塞内部中枢部の破壊……ですか!」

ダイテツ「うむ。だからこそ、何としても本艦のトリニウム・バスターキャノンで……ホワイトスター内部への突破口を開かねばならん!」

エイタ「……!」

テツヤ「覚悟を決める、エイタ。キョウスケやリュウセイ達に比べれば我々の任務はまだマシな方だ。」

エイタ「そ、そうですね……。では、艦首トリニウム・バスターキャノンのエネルギー充填を開始します!」

テツヤ「よし、行くぞ!機関、最大船速!ハガネ突撃!」

ダイテツ「こちらダイテツだ、各機は指定ポイントまで移動し・・・艦首トロニウム・バスターキャノンで敵要塞のエネルギーフィールドを破り、突破口を開く。」

キョウスケ「突破口・・・ならば、最後の賭けに出るといっわけですね？」

ダイテツ「そうだ。すまんが、頼むぞ・・・キョウスケ中尉。」

キョウスケ「了解・・・！」

エクセレン「あゝあ・・・やっぱ、結局こうなっちゃいのよねえ。」

イルム「ま、貧乏くじを引くのは俺達の宿命みたいなもんだな。」

エクセレン「ていうか、ダーリンがそういう運を必要以上に呼び込んでいるのかも・・・」

キョウスケ「うるさいぞ、エクセレン。それと・・・ダーリンはよせ。」

エクセレン「あらん、たまには気分が変わっていいんじゃない？」

リユーネ「ったくもう・・・何の気分なんだか。」

マサキ「相変わらず緊張感のねえ奴だぜ。」

アヤ「でも、おかげで肩の力が抜けたわ。」

クスハ「エクセレンさんって、いつもそうやって私達を元気づけてくれているんですね……?」

ブリット「それ……買いかぶり過ぎだよ、クスハ。」

エクセレン「ちょっと、そこ！余計なツッコミ入れない！」

キョウスケ「……無駄話はそこまでだ。みんな、ハガネの援護と進路上の敵機の排除を頼むぞ。」

マサキ「よし、任せな！」

ルシア「絶対ここを突破してみせる……!」

ダイテツ「行くぞ、テツヤ大尉。何としても本艦を目標ポイントへ到達させるのだ。」

テツヤ「了解！では、行きます！」

ライ「リュウセイ、敵の数が多い。合体せず分散して戦うぞ。」

リュウセイ「わかった、行くぜ！」

テツヤ「主砲、相対速度合わせよし！」

ダイテツ「前部主砲、一斉射撃!!」

シヨーン「主砲、1番から4番までの発射準備を完了しました！」

レフィーナ「各砲、発射！敵機を逃がしてはなりません！」

ハガネ、ヒリュウ改の遠方射撃で敵を減らす。

エクセレン「お残しは許さないわよん！」

ブリット「G・インパクトキャノン、発射！」

ラトウーニ「逃がさない・・・！」

タスク「こいつで消し飛ばせ、ブラスター！！！」

ヴァイスリッターのオクスタン・ランチャーEモード、ヒュッケバインMk-?のG・インパクトキャノン、ビルドラプターのハイパービームライフル、ジガンスクードのギガ・ワイドブラスターで進路上の敵を排除する。

キョウスケ「撃ち抜く！！！」

ライ「ハイゾル・ランチャー、発射！」

リュウセイ「T-LINKナツコオ！！！」

アルトアイゼンのリボルビング・ステーク、R-2パワードのハイゾル・ランチャー、R-1のT-LINKナツクルで戦艦に接近する敵機を排除する。

テツヤ「艦長！目標ポイントに到達しました！」

エイタ「艦首トロニウム・バスターキャノン、エネルギー充填90%！！！」

ダイテツ「よし、ホワイトスターへの攻撃を……」

そこに敵の増援が出現し、紫色のエゼキエルが出現する。

ゲーザ「ヒャーハツハツハツハツハッハッハッ！」

ヴィレッタ「ゲーザか!？」

ルシア「な、何だあいつ……!」

ゲーザ「もっと盛り上げてやるぜえ、この戦いをよお!!」

ギリアム「! 奴の狙いはハガネか!？」

エゼキエルのオルガ・キャノンがハガネの艦首部分を掠める。

ゲーザ「ヒャツハツハツハッハッハッ! バツチリ! 大当たりだつての!!」

ルシア「い、今の声……まさか……!？」

エイタ「か、艦首部分に被弾!!」

テツヤ「何!？」

エイタ「包囲盤破損、測的不能!」

テツヤ「バスターキャノンは撃てるのか!？」

エイタ「砲身損傷により、長距離砲撃は不可能です!!」

テツヤ「な、何だと・・・!?」

ダイテツ「うぬつ、ここまでか！艦を一時後退させる！」

テツヤ「後退ですって!？」

ダイテツ「そうだ。その後、総員に退艦命令を出せ！」

テツヤ「どういうことです、艦長!？」

ダイテツ「ワシがハガネを敵要塞のエネルギーフィールドへ直接ぶつけ・・・バスターキャノンの零距离射撃で、内部への突破口を開く！」

テツヤ「拒否します！艦長一人でこの艦を動かすことは出来ません！」

ダイテツ「オートクルーズ機能を応用すれば、可能だ！」

テツヤ「しかし！」

ダイテツ「命令を復唱せんか、大尉！お前達は次なる戦いのためにここから脱出するのだ!!」

テツヤ「！ま、まさか・・・このハガネを自沈させるおつもりですか!？」

ダイテツ「そうではない・・・ワシは最後の最後まで戦い抜く・・・！死んでいった多くの部下に報いるためにも・・・ワシに務めを果た

させてくれ・・・!!」

テツヤ「それでも・・・拒否します!」

エイタ「じ、自分も・・・ここまで来て逃げるのは嫌です!」

ダイテツ「お、お前達・・・!」

テツヤ「それに、自分には策があります!」

ダイテツ「策だと・・・!?!」

テツヤ「はい!この艦の特性を生かせば・・・艦長、どうか許可を  
!」

ダイテツ「よかろう・・・!やってみせろ!」

テツヤ「了解!エイタ、トロニウム・バスターキャノンの有効射程  
距離は!?!」

エイタ「現在、6800までダウンしています!」

テツヤ「それだけあれば充分だ!残る力をふりしぼって・・・指定  
ポイントまで突貫するぞ!!」

エイタ「了解!!」

レフィーナ「ユン、ハガネは何と言っているのです!?!」

ユン「再度突貫し、トロニウム・バスターキャノンによる攻撃を行

うそつです!」

レフィーナ「!? それではハガネも巻き込まれることに・・・!」

ショーン「・・・いや、スペースノア級の特性を生かせば、あるいは・・・」

レフィーナ「特性!? もしかして、艦首モジュールを!？」

ショーン「とにかく、ハガネを援護しましょう。敵はさらなる増援を送り込んでくるはずですからな・・・!」

キョウスケ「聞いたな、再度ハガネの進路を確保するぞ!」

ブリット「了解!」

ゲーザ「さあて、さっきのでレビ様の命令は完了したから・・・あとは俺の好きにやらせてもらうぜえ! ヒヤハハハハ!」

ヴィレッタ「何をする気だ!？」

ゲーザ「決まってるんだろ!? 地球人共を皆殺しにするんだよ!」

ヴィレッタ「サンプルを殺すというのか? それはレビ様の命令と矛盾しているぞ。」

ゲーザ「うるせえ! レビ様の命令はさっき完了したって言うてるだろう! だから、後は俺の好きにやってもいいんだっての!」

ヴィレッタ「こいつ・・・言っていることが支離滅裂ね。アタッド

が何かしたのか?)

ゲーザ「よし、まずはためえから血祭りだ!!」

ヴィレッタ「!!」

ゲーザ「ヒヤハッ! てめえが二重スパイだっていうネタは上がってんだよ!!」

ゲーザはヴィレッタの乗るエゼキエルにオルガ・キャノンに向けて。

ゲーザ「スパイは死にやがれ!!」

オルガ・キャノンがエゼキエルに直撃する。

ゲーザ「オラオラ! 死にやがれ、裏切り者めえ!」

ヴィレッタ(どうやら・・・ここが潮時のようね・・・)

ヴィレッタのエゼキエルが破壊された。

リュウセイ「あいつ、味方を落とすやがった!？」

マサキ「仲間割れか!？」

リュウセイ「それはわからねえが、あの感じは・・・!」

マサキ「ああ、テンザンの野郎にそっくりだぜ・・・!」

ルシア「エアロゲイターに捕えられて利用されているな。」

ライ「この際、奴の正体は何なのかは関係ない。ここを突破しなければ、連邦軍は敗北するぞ。」

リュウセイ「あ、ああ……！（俺達も捕まったら……あいつみてえに……！？）」

ゲーザ「次はてめえらの番だぜえ！ヒヤハ！ヒヤハハハハ！！」

キョウスケ「ルシア、この場は俺達に任せて奴の相手を頼む。」

ルシア「わかった、任せてくれ。」

マサキ「俺達も行くぜ。」

リユーネ「うん、あいつは放ってはおけないよ。」

ルシア「よし、行くぞ！」

ヴァルシオンV、サイバスター、ヴァルシオーネはゲーザのエゼキエルに接近する。

ゲーザ「ホ！やられキャラがよりどりみどりだぜ！」

ルシア「やっぱりお前……テンザン・ナカジマか！」

ゲーザ「何だテメエはよ……ツツ！？ま、また頭痛が……！何だっつてんだテメエはよ！」

ルシア「奴らに調整されても記憶は少し残っているようだな。」

ゲーザ「この野郎・・・上からズケズケとうるさくて仕方がなかったんだ・・・！汚え血をぶちまけて死にな！！！」

エゼキエルがレーザーブレードでヴァルシオンVに斬りかかるが、  
デイバイン・アームで受け止める。

ルシア「その傲慢さは相変わらずか！！！」

マサキ「行くぜ！ディスカッター！！」

サイバスターのディスカッターで割って入り、距離をとる。

ゲーザ「くそ！邪魔しやがって・・・！」

リユーネ「ホラホラ！ブーツとしてんじゃないよ！！」

ヴァルシオーネのハイパービームキャノンで狙い撃つが、G・フォ  
ールで防がれる。

ゼンガー「我らも加勢するぞ、ルシア！！」

エルザム「トロンベよ・・・今が駆け抜ける時！！」

ヒュッケバインMk-?トロンベのフォトン・ライフルでゲーザの  
エゼキエルを攻撃する。

ギリアム「予測通りだ、そこだ！！」

ゲシュペンスト・タイプRのニュートロンビームでエゼキエルを中

破に追い込む。

ゲーザ「ちょこまかと鬱陶しい奴らだ・・・！まとめて吹き飛ばしてやるよ！！」

エゼキエルがオルガ・キャノンの発射態勢に入る。

ルシア「狙い通りだ、クロスマツシャー！！」

ヴァルシオンVのクロスマツシャーでオルガ・キャノンを破壊する。

ゲーザ「な！？またテメエはそうやって邪魔ばかりじゃがって！！」

ゼンガー「隙を見せたな！斬艦刀・一文字斬りiiiiiiii！！」

グルンガスト零式の斬艦刀でエゼキエルを破壊した。

ゲーザ「ヘッ・・・なかなかやるじゃねえか・・・だがよお、まだゲームはこれからだぜえ！」

エゼキエルが急速に再生し、無傷の状態に戻った。

マサキ「再生しやがったぞ！？」

ルシア（あれはズフィールド・クリスタル・・・俺は一体バルマーの記憶を何処まで持っているんだ・・・）

カイ「だが、足止めが出来た。今頃ハガネは指定ポイントに到着し  
たはずだ。」

エイタ「敵要塞まで距離7000・・・6900・・・！バスター  
キャノンの有効射程距離に入ります！！」

ハガネが前進するところにエネルギーフィールドで妨げられる。

エイタ「！！ 前方に強力なエネルギーフィールド展開！か、艦が  
進みません！！」

テツヤ「それは計算の内だ！補機ロケットエンジンクラスターのオ  
ーバーブーストを使え！！」

エイタ「了解！オーバーブースト、点火！！」

テツヤ「総員、対衝撃・対閃光防御！続いて、重力ブレーキ解除！  
！」

エイタ「じゅ、重力ブレーキを！？そんなことをすれば、発射の反  
動で艦体がつ！」

テツヤ「いいからやれ！発射と同時に艦首モジュールを切り離すん  
だ！」

エイタ「りよ、了解！」

ゲージ「馬鹿が！そう何度も同じ手が通用すると思うなんての！！」

エイタ「ぜ、前方に敵機が！こちらを狙っています！！」

テツヤ「構うな！発射準備！！」

ゲーザ「させるか！てめえらはここれくたばるんだっての！ヒヤ―  
ッハッハッハッハッハア！！」

ルシア「俺が奴の足を止める！」

テツヤ「来るな！巻き込まれるぞ！！」

ルシア「テツヤ大尉・・・！一体何をやる気なんですか！？」

テツヤ「バスターキャノン発射準備！急げえ！！」

エイタ「了解！出力確認、バイパス開放！目標との相対距離・速度  
確認！！」

ハガネの艦首トロニウム・バスターキャノンが発射態勢に入った。

エイタ「発射10秒前！」

テツヤ「最終安全装置、解除！」

エイタ「最終安全装置、解除！総員、対衝撃・閃光防御！」

テツヤ「発射5秒前！奴ごとホワイトスターを・・・！あの白き  
魔星を撃てええええええ！！」

ハガネの艦首トロニウム・バスターキャノンが発射され、ゲーザの  
エゼキエルが巻き込まれる。

ゲーザ「ギャ、ギャアアアアアアアア！！」

ネビーイームのエネルギーフィールドが砕けた。

ユン「やりました！エネルギーフィールドの一部が消滅！内部へ突入できます！」

レフィーナ「ハガネは！？ハガネはどうなったの！？」

ユン「お、おそらく、爆発に巻き込まれて・・・！」

ショーン「いや、あれを！ハガネは無事ですぞ！」

レフィーナ「！！！」

ユン「確認しました！ハガネはホワイトスターから離脱しつつあります！でも、一体どうやって・・・！？」

ショーン「バスターキャノンの発射と同時に艦首モジュールを切り離し・・・その反動で脱出したようですな・・・！」

ユン「な、なんて無茶な・・・！」

ショーン「いえ。単純かつ無謀極まりない策ですが・・・テツヤ・オノデラ・・・さすが、ダイテツ中佐が見込んだ男だけのことはありますな。」

レフィーナ「ええ・・・！」

ユン「艦長、エルザム少佐より通信が入っています！」

レフィーナ「繋いでください！」

エルザム『こちらはエルザム・V・ブランシュタイン少佐です。これより後方待機させていたクロガネで八ガネの一部のクルーを収容し・・・艦首超大型回転衝角で敵要塞外壁を破壊。PT部隊と共に内部へ突入します。』

レフィーナ「了解です！では、本艦も・・・！」

エルザム「いや、貴艦には後方にいるシロガネの援護をしていただきます。」

レフィーナ「ええっ！？クロガネ一隻で敵要塞内に突撃するつもりですか！？」

エルザム『心配ご無用・・・この三番艦クロガネは、このような時のために造られたのですから。』

レフィーナ「・・・！」

エルザム『それに・・・レフィーナ中佐には我々の帰る場所を守っていただく必要があります。』

レフィーナ「・・・わかりました。貴艦のご武運を祈ります・・・！」

ルシア（ついにネビーイム内部に突入だ。この手で決着をつけてやる！）

第21話

完

第21話 白き魔星を撃て（後書き）

ルシア「ええとこれがこうで……ああ駄目だ！」

ライ「どうした？」

ルシア「あの時の、バーンブレイドが元に戻らないんだよ……どうしたのか……」

アヤ「あら……四角いおもちゃみたいな状態になってるわね。」

ルシア「リュウセイ、何とかしてくれ……」

リュウセイ「これが？どれどれ……うん……」

ルシア「ど、どうだ？」

リュウセイ「……お前、一体どういう変形の仕方したんだよ。ブレイクとワールドがごちゃ混ぜになってんぞ？」

ルシア「そうなのか？それよりこれ直るのか？」

リュウセイ「駄目だな、こりゃ買い直すしかないな。」

ルシア「そんなあ……」

キョウスケ「俺が直してやろう。貸してみる。」

ルシア「大丈夫なのか？」

キヨウスケ「分の悪い賭けは嫌いじゃないぞ。」

ルシア「分が悪いのかよ!? い、いや、もういいや後は俺が。」

バキツ

キヨウスケ「ん・・・?」

ルシア「あ・・・。」

エクセレン「あゝらら、壊しちゃった。」

キヨウスケ「すまん。」

ルシア「とほほ・・・。」

## 第22話 異星人の虫籠

ホワイトスター      ファクトリー

ダイテツ「では、いいのだな？エルザム少佐。」

エルザム「スペースノア級の扱いに関しては、自分より中佐の方が上です。それに、自分は人型機動兵器へ乗る方が性に合っていますので。」

ダイテツ「了解した。では、クロガネを預かるぞ。」

リョウト「それにしても、ここは……？」

ラトウーニ「重力や空気もある……。まるでスペースコロニーの中みたい。」

ルシア「いや、空もあるところを見ると……人工の地球だな。」

ジャーダ「何で異星人の要塞の中にこんな空間があるんだ……？」

ガーネット「さあ……？」

キョウスケ「……………」

ダイテツ「状況は？」

エイタ「大気成分、重力、気圧……ほぼ地球と同じです。」

ブリット「ここ、エアロゲイターの居住区なんだろうか……？」

レオナ「その割には建物がないし、人が住んでいる気配もないわね。」

ギリアム（ラドム博士が言ったように……ホワイトスター内の間はわずかなのか？それとも、ここにいないだけなのか……）

ガーネット「でも、不思議ねえ。ホワイトスターの中にこんな場所があるなんて。」

ジャーダ「ああ、まるで牧場みてえだな。」

ギリアム（牧場……言い得て妙かも知れんな。）

リョウト「そんな悠長なことを言ってる場合じゃないと思いますけど……。」

キョウスケ「いずれにせよ、今は敵の出方を見るしかない。各機、警戒しつつ前進するぞ。」

クロガネ、PT部隊がファクトリー内を前進する。

ルシア「……………」

マサキ「どうした、ルシア？」

ルシア「いや……どうも警戒が薄すぎると思ってな……。」

エルザム「こちらの出方を見計らっているのかもしれないな。各機、  
周辺の警戒を怠るな。」

レオナ「了解です、エルザム少佐……」

タスク「……なあ、レオナ。」

レオナ「何？作戦中のプライベート通信は厳禁よ。」

タスク「ちよつとだけ。な？」

レオナ「……仕方ないわね。何なの？」

タスク「俺さ……俺、諦めねえから。」

レオナ「！」

タスク「今、言いたいのはそのただけ。続きは……この戦いで  
生き残ってから言わせてもらうぜ。」

レオナ「タスク……」

エイタ「！ 12時方向に重力震を感知！」

テツヤ「各機、迎撃体勢を取れ！敵機がこのエリアの中央に現れる  
ぞ！」

中央エリアにアーマードモジュールが転移してきた。

ブリット「アーマードモジュール！どうしてこんな所に！？」

ラッセル「先に要塞内へ侵入した部隊でしょうか・・・？」

リウセイ「そんな馬鹿な。ホワイトスターへ突入したのは俺達だ  
けなんじゃないのか！？」

ラッセル「もしかしたら、敵に捕らえられていた部隊なのかも・・・」

エルザム「この認識コードは確かにDCの物・・・。だが、既に登録は抹消されている。」

ライ「なんだって・・・？」

エルザム「つまり、エアロゲイターに捕えられ、彼らの尖兵と化した  
同胞達というわけだ・・・！」

クスハ「そ、そんな・・・！あれに乗っているのは私達と同じ地球  
人だって言うんですか！？」

エルザム「おそらくな・・・！」

クスハ「じゃ、じゃあ・・・あの人達を助けないと！」

ルシア「・・・それは無理だ。」

クスハ「どうしてですか！？私だって、ブリット君達が助けてくれ  
たおかげで・・・」

ギリアム「いや、ルシアの言うとおりだ。君の場合はT・LINKによる制御方法で操られていたため・・・システムを破壊すれば良かったが、おそらく彼らは直接的な改造を受けていると思われる。」

ルシア「つまりは・・・元に戻る可能性は、ゼロに等しい。」

クスハ「・・・・・・・・!!」

カチーナ「クスハ、甘い考えは捨てな。あたし達は戦争をやっただよ。」

クスハ「・・・・・・・・は・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

リュウセイ「くっ・・・・・・・・よくもこんな・・・・・・・・!」

ライ「薄々予想していたが、いざ現実を目の前になると・・・・・・・・」

キョウスケ「気にするな。」

エクセレン「・・・・・・・・ドライね。」

キョウスケ「そう考えなければ、怒りを飲み込めん・・・・・・・・」

マサキ「どうしようもねえってのかよ・・・・・・・・!」

ルシア「一撃で終わらせよう。それが、一番いい方法だ。」

イルム「俺達を恨むなよ・・・・・・・・!ファイナル・ビーム!」

グルンガストのファイナル・ビームで敵のバレリオンを減らす。

ブリット「シシオウブレード！」

ヒュッケバイン Mk - ? のシシオウブレードでガーリオンを斬り捨てる。

クスハ「マキシ・ブラスター！」

グルンガスト式式のマキシ・ブラスターでリオンを撃墜する。

アヤ「ストライク・シールド、いきなさい！」

ライ「いけ、チャクラム！」

リュウセイ「ブーステッド・ライホオ！！」

R - 3 パワードのストライク・シールド、R - 2 パワードのビーム・チャクラム、R - 1 のブーステッド・ライフルで敵をせん滅した。

エイタ「敵機の全滅を確認！」

キョウスケ「・・・奴らも手札を全て見せたわけではあるまい。来るぞ。」

マサキ「ああ、わかってるぜ。」

アヤ「！ この感じは・・・？」

アヤに念が走った。

アヤ「う！くうっ！」

リュウセイ「アヤ!？」

アヤ「こ、この波動……！っ、強すぎる……！」

ライ「大尉、しっかりしてください！」

ラーダ（この波形パターンは……ジュネーブの時の……いえ、マイ・コバヤシのものと同じだわ……！）

ルシア（前にも感じたことがある念だな……だが、一体……？）

ラーダ「アヤ、T-LINKコネクターを40%カットして！」

アヤ「は、はい……！（！ 念動波が止んだ!？）」

リオ「アヤ大尉、大丈夫ですか!？」

アヤ「え、ええ……（何だったのかしら、今のは？まるで「ちらの心を見透かすような……）」

エイタ「艦長！新たな敵機が転移出現します!！」

転移出現してきたのは、ヴァルシオン改だった。

リュウネ「あれはヴァルシオン改!！」

リュウト「あの機体はもう残っていないはず……」

ギリアム「おそらく、収集したデータを基にして造られた複製だな。」

リユーネ「親父のヴァルシオンならいざ知らず、量産型の偽物なんかであたし達は倒せやしないよ！」

ゼンガー「立ち塞がる者は何人たりとも打ち倒すのみ！行くぞ！」

ルシア（まさかあの時イングラムが・・・いや、それなら俺のヴァルシオンVが複製されるはずだ・・・）

リオ「手加減はなしよ！」

リョウト「これなら！」

量産型ゲシュペンストMk-?タイプTT、ビルドシュバインのメガ・ビームライフルでヴァルシオン改をけん制する。

タスク「こいつで潰れる！ジガンデ・ウラガーノ！」

隙を突いてジガンスクードのジガンデ・ウラガーノでヴァルシオン改を撃墜した。

ブリット「G・インパクトキャノン接続、GO！」

クスハ「天に凶星、地に精星、必殺・計都瞬獄剣！」

ヒュツケバインMk-?のG・インパクトキャノンでバリアを破り、グルンガスト式式の計都瞬獄剣で撃墜した。

リュウセイ「SRXに合体するぞ！」

ライ「大尉、大丈夫ですか？」

アヤ「ええ、私のことは気にしないで。」

リュウセイ「行くぜ！ヴァリアブル・フォーメーション！！」

RシリーズはSRXに合体した。

リュウセイ「一撃で仕留めてやる！念動結界・・・ドミニオンボ  
ル！」

SRXのドミニオンボールでヴァルシオン改を撃墜した。

テツヤ「続けて地球側の機体を送り込んで来るとは・・・！エアロ  
ゲイターの戦力が不足しているわけではあるまい。いったい何が目  
的なんだ？」

エイタ「艦長！この空間に侵入してくる機体を感じました！」

ダイテツ「敵か！？」

エイタ「いえ、違います！これは・・・」

そこに現れたのは、ゲシュペンストMk-？タイプSだった。

ヴィレッタ「どうやら間に合ったようね。」

ブリット「！ あれは・・・！？」

エクセレン「わお！ヴィレッタお姉様じゃない？」

リュウセイ「誰だ？」

ラッセル「マオ社のスタッフで・・・ラーダさんと一緒にR・GU  
Nの開発に携わってた方です。」

リュウセイ（どこかで会ったことがあるような・・・）

ラーダ「あなた、今までどこに・・・！？」

ヴィレッタ「・・・感謝するわ、ギリアム・イエーガー少佐・・・  
単独でエアロゲイターの調査任務を遂行していた・・・」

ギリアム「ヴィレッタ・・・」

ヴィレッタ「・・・あなたの言いたいことはわかる。でも、私の目  
的はエアロゲイターによる災厄を止めること・・・もし、私の行動  
に疑いが生じたのなら・・・いつでも私を撃って構わないわ。」

ギリアム「・・・わかった。君を信じよう。」

ヴィレッタ「・・・感謝するわ、ギリアム・イエーガー少佐・・・  
それから・・・気をつけて。敵はまだ増援を送り込んでくる・・・」

そこに現れたのは、SRX、アルトアイゼン、ヴァイスリッター、  
サイバスター・・・

味方陣営の機体の複製が現れた。

リュウセイ「!! あれは!?!」

マサキ「サイバスターにヴァルシオーネ・・・それにアルトやヴァイスもいやがるぜ!」

キョウスケ「アサルト1より各機へ。みんな、気をつける。どうやら俺たちのフェイクが現れたらしい。」

キョウスケ「・・・やはりな。」

エクセレン「ふうん・・・敵さんも古典的な手を使ってくれるわねえ。」

リュウセイ「ヘッ! 偽物は本物に勝てねえってこと、身をもって教えてやるぜ!」

リュウセイ「お、俺だ・・・!」

エクセレン「おまけに言ってることまでそっくりねえ・・・」

ブリット「感心してる場合じゃありませんよ、エクセレン少尉!」

エクセレン「あらら、向こうのブリット君もシッコミ役なのね。」

シロ「そうみたいだニャ。」

シロ「! お、おいらまでいるニャ!?!」

マサキ「芸の細かい真似をしゃがって・・・その手に乗るかってん

だ！」

ジャーダ「ちょ、ちょっと待て。頭が混乱してきたぞ……」

レオナ「ドッペルゲンガー……というわけではなさそうね。」

イルム「死期が近いつてか？そいつは笑えない冗談だねえ。」

ギリアム「だが、我々の位相をずらしているわけでもない。となれば……」

ヴィレッタ「ああ。あれも先程のヴァルシオン改と同じ影……機体はデータを基にして作ったフェイク……そして、パイロットはあなた達の記憶をスキャンして作った写し身……つまり、実体を持った影よ。」

アヤ（もしかしたら、さっきの念動波はそのため……？）

マサキ「その手口、もしかして……」

ルシア（だが、今回は俺もみんなと同じものが見えている……）

マサキ「キョウスケ、今回の敵は前にリユーネ、ルシアを狙って来た奴に違いねえ！」

キョウスケ「そいつを見つけ出す方法はあるのか？」

エクセレン「とりあえず、目の前の偽物ちゃん達を倒せば出てくるんじゃない？」

キョウスケ（だが、敵の意図が見えん。俺達を倒すことではなく、混乱させることが目的なのか？）

ヴィレッタ「みんな、あの影・・・あなた達のダークサイドに惑わされては駄目よ！」

キョウスケ「了解。影は影らしく、闇に消えてもらう・・・！」

エイタ「こ、後方にまた重力震反応！」

テツヤ「今度はなんだ!？」

後方に転移してきたのは・・・初代ゲシュペンスト・タイプSだった。

ガルイン「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルシア「!？ あ、あの機体は・・・!？」

カイ「初代タイプSだと・・・!」

ゼンガー「あれが、ギリアムが言っていた・・・」

ギリアム「ああ、カーウアイ・ラウ大佐が乗っている機体だ。」

ルシア「大佐・・・本当に大佐が・・・!」

ギリアム「恐らく、大佐も先程の兵士同様、直接的に改造をされている可能性がある。」

エルザム「あの機体が大佐が乗っているのならば……」

ギリアム「ああ、彼を過酷な運命から解放するのは、我々において他にいない！」

ガルイン「……サ……ア……来……イ……サン……プ……ル達ヨ……」

ルシア「カーウアイ大佐……こうするしかないのか……！」

リュウセイ「ルシアはカーウアイ大佐の方を頼む！」

ライ「兄さん！影の方は俺達が何とかする！」

キョウスケ「ゼンガー少佐の邪魔はさせん……！」

ゼンガー「お前達……！」

カイ「……行くぞ、彼らの心遣いを無駄にはさせん……！」

教導隊はガルインのゲシユペンスト・タイプSと交戦状態に入る。

ギリアム「……あなたを救う方法は一つしかない……！呪縛を解くには、あなたを倒すしか……！」

ガルイン「……」

エルザム「……大義のために犠牲を払わねばならんとは……これも我が運命なのか……！？」

カイ「くっ……！恩を仇で返さねばならんとは……！」

ゼンガー「大佐……その運命……呪縛……俺が断ち切る！お覚悟を……！」

ルシア「もう約束なんてどうでもいい……！大佐の苦しみをこれ以上増やさせはしない！」

ガルイン「……………」

ゲジユペンスト・タイプの胸部が開き、ブラスター・キャノンが発射される。

ルシア「くそっ！」

歪曲フィールドで防ぎきれず、ダメージを負う。

ゼンガー「ブーストナックル！」

エルザム「そこだ……！」

カイ「もらっぞ……！」

グルンガスト零式のブーストナックル、ヒュツケバインMk-?トロンベのフォトン・ライフル、量産型ゲジユペンストMk-?のメガ・ビームライフルで集中攻撃をするが、小破で留まってしまふ。

ルシア「！いくらタイプSでもこれだけの攻撃では装甲がもたないはずなのに……!?」

ガーネット「ラトウーニ、何かわからないの!？」

ラトウーニ「機体構成材質の約80%がエアロゲイターのもの……あれは……形だけをゲシュペンストに似せた全くの別物よ……!」

カイ「あの時現れたイングラムのR・GUNと同じということか……!」

ガルイン「……ク……ウ……ウ……コ……来イ……来……イ……イ……早……ク……ク……私ガ……壊レ……ル……前二……」

ギリウム「短期決戦で挑むしかない……もう一度集中攻撃だ!」

ルシア「了解……!」

カイ「俺が隙を作る!エルザムとギリウムは遠方射撃で動きを封じ、ゼンガー、ルシアでとどめを刺せ!」

エルザム「了解!G・インパクトキャノン、接続……!」

ギリウム「そこだ!」

カイ「俺の拳を受けろ!!」

量産型ゲシュペンストMk-?の連拳でタイプSを怯ませた。

エルザム「撃て、トロンベよ!」

ギリウム「ニュートロンビーム、発射!」

ヒュツケバイン Mk-? の G・インパクトキャノン、ゲシュペンスト・タイプ R のニュートロンビームでタイプ S の動きを封じた。

ルシア「大佐の呪縛を解く……！クロスマツシャー……！」

ヴァルシオン V のクロスマツシャーで頭部を破壊した。

ゼンガー「ゼンガー・ゾンボルト、推して参る！チエストオオオオオオオ……！」

グルンガスト零式の斬艦刀でタイプ S をなぎ倒した。

ガルイン「……！！！」

カイ「やったか……！」

しかし、タイプ S が急速に再生を始めた。

エルザム「いかん……！」

ルシア「これ以上は……！！デイバインアーム……！」

ヴァルシオン V のデイバインアームでタイプ S の腹部を斬り、分裂させたと同時に再生が止まった。

ガルイン「……損傷……タ……イ……破……脱出……不可……能……機能……テ……イ……シ……」

ルシア「大佐……。」

ガルイン「……ルシ……ア……」

ルシア「!!」

ガルイン「……ギリ・ア……ム……エ……ル……ザ……  
ム……カ……イ……ゼン……ガー……ルシ……ア……  
……」

ルシア「大佐！意識が戻ったのですか!？」

ガルイン「……礼……ヲ……言……ウ……コレ……デ……  
私……ハ……」

ルシア「大佐……!」

ガルイン「……約束……ヲ……果タ……ソウ……才前ノ……  
……ゲシュ……ペンスト……」

その言葉を最後に、タイプSが爆発した。

ルシア「カ……カーウアイ大佐あああ!!」

ギリアム「くっ……!やはり……この方法しかなかった……  
なかったが……!エアロゲイターめ……よくも……!よくも  
っ!!」

エルザム「……大義のための犠牲……その業を……ルシアに  
背負わせてしまうとは……!受け入れさせるしかないというのか……  
……!我が妻と同じように……!!」

カイ「くっ……！教導隊の……本当の幕引きを、まだ若いルシアにさせてしまうとは……！許さん……！許さんぞ、エアロゲイター……！」

ゼンガー「う……ぐ……カ、カーウアイ大佐……！う、うう……うおおおおっ……！」

ルシア「大佐……何で……何でこんなことに……！」

リュウセイ「こっちは片付けたぞ！」

リユーネ「これで出てくるはずだよ。」

そこにヴァイクルが2機、転移してきた。

マサキ「現れやがったな！」

アタッド「……どうやら、あたしのトラウマシャドーはもう通じないみたいだねえ。」

マサキ「トラだかライオンだか知らねえが！偽物なんかで俺達を倒せると思つな……！三度目はもうねえぜっ……！」

アタッド「フン……。ガールインやここにいる連中のように、あたし達に操られてる方が幸せだつてのにねえ。」

ルシア「どういう意味だ……！」

アタッド「考えてもごらん？辛い過去やトラウマなんか悩まされ

ることなく。・・・ただひたすら、戦いに専念出来るんだよ。本望だろ？」

ルシア「カーウアイ大佐も同じだというのか・・・!!！」

アタツド「ガルインのことかい？やっぱり欠陥品じゃファーストコンタクターの相手は務まらなかったみたいだねえ。」

ルシア「貴様ああああ!!ふざけるのもいい加減にしろ!!！」

アタツド「ハッ！お前達は好きで戦ってるんだろ！ゲーザのようにはさ！」

マサキ「何!？」

アタツド「戦いが好きでもなけりや、わざわざこんな所まで来ないよ。だから、ネビーイムとジュデツカはあんた達に目を付けたんだ。この銀河系の中でも突出した闘争本能を持つ地球人にね。そう、ゲーザ・ハガナー・・・いや、テンザン・ナカジマがそのいい例だよ。」

リュウセイ「!!！」

マサキ「やっぱり、あいつは!!！」

アタツド「さあ、ゲーザ・・・奴らをあんたの仲間にしてやりな。多少傷物にしても、あんたと同じように身体を作り変えてあげるからね・・・ウフフ」

ゲーザ「ヒヤハッ！いいんだな!？ブチ殺しちまってもいいんだな

!?!」

アタツド「ああ、いいともさ！その方が扱いやすいからねえ！」

ゲーザ「ヒヤハハハ！やってやる！やってやるっの！どいつもこいつも血祭りに上げてやるぜ！プチプチ潰してやるぜ！！プチプチプチとなあ！ヒヤ！ツハツハツハツハツハア！！」

リュウセイ「テ、テンザン・・・！」

キョウスケ「リュウセイ・・・わかってるな？俺達には時間がない。」

リュウセイ「・・・・・・・・・・」

キョウスケ「情けは無用だぞ。」

リュウセイ「ああ・・・俺達の手で終わらせてやるしかねえ・・・！！！」

ゲーザ「何を言ってやがる！終わるのはてめえらの方だったの！ヒヤツハツハツハア！！」

アタツド「そうさ！その後で、あんた達に新しい人生を歩ませてやるよ！あたし達バルマーの忠実な兵器に仕立て上げてねえ！」

マサキ「あの女・・・！人間をもてあそびやがって！許せねえ！！」

ルシア「大佐の無念を・・・この手で晴らしてやる！！」

ヴァルシオンVがアタッド、ゲーザのヴァイクルに突貫する。

ルシア「貴様が大佐をあんな姿に変えたのか……！」

アタッド「心配いらさないさ、あんたもちゃんとガルインの様に改造してやるからさ。」

ルシア「ふざけるのも大概にしるおおお!!!!」

アタッドに念動波が直撃する。

アタッド「っ！な、何だっつてんだい今は……!?!」

ルシア「おおおおおお!!!!」

アタッド「まさか……こいつにこれだけの念の力が……!!」

ゲーザ「てめえの相手は俺だつての!!」

そこにゲーザのヴァイクルが介入する。

ルシア「吹き飛ばされなくなかつたらそこをどけ!!」

ゲーザ「吹き飛ばされるのはてめえの方だつての!!そのスカした面を血で染めてやるぜ!!!!」

キョウスケ「ルシアだけにやらせるな!!」

リュウセイ「わかってる!!今度こそ、テンザンは俺が止める!!!!」

ラトウーニ「牽制するわ、リュウセイはその隙に！」

ビルドラプターのHTBアンダーキャノンでゲーザのヴァイクルを牽制する。

ゲーザ「邪魔しやがって欠陥品の分際で……！」

マサキ「遅いぜ！」

リュウネ「くらいな、クロスマツシャー……！」

ヴァルシオーネのクロスマツシャーでバリアを破り、サイバスターのデイスカッターでヴァイクルにダメージを与える。

ゲーザ「調子に乗るんじゃないぞ……！」

ヴァイクルがオウル・キャノンを発射する。

アヤ「フィールドを！」

攻撃はSRXの念動フィールドで防がれた。

リュウセイ「テンザン、これで終わりにしてやる！ハイフィンガーランチャー……！」

SRXのハイフィンガーランチャーでヴァイクルにダメージを与える。

ゲーザ「プチツと潰れる……！」

ヴァイクルがカナフ・スラツシャーでSRXに突っ込んだ。

リュウセイ「ま、まずい!?!」

ライ「このままでは直撃する……!」

ルシア「させるか!?!」

ヴァイクルの真上にヴァルシオンVが立つ。

ルシア「クロスマツシャー!?!」

ヴァルシオンVのクロスマツシャーがヴァイクルを貫いた。

ゲーザ「ば、馬鹿な!このゲーザ・ハガナー様があああ!?!」

ヴァイクルが大破した。

ゲーザ「うぐっ……かつ……!?!」

リュウセイ「今度こそ終わりだ、テンザン!?!」

ゲーザ「かつ……かか……。そ、そそそっだ……。あ、あああ、  
ああ」

リュウセイ「!?!」

ゲーザ「あ、ああ明日は……。ははは……。明日ははは……。バー  
ニングググPTの……。けけ決勝大会じゃねえか……」

リュウセイ「！ お前・・・記憶が!？」

ゲーザ「い、いい家に帰って、マママシンの設定しなきゃななな、な、そ、それでででで・・・どいつもここいつもブチ倒しててやる・・・どいつもこいつももも・・・なな。ヒヤヒヤハハ・・・ヒヒヒハハハ・・・ヒヤハハハハ・・・ツ、ヒヤーツハツハツハツハアアアア!!」

その後、ヴァイクルが爆発を起こした。

リュウセイ「・・・・・・・・・・」

リュウト「・・・結局・・・同じことの繰り返しだった・・・。D  
Cとの最終決戦の時も・・・方法は・・・これしかなかったのか・・・?  
」

リオ「・・・気にすることないわ、リュウト君・・・」

リュウト「リオ・・・」

リオ「・・・あの人に同情の余地なんてない。自業自得よ・・・」

リュウト「・・・・・・・・・・」

リオ「・・・それよりも許せないのは・・・ああいう形で地球人を利用しようとするエアロゲイターよ・・・!」

リュウト「うん・・・」

リュウセイ「・・・テンザン・・・てめえのゲームは終わ

ったんだ……今度こそ本当にな……!」

アタッド「フン……意外にもろかったねえ。精神制御を強化し過ぎたか。しょうがないねえ……。じゃあ、地球人とバルマー人の格の違いって奴をみせてやるさね。」

アタッドのヴァイクルが、背部からカナフ・スレイブを射出した。

アタッド「これで死ぬ奴に用はないさね!」

カナフ・スレイブが一斉にPT部隊を襲う。

リオ「な、何なのこの攻撃!？」

リョウト「リオ!気をつけて!」

カナフ・スレイブの一部がガーネットのゲシュペンストに攻撃し、半壊させた。

ガーネット「きゃああ!!」

ラトウーニ「ガーネット!」

ビルドラプターはハイパー・ビームライフルでカナフ・スレイブを撃ち落とした。

ラトウーニ「ガーネット、逃げて!」

再び、2機にカナフ・スレイブに取り囲まれた。

そこに、ジャーダが乗るヒュツケバイン009が庇いに入る。

ジャーダ「俺の家族をやらせはしねえ!!」

カナフ・スレイブがヒュツケバイン009に集中攻撃をし、大破させた。

ガーネット「あ、ああ……!!」

ラトウーニ「ジャーダアア!!」

ルシア「ジャーダ!!」

アタツド「フン、つまらない猿芝居を……」

ルシア「貴様あああ!!!!」

再び、アタツドに念動波が直撃する。

アタツド「クツ……!!ま、また……!!? な、何なんだい今のは……!!」

ルシア「!? (何だ……今一瞬何が……!)」

アタツド「何で……何でお前ごときに念写を見られなきゃならないんだい!!」

アタツドがカナフ・スレイブをヴァルシオンVに集中させた。

ルシア「今だ!メガ・グラビトンウェーブ!!」

メガ・グラビトンウェーブでカナフ・スレイブを破壊し、ヴァイクルを中破させた。

アタツド「あ、あんた、覚えてなよ！原型をとどめないぐらいに調整してやる！」

マサキ「それは出来ねえ相談だな！」

サイバスターがアカシツク・バスターでヴァイクルに突っ込む。

アタツド「い、いつの間に・・・！？」

マサキ「アカシツク・バスターアアア！！」

アタツド「あああああっ！？」

アカシツク・バスターが直撃し、ヴァイクルが大破する。

アタツド「う、嘘だよ！！何であたしが・・・バルマー人のあたしが地球人なんかに・・・！！こ、こんなこと・・・あたしは認めないよ！！あたしは奴らの性能を調べ尽くしたんだ！なのに・・・！あたし達が知恵を与えてやらなきゃ、満足に戦えない連中に・・・！！

何で！？何でこのあたしがっ！！こ、このあたしが倒されなきゃならないのさあ！？」

アタツドのヴァイクルが爆発する。

エイタ「敵機の全滅を確認！」

ダイテツ「よし……！艦首超大型回転衝角、始動！要塞中枢部へ突撃せよ……！」

ルシア（アタッド……脱出したな。だが……もう終わりだ……）

ジャーダ「す、すまねえな……ルシア……」

ルシア「ジャーダ！？大丈夫か！」

ジャーダ「か、掠り傷だよ……これ位……」

リーダー「駄目よ、早く治療をしなくちゃ……！」

ガーネット「あなた……無茶はやめて……」

ジャーダ「……わかった。」

ラトウーニ「大丈夫、私達がジャーダ達の方まで戦う。」

ルシア「……行こう。中枢はこの先だ。」

リュウセイ「待ってるよ、イングラム！今からためえの所へ行つてやる……！」

自動惑星ナビーム 調整槽室

アタッド「う……う……。このまま……死んでたまるもの

かい……。必ず……。あいつらを……。こ、こうなったら……。レビのデータとズフィールドクリスタルであたしの……。身体を……。あたしの身体を強化して……」

端末からデータファイルが出力された。

アタッド「な、何さ……。これ？極秘ファイル……。？特殊脳医学研究所……。被験体ナンバー4……。？ジエニファー・フォンダ……。？」

映ったジエニファー・フォンダの顔はアタッドそっくりだった。

アタッド「！！　そ、そんな馬鹿な……。！これ……。あたしの顔じゃないか！！ま、まさか……」

イングラム「そういうことだ。」

アタッド「イ、イングラム……。！あ、あたしは……。あたしは……。！？」

イングラム「そう。お前はバルマー人ではない。俺があこのサンプル達と一緒に持ち帰った……。ジエニファー・フォンダという名の地球人だ。」

アタッド「う、嘘だろ……。！？それじゃ、あたしもガルインやゲーザと同じで……？」

イングラム「そうだ。」

アタッド「う、嘘だ……。！あたしはアタッド・シャムランだ……」

生粋のバルマー人だ！」

イングラム「それは与えられた記憶だ。そして……この自動惑星  
ネビーイームにバルマー人は一人もいない。この俺を含め……フ  
アーストコンタクターを除いてな。」

アタッド「！」

イングラム「今まで御苦労だった、アタッド。いや、ジエニファー・  
フォンダ……」

イングラムはアタッドに銃口を向けた。

イングラム「眠りにつくがいい。永遠にな……」

イングラムは引き金を引き、アタッドを射殺した。

第22話 完

## 第22話 異星人の虫籠（後書き）

レビ「フフフ・・・終わるか。ならば、我が軍門に下るか、ここでシャットダウンするか・・・好きな方を選ぶ。」

ルシア「選ぶまでもないさ！ここでお前を」

シロ「そんな言い方じゃ駄目ニヤ。次の話も読んでもらえなくなるニヤ。」

ルシア「お、おい・・・シロ？」

レビ「何・・・？なら、どうすればいいのだ？」

シロ「うーん・・・そうニヤ・・・。とりあえず、おいらの真似をしてみてもどうニヤ？」

ルシア「は？」

レビ「お前の真似だと・・・？」

ルシア「おい、やらなくていいぞ。レビ。」

レビ「・・・終わるか・・・ニヤ。ニヤらば、おいら達のとこに来るか、ここでシャットダウンするか・・・好きな方を選ぶ・・・ニヤ。」

シロ「・・・まあ、それでよしとしくかニヤ。」

ルシア「……………不覚にも可愛く見えたぞ、レビ。」

レビ「ぢや、戯言を……………！次回で地獄に落としてやる！」

## 第23話 人類に逃げ場なし

ホワイトスター 中枢部

テツヤ「また大きな空間に出た……！ここが中枢部なのか!？」

エイタ「いえ！ホワイトスターの半径と、今までの距離から計算すれば……この向こう側だと思われませう！」

ダイテツ「よし、全砲門開け！ここから艦砲射撃によって、一気に中枢部を破壊する！PT部隊、出撃！本艦を援護せよ……！」

PT部隊が出撃し、中枢部にイングラムのR・GUNリヴァーレが立ちはだかる。

イングラム「来たか……俺が選り出した巫女は神へ召された。後は……最後の仕上げをするのみ。そう……最後の、な。」

キョウスケ「セオリーどおり、待ち伏せされていたようだな。」

リュウセイ「イングラム……！イングラム・プリスケン……！今日こそためえを倒し、このホワイトスターを破壊してやる……！」

アヤ「イングラム少佐……私はあなたと戦います。あなたから与えられた使命を果たすために……！」

イングラム「その必要はない。」

アヤ「!?!」

イングラム「何故なら、お前達にはこのネビーイームで新たな使命が与えられるからだ。」

マサキ「ああ、そうかい!だがよ、何でもてめえの思い通りになると思うな!俺はてめえのサンプルや兵器なんかじゃねえんだ!」

アヤ「マサキ……!」

エクセレン「あの子の言うとおりよ、アヤ大尉。」

アヤ「エクセレン……!」

エクセレン「前に言ったでしょ?私達が感情を持った人間だつてこと……イングラム少佐に教えてやりましょ。」

アヤ「ええ、わかってるわ……!」

キョウスケ「アサルト1より各機へ。R-GUNリヴァールを倒し、要塞中枢部を破壊するぞ!」

ブリット「了解です、中尉!」

マサキ「おっと……言うことはまだあるんじゃないのか?キョウスケ。」

キョウスケ「言うこと……?」

エクセレン「そうそう。この作戦が終わったら打ち上げをやるぞ、」

とかね。」

マサキ「茶化すなつての！」

ルシア「大体から前に済ませたる？」

キョウスケ「フツ・・・ならば、このパーティの締めは派手にやってくれ。」

マサキ「ああ、任せな。奴らが俺達に猶予を与えたことを後悔させてやるぜ。」

エルザム「ライ、いいな？我らの父から託された使命を果たす時・・・！」

ライ「わかっている、兄さん。俺は戦う・・・カトライア義姉さんが愛した地球やコロニーを守るために。」

エルザム「フツ・・・それでこそ我が弟だ。」

ヴィレッタ（イングラム・・・あなたの枷を解く方法は一つしかない・・・）

ダイテツ「諸君！我々の盾となつて散つた同胞に報いるためにも・・・最後の決着をつける！！人類の未来はこの一戦にあり！総員奮起せよ！！！」

ゼンガー「応！我らが使命、我らが意地、我らが力！今こそ刃と成して敵を斬れつ！！！」

アヤ「そうよ……。心に念じる見えない刃……。それが私達の武器……。！イングラム少佐！私は……。私達はあなたを倒します！」

イングラム「来るがいい、我らによって選ばれし者共よ……。お前達の力を俺に示せ！」

カチーナ「取り巻きはあたしらに任せな！お前らはイングラムのところだ！」

ラトウーニ「ここは任せて、リュウセイ！」

リュウセイ「わかった！頼んだぜ！」

一部を残し、部隊はイングラムと交戦状態に入る。

イングラム「来たか……。だが、簡単には通さんぞ。」

目の前にエゼキエルが展開する。

エクセレン「あらら、お邪魔虫のご登場？」

キョウスケ「SRXを突破させる。各機、仕掛けるぞ！」

ブリット「了解！チャクラム・シューター、GO！」

ヒュッケバインMk-?のチャクラム・シューターでエゼキエルに巻きつき破壊する。

ルシア「そこをどけ！フォトンビーム！」

ヴァルシオンVのフォトンビームでエゼキエルを中破させた。

そのエゼキエルがスパーク・トピードでSRXを狙い撃つが、念動フィールドで防がれた。

アヤ「ああっ……あうっ……!!」

リュウセイ「アヤ、大丈夫か!？」

アヤ「ま、前にも言ったはずよ……。心配はいらないわ……!!」

リュウセイ「だ、だけどよ!!」

アヤ「いいから!あなたは戦闘に集中しなさい!」

ライ「大尉、今からT-LINKコネクターを全てR-1に回します。」

アヤ「駄目よ!!」

ライ「……!!」

アヤ「私に役目を果たさせて!ライ、お願いよ!!」

ライ「わかりました……!!」

アヤ「さあ、二人でリュウをサポートするわよ!」

ライ「了解です!」

ルシア「俺達もいることを忘れてもらっちゃ困るぞ?」

ヴィレッタ「ええ、私達も全力でサポートするわ。」

リュウセイ「ああ、みんな。頼んだぜ!」

キョウスケ「手札は揃った・・・仕掛けるぞ!」

イングラム「フッフ・・・もうすぐだ。お前の記憶が全て戻り、このネビーイームを統べる時は近い・・・」

ルシア「前にも言ったはずだ、俺はバルマーと決別した!このネビーイームがどうなるうと知ったことではない!」

イングラム「果たして、そう求めた結果になるか・・・?」

ルシア「・・・もう語ることはない・・・イングラム、お前を倒す!!」

キョウスケ「エクセレン!」

エクセレン「わかってる!」

アルトアイゼン、ヴァイスリッターがR-GUNリヴァーレを攻撃し、牽制する。

マサキ「くらえ!アカシック・バスター!!」

アカシック・バスターでR-GUNリヴァーレを攻撃する。

ブリット「G・インパクトキャノン、発射!!」

ヴィレッタ「イングラム・・・あなたの枷は私が解く!メタルジェノサイダー、マキシマムシュート!!」

R・GUNリヴァーレはG・インパクトキャノン、メタルジェノサイダーを歪曲フィールドで防いだ。

イングラム「どうした?当てるだけで精一杯か?」

ルシア「リュウセイ!奴を倒すには一撃必殺しかない!」

リュウセイ「わかったぜ、ルシア。ライ、攻撃用のT・LINKコネクターを全部こっちに回せ!」

ライ「了解!」

リュウセイ「アヤ、もうひと踏ん張り頼む・・・フィールド全開だ!」

アヤ「ええ、T・LINKフルコンタクト!」

ライ「Z・Oソード、射出!」

SRXがZ・Oソードを構える。

ライ「トロニウム・エンジン、フルドライブ!」

リュウセイ「うおおおおっ!」

イングラム「リュウセイ、お前は俺の線系から逃れることは出来ん。」

リュウセイ「黙れ！！俺は俺の意思で戦う！ライやアヤと一緒にな！！！」

イングラム「ならば・・・あがけ、俺の目の前で・・・」

R・GUNリヴァーレがアキシオン・バスターの発射態勢に入った。

イングラム「アキシオン・バスター、デット・エンド・シユート！！！」

アキシオン・バスターが発射された。

ルシア「SRXは最後の切り札だ！やらせはしない！！！」

ヴァルシオンVが援護防御に入り、直撃を食らう。

イングラム「無駄なことを・・・」

ルシア「それはどうかな？」

イングラム「何・・・？」

R・GUNリヴァーレの死角からSRXが突っ込む。

リュウセイ「でいいいいいいやあああ！！！！！」

SRXのZ・OソードがR・GUNリヴァーレの腹部を突いた。

イングラム「ぐああああっ!!」

リュウセイ「天上天下念動爆碎剣!!」

SRXがZ・Oソードを抜き、左手を握り締める。

リュウセイ「念動爆碎!!」

R・GUNリヴァーレが爆発し、大破した。

リュウセイ「これで終わりだ、イングラム!!」

イングラム「……そうか……」

リュウセイ「!?!」

イングラム「……俺は……そうだったのか……」

リュウセイ「何を言っただけだ!?!」

イングラム「俺も……操られていたのか……ゴッツォの枷によって……ふ、ふふふ……因縁だな……」

ルシア（ゴッツォ……!?!）

リュウセイ「枷だ?!?! てめえは一体何者なんだ!?!」

イングラム「俺は……地球人でもなければバルマー人でもない……」

・任務を遂行するために・・・作られた・・・虚ろな存在に過ぎん。」

リュウセイ「な・・・！？虚ろな存在・・・って？」

キョウスケ「・・・作られた人間ということか。」

ルシア（イングラムの正体・・・アウレフ・パルシエム・・・だからか・・・）

イングラム「・・・俺の枷は解けた・・・この偽りの肉体から・・・俺のネフェシユは解放される・・・」

リュウセイ「て、てめえ・・・何を！？」

イングラム「礼を言うぞ、お前達・・・そして・・・すまなかつた・・・」

リュウセイ「な・・・！？」

アヤ「少佐・・・！！」

イングラム「アヤ・・・俺を許せとは言わん・・・だが、これからは・・・過去に囚われず・・・新しい道を歩んでくれ・・・」

アヤ「イングラム・・・少佐・・・！」

イングラム（・・・ようやく取り戻した自我・・・完全な自我・・・俺のネフェシユが・・・生と死の狭間にあつたとは・・・。当然の報いか・・・）

だが・・・例え一瞬でも・・・俺はイングラム・プリスケンという人格を・・・確立・・・出来たのだ・・・それが・・・何回目なのか・・・何人目の俺なのかは・・・わからないが・・・迎える結末は・・・全て・・・」

リュウセイ「イングラム!!」

R・GUNリヴァールが爆発し、イングラムは死亡した。

リュウセイ「!!」

アヤ「ああ・・・しょ、少佐・・・!」

ライ「・・・」

ヴィレッタ「・・・イングラム・・・」

ギリアム（・・・それがお前の宿命か・・・イングラム・プリスケン・・・）

リュウセイ「・・・そ、そんな・・・!教官は操られていたって・・・本当なのか・・・!?!」

マサキ「・・・そう・・・かも知れねえ。あいつも・・・テンザンみてえに・・・」

リユーネ「だからって、あいつのやってきたことが許されるわけじゃないよ・・・」

ルシア「イングラム少佐も・・・それをわかった上で・・・」

キョウスケ「方法はどうかあれ・・・イングラムから託されたもの・・・俺達はそれを背負い・・・この戦い・・・幕引きは俺たちがしなければならん。」

リュウセイ「・・・わかってるぜ。強えな・・・キョウスケ中尉。」

キョウスケ「・・・鈍いだけだ。」

ルシア「自分で言うかな・・・それ。」

その時、中枢部の空間のところで爆発が起きる。

テツヤ「な、何だ!?!」

エイタ「このブロックが崩壊を始めました!!」

テツヤ「艦長!」

ダイテツ「うむ、この機を逃がすわけにはいかん!全砲門開け!艦砲射撃で中枢部を破壊する!!」

ホワイトスター 周辺宙域

ユン「ホワイトスター内部より高エネルギー反応!!」

レフィーナ「何が起きたのです!?!」

ユン「ふ、不明です！」

シヨーン「もしや……!?!」

ユン「あ……!艦長、敵機が……敵機動兵器が活動を停止しました!」

レフィーナ「！」

シヨーン「……ということは……?」

レフィーナ「クロガネは……!?!?クロガネはどうなったの!?!」

ホワイトスター外壁が爆発し、そこからクロガネが飛び出してきた。

シヨーン「おお、クロガネ……!」

レフィーナ「ダイテツ艦長……みんな……無事だったのですね……!」

ダイテツ「こちらはクロガネ艦長、ダイテツ・ミナセだ。本艦とP  
T部隊はホワイトスター中枢部の破壊に成功した。」

シヨーン「では、レビ・トラーも……?」

ダイテツ「いや、それは……」

ユン「ホ、ホワイトスターに再び高エネルギー反応!?!ば、爆発ではありません!」

レフィーナ「何ですって!?!」

宙域にいる戦艦がホワイトスターからの攻撃により、ヒリュウ改、クログネ以外が全滅した。

レフィーナ「! きゃああああ!?!」

エイタ「うああああ!?!」

テツヤ「じよ、状況を報告しろ!?!」

エイタ「ぎ、残存艦隊に直撃!?!本艦右舷部、第三艦橋、大破!?!」

テツヤ「な、何だと!?!」

エイタ「ホ、ホワイトスターからの強力なビーム攻撃によるものと思われます!?!」

ダイテツ「馬鹿な!あの要塞はまだ生きているのか!?!」

エイタ「! ホワイトスター、地球へ向けて移動を開始!?!」

ダイテツ「まさか・・・!地球を!?!全機、追撃せよ!?!」

エイタ「あ、ああ!?!よ、要塞内部から・・・巨大な機動兵器が出現!?!」

ホワイトスター北極部から、巨大な白い機体・・・ジュデツカが出現した。

リュウセイ「な、何だ!?あのデカイロボットは!?!」

ルシア（あれは……まさか……!）

ジユデツカから強力な念が放たれた。

リュウセイ「つつ!!」

ブリット「!!」

クスハ「!!」

タスク「く!?!」

リョウト「な……!!」

リオ「!!」

レオナ「今は……何!?!」

アヤ「こ、この念は……!!」

レビ「我が名はレビ……。レビ・トーラー……」

ラーダ「あれが……レビ……」

ギリアム「エアロゲイターの統率者か。」

ラーダ（私とギリアム少佐の予測が正しければ……あの子もほか

のエアロゲイターと同じく・・・)

ギリアム(精神制御を受けた地球人だと言うことになる。そして、その正体は・・・)

ヴィレッタ(・・・以前と違って、レビの力が増している。ネビーイームの中枢から切り離されたことによって、負担が減り・・・代わりに、レビとジュデツカの融合度が増したのね。)

レビ「選ばれしサンプル達よ・・・ファーストコンタクター、クラス・ギボルの候補者達よ。これ以上の抵抗は無駄だ。このジュデツカを破壊せぬ限り・・・ネビーイームを止めることは出来ん。大人しく我らの軍門に降れ。」

エクセレン「わお！お優しいことで！」

リュウセイ「それで、てめえらの兵器となって戦えつてのわ！？あのテンザン・ナカジマやカーウアイ・ラウ大佐みたいに！」

レビ「そうだ。そのため、我々はネビーイームより先に地球へメテオ3を送り込み・・・地球人類へEOTを与えて兵器としての進化を促し、その過程を見守ってきた。そして、我々が与えて来た幾多の試練を乗り越え・・・最終的にサンプルとして選び出された者が、お前達なのだ。」

ダイテツ「技術レベルはお前達の方が高いにも関わらず、ワシらを戦力として必要とする理由は何だ？」

レビ「数年に渡る調査の結果、地球人は他星の人種に比べ、強い闘争心と高い戦闘能力・・・そして、他星の技術を短時間で吸収する、

柔軟かつ優秀な知能を持つ人種であるとわかった。

さらに、魔装機神と呼ばれる兵器のように・・・地球には独自の技術で超高性能な兵器を造り出す文明も存在している。つまり、地球人類は・・・この銀河系の中でも、類稀なる力を持った優性戦闘種族なのだ。」

ギリアム「・・・優性戦闘種族・・・なるほどな、言い得て妙かも知れん。」

レビ「地球人が何故にそのような進化を遂げたか・・・その理由は我々にもわからない。あるいは、地球という星そのものに何らかの秘密があるのかも知れない。」

マサキ（・・・・・・・・・・）

エクセレン「・・・・・・・・・・」

キョウスケ「・・・読めた。お前達の目的は・・・地球人という兵器を大量に『生産』することか。」

マサキ「大量生産だと・・・！？どういう意味だ、キョウスケ？」

キョウスケ「レビの言うとおり、俺達はあくまでもサンプルに過ぎない・・・だからこそ、奴らは俺達の様々なデータを基に・・・大勢の地球人を捕らえ、兵器として調整する。それがレビ・トレーラー、お前の目的であり、ホワイトスターはそのプラント・・・生産工場だ。」

ゼンガー「初期段階に、その実験台とされたのがカーウアイ大佐・

・・・」

リュウセイ「最近ではテンザン・・・」

エクセレン「手っ取り早く精神コントロールで・・・ってのが、クス八ちゃんね。」

レビ「そのとおりだ。」

リオ「じゃあ、さっきの居住空間に人の気配が全くしなかったのは・・・?」

ギリアム「そうだ・・・。ホワイトスターはエアロゲイターの自動機械惑星であると同時に・・・収集・調整した地球人を飼うためのオリなのだろう。」

エルザム「レビ・トレーラー・・・お前は我々を収集した後、どこへ運び去るつもりだ?」

レビ「それに答える必要はない。お前達はただ・・・バルマーの兵器となれば良いのだ。」

エルザム「悪いが、その誘いは断らせていただく!」

レビ「フッフ・・・自ら生きる道を閉ざすつもりか?」

ゼンガー「我らは幾多の試練を乗り越え、ここまで来た。自らの剣を捨てに来たのではない!!」

キョウスケ「・・・押し開く。お前の結界ごとな・・・!!」

ルシア「・・・人類に逃げ場なし。だが、俺達は逃げることも、お前達に屈するつもりもない!!」

レビ「来るがいい。我らに抵抗する気力がなくなるまで、叩きのめしてやる。」

カイ「各機、仕掛けるぞ!ここで全てを終わらせるんだ!」

ルシア「了解!」

ギリアム「俺の予測した未来へ進むか・・・それとも、別の未来へ行くか。ここが分岐点のようだな。」

レビ「この感覚、その力・・・。目覚めつつあるのか、それとも・・・意図的に隠していたな?」

ギリアム「・・・さあな。だが、力などなくても、お前の未来は見えている。この戦いに参加している全員の目にな・・・!」

ゼンガー「・・・」

レビ「感じるぞ、お前の力・・・。我々が求める力とは、まったく異質なもの・・・極めて原始的・・・そしてそれ故に未知数の力と危険性を持っている・・・」

ゼンガー「人を自分の尺度だけで計ると痛い目を見る・・・ゆめゆめ忘れんことだ。」

レビ「力押しだけで、このジュデッカを倒せると思うな・・・!」

ゼンガー「もはや問答無用！」

レビ「何・・・!?」

ゼンガー「我はゼンガー！ゼンガー・ゾンボルト！！悪を断つ剣なり！！貴様は零式斬艦刀によって、ここで潰えるのだ！！」

ラトウーニ「最終標的・・・確認・・・」

レビ「ほう・・・素質もあり、制御をしやすいサンプルだな。」

ラトウーニ「私は・・・都合のいい道具には、もうならない・・・！あなたみたいにはなりたくないもの・・・！」

レビ「私が道具だと？フツ・・・他人の意志を受け入れるだけの人形が何をいう。」

ラトウーニ「みんなのおかげで私は自分を取り戻せたわ・・・だから、あなたも・・・！」

イルム「デートのお誘いからともかく、あんたらの兵器になれっつのは願ひ下げなんぞね！」

レビ「遠慮することはない・・・。お前達の能力を最大限に引き出してやるぞ？」

イルム「あんたこそ、そんなマシンから降りたらどうだい？せつかくの可愛さがもつたないぜ？磨けばいい女になると思うんだがな。」

「

レビ「ふざけた男だ……。この軽口が、二度と叩けないように調整してやる。」

イルム「だから、言っただろ？あんたのお誘いは願ひ下げだつてな！」

ギリアム「照準セット！」

ラトウーニ「BMセレクト、ガンファイト……。！」

イルム「ブーストナックル！」

ゲシュペンスト・タイプRのメガ・ビームライフル、ビルドラプターのHTBアンダーキャノン、グルンガストのブーストナックルで攻撃するが、全て念動フィールドで防がれる。

ルシア「レビ・トローラー……。！」

レビ「来たか、最初に地球に降り立ったバルマー人……。ファーストコンタクター。」

ルシア「俺は……。バルマーの人間だつたと聞いた時は困惑したが、心は地球人と変わらない！」

レビ「長く地球にい過ぎたか……。ならば、再びバルマー人として調整し、私の元に就いてもらおうか。」

ルシア「断る！俺の未来が閉ざされようと……。そのジュデッカだけは破壊する！！」

レビ「まさか貴様……このジュデツカが破壊された後の事を知った上で……！そんなことをすれば貴様は……！」

ルシア「罰は……俺自身の死で償ってやる！クロススマツシャー！」

ヴァルシオンVのクロススマツシャーは念動フィールドを貫き、ジュデツカにダメージを与えた。

レビ「フッフ……やるな。イングラムが見込んだだけのことである。」

リュウセイ「何言ってるやがる！てめえもあいつと同じで……ホワイトスターに操られてるだけなんじゃねえのか！？」

レビ「何を馬鹿な。私はネビーイームの中枢を司るジュデツカの生体コアだ……！」

リュウセイ「いや……それどころか、てめえだって、テンザンみたいに……捕えられて調整された……地球人なのかも知れねえんだぞ！？」

レビ「世迷い言を。他の者はいざ知らず……私はれっきとしたバルマー人だ。」

リュウセイ「それすら、与えられた記憶かも知れねえんだ！！」

レビ「黙れ、私は地球人などでは……うつっ！な、何だ……？この頭痛は……」

アヤ「……………！リーダーさん……………。レビ・トローラーは……  
あの子は……………」

リーダー「そ、それは……………」

アヤ「……………やっぱり……………。イングラム少佐と同じよう  
に……………」

リーダー「ア、アヤ……………」

キョウスケ「大尉……………」

アヤ「分かっているわ、キョウスケ中尉。あの機体を破壊しなければ……  
地球に未来はない……………だから……………」

ヴィレッタ「……………」

レビ「お前達に……………ネビーイムを止めることなど……………」

キョウスケ「いや、勝機はすでに見えている。」

レビ「何……………？」

キョウスケ「お前が言った通り、ジュデツカを倒せば……………この戦  
い、俺達の勝ちだ。」

レビ「このジュデツカを倒すだと？思い上がるな、地球人共め！」

キョウスケ「このチャンス、逃がさん。ジョーカーを切らせてもら  
う。これが……………最後の一枚だ！」

レビ「くっ・・・突出し過ぎた戦力は我らにとって両刃の剣となる・・・降らぬというのであれば、滅殺もやむなし・・・？お前達のデータをこのジユデツカに刻み込めばよい・・・！」

リュウセイ「それはお前の意志なのかよ！？」

レビ「何・・・？」

リュウセイ「本当にそう思ってるのかよ！？お前は利用されてるんじゃないのかよ！？」

レビ「この私が何に・・・！？」

リュウセイ「そのジユデツカって奴にだ！お前が自分の意志で動いているんなら、ともかく・・・機械に操られて戦って、何になるって言うんだ！？」

レビ「・・・」

リュウセイ「DCもコロニー統合軍も・・・形はどうあれ、自分達の目的のために戦っていた・・・だけど、てめえらはどうなんだ！？本当に自分の意志で俺達と戦ってんのか！？あのテンザンやカーウアイ大佐みてえに利用されるだけされて・・・死ぬまで兵器として戦わされてるだけじゃねえのか！？」

レビ「黙れ・・・！私はレビ・トラー・・・ネビーイムの支配者だ！！」

リュウセイ「くっ・・・？イングラム教官と同じで、倒すしかねえ

のか……!? そうしなきゃ、あいつを……!」

アヤ「リュウ……!」

マサキ「……リュウセイ、もう後にはひけねえぜ」

リュウセイ「! マサキ……?」

マサキ「今ここであいつを止めなきゃ、この戦いは終わらねえ……! 何のために俺達がここにいいのか……何のために戦ってきたのか……俺達が選んだ道は正しかったのか……その答えは……この戦いに生き残らなきゃ、見つけだせねえんだ!」

キョウスケ「……理由はどうあれ、これは互いの存在をかけた戦いだ……ここで碎け散れば、過去も未来もなくなる。ならば、やることは一つ……そんな敵であろうとも、撃ち貫くのみ……!」

リュウセイ「……わかった……呪縛を解くために……ジユデツ力を倒す……!」

キョウスケ「よし……アサルト1より各機へ。仕切り直した。全機で一斉攻撃を仕掛け、奴を撃破するぞ。」

リユーネ「わかったよ! 親父があたし達に託した未来……守ってみせる!」

エクセレン「さて、オーラスね!」

マサキ「よし! 行くぜ、みんな! この戦いを終わらせるために……俺達の未来をこの手でつかむために……!」

ラトウーニ「全機で一点集中攻撃をして、結晶薄膜化現象を引き起こせば……！」

エルザム「あのバリアを破れるというわけか……」

イルム「危険な賭けだな……そりゃ。」

キョウスケ「外せば無一文どころか全てが終わる。だが、当たれば億万長者だ。全賭けでいく！」

マサキ「ああ、俺達の力押しが半端じゃないってところを見せてやるぜ！」

カイ「各機、攻撃開始！」

P T部隊の遠方射撃でジュデッカのフィールドに一点集中攻撃を仕掛ける。

レビ「無駄なことを……」

ブリット「二の太刀があると思うな！レビ・トラー……！」

エルザム「今一度、血塗られた手で引き金を引こう。レビ、お前を倒すために！」

ヒュツケバイン Mk - ? 2機がG・インパクトキャノンを発射する。

キョウスケ「全弾持つていけ……！」

入れ替わりにアルトアイゼンのスクエア・クレイモアを全弾当てる。

リユーネ「行くよ！必殺、クロスマツシャー！！」

タスク「くらええええ！ギガ・サークルブラスター！！」

ヴァルシオーネのクロスマツシャー、ジガンスクードのギガ・サークルブラスターで念動フィールドを弱体化させる

レビ「くっ……この程度で……！」

ゼンガー「斬艦刀・疾風怒濤！！」

グルンガスト零式の斬艦刀で念動フィールドを破った。

レビ「な、何！？」

マサキ「くらええええ！コスモノヴァー！！」

ルシア「メガ・グラビトンウエエエエブ！！」

サイバスターのコスモノヴァー、ヴァルシオンVのメガ・グラビトンウエーブでジュデツカを半壊させた。

イルム「計都羅？剣・暗剣殺、斬！！」

グルンガストの計都羅？剣・暗剣殺でジュデツカの尻尾を叩き切る。

リユーセイ「レビ……その呪縛から解き放ってやる！」

アヤ「T-LINKフルコンタクト！」

ライ「Z・Oソード、射出！」

リュウセイ「天上天下無斬りいいいい！！！」

SRXの天上天下無敵斬りでジユデツカを斬る。

リュウセイ「爆碎！！！」

レビ「あああああっ！！！」

ジユデツカが爆発し、大破する。

レビ「・・・フ、フフフ・・・」

リュウセイ「!?!」

レビ「・・・お前達は・・・取り返しのつかない間違いを犯した・・・」

キョウスケ「なに・・・!?!」

レビ「フフフ・・・このジユデツカとネビームが機能を停止すれば・・・我らバルマーの最終安全装置が・・・作動する・・・」

キョウスケ「安全装置・・・?何のための?」

レビ「・・・対象文明が一定値以上の戦力を発揮した場合・・・すなわち・・・このジユデツカを・・・撃破した時・・・その文明は

バルマーにとって危険分子と判断され・・・自動的に・・・消去される・・・」

マサキ「消去だと！？てめえらにはまだ何かあるのか！？」

レビ「そうだ・・・。最初にして『最後の審判者』が・・・」

リュウセイ「最初にして最後・・・？ホワイトスター以外に、奴らの兵器があるつてののか！？」

ルシア「・・・ああ、地球上に、一つだけある。」

キョウスケ「！ まさか・・・！」

リョウト「さ、最初に地球へ送り込まれたエアロゲイターの物体と  
いえば・・・！？」

ルシア「ああ・・・」

レビ「フ、フフフ・・・。既に・・・安全装置は・・・解除された・・・  
もう・・・止めることは・・・出来ない・・・これで・・・お前達の  
星は・・・終・・・わ・・・り・・・だ・・・」

ジユデッカが大爆発を起こし、破壊された。

エイタ「敵の巨大機動兵器の撃墜を確認！ 破片、拡散していきま  
す！ホワイトスター、及び敵機動兵器群、全て活動を停止しました  
！」

テツヤ「・・・そ、そうか・・・」

ダイテツ「各機、警戒態勢を維持。損傷の激しい機体はシロガネへ  
・・・」

その時、ルシアに強力な念が走る。

ルシア「ガ、ガアアアアア!!」

リュウセイ「ど、どうしたんだ、ルシア!？」

ルシア「は、早く・・・俺を攻撃しろ・・・!取り返しのつかない  
ことに・・・!!」

マサキ「お、おい!何を言い出すんだよ!？」

ルシア「や、奴らは・・・俺にも細工を施している・・・!今こ  
で俺を殺さないと・・・!!」

リユーネ「い、一体何が・・・!」

ルシア「・・・」

エクセレン「ル、ルシア君・・・?」

ルシア「・・・フフフ・・・ハハハハ・・・ハハハハハハ  
ハ!!」

ヴァルシオンVが地球に降下していった。

ユン「ヴァ、ヴァルシオンV、大気圏に入りました!!」

レフィーナ「降下先は!？」

シヨン「このコースですと・・・アイドネウス島に向かっていますな・・・」

クロガネ、ヒリュウ改の警報が鳴り響く。

テツヤ「な、何だ!？」

エイタ「サ、サテライトからのデータリンク!ア、アイドネウス島の駐留艦隊が全滅した模様です!!」

テツヤ「全滅!? 待て、あそこにはDCやエアロゲイターはいないぞ!」

レフィーナ「ま、まさかルシア中尉が・・・!？」

ユン「いえ、ヴァルシオンVはまだアイドネウス島に着いていません!」

ダイテツ「詳しい情報は入って来ていないのか？」

エイタ「S・AWACS32より映像が回されて来ています。メインモニターに映します!」

テツヤ「!! あ、あれはっ!？」

アイドネウス島

ルシア「……………」

シュウ「また会いましたね。いえ、初めまして……と言つべきですか？」

ルシア「……何者だ、貴様。」

シュウ「私に見覚えがないのですか？」

ルシア「ああ。」

シュウ「完全にルシア君の記憶がなくなりましたね……」

ルシア「地球に降下し……今まで地球人として戦ってきた記憶は全て抹消した。」

シュウ「地球へは何の目的で出向いてきたのですか？」

ルシア「知れたこと……バルマーにとって脅威であるこの地球を……破壊し、力を取り込む。最後の審判者としてな……」

シュウ「それも、全て与えられたものではないのですか？」

ルシア「何……？」

シュウ「あなたは地球環境の適応試験のために送られた……サンブルに過ぎなかつたはずです。」

ルシア「適応試験・・・？戯言を、余はレビ・トーラー、アウレフ・パルシエムの監察者だ。最終的にサンプルは予想以上の成長を遂げた。育ちすぎたサンプルは・・・データだけを残し、地球ごと抹消する。貴様も含めてな。」

シュウ「そうですか・・・いくらあなたとはいえ、私を利用できないと思わない事ですね。」

ルシア「貴様に止められるか・・・？余を、最後の審判者を・・・」

ヴァルシオンVが浮かび上がったメテオ3に取り込まれる。

メテオ3が変化し、取り込まれたヴァルシオンVがズフィールド・クリスタルによって変異した。

シュウ「！？その機体は・・・！」

第23話 完

第23話 人類に逃げ場なし（後書き）

リュウセイ「いよいよ最終決戦だ！」

キョウスケ「俺も切り札を切らせてもらう・・・！」

アヤ「T-LINKフルコンタクト！」

ライ「トリウム・エンジン、フルドライブ！」

リュウセイ「全てを斬り裂け！SRX！！！」

Next Stage 創世神ズフィールド

## 最終話 創世神ズフィールド

アイドネウス島

ズフィールドクリスタルで変異したヴァルシオンVがグランゾンと対峙する。

シュウ「その機体は・・・」

ルシア「シュウ・シラカワ、止められるか？この創世神ズフィールドを・・・」

シュウ「このまま捨て置くわけにもいきませんね。」

グランゾンが腹部を開き、重力エネルギーを集中させる。

シュウ「ブラックホール・クラスター、発射！」

グランゾンがブラックホール・クラスターを発射し、ズフィールドに直撃する。

シュウ「いくら技術が優れようと、グランゾンには敵いませんよ？」

ルシア「それはどうかな？」

ズフィールドがダメージを瞬時に回復させた。

シュウ「!? これだけの再生能力があるとは・・・!」

ルシア「裁きを受ける。アルドレーザー、照射！」

ズフィールドが両手を握りしめ、アルドレーザーを発射する。

グランゾンは歪曲フィールドで防ぐが、フィールドが抜け、中破する。

シュウ「くっ……！グランゾンがここまで追い詰められるとは……！」

そこにクロガネ、ヒリュウ改が進入する。

ダイテツ「間違いないのだな!？」

テツヤ「は、はい！形状こそ変わっていますが……あれはメテオ3です!！」

シヨーン「むう……！あの隕石が、エアロゲイターの兵器だったとは……!！」

レフィーナ「……レビ・トレーラーが言っていた……バルマーの最終安全装置……」

ダイテツ「我々に滅亡という裁きを下すために……目覚めたのか……!！」

ルシア「フッフ……そうだ。」

リュウセイ「な、何だよあのデカブツ!？」

リユーネ「あれにルシアが乗ってる・・・!?!?」

マサキ「それに、シュウのグランゾンもいやがる!?!?」

シュウ「どうやら・・・助かったようですね・・・」

シロ「グ、グランゾンがあんニヤにダメージを・・・!」

シュウ「マサキ・・・不本意ですが、この場はお任せします。グランゾンが予想以上のダメージを負ってしまいましたからね。」

マサキ「待ちやがれ! シュウ!!」

シュウ「では、ルシア君を頼みましたよ。」

グランゾンが転移し、撤退した。

マサキ「シュウ!!」

クロ「マサキ、今はルシアをニヤんとかする方が先ニヤ!」

ルシア「フッフ・・・逃げたところで余に滅されるが定め・・・」

エクセレン「ルシア君、キャラ変わってない?」

ルシア「・・・」

エクセレン「あら・・・無視?」

リョウト「ま、まさか・・・ビアン博士がメテオ3に重力アンカーを仕掛けた理由って・・・！」

キョウスケ「今日という日を予測していたのか・・・!?？」

リョウト「ビアン博士も薄々、メテオ3の正体に気付いていたんだと思います。」

ラトウニ「でも、ビアン博士達の頭脳をもってしても・・・メテオ3の正体を完全に暴くことは出来なかった・・・」

ルシア「そうだ、下等な地球人如きに、セプタギンを解析しきれるものか。」

リユーネ「あ、あんた・・・今親父のことを・・・！」

ルシア「親父？何のことだ・・・」

ヴィレッタ（セプタギンの封印が解かれたと同時に、ルシア・ゾルダークとしての人格が抑え込まれてしまったようね・・・時間が経てばいずれ彼の人格は・・・抹消される・・・）

ルシア「余の裁きを受ける・・・地球人類共・・・！」

ユン「メテオ3に動きが！」

レフィーナ「！！！」

セプタギンから連邦軍、DC、エアロゲイターの機動兵器が出現した。

カチーナ「何だ、ありゃ！？連邦軍やDCの兵器もいるぜ！！」

ギリアム「おそらく、先程取り込んだ物や、今までのデータを基にした複製だろう・・・！」

カチーナ「ってことは、あたし達もしくじれば・・・！？？」

ラッセル「奴らの兵器になるっていうのは・・・こついつことなのか！？」

レオナ「いえ、そんな生易しいものじゃなくてよ。私達は、人格も記憶もすべて失い・・・メテオ3の一部となる・・・！」

ガーネット「そ、そんなの嫌よ！せつかく生き残れたのに・・・みんなのに吸収されるなんて！」

ジャーダ「何言ってたんだ！まだそうなるって決まったわけじゃねえ！！」

ルシア「安心しろ・・・記憶、人格がなくなっても・・・貴様らの存在は残される・・・データと肉体はな・・・」

カチーナ「て、てめえ・・・！！」

クスハ「・・・・・・・・・・」

ブリット「どうした、クスハ？」

クスハ「これ・・・ホントにルシアさんが喋っているんですか・・・」

「？」

ライ「だが、あれはどう見ても……！」

アヤ「クスハの言うとおりかもしれない……ルシアもイングラム少佐と同じ様に……！」

ルシア「さっきからルシア、ルシアと……余はそのような名前ではない。」

リユーネ「じゃあ何だつてのさ！」

セプタギン「我が名はセプタギン……我は……最後の審判者……」

リユーセイ「セプタギン……！」

セプタギン「汝らの力を吸収し、余の糧とする。」

タスク「取って食おうつてのか？」

セプタギン「抗うな、余計に苦しむだけだ。」

アヤ「やっぱり……これはルシアの口から発しているものじゃないわ……！」

リーダー「恐らく、メテオ3がルシアに干渉し、代わりに発言させているのね……！」

マサキ「てことは……あの隕石を叩けばルシアは戻るのか!？」

リーダー「ええ、おそらくは……」

リュウセイ「だったら簡単だ！あんな石ころの一つや二つ、叩き割ってやる！」

イルム「……そうだな。それが、あの戦いで勝ち残った俺達の宿命って奴だからな。」

タスク「あいつを、この島から出したら終わり……。まさき背水の陣って奴だな。」

ライ「ああ……。ここで退くことは許されない。エアロゲイターに引導を渡すのは、俺達の役目だ。」

アヤ「そして、あの子やイングラム少佐達のような目に遭う人……」

クスハ「これ以上、増やさないためにも……！」

ブリット「あの隕石は俺達の手で壊してやる……！」

エクセレン「その意気、その意気！ねえ、キョウスケ？」

キョウスケ「……隕石の一部になる……。ピンと来ない話だが……」

エクセレン「あらん、身も心も一つに……。ってやつ？」

キョウスケ「なりすぎだな。今までの戦い……。こんな石ころ風情

に無駄にされるのは業腹だ。」

リユーネ「親父達がきっかけとなったこの戦い・・・今度こそキツチリとケリをつけてやるよ!!」

マサキ「ああ！手前勝手な理由で、この地球を滅ぼされてたまるかってんだ！」

ゼンガー「艦長！我らに最後の出撃命令を!!」

ダイテツ「うむ！PT部隊、出撃せよ!!」

PT部隊が出撃し、Rシリーズの機体はSRXに合体する。

セプタギン「そうか・・・そこまでして抵抗するか・・・では、汝らに相應しい裁き・・・死をくれてやる。」

エイタ「艦長！メテオ3周辺の機体が動き出しました!!」

ダイテツ「・・・！隕石ごときが・・・！ワシらを侮るなよ！裁きを下されるのは、貴様の方だと言うことを・・・教えてやる!!」

セプタギン「愚かな・・・余をそう簡単に倒せると思っているのか？」

ダイテツ「総員に告ぐ!!我々が何のためにここまで来たか・・・今一度思い出してもらいたい！今に至るまで・・・多くの者が涙を飲んで散っていった・・・！」

カイ「・・・」

ギリアム「……………」

ダイテツ「我々の力が及ばぬせいで、多くの罪なき人々が、絶望の底へ沈んでいった……………」

リュウセイ「……………」

キョウスケ「……………」

ダイテツ「だが！ワシらは今一度、ここで持てる力を振り絞らねばならん！！何としても、メテオ3を破壊せねばならん！！」

レフィーナ「そうです…………。この戦いに…………真の終止符を打つのです…………！多くの人々から、様々な希望と未来を託された…………私達のこの手で…………」

ダイテツ「全機、総攻撃開始！！」

レフィーナ「最後の審判者に…………最後の裁きを下すのです…………」

セプタギン「甘い…………余に裁きを下せると思っ…………」

カイ「だが、問題はどうかやってあの巨大兵器に乗ってるルシアを止めるか…………」

ヴィレッタ「方法は…………ないわけではないわ。ルシアはセプタギンによる遠隔操作によって操られて、彼の人格が封印されている。」

マサキ「じゃあ今俺達の目の前にいるルシアは…………」

ライ「身体はそうでも、心は違う・・・ということだな。」

ヴィレッタ「ええ。けど、時間が経ってしまえば人格は消去されてしまう。」

ラトウーニ「そうなる前に・・・ルシアの人格が呼び戻されれば・・・」

キョウスケ「その隙にメテオ3を破壊すれば、支配は解かれる・・・」

ヴィレッタ「あくまで可能性よ。」

キョウスケ「いいだろう、分の悪い賭けは嫌いじゃない。」

ギリアム「だが、動きを止めなければまともな説得は不可能だろう・・・」

リュウセイ「そんなの、攻撃しながら説得すればいいんだ！」

ライ「ああ、かなり望みは少ないが・・・」

アヤ「やりましょう！少しでも助けられる可能性があるのなら・・・！」

マサキ「ああ、もう目の前で仲間が死ぬのは見たくないからな！」

セブタギン「来い、地球人共よ・・・！余の裁きを享受せよ！」

ゼンガー「往くぞ！」

セプタギン「そのような原始武器で余を倒せると思うな……」

ゼンガー「倒す必要はない、元のお前に戻せばいいことだ。」

セプタギン「まだ分からないのか？これが余の元の姿だ。愚かな地球人には……」

ゼンガー「黙れ！！」

セプタギン「何……！！」

ゼンガー「そして聞け！我はゼンガー！ゼンガー・ゾンボルト！！悪を断つ剣なり！！この斬艦刀によって……貴様はルシアの身体から潰えるのだ！！」

グルンガスト零式が斬艦刀を振りかぶり、ズフィールドはZ・Oソードで受け止めた。

セプタギン「その程度で……！！」

エルザム「ルシア、私の声が聞こえるか？」

セプタギン「まだ理解出来ていないようだな、ここに奴は……」

その時、セプタギンの頭に念が走った。

セプタギン「グッ！？ ま、まさか……その様なことが……！！」

エルザム「お前には随分と辛い思いと苦勞をさせてしまった。だから、その償いを今、ここで成し遂げさせてもらう！セプタギン！お前を倒すために！」

カイ「ルシア、聞こえるか！隕石如きに操られるようじゃ、まだまだ半人前だな！」

セプタギン「貴様の声は届かん・・・何度言えば・・・グツ!?  
ま、まだ・・・まだ奴が・・・!?」

カイ「どうやら聞こえてるようだな！後でたつぷり説教を垂れこんでやる・・・こいつを倒した後にな!!」

ギリアム「やはり、俺の予想が当たっていたか・・・」

セプタギン「大した策略家だ。だが、全てを見透かしているわけはあるまい？」

ギリアム「そうでもないさ、お前は気付いてないようだが・・・時々、ルシアの人格が表に出てきている。」

セプタギン「馬鹿な・・・余は・・・グツ!?」

ギリアム「その頭痛がいい例だ！お前は完全にメテオ3と同化しきれていない!!」

セプタギン「ぞ、戯言を・・・!」

エルザム「G・インパクトキャノン、接続!」

カイ「俺の拳を受ける！」

エルザム「撃て、トロンベよ!!！」

ギリアム「ターゲットインサイト!もらった！」

ヒュッケバイン Mk-?トロンベ、ゲシュペンスト・タイプSの射撃攻撃で怯ませ、量産型ゲシュペンスト Mk-?がその隙に接近する。

カイ「ジェット・マグナム!!！」

ジェット・マグナムで腹部を攻撃する。

セプタギン「この程度でスフィールドを破壊できると思っな・・・!!」

ヴィレッタ「待っていなさい!今セプタギンの枷から解放させてあげる!!」

セプタギン「アウレフの片割れか・・・パルシエム如きで余を倒せると思っな?」

ヴィレッタ「あの人に託された使命を・・・ここで果たす！」

クスハ「ルシアさん、やめてください！」

セプタギン「何度語りかけようと無駄なことだ。奴には届かん。」

クスハ「あなたは強くて・・・心優しい人です!それを思い出して

ください!」

セプタギン「クツ……!何故だ……何故、この女に気を許して  
しまう……!」

ブリット「ルシア!お前はこんなことをして喜ぶような奴じゃない  
!正気に戻ってくれ!」

セプタギン「無駄だ、既にこの身体は余のものだ。」

ブリット「ならば……狙いは一つ……その機体の制御装置を破  
壊するまでだ!」

セプタギン「簡単に見つかると思うな。」

ヴィレッタ「メタルジェノサイダーモード、起動!」

クスハ「行くわよ式式……!」

ブリット「一意専心!」

クスハ「必殺、計都瞬獄剣!」

ブリット「シシオウブレード、チェストオオオX!」

グルンガスト式式の計都瞬獄剣、ヒュッケバインMk-?のシシオ  
ウブレードでズフィールドを攻撃する。

ヴィレッタ「R・GUN、マキシマムシユート!」

R・GUNのメタルジェノサイダーが直撃し、中破する。

セプタギン「流石だな・・・クラス・ギボルの資格があるだけのことはある・・・だが、それでも余には勝てん。」

ズフィールドのダメージが瞬時に回復してしまう。

シロ「さ、再生したニヤ！」

ヴィレッタ（ズフィールドクリスタルね・・・けど、再生には限界がある。）

セプタギン「これで分かっただろう、どの様な力があるうと、余に勝つことは・・・」

セプタギンに激しい頭痛が起こった。

セプタギン「グッ!? な、何だ・・・! まだ余の身体に奴が・・・!」

ルシア（み、みんな・・・!）

リユーネ「!? ルシア!」

ルシア（ここを・・・攻撃しろ・・・! メテオ3とズフィールドを繋げる制御装置だ・・・!）

セプタギン「よ、余計なことを・・・! 仮の人格如きが・・・!」

ルシア（それでもダメなら・・・みんなの手で俺を・・・!）

セプタギン「しゃしゃり出るな！ルシア・ゾルダーク！！」

マサキ「ルシア！」

セプタギン「……フフフ……ハハハハ！！」

リュウセイ「ま、まさか……！？」

セプタギン「仮の人格如きが……これが限界か。」

マサキ「て、てめえ！！」

キョウスケ「熱くなるな、まだ消えたわけではない。」

エクセレン「でも、早くしないとホントに……」

キョウスケ「わかっている、あいつのしごとさに賭けるぞ。」

マサキ「ルシア、目を覚ましやがれ！」

セプタギン「無駄だ、いくら叫ぼうが奴には……グッ！？

ま、またか……！」

シロ「かなりしぶとく抵抗してるようだニヤ！」

クロ「でも、あまり時間はニヤいニヤ！」

マサキ「わかってる！ルシア、お前に取り付いてる邪悪な衣は……俺がかき消してやる……！」

リユーネ「あんたはここまでヤワな奴じゃないだろ？いい加減正気に戻りな！」

セプタギン「お前の知るルシア・ゾルダークは死んだ・・・それとも、奴と冥府で再会するか・・・？」

リユーネ「冗談！あたしはまだそっちに行く気はないよ！！」

キョウスケ「お前らしくもないな。敵の手に落ちるとはな・・・」

セプタギン「元よりこうなる運命だったのだ、諦めるのだな。」

キョウスケ「いや、まだ手札を捨て切れていないのでな。諦めるのはまだ早い。」

セプタギン「ならば、そのゲームを終わらせるまでだ。」

キョウスケ「まだ終わらせるわけにはいかない。だが・・・今は、撃ち貫くのみ・・・！」

エクセレン「ルシア君、あんまりオイタが過ぎるとホントにとつちめちゃうわよ？」

セプタギン「貴様如きに仕置きされるほど、愚かではない。」

エクセレン「わお！結構ノリいいわね。けど・・・私がとつちめたのはルシア君じゃなくて・・・セプタギン、あなたなのよね！」

リユーセイ「ルシア！お前もイングラム教官やレビと同じで操られ

ているだけだ！」

セプタギン「余を出来そこないのレビ・トラーと人形のアウレフと一緒にしてもらっては困る。」

ライ「だが、先程のわずかな時間の間・・・ルシアという人格が出た以上、お前は完全にセプタギンになったわけではない！」

アヤ「そうよ、だから・・・イングラム少佐やあの子と違って、助けられるわ！」

リュウセイ「行くぞ、SRX！ルシアをセプタギンの呪縛から解放つんだー！」

キョウスケ「全弾持っていけー！」

エクセレン「そこそこおー！いただきー！」

リユーネ「これでもくらいな！クロスマッシャーー！」

ヴァイスリッターのオクスタン・ランチャーWモード、ヴァルシオーネのクロスマッシャーでズフィールドにダメージを与える。

その隙にアルトアイゼンは切り札を切った。

一気に接近し、リボルビング・ステーキを全弾ぶつける。

キョウスケ「ジョーカー、切らせてもらった。」

セプタギン「フフフ・・・これの何処が・・・」

アヤ「T・LINKフルコンタクト！」

ライ「トロニウム・エンジン、フルドライブ！」

リュウセイ「全てを切り裂け！SRX！！」

SRXがZ・Oソードを構え突貫してくる。

セプタギン「何・・・！？」

リュウセイ「天上天下念動爆碎剣！！」

SRXの念動爆碎剣でズフィールドを中破させる。

セプタギン「ハハハハ！もう一息足りなかったようだな！」

マサキ「まだ俺がいるぜ！！」

サイバスターがアカシック・バスターでズフィールドの背後に回る。

セプタギン「小癪な・・・！」

リュウセイ「そこを動くな！念動結界・・・ドミニオン・ボール！」

SRXのドミニオン・ボールでズフィールドを行動不能にされた。

セプタギン「貴様らああ！！」

マサキ「そこだ！！アカシック・バスター！！」

アカシック・バスターで背部に体当たりし、スフィールドが行動を停止した。

リュウセイ「や、やったのか!？」

キョウスケ「まだ分からん・・・油断するな。」

セプタギン「・・・・・・・・・・・・・・・・フフフフ・・・・・・・・」

リユーネ「!？」

セプタギン「ハハハハハ!やるな、制御装置を破壊するとは・・・・・・・・!」

ブリット「せ、制御装置を破壊したのに・・・・・・・・!」

クスハ「そ、そんな・・・・・・・・!」

ラトウーニ「戻らなかった・・・・・・・・!」

セプタギン「そう卑下するな、ここまで出来た事を褒めてやってもいいぞ。これで取り込みのし甲斐があるというものだ!」

キョウスケ「・・・・・・・・賭けに負けたか・・・・・・・・」

エルザム「・・・・・・・・こうなれば・・・・・・・・奴ごとスフィールドを破壊するしかない・・・・・・・・」

ライ「・・・・・・・・!」

アヤ「そんな・・・もう少しだったのに・・・！」

リユウセイ「助けられなかった・・・ちきしょう・・・！ちきしよおおおお！！！」

???

ルシア（ここは・・・そうか、完璧にセプタギンに取り込まれ・・・俺という存在が消えたか・・・やっぱり、異星人が地球を護る資格なんて・・・なかったんだ・・・）

ルシアの目の前に一人の男が現れた。

???'「・・・・・・・・・・」

ルシア「誰だ・・・？」

???'「お前に架せられた枷を解くために・・・お前に力を貸そう。」

ルシア「何・・・？」

???'「だが・・・最後の審判者を倒すには、お前自身の意志の力が必要だ。」

ルシア「意志の・・・力・・・わかった。」

???「唱えろ、テトラクテュス・グラマトン。」

ルシア「テトラクテュス……グラマトン……！」

アイドネウス島

レフィーナ「超重力衝撃砲、撃て!!！」

ヒリユウ改の超重力衝撃砲でズフィールドに攻撃する。

ダイテツ「この隙を逃すな！」

テツヤ「艦首超大型回転衝角、始動！」

ダイテツ「クロガネ、突撃!!！」

クロガネの艦首超大型回転衝角がズフィールドに直撃する。

セプタギン「無駄だというのがまだわからんか？」

ズフィールドが無傷の状態まで再生する。

カチーナ「ま、また再生しやがったぞ!？」

ラッセル「このままじゃ……きりがなし……」

セプタギン「そろそろ本気を出そうか。ヘキサ・グラム展開！」

ズフィールドから結晶が4つ飛び出し、広範囲でPT部隊を囲む。

セブタギン「滅せよ！」

結晶から衝撃波が放たれ、PT部隊に大ダメージを与えた。

キョウスケ「うぐっ!？」

リュウセイ「うわああっ!！」

テツヤ「くっ……!各機の状況は!？」

エイタ「PT部隊の損害が激しすぎます!ズフィールドを抑えられません!！」

ショーン「いよいよもって、コクピットを狙うしかありませんかな……」

レフィーナ「そ、それは……!！」

ショーン「ルシア中尉を見捨てる結果になってしまいますが……人類全体と、一人の人間を天秤で量るわけにもいきません。」

ダイテツ「……各機、ズフィールドのコクピットブロックを破壊せよ。」

テツヤ「艦長!？」

ダイテツ「ワシらは人類全体の存亡を掛けて戦っているのだ!大儀を見失ってはいかん!！」

ガーネット「頭ではわかってる・・・わかってるけど・・・！こんなあんまりよ！！！」

ジャーダ「皮肉にも、親父と同じ場所で・・・こんなことになってしまつとはな・・・！」

リユーネ「・・・あたしがやるよ。」

マサキ「リユーネ・・・！」

リユーネ「親父が見てたら、絶対真つ先に止めに行くはずだよ。だから・・・ここはあたしが・・・！」

セプタギン「愚かな、貴様如きが止められると・・・。」

その時、セプタギンに強力な念が走る。

セプタギン「グ！！？グアアアア！！！」

リユウセイ「！？　な、何だ！？」

クロ「さつきと同じ反応だニヤ！」

マサキ「あいつ・・・まだ抵抗してるのか・・・！？」

セプタギン「バ、バカな・・・！完全に抹消したはず・・・それが何故・・・！？」

ズフィールドがエネルギーを溜め、メテオ3に照準をつけた。

セブタギン「な．．．余の意志に反しているだ．．．!? やめろ．  
．．．! やめろおおおお!!」

ルシア（虚無に還れ．．．! オメガ・ウェーブ!）

ズフィールドがオメガ・ウェーブを放ち、メテオ3に直撃する。

ラトウーニ「!？」

テツヤ「な、何が起こった!？」

エイタ「ズ、ズフィールドがメテオ3に攻撃を．．．!」

ダイテツ「まさか．．．!」

ルシア「み、みんな．．．心配をかけてすまなかった。」

マサキ「ルシア!？お前、元に戻ったのか!」

ルシア「ああ、みんなの声が聞こえた．．．おかげで、ここに戻っ  
てくれた．．．」

アヤ「でも、何で．．．」

エクセレン「まあまあ、結果オーライってことでいいんじゃない  
?」

リュウセイ「そんなあっさりと．．．」

セプタギン「緊急事態発生、緊急事態発生。ファーストコンタクト、離反。」

セプタギンがフリーレ、ヴァイクルを多数出現させる。

リョウト「メテオ3がまた動き出した……！」

リオ「でも機体の損傷が激しすぎて……」

ルシア「任せる。」

ズフィールドがセプタギンの方に向かう。

セプタギン「対象文明ト共二……ズフィールドヲ破壊……」

ルシア「散々俺の身体を利用してくれたな……！審判を下してやる……！」

フリーレ3隻がレギオン・イレイザーでズフィールドを攻撃するが、全て念動フィールドで防がれる。

ルシア「返礼は……お前の破壊だ！セプタギン……！」

ズフィールドがアルドレーザーの発射態勢に入った。

ルシア「アルドレーザー、照射……！」

アルドレーザーが放たれ、フリーレを全艦撃墜する。

タスク「す、すげえ…………！」

レオナ「何て威力なの・・・！」

エクセレン「敵だと恐ろしかったけど、味方だところも頼もしいなんてね。」

キョウスケ「のん気に構えている場合か、俺達もメテオ3に攻撃を仕掛けるぞ。」

カイ「動ける機体はメテオ3に集中攻撃しろ！これが本当の幕引きだ！！！」

ゼンガー「応っ！！！」

動けるPT部隊にヴァイクルが襲い掛かる。

ルシア「通しはしない！！Z・Oソードで叩き斬ってやる！！！」

ズフィールドのZ・Oソードでヴァイクルを次々と切り倒す。

キョウスケ「アサルト1より各機へ。メテオ3の中枢部を破壊するぞ！」

ヴィレッタ「待って！メテオ3に動きが・・・！」

セプタギン「対象文明・・・抹消・・・」

セプタギンのズフィールドクリスタルが増殖し始めた。

ギリアム「まずい・・・！この距離で広範囲攻撃を・・・！」

ルシア「任せてください、ギリアム少佐！」

ズフィールドに光が集まる。

ルシア「心せよ・・・十の神罰が今、汝に下る・・・！」

ギリアム（！？ あれは・・・！）

レオナ「何？一瞬天使のようなものが見えたけど・・・」

ルシア「うおおおおお！！！」

ズフィールドから衝撃波が放たれ、セプタギンの動きが止まる。

セプタギン「行動二支障発生、攻撃・・・不可能・・・」

キョウスケ「今だ！」

ダイテツ「この機を逃すな！全砲塔、発射！！」

レフィーナ「こちらも、全管一斉砲撃を！」

P T部隊、戦艦の集中攻撃でセプタギンが大破した。

セプタギン「・・・危険・・・危険・・・危険・・・危険・・・  
データ二無シ・・・データ二無シ・・・」

リュウセイ「様子がおかしいぞ！」

セプタギン「回収済ミノ・・・生体コア・・・修復開始・・・ジ  
ュデツカ・・・複製開始・・・」

テツヤ「また何かを複製するつもりか！」

ダイテツ「いかん！！もう一度集中攻撃をかける！複製させるな！  
！」

エクセレン「でも、弾切れでエネルギーもほとんどないわよ。」

リュウセイ「あと少しだったのに・・・！」

ルシア「・・・俺が行く。」

マサキ「待て！何する気だ！？」

ルシア「動きは止めているが・・・中枢部を破壊しないと複製が止  
まらない。このままセプタギンの中枢部を破壊する。」

エルザム「だが、それにはメテオ3に接近する必要がある。」

カイ「そうだ、もし離脱が間に合わなかったら・・・」

ギリアム「！？まさか・・・！」

ルシア「ええ・・・ギリアム少佐が考えている通りです。」

リュウセイ「ちょっと待てよ！それって・・・！？」

ルシア「全てはこのメテオ3から始まった・・・俺がこいつと共に

来たのなら・・・幕引きは俺の手でつける・・・」

マサキ「待て！それじゃお前が死ぬことになんだぞ！！」

ルシア「時間がないんだ！！それに・・・奴にジュデッカを複製させてしまえば・・・このズフィールドでも敗北してしまう！！」

キョウスケ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルシア「いいだろう？キョウスケ・・・」

キョウスケ「・・・・・・・・わかった、好きにしる。」

ブリット「キョウスケ中尉！！」

クスハ「そんなのあんまりです！せつかく元に戻ったのに・・・！」

エクセレン「でも・・・他に方法がある？」

ブリット「う・・・！」

ルシア「大丈夫だ、俺は必ず帰ってくる。約束だ。」

ラトウーニ「・・・・・・・・」

セプタギン「ジュデッカ・・・再構成・・・30%・・・消化・・・

」

ルシア「・・・行くぞ、ズフィールド。」

ズフィールドはブーストでセプタギンに急接近する。

ルシア「うおおおおおおおー!!」

ズフィールドがセプタギンに突っ込み、中枢部を掴み取る。

セプタギン「緊急防衛モード作動・・・ズフィールドヲ・・・破壊・・・」

セプタギンに発生したズフィールドクリスタルが、ズフィールドに刺さる。

ルシア「う、ぐう・・・!」

ジャーサ「くそ・・・!俺達は指をくわえて見ることしかできねえのかよ!」

ガーネット「駄目よ・・・自分で死ににいくなんて・・・そんなの駄目えええ!!」

ルシア「受ける・・・!ジーベン・ゲバウト!!!」

ズフィールドのジーベン・ゲバウトでセプタギンの中枢部を握りつぶした。

セプタギン全体が爆発し、メテオ3が収められていた穴に落下していく。

セプタギン「キ・・・ケン・・・ブ・・・ン・・・メ・・・イ・・・チ・・・ツジヨ・・・ヲ・・・ミ・・・ダス・・・キケ・・・ン・・・」

．．キ．．．ケン．．．ホ．．．ウ．．．コク．．．フ．．．カ  
ノ．．．ウ．．．」

ルシア「脱出は．．ズフィールドクリスタルに刺さってるから不  
可能か．．これでいいんだ．．これで．．」

その時、複製されたジユデツカがズフィールドを掴んだ。

ルシア「何．．．！ジユデツカが．．！？」

レビ「．．．フツ．．．」

ジユデツカが、ズフィールドをセプタギンから投げ離れた。

ルシア「レビ．．．！」

セプタギン「ワ・レ・ハ．．．サ・イ・ゴ・ノ．．．」

セプタギンが最後の悪あがきで、オメガウエーブを放ち、ズフィー  
ルドを大気圏外まで吹き飛ばした後、大爆発を起こした。

エイタ「メテオ3の撃墜を確認！！」

テツヤ「こ、今度こそ．．やったのか．．？」

ダイテツ「ズフィールドはどうなった！？」

エイタ「先程の高エネルギー体により、大気圏外に放り出された模  
様です！」

ユン「破壊はされていないようです!」

レフィーナ「ということとは……!」

ショーン「艦長、まだオペレーションSRWは終わっていませんぞ?」

レフィーナ「え……?」

ダイテツ「……そうだな。全機収容後、宇宙に上がるぞ。」

テツヤ「了解!」

7年前     アイドネウス島

研究員「ビアン博士!これは……!」

ビアン「ただの隕石ではあるまい。直ちに調査を。」

研究員「博士!近くに子供が……少年がいました!」

ビアン「何!?!」

研究員「医務室で治療させています!すぐに来てください!」

ビアンがEOTI機関の医務室に足を運ぶ。

ビアン「この子が隕石落下地点付近にいた子供だな?」

医師「はい……信じられません。あんなところにこんな子供が……」

「……」

ピアン「君、名前は？」

「……わからない……」

ピアン「君は何処から来たのだ？」

「……わからない……」

ピアン「そうか……」

医師「博士、どうしましょう……？」

ピアン「この子供は私が預かるう。」

医師「博士がですか？」

ピアン「うむ。君、私の処に来る気はないか？」

「……行くところがないのなら……」

ピアン「私が名前をつけてやろう……お前は……ルシアだ。」

ルシア「ルシア……？」

ピアン「そうだ、お前は来るべき未曾有の危機に立ち向かう救世主となるのだ。そのために・・・お前は強くならねばならん。」

ルシア「・・・はい・・・」

宇宙 衛星軌道上

打ち上げられたズフィールドは宇宙を漂っていた。

ルシア（・・・終わった・・・か・・・地球って・・・こんな  
にきれいな星だったんだな・・・）

ズフィールドは、地球に手を伸ばす

ルシア（・・・何と目覚めるばかりに自然の照り映えている事  
よ・・・何と大地の輝いている事よ・・・木々から花が吹き出て、  
心から歡喜が湧き溢れる・・・おお太陽よ・・・黄金成すその美  
しさよ・・・お前は祝福する、この香ばしい大地を・・・  
私はどんなにお前を愛して・・・いるだろう・・・どんなに・・・  
・お前の目に輝いている事だろう・・・！）

ズフィールドクリスタルが砕け散り、ヴァルシオンVに戻った。

ルシア「・・・父さん・・・俺は・・・異星人だったんだ・・・  
！あなたの敵である異星人だったんだ・・・！そんな俺が・・・救  
世主なんかになれるわけなかったんだ・・・！」

ルシアは、ロケットを取り出した。開けるとそこには、姿勢を正す

ルシア、陽気にピースサインをしているリユース、その二人に寄り添うピアノが映る写真があった。

ルシア「う……く……！この俺がいなくなれば……地球圏に真の平和が戻る……  
これで……いいんだ……」

リユウセイ「馬鹿野郎！全然よかねえよ！！」

ルシア「！？ リユウセイ……！」

ライ「お前一人がいなくなったからといって、戦いが終わることはない。」

マサキ「それに……勝手に死ぬことなんて考えんじゃねえよ！！  
そうやって俺達に過去の重荷を背負わせて……お前はそれでいいのかよ！！」

ルシア「マサキ……！」

リオ「あなたの正義感はその程度のもだったの！？」

アヤ「あなたのその命は、もうあなただけのものじゃなくなってるのよ。」

エクセレン「それに、ルシア君みたいな人間が一人いる方が楽しくなるんじゃない？」

キョウスケ「エクセレンの言う事は間違ってるとは言わん……だが、俺達の敵になった負い目があるのなら……気にするな。」

ブリット「そうさ、こうしてまた俺達と戦って、最後の審判者に勝てたんだ。」

クスハ「それはルシアさんのおかげでもあるんです。だから・・・自分を責めるのはやめてください。」

リョウト「そうだよ。おかげでみんなこうして、ここまでルシアを迎えに来れたんだから。」

エルザム「ルシア、お前に十字架を背負わせてしまうことになってしまったが・・・」

ゼンガー「お前は正当な道を歩め。どんな困難が立ちはだかるうと・・・全て、切り散らしてな・・・」

ルシア「エルザム少佐・・・ゼンガー少佐・・・!」

ガーネット「それじゃ、本音を聞かせてもらいましょうか?」

ジャーダ「簡単な質問だよな。な?ラトウーニ。」

ラトウーニ「ええ・・・ルシアの思いがままに答えてくれればいいと思う・・・」

ルシア「・・・」

タスク「そういうのは、はっきり言ってしまった方がいいぜ?」

レオナ「たまにはいいこと言っわね。」

カチーナ「さつさと答えねえと千叩きだぞ！」

ラッセル「それじゃ質問に答えられないですよ……」

ルシア「……俺は……」

カイ「……」

ギリアム「……」

ルシア「俺は……みんなと生きたい……！」

ラーダ「……」

ヴィレッタ「……」

ルシア「俺は……この地球も……みんなも……好きだ……！だから……俺はこれからも……この地球で……生き続けたい……！」

リユーネ「……おかえり、ルシア。」

ルシア「ダイテツ艦長……ヴァルシオンV……ルシア・ゾルダーク……ただいまより帰還します！」

ダイテツ「了解した。諸君、ご苦労だった。現時刻をもって、オペレーションSRWを終了する。」

テツヤ「了解です、艦長……。これで杯をいただけます。」

ダイテツ「フフ・・・そうだな。」

ルシア（父さん・・・俺、これからも生き続けるよ・・・この地球を護るために・・・）

最終話 完

最終話 創世神ズフィールド（後書き）

リュウセイ「ああ・・・ついに終わったか・・・」

ルシア「おい、また続いてるぞ。」

ライ「こうして終わると、なんともあっけないな。」

ルシア「いや、だからまだ終わってないって。」

アヤ「私達の出番もここまでかしら？」

ルシア「まだ出番ありますって！」

エクセレン「ええ、これから私のセクシー・ロマンス・ウェポンが唸るってのになぁ・・・」

ブリット「え、SRWホントにあるんですか・・・？」

キョウスケ「何のことかさっぱりわからんが・・・」

マサキ「ま、どうでもいいだろ？」

リユーネ「そうだね・・・」

ルシア「話聞けお前ら！まだ続いてるぞ！！」

リュウセイ「・・・へ？」

マサキ「まだ続きあったのか？」

キョウスケ「ルシアが言っているのだから、間違いではないだろう。」

┌

Last Stage

星の海へ

ズフィールド

セプタギンに取り込まれたヴァルシオンVがズフィールドクリスタルによって変異を遂げた人型決戦兵器。

ズフィールドクリスタルで構成されており、生半可な攻撃ではすぐに再生してしまう。

攻撃力はジュデツカを大幅に凌駕し、実質エアロゲイターの切り札となっている。

セプタギンからの支配を解くことでルシアは正気を取り戻し、クロガネとヒリユウ改の部隊と合流、セプタギンが破壊された後、消滅した。その時、ヴァルシオンVに何らかの痕跡を残したが……  
武装

Z・Oソード

アルドレーザー

ヘキサ・グラム(MAPW)

オメガウエーブ

ジーベン・ゲバウト

特殊能力

念動フィールドS

HP回復中

EN回復大

フルブロック



## エピローグ 星の海へ

伊豆基地 某所

ギリアム「……ヴィレッタ、君とイングラム少佐は……」

ヴィレッタ「あの人はネビーイムを造った者達の代行者……対象となる文明を発見した場合、自動的に中枢であるジュデッカと共に目覚め……優れた『兵器』の選抜と育成、収集という任務を遂行するための存在……」

ギリアム「……」

ルシア「……」

ヴィレッタ「けど、イングラムは何らかの理由で創造者のプログラム通りに覚醒せず……その結果、より強力なジュデッカの支配を受けた。」

ルシア（それで……イングラム少佐は……）

ヴィレッタ「だから……あなた達が知るイングラムは……本当の彼ではない。あれは……本当の彼では……」

ギリアム「そうか……」

ヴィレッタ「……」

ギリアム（では……彼が複雑な内面を持っているという予想は……）

・当たっていたのだな。」

ルシア「気になることがある。何でヴィレッタ大尉はジュデツカの支配を受けなかったんだ？」

ヴィレッタ「イングラムは、ジュデツカに完全に支配される前・・・私を目覚めさせ、枷を外した。私は彼の分身であり、肉親・・・」

ギリアム「・・・・・・・・・・」

ルシア（分身・・・言い得て妙かもしれないな・・・）

ヴィレッタ「彼の複製とも言える存在・・・つまり、もう一人のイングラムなのよ。そして、彼は私に任務を与え・・・私はそれを遂行するために、こちら側と向こう側を行き来していたのよ。」

ギリアム「なるほど・・・」

ヴィレッタ「言わば、私は二重スパイ・・・フフ・・・他のみんなには言い訳のしようがないわね・・・」

ギリアム「・・・・・・・・・・最後に一つ質問させてくれ。あのネビーイームは何者によって造られたのだ？」

ヴィレッタ「『帝国監察軍』、または『バルマー』と呼ばれる者達・・・でも、私はもとより、イングラムでさえも、彼らに関する詳しい情報は与えられていない。だから・・・ファーストコンタクターである、ルシアを回収しようとした。」

ルシア「そうか・・・それで・・・」

ギリアム「それに関しては、ルシアは何かわかるか？」

ルシア「……いえ、イングラム少佐達の正体……バルマーの目的……それだけしかわかりません。都合良く詳細部分は記憶を消されているみたいです。」

ギリアム「その目的は……？」

ルシア「ネビーイムは創造者から与えられた命令通りに、宇宙空間を移動し……地球を発見して、メテオ3と俺を落下させ……『兵器』を育て、収集し、いずこかへ持ち運ぼうとしているだけです。」

ヴィレッタ「創造者達がどこにいるか……今も存在しているかどうかは、不明だわ。」

ギリアム「そうか……（南極で接触した異星人がバルマーであるかどうかも、定かではないということになるな。いずれにせよ……銀河に存在する文明は、一つではない……それどころか……我々の想像を超えたモノが混じり合う世界……実験室のフラスコか……だとすれば、その実験結果は……）

ヴィレッタ「……」

ギリアム「ヴィレッタ。この後、私は情報部へ戻る。おそらく、戦後処理やホワイトスターの調査などで忙殺されることになるだろう。そこで……出来れば、君達の手を借りたい。」

ルシア「お、俺もですか……？」

ヴィレッタ「……………」

ギリアム「君達の知識と技能を見込んで、情報部にスカウトしたい。無論、ヴィレッタ……君の正体を公にするつもりはない。」

ヴィレッタ「…………ごめんなさい。私にはイングラムから与えられた使命……あの人が育てたSRXチームと行動を共にするという使命が残っている。」

ギリアム「……やはり、そうか。なら、無理は言わない。」

ルシア「少佐、俺も辞退します。俺も……やりたいことが見つかりましたから……」

ギリアム「わかった、お前が決めたことだ。止めはしないさ。」

ヴィレッタ「でも、私の知識が必要になったら、いつでも呼んで協力させてもらおうわ。」

ギリアム「すまない。」

ヴィレッタ「それから、少佐……最後にお礼を言わせて。」

ギリアム「礼？」

ヴィレッタ「そうよ。あなたは私のことを信じてくれたから……」

ギリアム「フフ……それはお互い様さ。」

数時間後 通信室

フィリオ『久しぶりだね、ルシア。』

ルシア「フィリオか・・・身体は大丈夫なのか？」

フィリオ『大丈夫だよ。戦争も終わって、やっとプロジェクトDに本腰を入れられるようになったから休んではいけないよ。』

ルシア「そうか・・・それで、ものは相談なんだが・・・」

フィリオ『ルシアには1週間後のメンバー総会に参加してもらおうよ。』

ルシア「メンバー総会？」

フィリオ『総会って言っても、ただのレクリエーションだよ。メンバー同士、交流を深めようって企画だ。』

ルシア「ちょっと待ってくれ、俺がメンバーって・・・」

フィリオ『これは、ピアン総帥の命令なんだ。』ルシアをプロジェクトDに参加させる『ってね。』

ルシア「・・・そうか・・・（父さん・・・内心俺が異星人だってこと・・・知ってたかもしれない・・・きっと、元の母星に帰そうと思って・・・）」

フィリオ『君にナンバー00の席を空けておいたよ。じゃあ、会える日を楽しみにしているよ。』

ルシア「ああ、よろしく頼んだ。」

通信が切れ、新しく通信が入った。

オペレーター「ルシア中尉、AAAコードの通信が入っています。」

ルシア「AAA？一体誰だ・・・？」

ブライアン『私はブライアン・ミッドクリッドだ、ルシア・ゾルダーク中尉はいるかね？』

ルシア「な！？ブライアン・ミットグリット大統領！？」

ブライアン『おお、ちょうどそこにいたのか。よかった、これで空き時間が増えるってものだ。』

ルシア「は、はあ・・・」

ブライアン『実は言うと、君宛の荷物が間違っってエルピスに届いていたから連絡しようと思っっていてな。』

ルシア「荷物・・・ですか？」

ブライアン『ああ、驚くことに中身は・・・パーソナルルーパーが入っっっていたんだ。』

ルシア「パーソナルルーパー？」

ブライアン「たしか、特殊戦技教導隊のカーウアイ・ラウ大佐が使っていたとされる……タイプSと言ったかな？」

ルシア「タ、タイプS……!？」

ブライアン「全く、平和主義者の僕にこんなものをエルピスに送ってくるなんて……僕が持っけていても宝の持ち腐れだから、君にあげるよ。」

ルシア「大佐……あんな状態になっても……約束を守ってくれたんですね……!」

ブライアン「お、おいおい泣かなくてもいいだろう？まるで僕が泣かせたみたいになっているじゃないか。」

ルシア「す、すみません……そんなつもりじゃ……」

ブライアン「気にしなくてもいいよ。いつでもエルピスに取りに来てくれ。待っているよ。」

ルシア「はい……ありがとうございます!」

通信が切れた。

ルシア「……大佐……ありがとうございます……タイプS……大事にします。」

L5戦役の祝勝会とヒリユウ改の壮行会が行われていた。

タスク「なあレオナちゃん。この後二人っきりで海に行くってのはどう？」

レオナ「二人きりでなければ、よくてよ？」

タスク「しよ、しよんな」

テツヤ「か、艦長・・・もう駄目です・・・！」

ダイテツ「何を言っておる。まだ一杯しか飲んでいないではないか？」

テツヤ「あ、あの・・・その・・・」

カイ「何だ、だらしないぞ大尉？」

テツヤ「じ、自分は・・・その・・・下戸でして・・・」

カイ「そうか・・・ゼンガーと同じだな。」

テツヤ「ええっ！？あの人が!？」

ルシア「教導隊にいた時は何度ものびてましたからね。」

テツヤ「し、信じられん・・・」

そこに、またバニーガールのコスチュームでエクセレンが現れた。

エクセレン「はいはい、みんな盛り上がってる？」

リユーネ「また着てるよあの人……」

イルム「何度見てもキョウスケの奴がうらやましいぜ。」

マサキ「何言ってるんだか……」

リョウト「……………」

リオ「ちよつとリョウト君、何処見てるのよ。」

リョウト「え！？い、いやそんなつもりじゃ……」

ブリット「あはは……」

キョウスケ「……………はあ……………」

エクセレン「それじゃあこれからかくし芸大会を始めます！出場する人は準備よろしく！」

会場が歓声で沸いた。

エクセレン「え、司会進行役はエクセレン・ブラウニングと……この方が務めます！」

ルシア「え、まだ誰かいるのか？まさかガーネット……」

ガーネット「私ならここにいますけど？」

ラトウーニ「じゃあ一体誰が・・・」

そこに現れたのは・・・バニーガールのレフィーナだった。

マサキ「な!?!」

リユース「ええ!?!」

イルム「おおっ!」

リオ「!?!」

リョウト「!?!」

クスハ「・・・!」

ブリット「な・・・!」

キョウスケ「う・・・!」

ラッセル「うわ・・・」

カチーナ「・・・」

タスク「な・・・!?!」

ダイテツ「・・・!」

カイ「な、なんと・・・」

シヨーン「ほう……」

テツヤ「ブハア!？」

ルシア「うわ!？大尉、いきなり吹かないで下さいよ!！」

エイタ「レ、レフィーナ艦長!？」

レフィーナ「みなさん……どうかよろしく願いします!！」

ブリット「……」

クスハ「ブリット君、また鼻血が……」

ブリット「え?あ……!！」

エクセレン「ちょっとブリット君!鼻血出すタイミングは今じゃないでしょ!？」

ブリット「そ、そんなこと言われても……!！」

イルム「やれやれ、一発目からあんな大ネタで来るとはな……」

マサキ「壮行会が盛り上がるからいいんじゃないかねえの?」

キョウスケ「ところでマサキ、お前も明日伊豆を出ると聞いているが……」

マサキ「ああ、地上の方は何とか落ち着いたようだからな。俺は奴

を追っぜ。」

キヨウスケ「シユウ・シラカワか。」

マサキ「ああ。俺の勘じゃあいつはまだ地上にいる。草の根分けてでも捕まえてやるぜ！」

キヨウスケ「そうか。」

イルム「じゃ、お前のコードネームを更新しておいてやる。MAI GOってな。」

マサキ「MAI・・・何だそれ？」

シロ「迷子つてことだニヤ・・・」

マサキ「あ、あのなあ・・・」

クスハ「ねえ、リユーネはどうするの？」

リユーネ「月にでも行こうかと思ってる。DC戦争にあった地球には、ちょっと居づらいしね・・・」

クスハ「そう・・・」

リユーネ「クスハこそ、これからどうするのさ？」

クスハ「私？私は・・・」

エクセレン「さあ今夜のオオトリは・・・ルシア・ゾルダークによ

るパティシエ披露です！」

会場に拍手が響く。

ルシア「どうも、これから俺の得意なパフェを御馳走しようと思  
います。」

カイ「パ、パフェだと・・・？」

タスク「うわゝ、似合わね〜。」

カチーナ「こりゃ、優勝はタスクがもらいな。」

ルシア「ではいきます！」

ルシアは素早く材料を切り、予め用意していたクリームを使い、パ  
フェを完成させた。

ルシア「では、レフィーナ中佐に試食していただきましょう。」

レフィーナ「わ、私ですか？」

ルシア「ええ、どうぞ。」

レフィーナ「では・・・いただきます・・・」

リオ「・・・・・・・・・・」

ガーネット「・・・・・・・・・・」

レフィーナ「……おいしい……すごくおいしいですー！」

リオ「それ、私も食べてみたい！」

リョウト「リ、リオ！？」

レオナ「さすが、エルザム少佐直伝の腕前ね……私もいただくかしら？」

タスク「レオナちゃんまで……！」

カチーナ「うまそうだな……あたしもいただくか？」

ラッセル「カ、カチーナ中尉がパフェ……」

カチーナ「なんだよ、あたしが食ったらいけないってか！？」

ラッセル「い、いや！そういう意味じゃなくて！？」

イルム「ムツツリな割には、女の子のハートを掴むのが得意なんだな。」

リユーネ「それ、絶対違うと思うんだけど……」

エクセレン「では、結果発表に移ります！かくし芸大会の優勝者は……」

ジャーダ「絶対俺だ……！」

タスク「今回は成功したんだ、俺が優勝だ……！」

ルシア「……………正直どうでもいいんだが……………」

エクセレン「見事女の子の心を掴んだルシア・ゾルダークの優勝です！」

ラトウーニ「ルシアが勝っちゃった……………」

ガーネット「ラトウーニ、ルシアにパフェ作ってもらったら？」

ラトウーニ「……………うん……………」

タスク「なあ……………ルシア……………」

ルシア「何だ？」

タスク「俺とレオナに料理を覚えてくれ！」

ルシア「は!？」

レオナ「な、何言ってるのよ馬鹿！」

そして……エルピスでゲシュペンスト・タイプSを受け取り、ヒューストン基地に向かう日が来た。

フィリオ「ようこそ、待っていたよ。」

ルシア「ああ、みんなは？」

フィリオ「集まってるよ、こっちだ。」

フィリオに案内された部屋に、アイビス、ツグミ、スレイがいた。

ルシア「プロジェクトTDMメンバーはこれで全部か？」

ツグミ「はい。私はプロジェクトチーフを担当しています。」

スレイ「ルシア様がプロジェクトに参加すると聞いた時は驚きました。」

ルシア「うん？口を利いてくれてたんじゃないのか？」

スレイ「い、いえ・・・本当に参加出来るとは思ってなかったので・・・」

アイビス「ルシア様・・・あの時は本当にありがとうございました。」

ルシア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ツグミ「どうされました？」

ルシア「どうも固くていかんな。」

スレイ「え？」

ルシア「俺も今日からプロジェクトTDMのメンバーだ。それに・・・  
ピアン総帥もDCもなくなった。俺はもうそんな偉い御身分じゃな

いさ。」

フィリオ「・・・そうだね、これから一緒に活動をしていくメンバーなんだ。特別扱いはやめよう。」

スレイ「・・・兄様がそういうなら・・・」

アイビス「よ、よろしくお願いします・・・ルシア・・・さん・・・」

ルシア「さん付けか・・・ま、いつか。」

フィリオ「時間がたてば慣れるさ、慌てなくてもいいよ。」

ルシア「フィリオ、折り入ってお願いがあるんだが・・・TDで開発されたテストタイプは全て俺に回してくれないか？」

フィリオ「何故？」

ルシア「彼女達に不完全なものを使わせるわけにもいかないだろう？俺ならまだ応用が利く。」

フィリオ「・・・そうだね、考えておくよ。」

ルシア「ああ。」

ツグミ「それじゃ、今お茶を淹れますね。」

フィリオ「頼むね、タカクラチーフ。」

ルシア（父さん・・・ここで、俺は宇宙に出るよ・・・そして・・・  
いつかは、バルマー星を探そうと思ってる・・・やっぱり、気にな  
るところがあるからな。

そして・・・彼女達に降りかかる異星からの脅威は俺が振り払う。  
それが、あの戦いで見つけた・・・俺の新しい使命だから・・・）

T O B E C O N T I N U E D

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0137j/>

---

スーパーロボット大戦OG ~パラレル~

2010年10月9日00時01分発行